

東日本大震災
ケアマネジャーの活動記録

特定非営利活動法人
宮城県ケアマネジャー協会

980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3丁目7-4 宮城県社会福祉会館 4F

TEL 022-716-0716 FAX 022-716-0717(月～木 10:00～17:00)

Eメール mcma@par.odn.ne.jp

ホームページ <http://www2.odn.ne.jp/~mcma/>

ケアマネサポートセンター 022-716-0718

『東日本大震災時の活動と未来への提言』

2013.05.25. 宮城県ケアマネジャー協会

東日本大震災（大津波）の時、ケアマネジャーや地域包括支援センターはどのような状況だったのだろうか。ケアマネジャー一人ひとりは何をしていたのだろうか。相談支援の専門職団体である、宮城県ケアマネジャー協会等は何をしていたのだろうか。

宮城県内のケアマネジャー11名が犠牲になりました。津波の被災地に行き茫然となり、何かをしなければという思いで活動していたものの、被災された方々の状況や日々変化する必要性に対応できていたのだろうか…。ケアマネジャーの活動を振り返り記録に残します。

また、震災後の早い時期から、日本介護支援専門員協会を通じ、専門職ボランティアとして全国から多数、それも継続的にご支援をいただいたことに感謝申し上げます。

～ 記 録 ～

現場に行ってみて判断し
顔を見て話し合い
役割を明確にし連携して行動する

震災2日後の3月13日、宮城県ケアマネジャー協会と宮城県社会福祉士会は、相談支援の専門職として「高齢者・障がい者等要援護者支援」をすることとして支援活動を開始した。ケアマネジャーの専門性である「要介護高齢者のアセスメントと生活支援」を活かす場面である。

時間の経過とともに変化する生活ニーズに対応するべく、行政と地域包括支援センターとの意思疎通に努め、「地域包括支援センターをバックアップする」という立ち位置での活動をしてきた。医療やヘルスと同じ病気や健康という視点ではなく、「生活」に視点を置き、社会福祉士、ケアマネジャー、弁護士等による「福祉の総合相談支援」体制での支援に努めてきた。あくまで地元の支援者の後方支援として。

ケアマネジャーの活動

活動に関する調査結果（分析とエピソード）参照

ケアマネジャー協会の活動

03.13.巨大津波被災地、亘理，山元，岩沼，名取，仙台へ。ケアマネ協会会長と協議後、宮城県庁へ出向き、担当課：長寿社会政策課と協議。ケアマネ協会は「避難している要介護者保護支援を担当することとする。14.避難要介護者保護に向けて、宮城県、被災市町、受け入れ施設と調整へ。17.東松島，石巻，女川へ。役員・支部役員等の安否確認と連絡体制確保。18.南三陸，気仙沼へ。役員・支部役員等の安否確認と連絡体制確保。亘理町，山元町状況確認，仙南保健福祉事務所へ状況報告。亘理町：避難所高齢者アセスメント開始（～3.19.）。20.宮城県社会福祉士会，宮城県ケアマネジャー協会として「津波被災地の地域包括支援センターの支援をする」をすることになる。22.南端：山元～北端：気仙沼の包地域包括支援センターへ。24.避難所（被災）高齢者アセスメント表作成。25.東松島市，石巻市，女川町への支援調整に仙台弁護士会の弁護士有志も同行。27.石巻，女川，南三陸，気仙沼へ（ケア協役員）。28.発災後3週間を経過しても避難所に要介護高齢者が多数存在した。宮城県が、避難所要介護者を県内の特養・老健等で入所定数の10%超の緊急入所受け入れを強力に指示。30.宮城県保健福祉部，長寿社会政策課と石巻との協議。東松島市：総合相談支援。04.02.長寿社会政策課と気仙沼市との協議。03.石巻市：雄勝包括支援センター支援。04.石巻市のボランティア活動拠点調整。04.地域包括支援センター支援調整担当を決める。05.亘理町：地域包括支援センター総合相談支援。09.気仙沼市福祉避難所運営と高齢者アセスメント（～7.30）12.石巻市現場担当者との協議。14.南三陸町現場担当者との協議。多賀城市地域包括支援センターに支援開始。18.石巻市地域包括支援センターとの協議。22.石巻市雄勝

町の実態調査と担当保健師との協議。24.石巻市牡鹿町の実態調査と担当保健師との協議。28.厚生労働省振興課課長と協議。29.厚生労働省振興課課長と石巻方面視察同行
05.02.石巻市雄勝包括:生活支障アセスメント開始(～9.30)。05.東松島市:健康支援調査開始(～5.31)。
16.日本介護支援専門員協会木村会長と協議。岩沼市:健康調査開始(～7.19)。19.石巻雄勝町外出支援開始(～10.18)。20.石巻市稲井地域包括支援センターでボランティアの情報交換会開催。23.仙台市:認知症ケアについての協議。26.石巻市桃生準福祉避難所:生活支援打ち合わせ。06.01.女川町:地域包括支援センター支援開始(～6.17)。02.石巻市桃生準福祉避難所:生活支援開始(～6.16)。13.亶理町:仮設住宅居住者支援について協議。21.気仙沼市:仮設住宅居住者支援について協議。24.石巻市地域包括支援センター打ち合わせ。25.亶理町:仮設住宅での総合相談支援開始(～7.24)。08.02.石巻市仮設住宅総合相談実施に向けての打ち合わせ。20.石巻市仮設住宅総合相談支援開始(～11.12)。09.02.女川町:地域包括支援センター支援開始(～9.20)。05.宮城県サポートセンター支援事務所開設。17.女川町:仮設住宅総合相談支援開始(～11.12)。2012.01.18.東松島市:津波被災地(約5,000世帯)「生活支障・生活ニーズ把握と生活支援」開始(～03.07)。09.03.東松島市:津波被災地及び応急仮設住宅(約5,100世帯)「生活支障・生活ニーズ把握と生活支援」開始(～10.21)。

ケアマネジャー、社会福祉士等の専門職ボランティアを受け入れてもらえるまでの準備に時間がかかった。平時の活動により、顔の見える関係ができていたことは大きかったが、被害が甚大過ぎた。押し付けにならず、負担にも感じないように時間をかけ、少しずつ具体的に提案していった。市町村と県、行政の担当課間、本所と支所等、できるだけ足を運んで報告し、話しを聞いていただくことに努めた。市町村の窓口となる人を決めて関わることにしたが、市町村の調整役を宮城県の長寿社会政策課がおこなったことも効果的だった。これも平常時の関わりによるものだろう。

津波被災地域の行政職員は100%以上の力で頑張っている住民の支援活動している。自らも被災し家族を失ったまま働き続けざるを得なかった人達もたくさんいる。そこに私達ケアマネジャーや社会福祉士が専門職として何ができるのだろうか。

ケアマネジャーが、個人としても支援物資を運んだり、介護をしたり、片付けを手伝ったり炊き出しをしたり、義捐金を送ったり様々な支援活動をしたと思うが、「専門職として何ができるか？」である。医療チームのように、自前で診療車を持ち込み、キャンプし、無料で治療し、無料で薬を出すといった自己完結な対応をすれば行政に負担はかけないが、ニーズ調査をして問題を見つけて置いておくだけでは、被災地の担当者の負担を増やすばかりである。私達も問題を見つけたら、当然現地担当者への報告・指示は必要だが、何等かの方法で完結まで関わるといふ、負担をかけない自己完結型の対応をしなければならない。

また、アセスメントの結果や情報、関わり方の経緯等のデータはその市町村のもの、地域包括支援センターのものであることを理解して関わることも重要である。地域によっては、保健師の健康調査の結果と、社会福祉士の生活支障調査の結果を一つにファイルして保管する等の工夫をした。

制度仕組みが出来ている現在は、住民に対して団体が直接的に支援するのではなく、ケアマネジャーや社会福祉士は行政支援、地域包括支援センター支援をすることとした。

(1) 宮城県ケアマネジャー協会

- ①避難所高齢者アセスメントにより保護の必要性を把握し、市町村の判断材料を提供すること。
- ②避難所や在宅の健康調査に協力すること
- ③生活支援(避難所、仮設住宅)に関すること

(2) 宮城県社会福祉士会

- ①地域包括支援センターの業務支援をすること。

避難所、在宅、仮設住宅での生活の支障を抱えている住民を見つけて問題を解決すること。被災関連問題解決と生活再建の支援に関する総合相談に対応すること。

このような総合相談対応は、平常時に何件もあることではないが、今回の津波被災によって一気に何千件も発生すると安易に予測できる。しかし、地域包括支援センターには基本3人しか職員がいない。長期的な人的支援が必要である。

また、震災直後から仙台弁護士会の有志による現地活動への同行、個別の同行訪問、訪問による総合相談対応で関わっていただいた。

その後は、市町村、地域包括支援センターの支援を中核にして、社会福祉士会、ケアマネジャー協会、弁護士会と協働による、仮設住宅の生活と生活再建に向けての総合相談支援をすることとした。

- ①地域包括支援センターの総合相談・権利擁護業務支援
- ②仮設住宅サポートセンターの支援

- ③仮設住宅のライフサポートアドバイザー，生活支援相談員の活動支援
- ④仮設住宅を中心とした，福祉・介護・法律等，生活再建に向けての総合相談会等の開催と実務
 - ・ケアマネジャー：高齢者の生活相談と支援
 - ・社会福祉士：全年齢，全障害がい者の生活相談と支援
 - ・弁護士：生活全般，生活再建に向けての法律相談支援

まとめと教訓

社会福祉士，介護支援専門員等，福祉の相談支援者の支援対象者は，要支援・要介護高齢者と要援護障がい者である。長期間に渡り被災地支援に入っていると，その範囲が分からなくなり，何でもしなければならぬと錯覚してしまう。

二年を経過した今は，ボランティアとしてではなく，市町村からの委託事業としての関わりになっている。行政，応急仮設住宅サポートセンター支援員，ボランティア，福祉の専門職，法律の専門職，医療・保健の専門職等，それぞれが特徴や専門性を発揮し，必要な人に必要な支援ができるようになれば良い。

被災地である宮城県内からの，ケアマネジャー，社会福祉士の専門職ボランティアが，述べ1,300人を超えた。総合相談には，個別訪問対応も含め仙台弁護士会の弁護士の方々にもボランティアとして多数参加していただいた。県内すべての地域から人が集まり，震災前からの「お互い顔の見える関係」がさらに強い連帯感になったと感じるし，今後の支援にも役立つはずだ。

「平常時の活動や努力は非常時でも活かされ，平常時でも非常時でもケアマネジャーはケアマネジャーとして専門性を持って活動することが重要である。」ということが今回の震災後の活動から得られた教訓である。

※この記録は，全国からの有志・団体からの災害支援金の一部を活用させていただき作成しました。

東日本大震災におけるケアマネジャーの活動に関する調査結果

調査の 実施概要

東日本大震災及び大津波の被災地における、ケアマネジャーとしての活動現状調査をおこなった結果です。

- | | |
|---------|--|
| ①調査名 | 東日本大震災におけるケアマネジャーの活動に関する調査 |
| ②調査対象者 | 宮城県内全居宅介護支援事業所所属の介護支援専門員
※介護サービス情報公表センター公表情報による |
| ③調査方法 | 郵送による全数調査 |
| ④調査票配布数 | 1, 576件（526事業所） |
| ⑤調査票回収数 | 1, 031件 |
| ⑥回収率 | 65.4% |
| ⑦調査期間 | 平成23年10月25日～11月15日 |
| ⑧実施主体 | 宮城県ケアマネジャー協会 |

目 次

第 1 章 調査目的

第 2 章 調査主体

第 3 章 調査方法

第 4 章 調査結果

4-1 単純集計

4-1-1 ケアマネジャー自身について

4-1-1(1) 年齢

4-1-1(2) 性別

4-1-1(3) 勤務年数

4-1-1(4) 勤務形態

4-1-1(5) ケアマネジャー以外に有している資格

4-1-1(6) 自身の被災状況

4-1-1(7) 自宅の被災状況

4-1-1(8) 津波発生当時の勤務状況

4-1-1(9) 震災時の担当利用者数

4-1-1(10) 2011年10月1日現在の担当利用者数

4-1-2 所属している事業所について

4-1-2(1) 所属法人の種類

4-1-2(2) 所属法人の提供するサービス

4-1-2(3) 震災時のケアマネジャーの人数

4-1-2(4) 震災時の事業所全体の担当利用者数

4-1-2(5) 居宅介護支援事業所の所在する市町村

4-1-2(6) 居宅介護支援事業所人員の被災状況

4-1-2(7) 居宅介護支援事業所の被災状況(建物)

4-1-2(8) 居宅介護支援事業所の被災状況(ライフライン等)

4-1-3 ケアマネジャーとしての活動について

4-1-3(1) 担当利用者や介護サービス利用者への救助等緊急対応の有無

4-1-3(2) 緊急対応の内容

4-1-3(3) 利用者の安否確認開始時期

4-1-3(4) 安否確認開始のきっかけ

4-1-3(5) 主な安否確認方法

4-1-3(6) 安否確認の優先順位の有無

4-1-3(7) 安否確認において優先したもの

4-1-3(8) 安否確認終了時期

4-1-3(9) 安否確認後に緊急入所に繋げた件数

- 4-1-3(10) 安否確認後に緊急入院に繋がった件数
- 4-1-3(11) 安否確認後に福祉避難所に繋がった件数
- 4-1-3(12) 安否確認後に介護サービスに繋がった件数
- 4-1-3(13) 避難所で介護サービスに繋がった件数
- 4-1-3(14) ケアマネジャーとして非常時の安否確認を重要だと思うか
- 4-1-4 ライフライン停止等への対応
 - 4-1-4(1) 要介護高齢者を支える上で必要だった物資
 - 4-1-4(2) ライフライン停止による不具合への対応
- 4-1-5 その他の活動
 - 4-1-5(1) 避難所や地域での活動の有無
 - 4-1-5(2) どのような活動を行ったか
- 4-1-6 震災前・今後の活動
 - 4-1-6(1) 災害対応マニュアルの有無
 - 4-1-6(2) 災害対応マニュアルは震災で役に立ったか
 - 4-1-6(3) 震災前の研修参加経験の有無
 - 4-1-6(4) 参加した研修の種類
 - 4-1-6(5) 震災前から連携をとっていた
 - 4-1-6(6) ケアマネジャーの仕事のやりがい
 - 4-1-6(7) ケアマネジャーの仕事の満足度
 - 4-1-6(8) ケアマネジャーの仕事を続けたいか
- 4-2 クロス集計
 - 4-2-1 年齢(三浦)
 - 4-2-2 性別(野田)
 - 4-2-3 勤務年数(阿部)
 - 4-2-4 自身の被災状況(熊澤)
 - 4-2-5 自宅の被災状況(但野)
 - 4-2-6 所属法人の提供するサービス(千田)
 - 4-2-7 居宅介護支援事業所の所在する市町村(富永)
 - 4-2-8 災害対応マニュアルの有無(柳沼)
 - 4-2-9 災害対応マニュアルは震災で役に立ったか(柳沼)
 - 4-2-10 ケアマネジャーの仕事のやりがい(瀧澤)
 - 4-2-11 ケアマネジャーの仕事の満足度(宍戸)
 - 4-2-12 ケアマネジャーの仕事を続けたいか(高橋)

第5章 おわりに

第1章 調査目的

東日本大震災におけるケアマネジャーの活動に関する調査

東日本大震災，特に津波の被災地において，ケアマネジャー自らが被災しているにも関わらず，利用者の人命救助，安否確認や避難所での支援，緊急入所，緊急入院への対応，サービスが少ない中の調整等に奔走していた。

宮城県ケアマネジャー協会では，この非常時にケアマネジャーがどのように活動していたかを明らかにして記録と記憶に残し，今後の活動に繋げる。

第2章 調査主体

宮城県ケアマネジャー協会

分析担当 宮城大学 事業構想学部 糟谷研究室

第3章 調査方法

・調査方法と対象

宮城県内全居宅介護支援事業所所属の介護支援専門員を対象とした。

調査方法は郵送による全数調査で行った。

・調査期間

2011年10月25日から11月15日まで

・調査内容

下記の6点を主な調査内容とし，質問項目を設けた。

1. 基本属性(性別，年齢，勤務年数，資格，勤務形態，被災状況，担当利用者数など)
2. 所属事業所について
3. ケアマネジャーの活動について
4. ライフライン停止などの対応について
5. その他の活動について
6. 震災前の活動・今後の活動について

・回収成績

調査票は526の事業所に1576件配布し，回収数は1031件，回収率は65.4%であった。

・調査結果

単純集計とクロス分析により，統計分析を行った。なお，分析にはSPSSを使用した。

また，クロス分析については5%水準で有意差があったもののみ掲載した。

第4章 調査結果

4-1 単純集計

4-1-1 ケアマネジャー自身について

4-1-1(1) 年齢

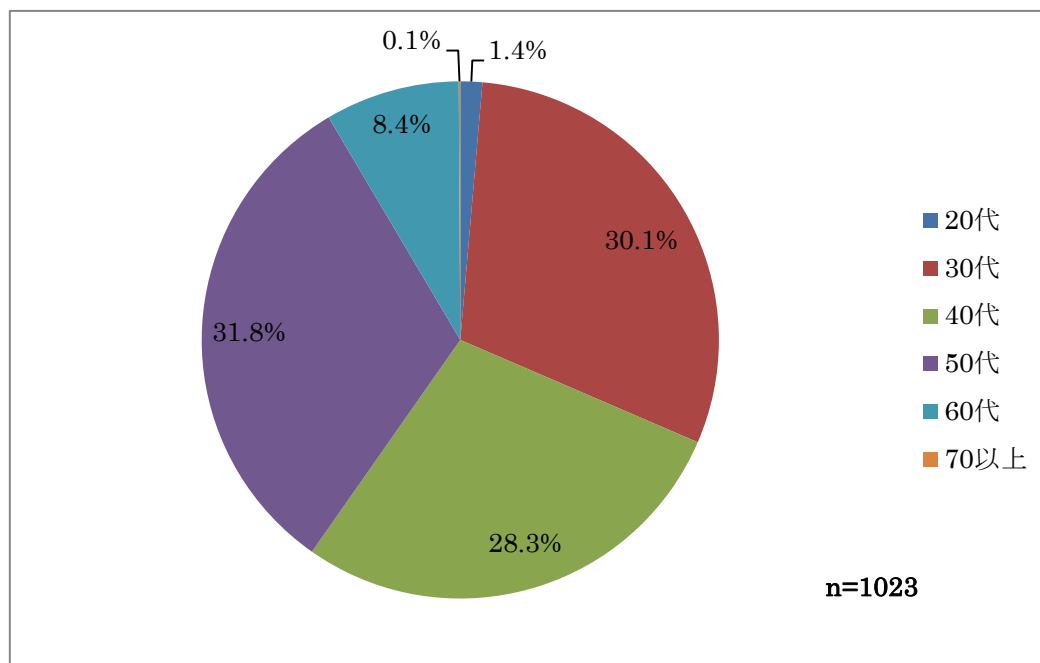


図 4-1-1-1 年齢

回答者の年齢は、30代、40代、50代がそれぞれ約3割であった。続いて60代が8.4%、20代が1.4%、70代以上が0.1%となった。

4-1-1(2) 性別

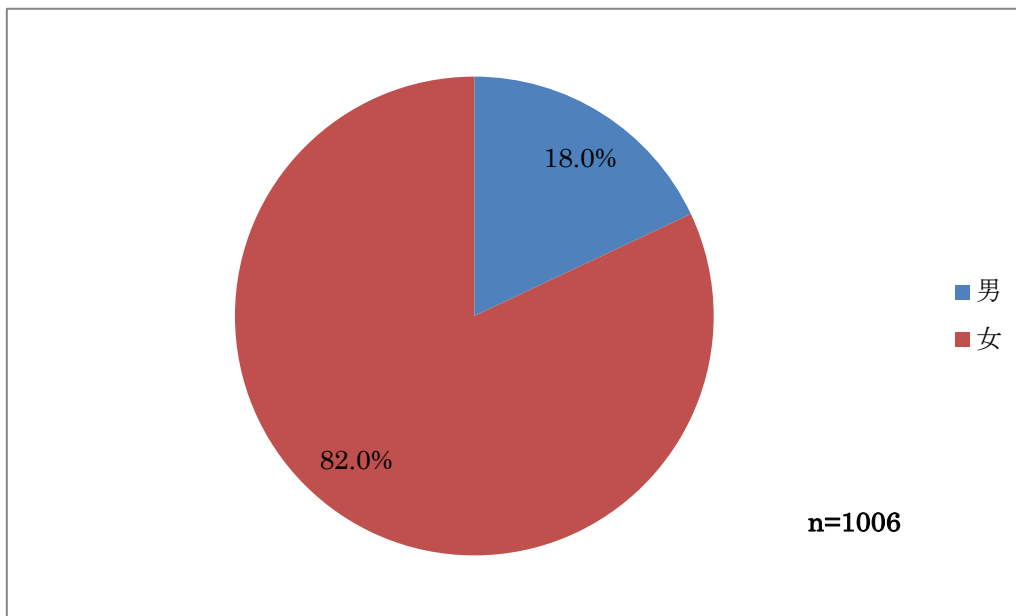


図 4-1-1-2 性別

性別については男性が 18.0%，女性が 82.0%であった。

4-1-1(3) 勤務年数

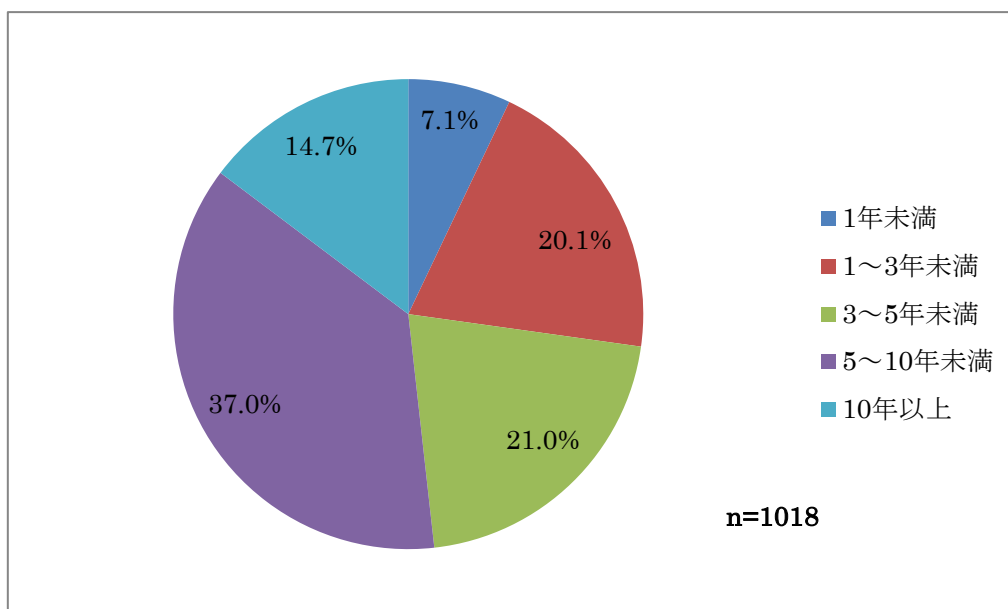


図 4-1-1-3 勤務年数

勤務年数について最も多かったのは 5～10 年未満で 37.0%であった。続いて 3～5 年未満が 21.0%，1～3 年未満が 20.1%となった。

4-1-1(4) 勤務形態

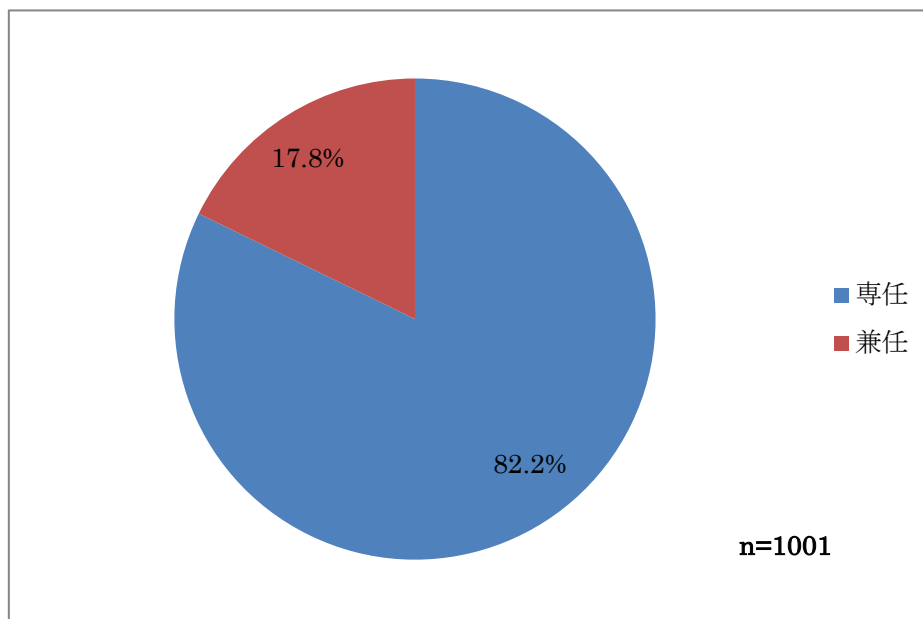


図 4-1-1-4 勤務形態

勤務形態については専任が 82.2%，兼任が 17.8%であった。よって，専任が約 8 割，兼任が約 2 割を占めていることが分かった。

4-1-1(5) ケアマネジャー以外に有している資格

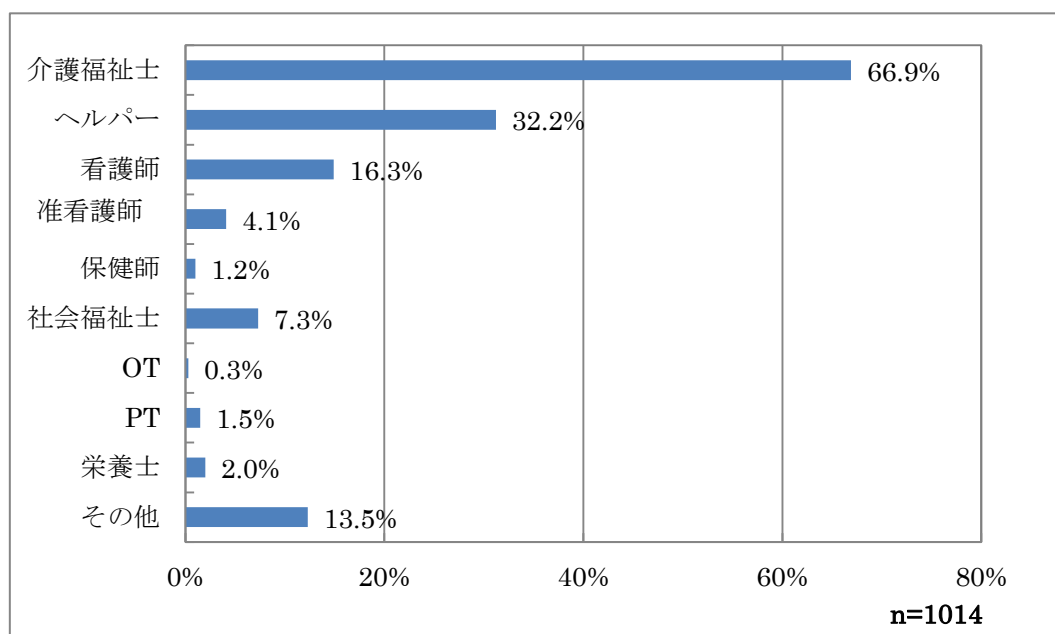


図 4-1-1-5 ケアマネジャー以外に有している資格

図から，ケアマネジャー以外の資格では，「介護福祉士」が一番多いことが分かった。その次に多いものは「ヘルパー」や「看護師」の資格であった。

4-1-1(6) 自身の被災状況

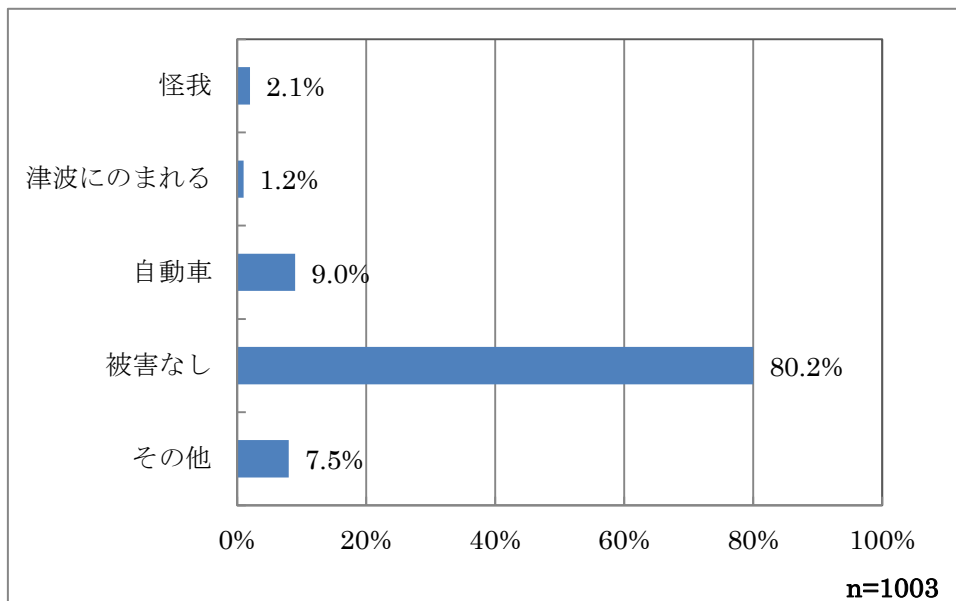


図 4-1-1-6 自身の被災状況

ケアマネジャー自身の被災状況は、約 10 人に 1 人が自動車を失い、約 100 人に 3 人が「怪我」や「津波にのまれる」といった人的被災を受けていた。

4-1-1(7) 自宅の被災状況

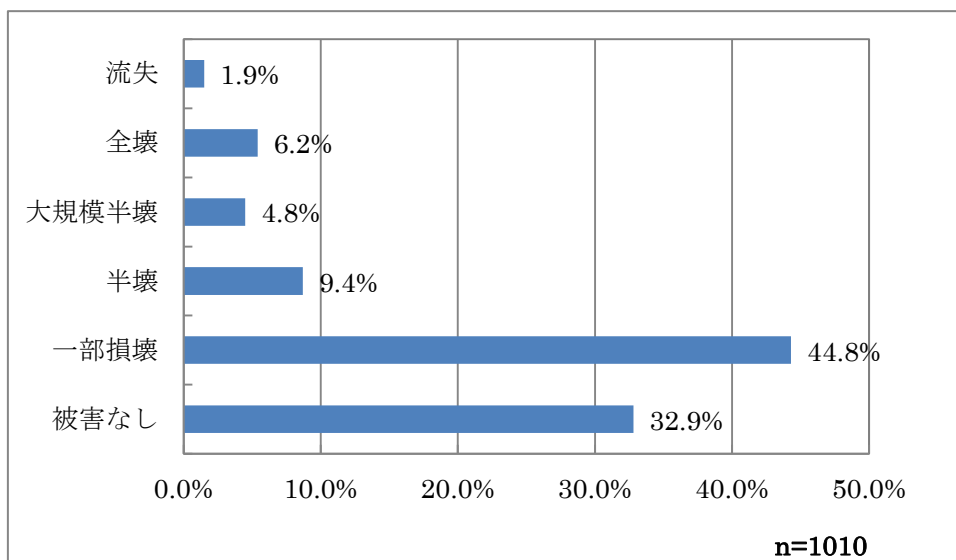


図 4-1-1-7 自宅の被災状況

約 7 割のケアマネジャーが自宅が被災し、約 10 人に 1 人は全壊の被害を受けていたことがわかった。

4-1-1(8) 津波発生当時の勤務状況

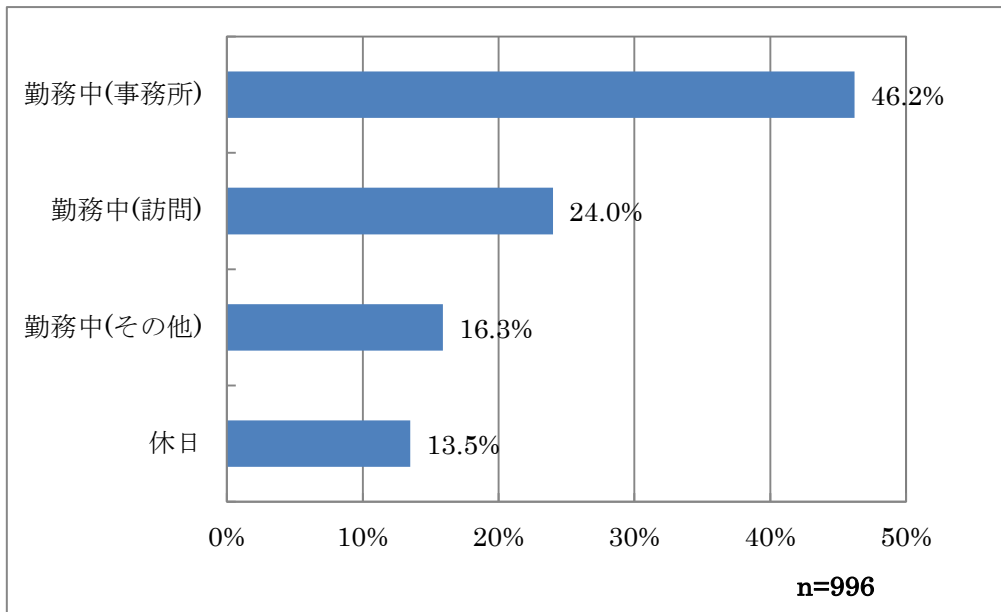


図 4-1-1-8 津波発生当時の勤務状況

金曜日の午後であったため、勤務状況で一番多かったものが「勤務中(事務所)」，次に多かったものが「勤務中(訪問)」だった。

4-1-1(9) 震災時の担当利用者数

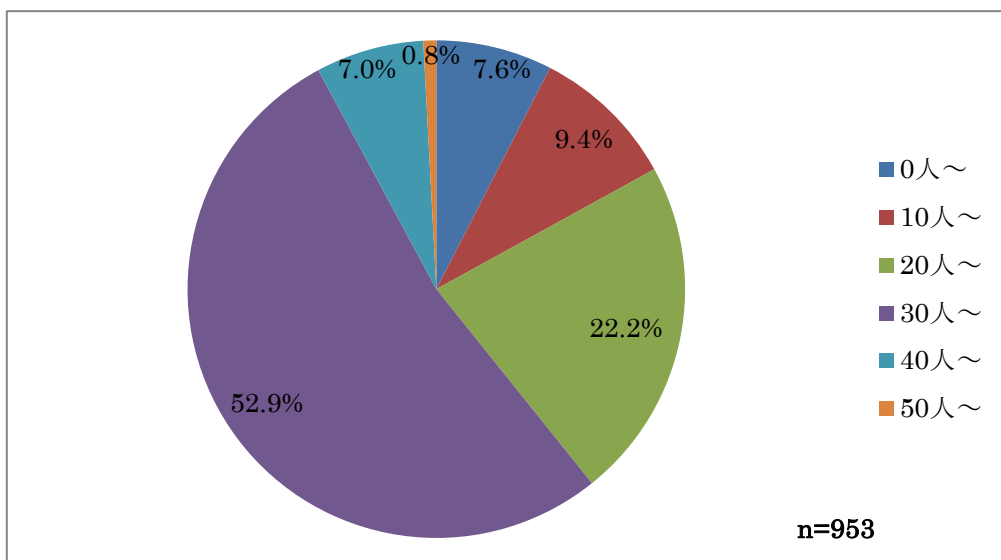


図 4-1-1-9 震災時の担当利用者数

上図をみると、最も多かったのが 30 人～39 人利用者を担当していた人で、全体の半数を超えて 52.9%であった。次いで 20 人～29 人を担当していたという人が 22.2%で全体の約 4 分の 1 を占めていた。

4-1-1(10) 10月1日現在の担当利用者数

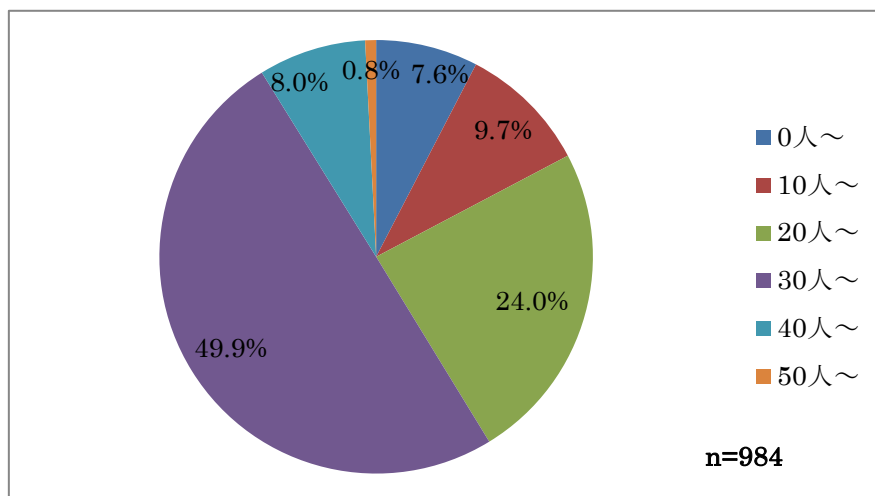


図 4-1-1-10 10月1日現在の担当利用者数

図 4-1-1-9 と比べると、30～39 人担当していた人が若干ではあるが 3%減少し、逆に、20～29 人担当している人が 2%増加していることが分かった。

このことから、震災後ケアマネジャー一人当たりが担当する利用者の人数が減る傾向だったと考えられる。

4-1-2 所属している事業所について

4-1-2(1) 所属法人の種類

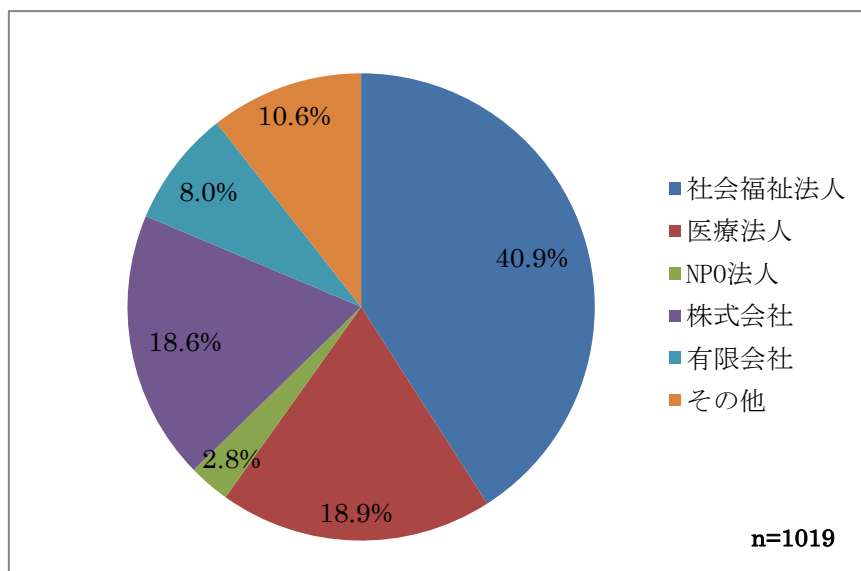


図 4-1-2-1 所属法人の種類

上図をみると、最も多いのが 40.9%の社会福祉法人である。次いで、医療福祉法人と株式会社がほぼ同じ割合で存在することが分かった。また、最も少ないのが NPO 法人で 2.8% となった。

4-1-2(2) 所属法人の提供するサービス

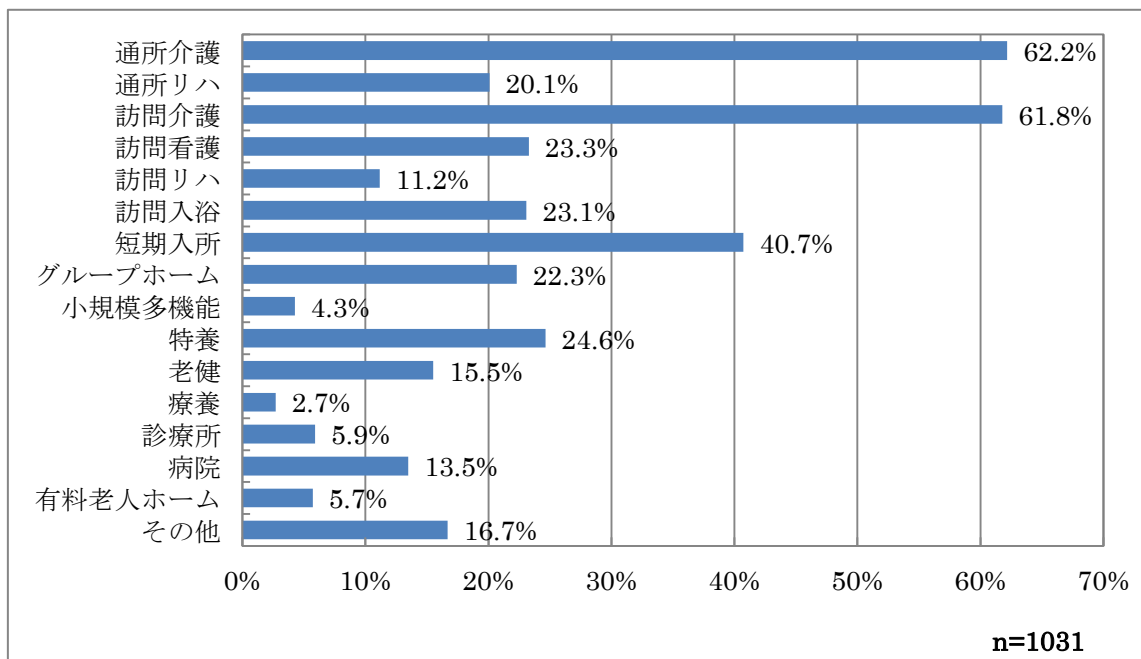


図 4-1-2-2 所属法人の提供するサービス

上図より、通所介護が 62.2%、訪問介護が 61.8%と約 6 割の法人が提供していることが分かった。このことから、介護の需要が多いことが推測することができる。次いで、短期入所が 40.7%となった。また、最も少ないサービスが療養で 2.7%であった。

4-1-2(3) 震災時のケアマネジャーの人数

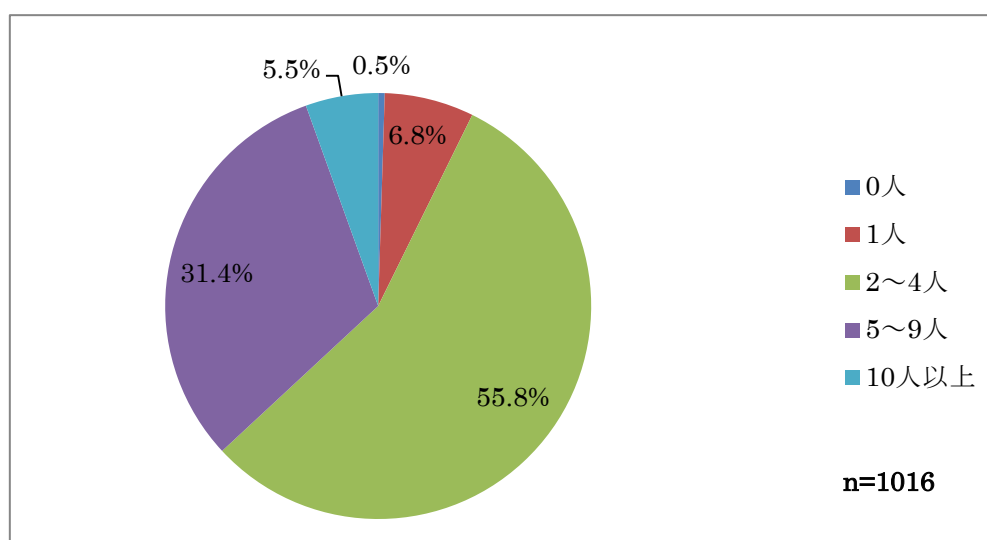


図 4-1-2-3 震災時のケアマネジャーの人数

図 4-1-2-3 より、震災時の事業所ごとのケアマネジャー人数は 2~4 人が最も多く、10人以上在籍している事業所は 0.5%にとどまっていることがわかった。

4-1-2(4) 震災時の事業所全体の担当利用者数

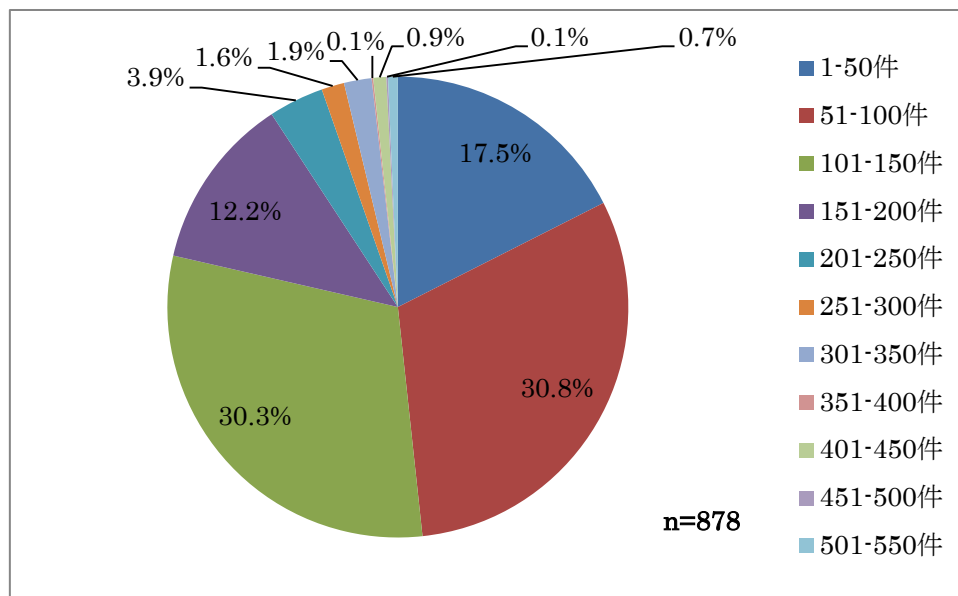


図 4-1-2-4 震災時の事業所全体の担当利用者数

図 4-1-2-4 から、震災時の事業所全体の利用者数は 51～150 件で全体の 60%を占めていることがわかった。このことから宮城県は小規模から中規模程度の事業所が多いことが推測できる。

4-1-2(5) 居宅介護支援事業所の所在する市町村

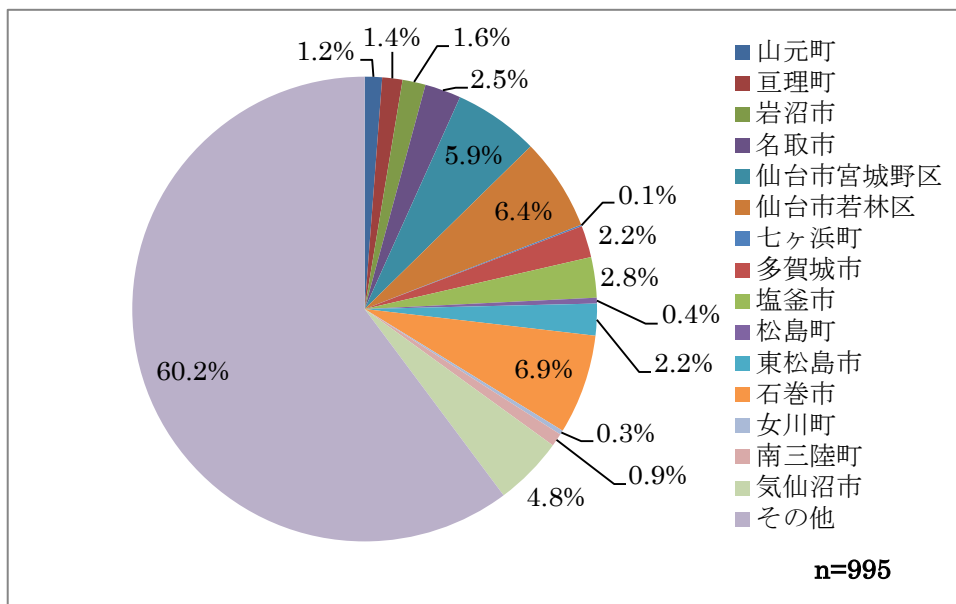


図 4-1-2-5 居宅介護支援事業所の所在する市町村

図 4-1-2-5 をみると、宮城県全体の約 4 割の事業所が津波被災地に所在していたことがわかった。

4-1-2(6) 居宅介護支援事業所人員の被災状況

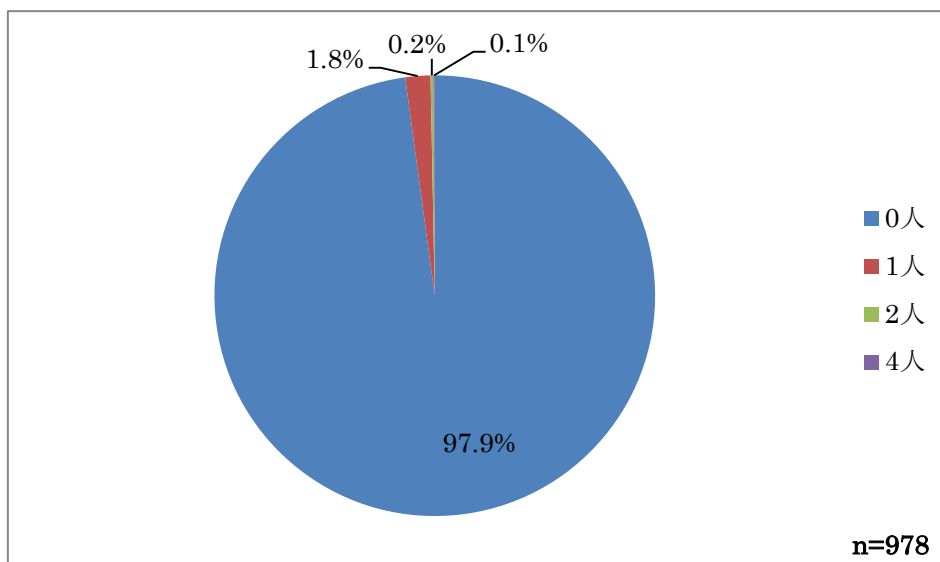


図 4-1-2-6-1 居宅介護支援事業所人員の被災状況(怪我)

図 4-1-2-6-1 から、約 2 パーセント (20 の事業所) のケアマネジャーが人的被害を受けていたことが分かった。

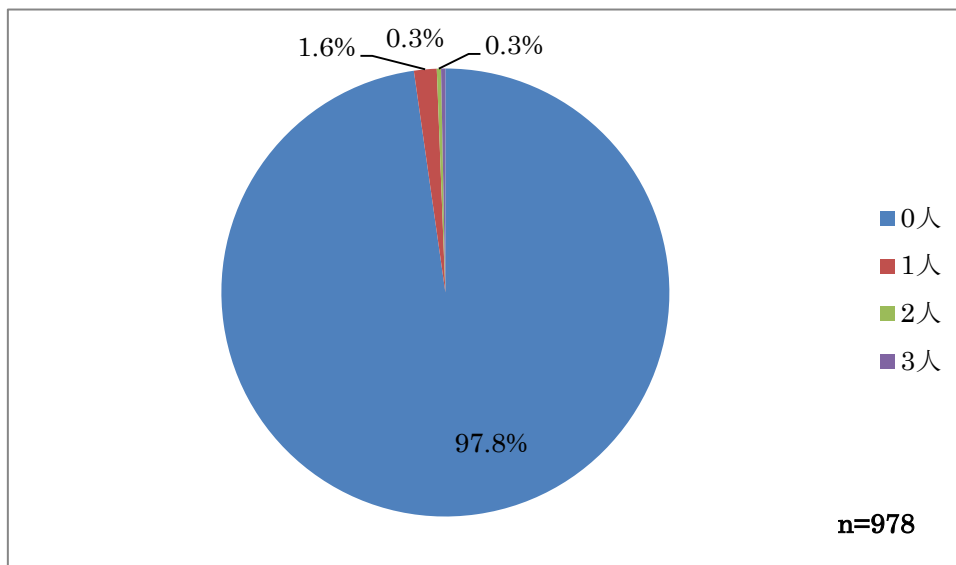


図 4-1-2-6-2 居宅介護支援事業所人員の被災状況 (死亡)

図 4-1-2-6-2 から、約 2%の事業所で被災しケアマネジャーが死亡 (11 名) した。

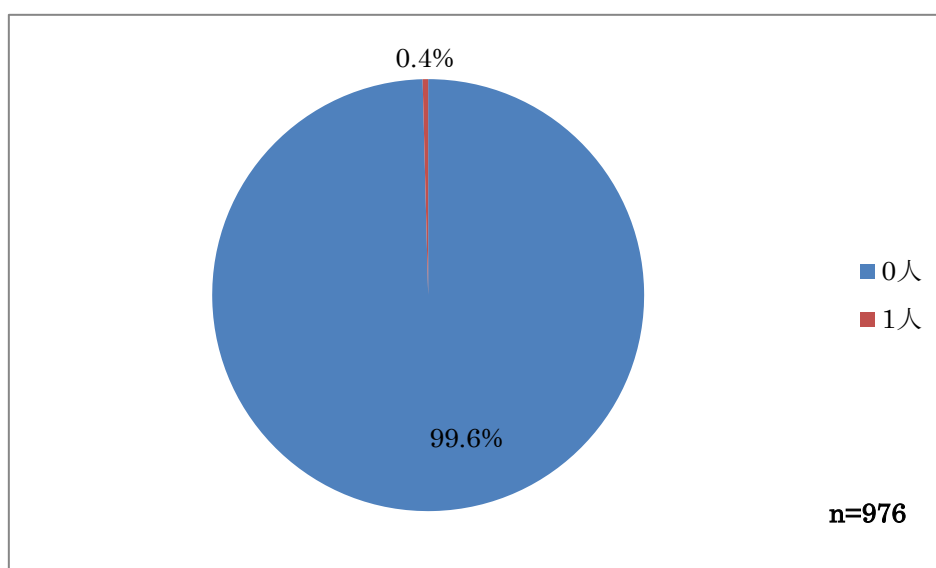


図 4-1-2-6-3 居宅介護支援事業所人員の被災状況 (行方不明)

図 4-1-2-6-3 より、この時点の行方不明は 1 人だった。

4-1-2(7) 居宅介護支援事業所の被災状況(建物)

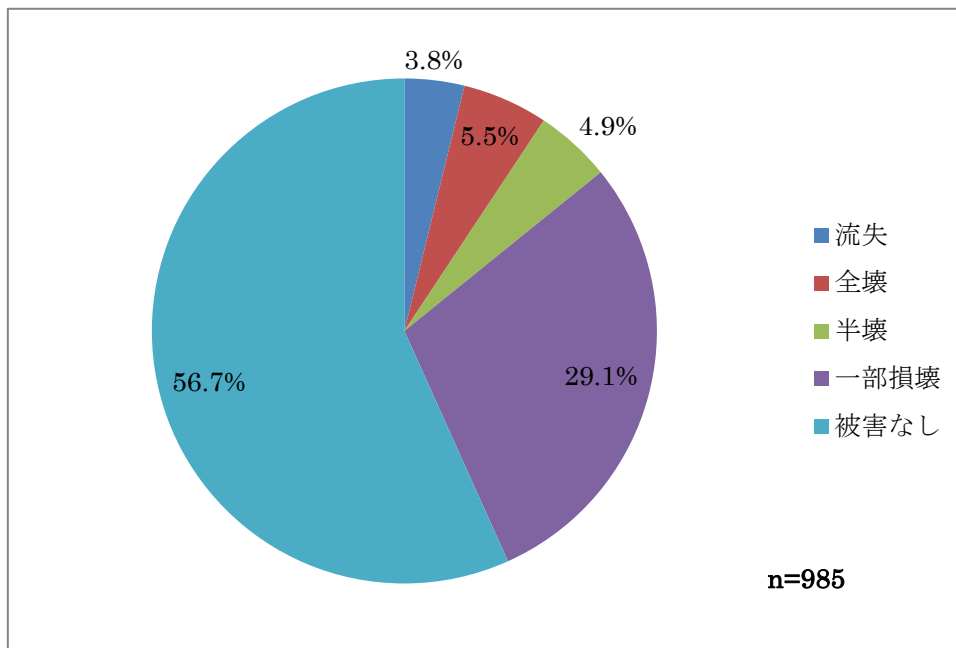


図4-1-2-7 居宅介護支援事業所の被災状況(建物)

10%弱の事業所が流出と全壊の被害を受けたが、半数以上の事業所が被害なしであった。

4-1-2(8) 居宅介護支援事業所の被災状況(ライフライン等)

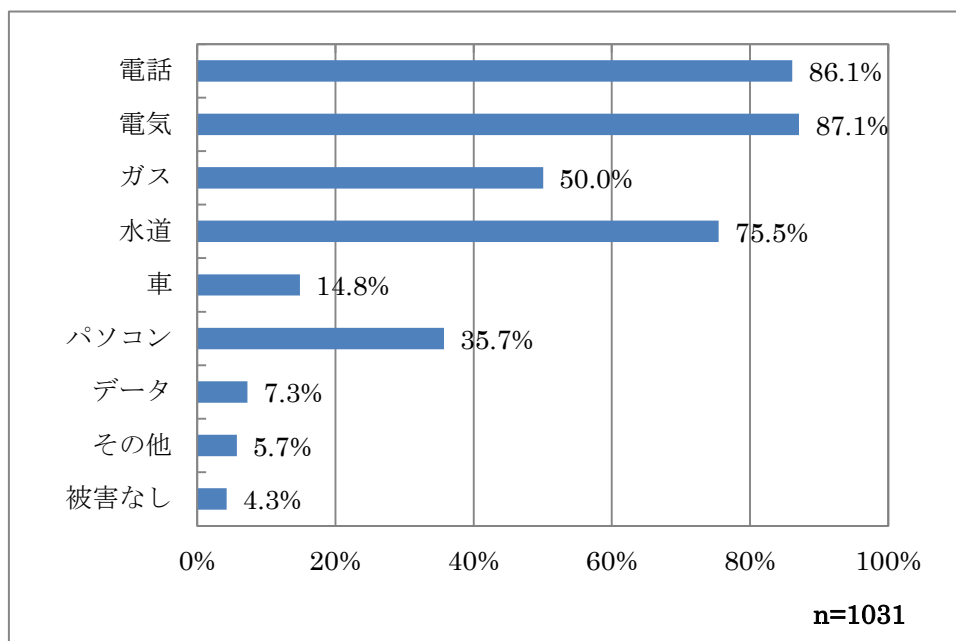


図 4-1-2-8 居宅介護支援事業所の被災状況(ライフライン等)

ライフラインについては被害なしが全体のわずか 4.3%であった。中でも電気は 87.1%、ガスは 50.0%、水道は 75.5%とライフラインの被害が大きかったことがわかる。

4-1-3 ケアマネジャーとしての活動について

4-1-3(1) 担当利用者や介護サービス利用者への救助等緊急対応の有無

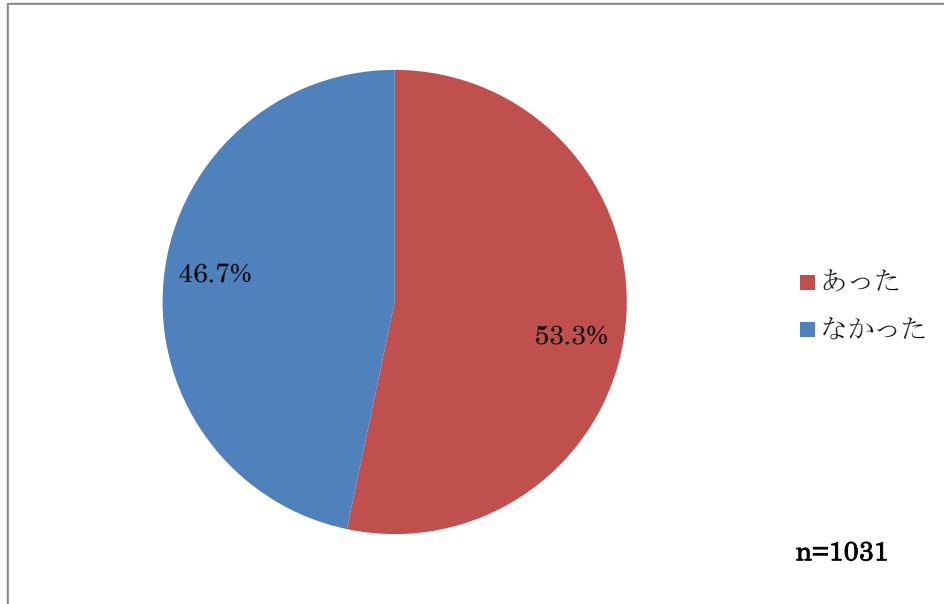


図 4-1-3-1 担当利用者や介護サービス利用者への救助等緊急対応の有無

半数強が担当利用者や介護サービス利用者への救助等緊急対応にあたったということがわかった。

4-1-3(2) 緊急対応の内容

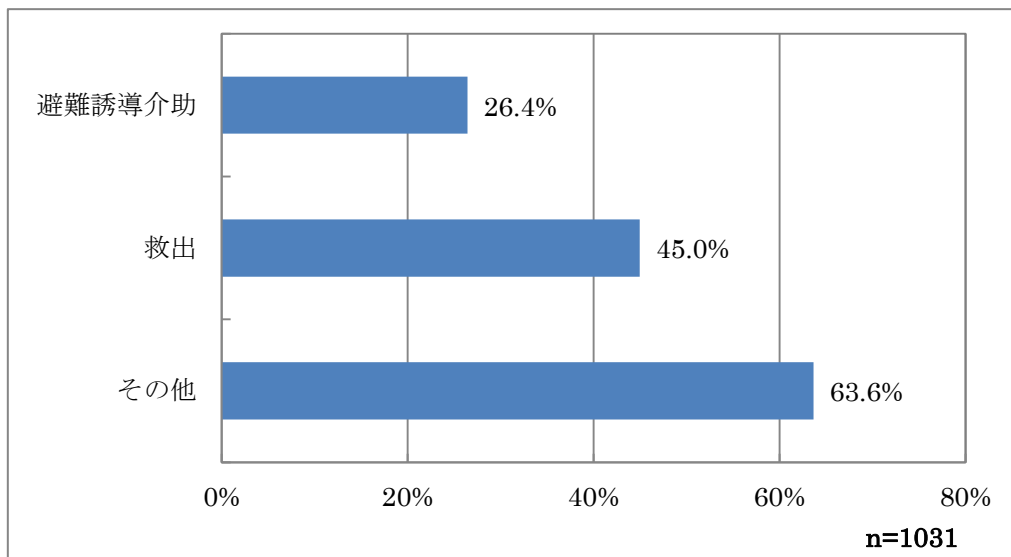


図 4-1-3-2 緊急対応の内容

避難誘導介助に当たった人は 26.4%，救出に当たった人は 45%であった。

4-1-3(3) 利用者の安否確認開始時期

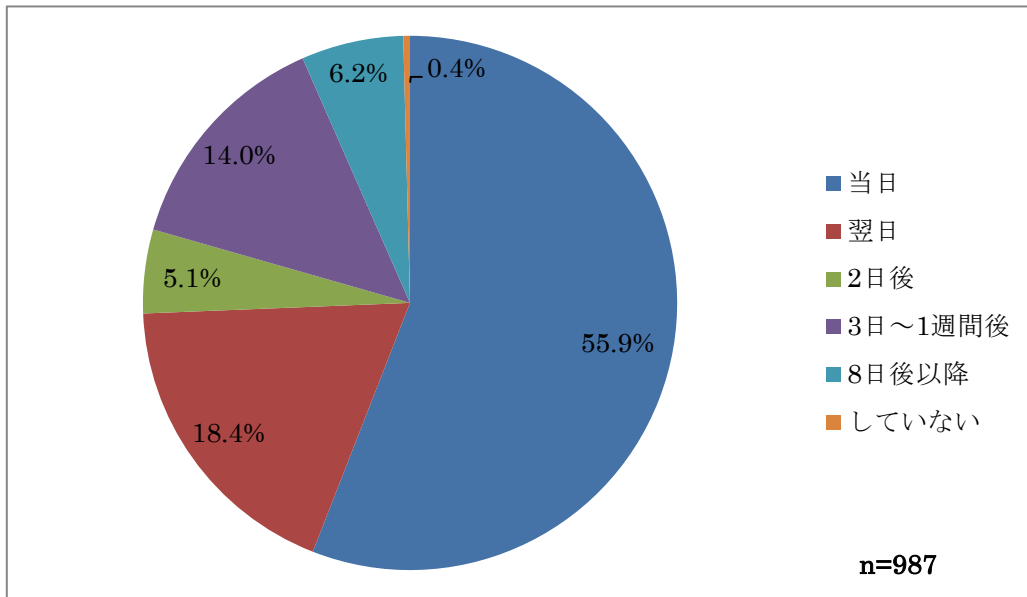


図 4-1-3-3 利用者の安否確認の開始時期

利用者の安否確認の開始時期は、半数を超える 55.9%が当日から安否確認を開始している。約 8 割が当日から 2 日後に安否確認を開始していることから、震災が起きてから早い時期で安否確認を行っていることが分かる。

一方で安否確認を開始したのが 8 日以降と遅いものも 6.2%あった。0.4%とごくわずかではあるが、利用者の安否確認をしていないという回答もあった。

4-1-3(4) 安否確認開始のきっかけ

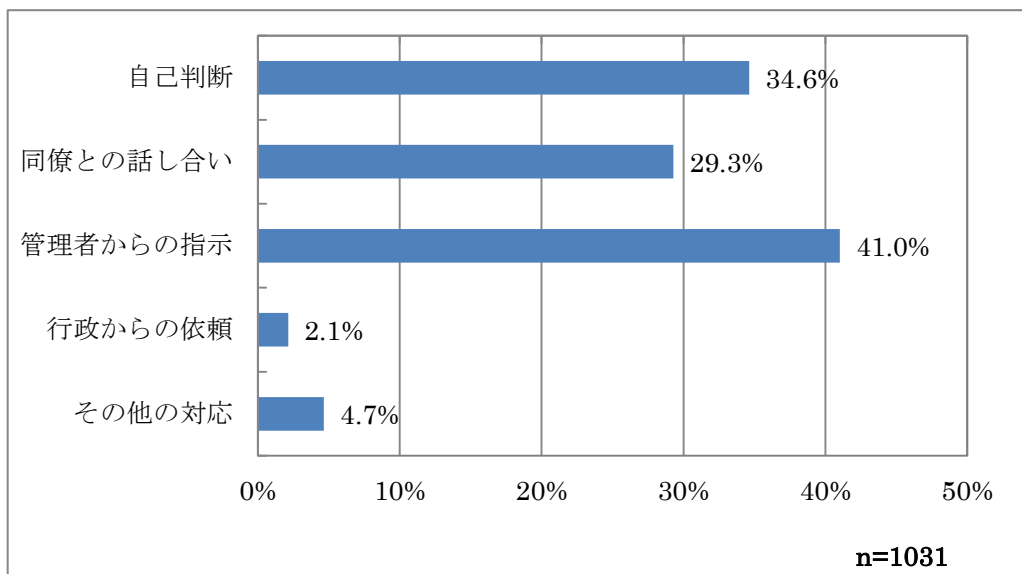


図 4-1-3-4 利用者の安否確認の開始のきっかけ

利用者の安否確認の開始のきっかけは管理者からの指示と答えた割合は 41.0%と最も多

かった。続いて自己判断が 34.6%であった。また、同僚との話し合いと答えた割合も 29.3% 存在しており、この質問に対する答えは大きく 3 つに分かれていた。2.1%という少数ではあるが、行政からの依頼が安否確認の開始のきっかけであったという回答もあった。

4-1-3(5) 主な安否確認方法

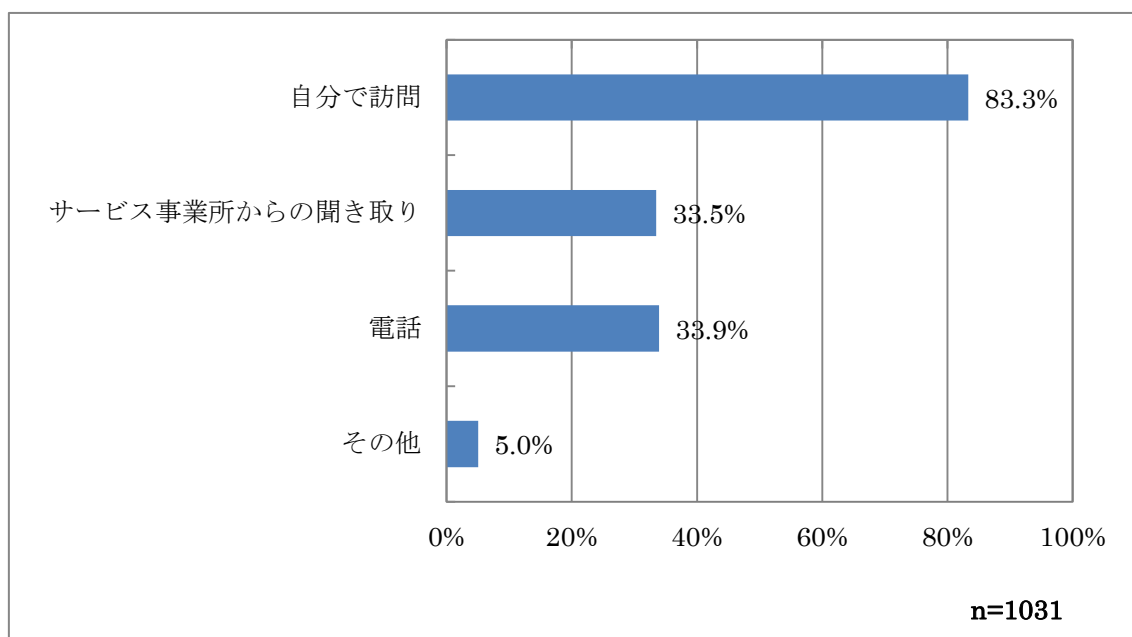


図 4-1-3-5 主な安否確認方法

主な安否確認方法は自分で訪問と答えた割合が 83.3%ということから、8 割を超える多くのケアマネジャーが自ら訪問して安否を確認していたことが分かった。また、サービス事業所からの聞き取り、電話と回答した割合も共に約 3 割あった。その他の安否確認方法は 5.0%と少数であった。

4-1-3(6) 安否確認の優先順位の有無

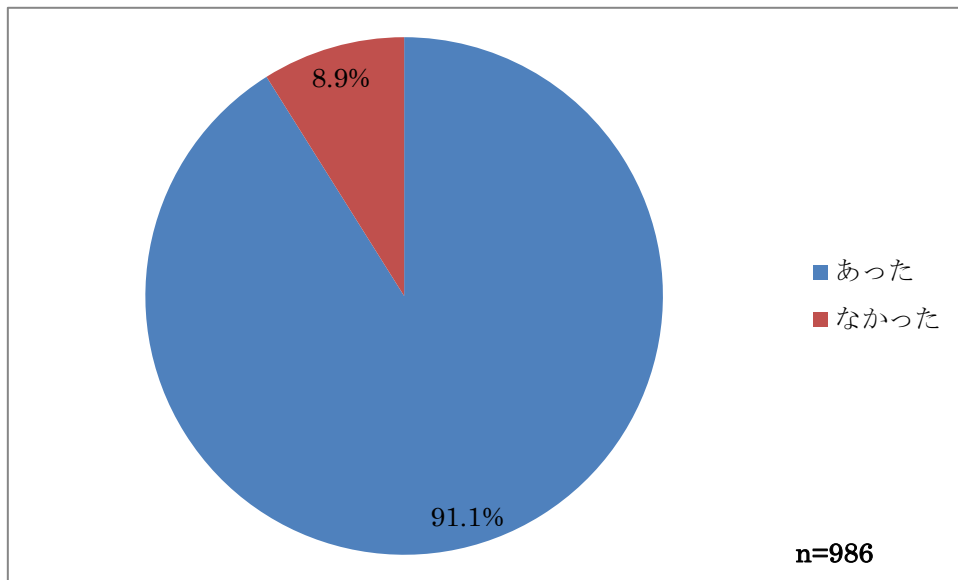


図 4-1-3-6 安否確認の優先順位の有無

安否確認の優先順位があったと答えた人は、9割を超える91.1%であった。このことから回答したケアマネジャーのほとんどが優先順位をつけて、利用者の安否確認を行っていたということが分かる。

4-1-3(7) 安否確認において優先したもの

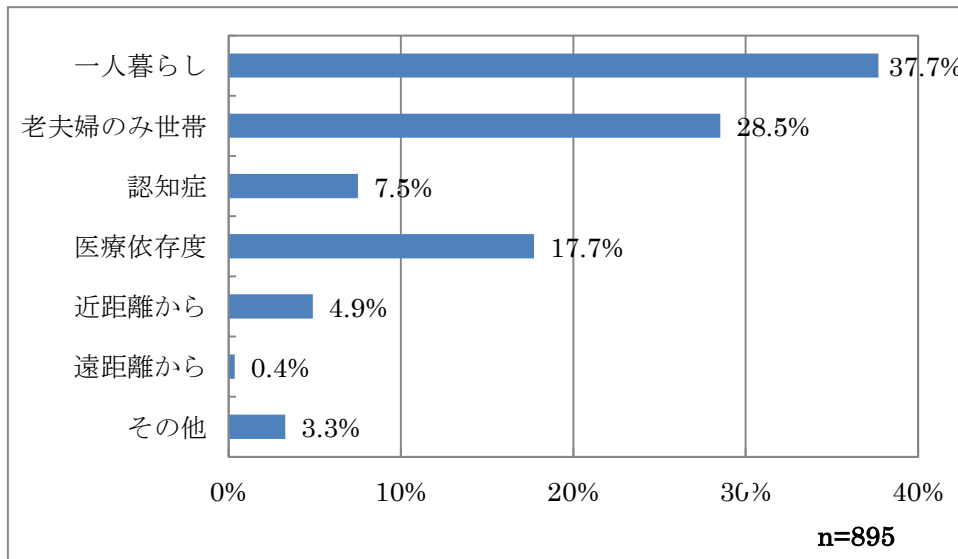


図 4-1-3-7 安否確認において優先したもの

最も多いのは一人暮らし、次いで老夫婦のみ世帯であった。利用者の周りに利用者を見てくれる人がいるかで優先順位をつけていたと考えられる。

4-1-3(8) 安否確認終了時期

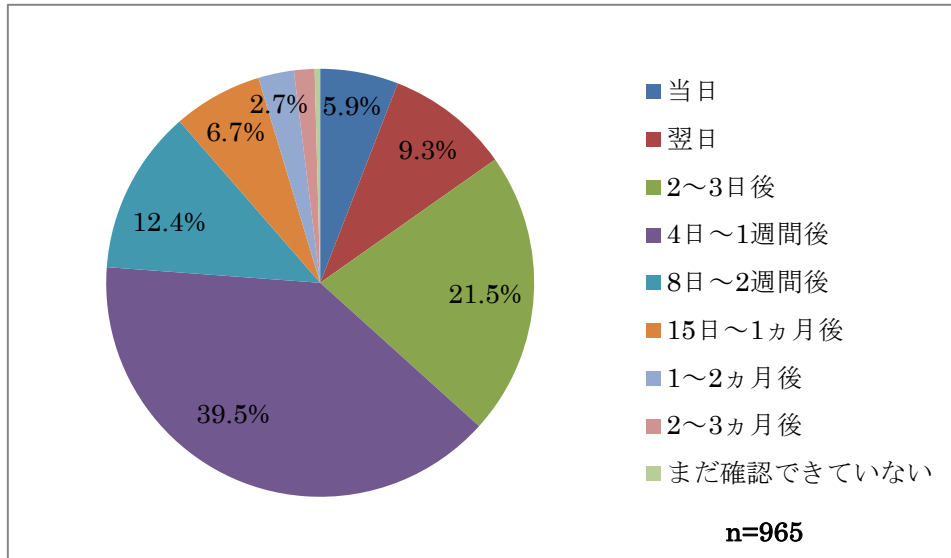


図 4-1-3-8 安否確認終了時期

当日から次第に割合が増え、4日～1週間後が最も多く、8日～2週間後からは次第に減少していった。

4-1-3(9) 安否確認後に緊急入所に繋げた件数

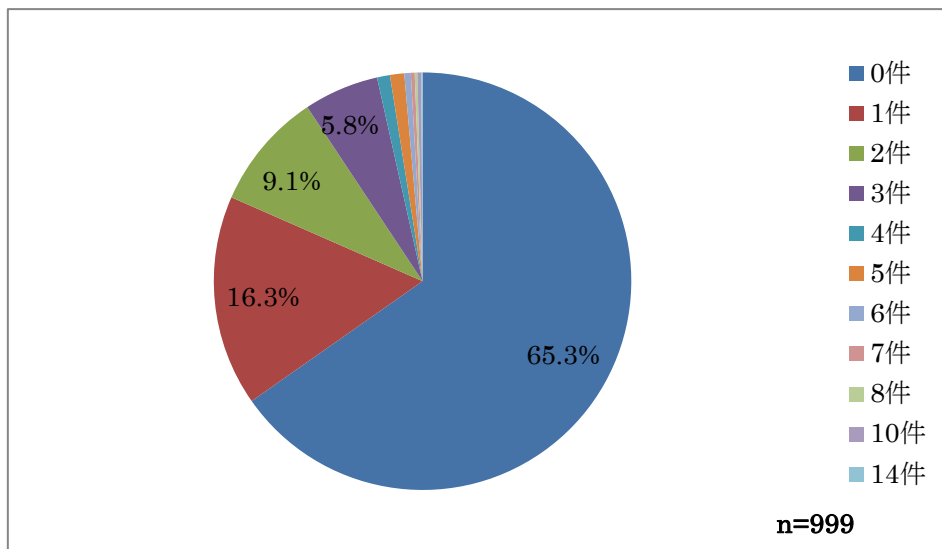


図 4-1-3-9 安否確認後に緊急入所に繋げた件数

ケアマネジャーは、要介護高齢者の安否確認をただだけでなく、アセスメントにより 25% が保護の必要性を判断し緊急入所に繋げたことが分かった。

4-1-3(10) 安否確認後に緊急入院に繋がった件数

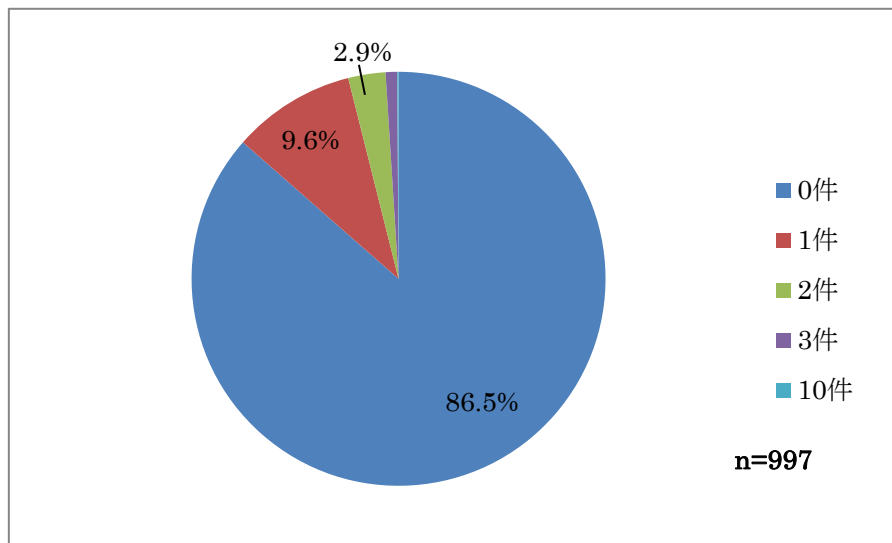


図 4-1-3-10 安否確認後に緊急入院に繋がった件数

約 15%の医療の必要性を判断し、緊急入院に繋がったことが分かった。

4-1-3(11) 安否確認後に福祉避難所に繋がった件数

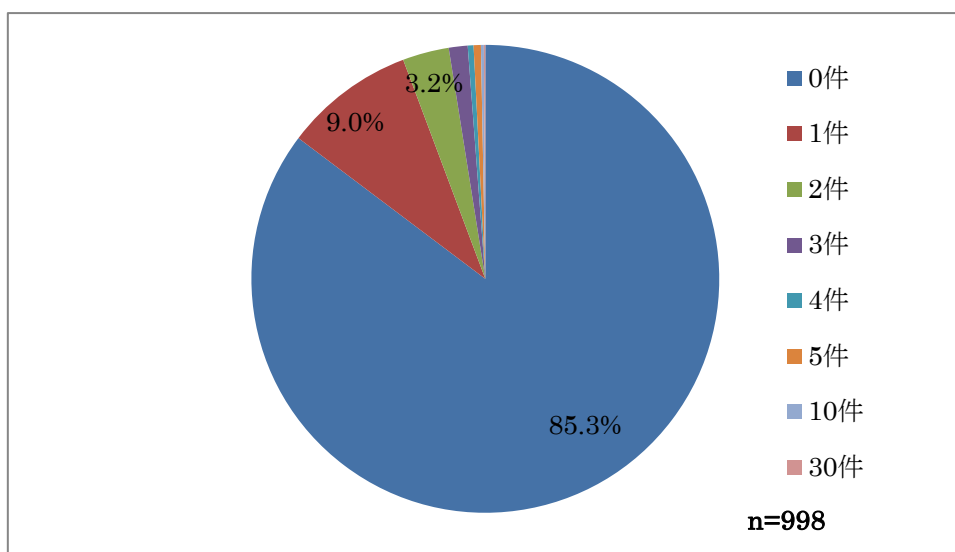


図 4-1-3-11 安否確認後に福祉避難所に繋がった件数

安否確認し、在宅での生活が不可能な要介護高齢者を福祉避難所に繋がった割合が 15%であった。緊急入所 25%と比較すると、福祉避難所が少なかったか機能していなかったのではないかと推測できる。

4-1-3(12) 安否確認後に介護サービスに繋がった件数

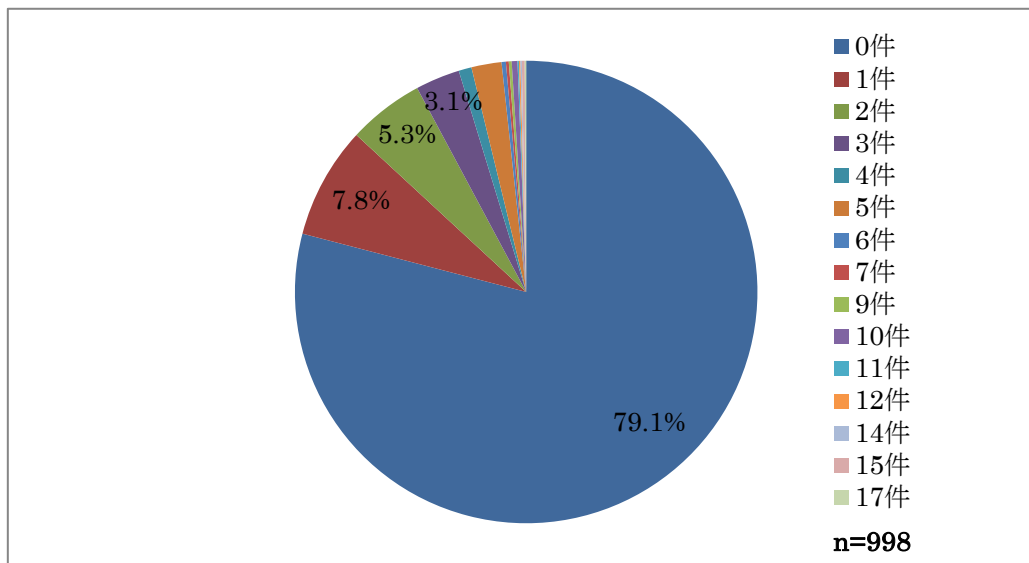


図 4-1-3-12 安否確認後に介護サービスに繋がった件数

安否確認後に、約 2 割の要介護高齢者を介護サービスに繋げて対応していた。

4-1-3(13) 避難所で介護サービスに繋がった件数

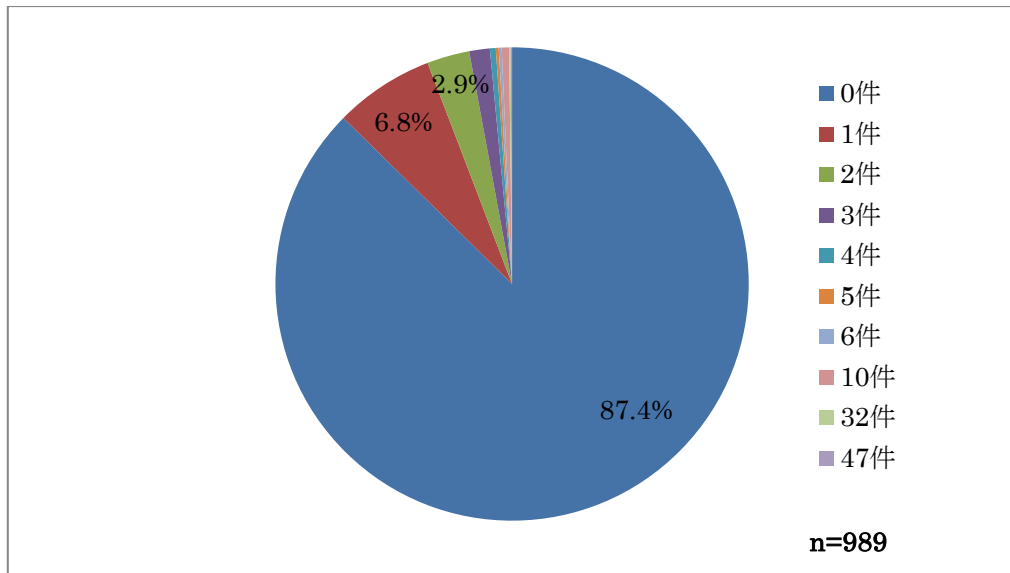


図 4-1-3-13 避難所で介護サービスに繋がった件数

避難所に行って安否確認、もしくは避難所を訪問することで、約 15%を介護サービスに繋げて支援することができた。

4-1-3(14) ケアマネジャーとして非常時の安否確認を重要だと思うか

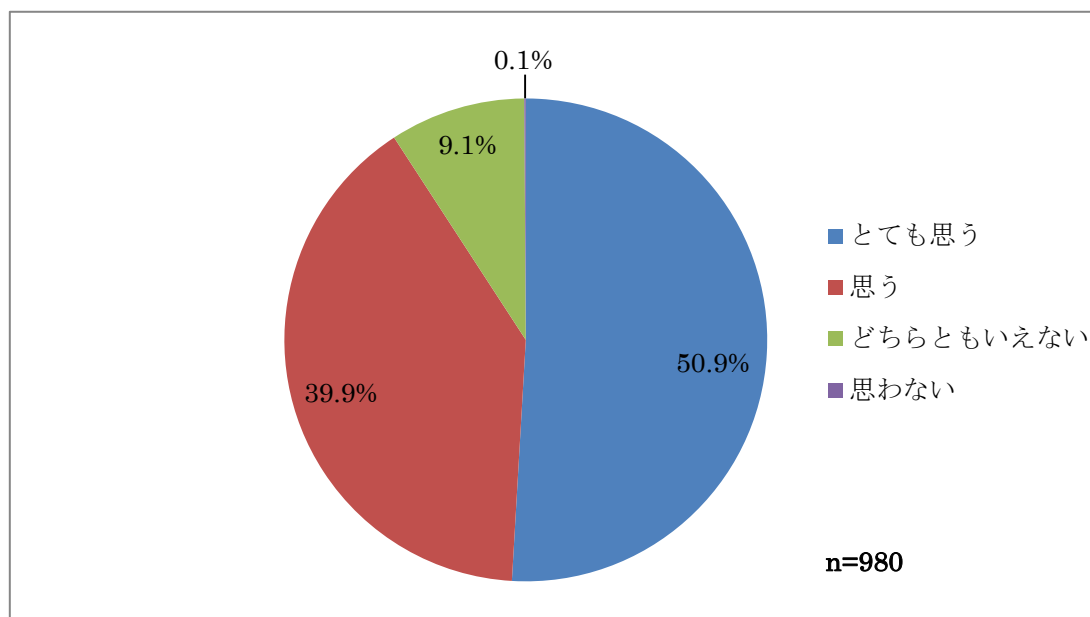


図 4-1-3-14 ケアマネジャーとして非常時の安否確認を重要だと思うか

ケアマネジャーとして非常時の安否確認を重要と思うかの回答として、思うと回答した人が全体の約 90%であった。0.1%重要と思わないという回答者もいた。またどちらともいえないと回答した人の割合が約 10%いたことが分かった。ケアマネの安全確保も管理者としての役割である旨のコメントがあった。

4-1-4 ライフライン停止等への対応

4-1-4(1) 要介護高齢者を支える上で必要だった物資

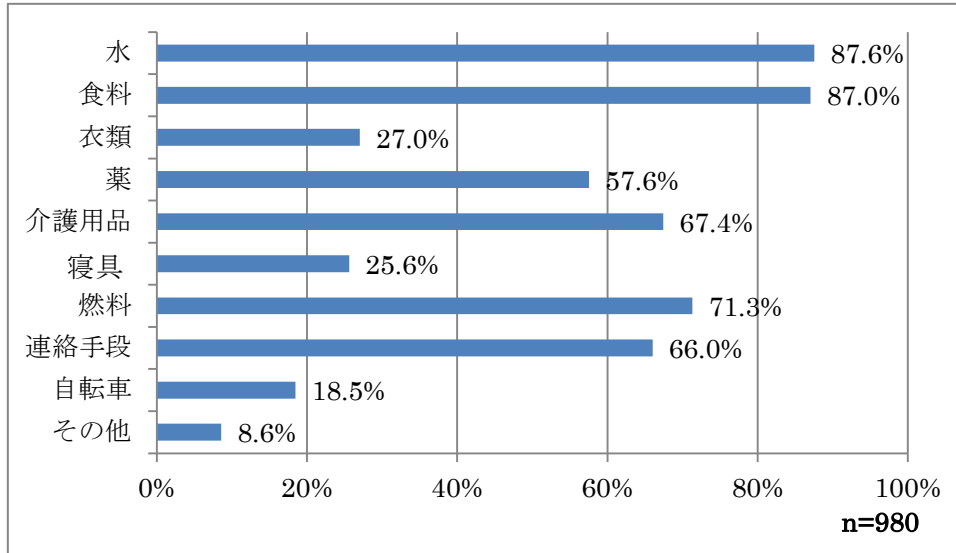


図 4-1-4-1 要介護高齢者を支える上で必要だった物資

上の図から飲食、燃料が必要とされていたことが分かり、生きるために最低限必要な物資が充実していなかったことが分かる。さらに、薬や介護用品の割合も高く、要介護高齢者ならではのニーズが反映されていると考えられる。

4-1-4(2) ライフライン停止による不具合への対応

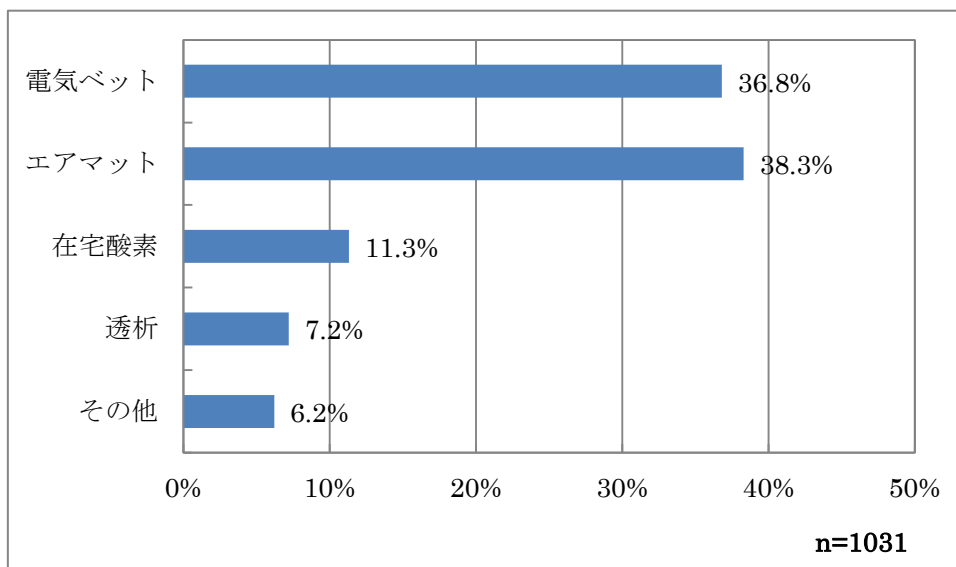


図 4-1-4-2 ライフライン停止による不具合への対応

電気ベッドやエアマットなど、生活する上での必需品が停電のために使用できなくなり、ケアマネジャーが数多く対応したことがわかった。

4-1-5 その他の活動

4-1-5(1) 避難所や地域での活動の有無

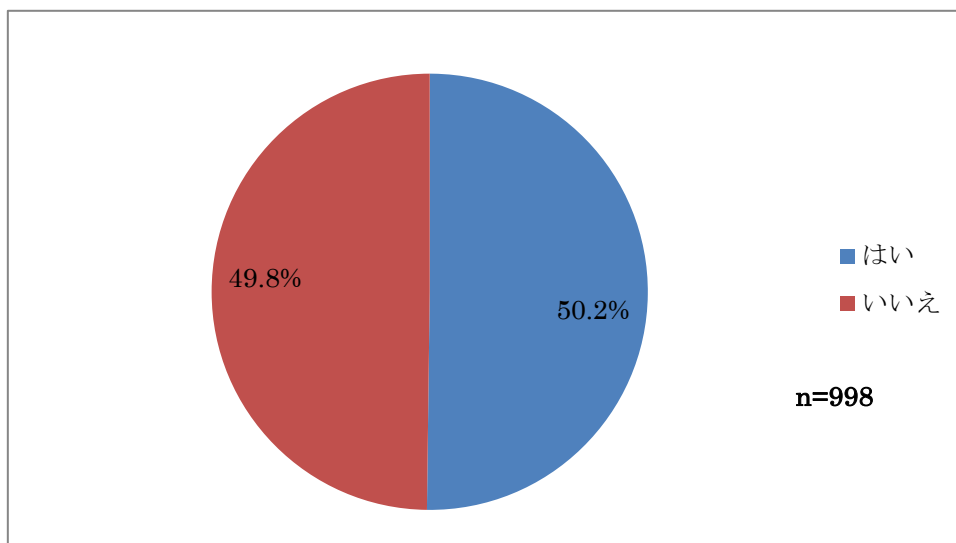


図 4-1-5-1 避難所や地域での活動の有無

避難所や地域での活動経験の有無に関しては半々に分かれる結果となった。

4-1-5(2) どのような活動を行ったか

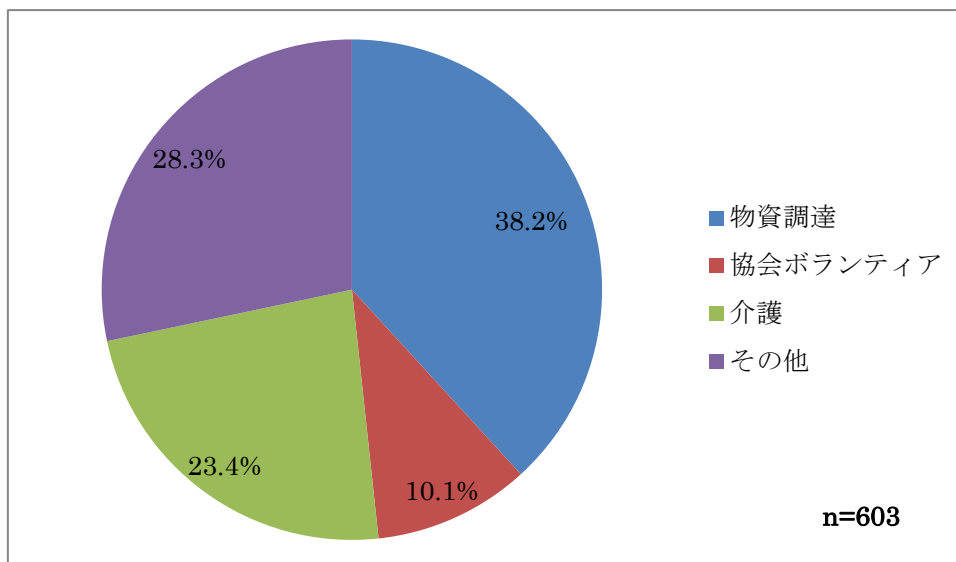


図 4-1-5-2 どのような活動を行ったか

活動内容で多くを占めたのが物資調達と介護だった。被災時にいかに介護と物資が必要で、多くのケアマネジャーがその対応をしていたことが明らかになった。

4-1-6 震災前・今後の活動

4-1-6(1) 災害対応マニュアルの有無

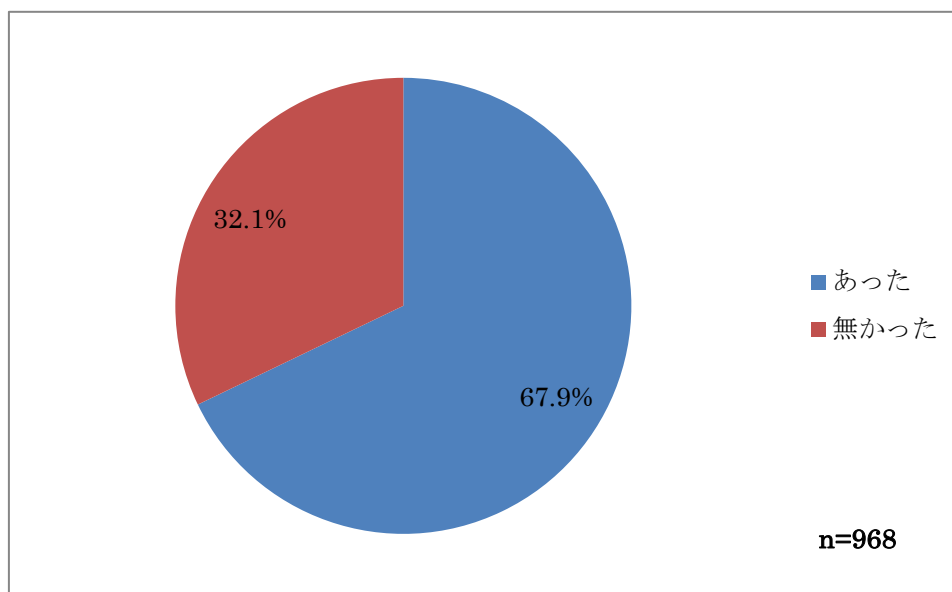


図 4-1-6-1 災害対応マニュアルの有無

約 7 割の事業所で、ケアマネジャーとしての災害対応マニュアルを作っていたことが分かった。

4-1-6(2) 災害対応マニュアルは震災で役に立ったか

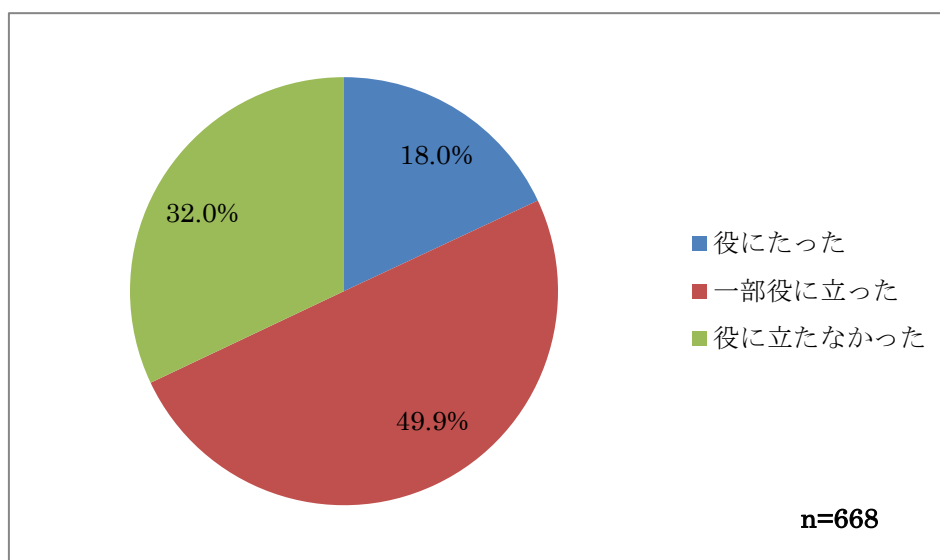


図 4-1-6-2 災害対応マニュアルは震災で役に立ったか

災害対応マニュアルがあったとしても、約 3 割が役に立たなかったと回答しており、想定を超えた被害の甚大さが伺える。

4-1-6(3) 震災前の研修参加経験の有無

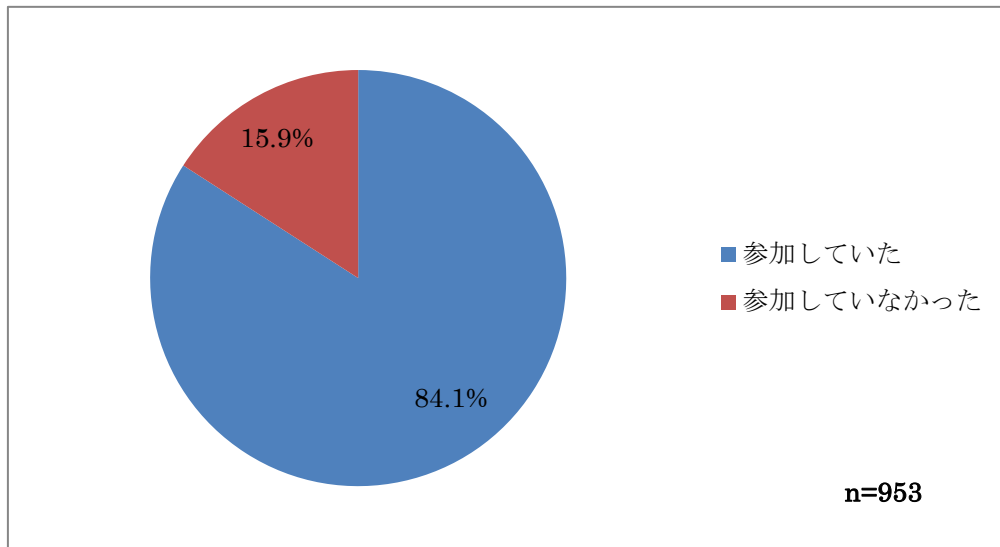


図 4-1-6-3 震災前の研修参加経験の有無

震災前、約 16 パーセントのケアマネジャーが日々の研修に参加していないことが分かった。

4-1-6(4) 参加した研修の種類

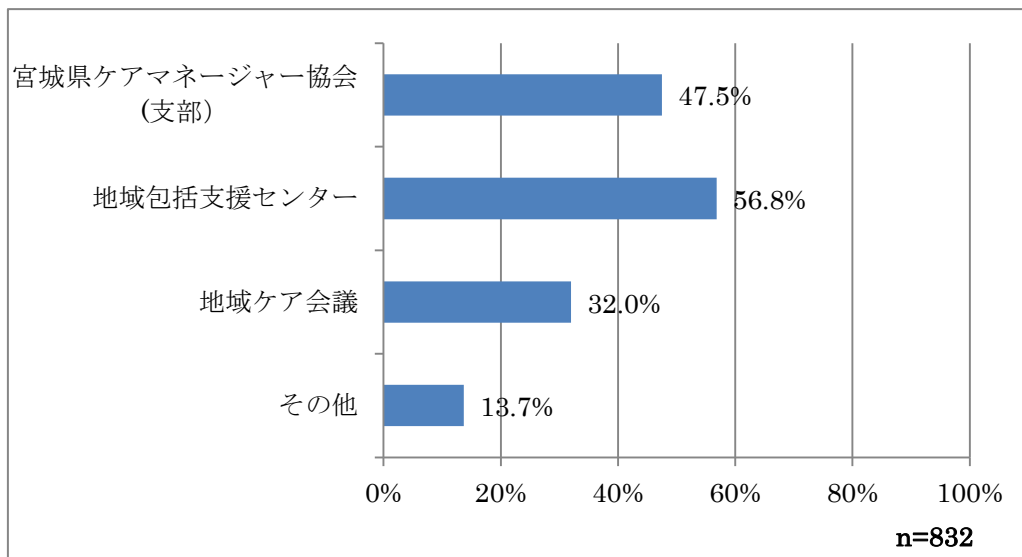


図 4-1-6-4 参加した研修の種類

震災前の研修参加状況を見ると、地域包括支援センターが行う研修と宮城県ケアマネジャー協会(支部)が行う研修が大部分を占めていたことが分かった。

4-1-6(5) 震災前から連携をとっていた

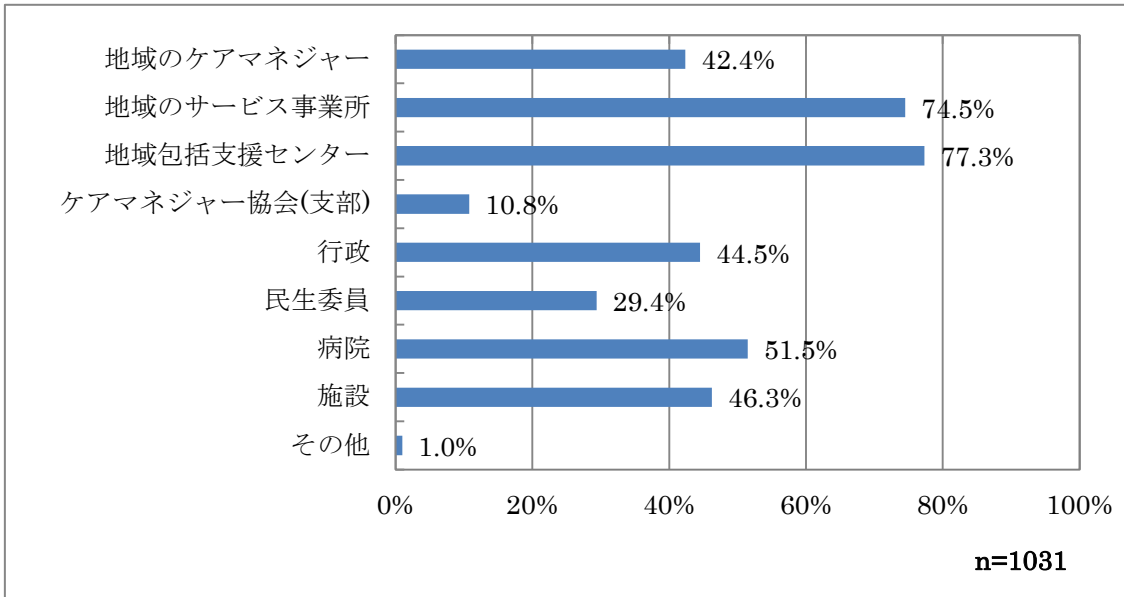


図 4-1-6-5 震災前から連携をとっていたところ

震災前から連携をとっていたところで回答が多かったのは、地域のサービス事業所と地域包括支援センターであった。これら 2 つの施設には社会福祉士やケアマネジャーが置かれているため、専門の知識を相互に共有するなどして、連携を取り合っていると考えられる。

4-1-6(6) ケアマネジャーの仕事のやりがい

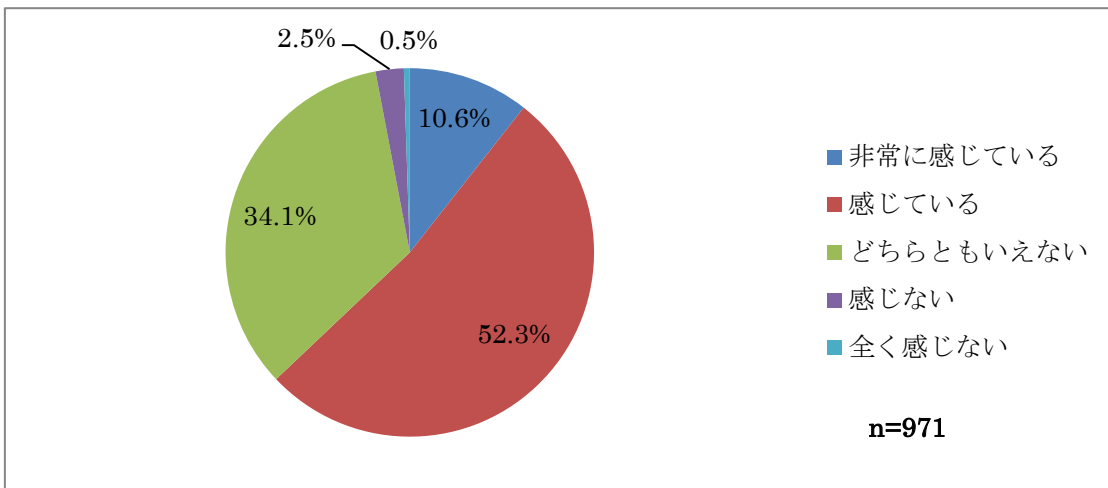


図 4-1-6-6 ケアマネジャーの仕事のやりがい

ケアマネジャーの仕事にやりがいを感じている人は 6 割を超えるが、約 4 割はそうではないことが分かった。

4-1-6(7) ケアマネジャーの仕事の満足度

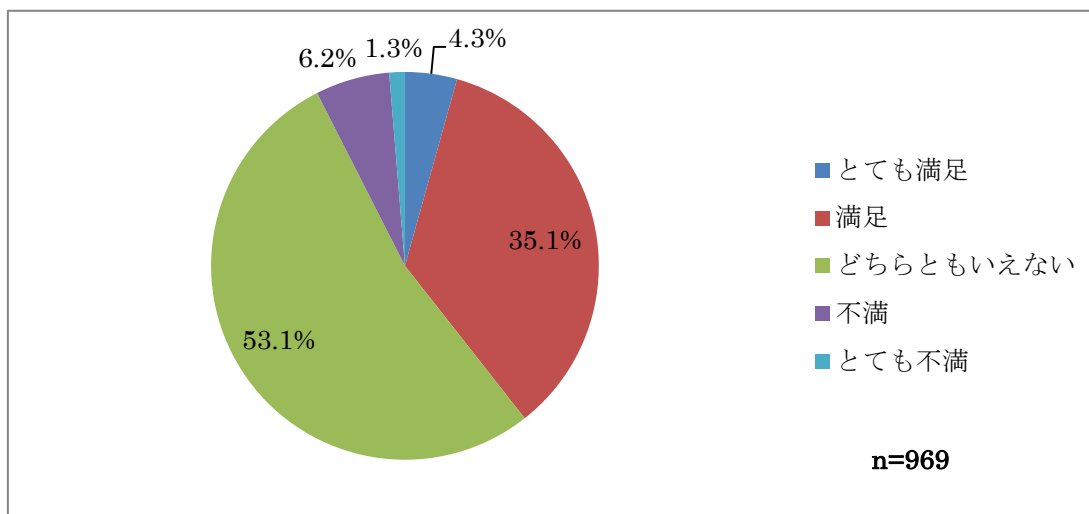


図 4-1-6-7 ケアマネジャーの仕事の満足度

図 4-1-6-6 ではケアマネジャーの仕事にやりがいを感じている人でも、仕事の満足度が高いとは限らないことが分かった。労働条件に問題があるのか、仕事の内容に問題があるのか理由までは聞く設問にはなっていなかった。

4-1-6(8) ケアマネジャーの仕事が続きたいか

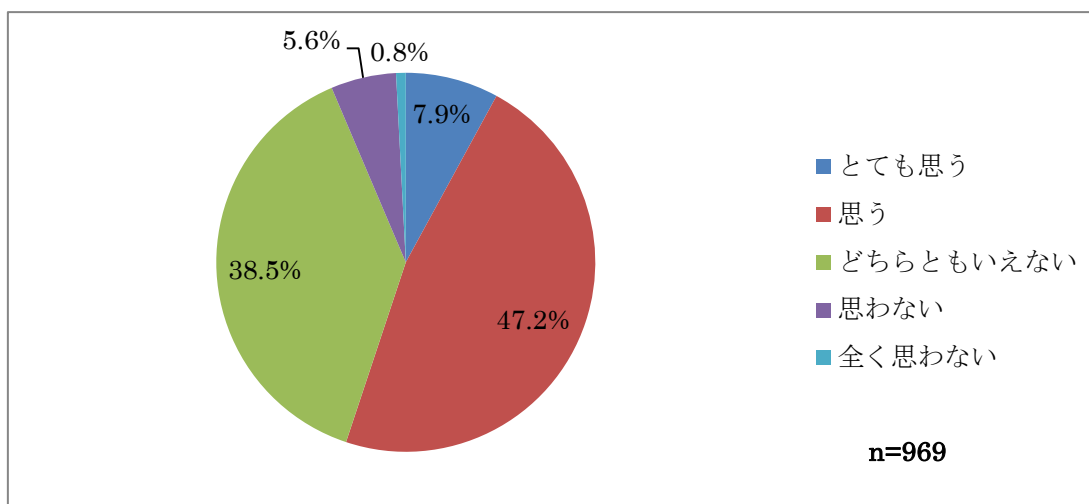


図 4-1-6-8 ケアマネジャーの仕事が続きたいか

ケアマネジャーの仕事が続けたいと思うと回答した人は約半分を占めていた。図 4-1-6-6 の「ケアマネジャーとしての仕事のやりがい」のグラフの割合と近いことにより、ケアマネジャーの仕事が続けたいかどうかは、仕事に対してやりがいを感じているかどうかによると思われる。

4-2 クロス集計

4-2-1 年齢

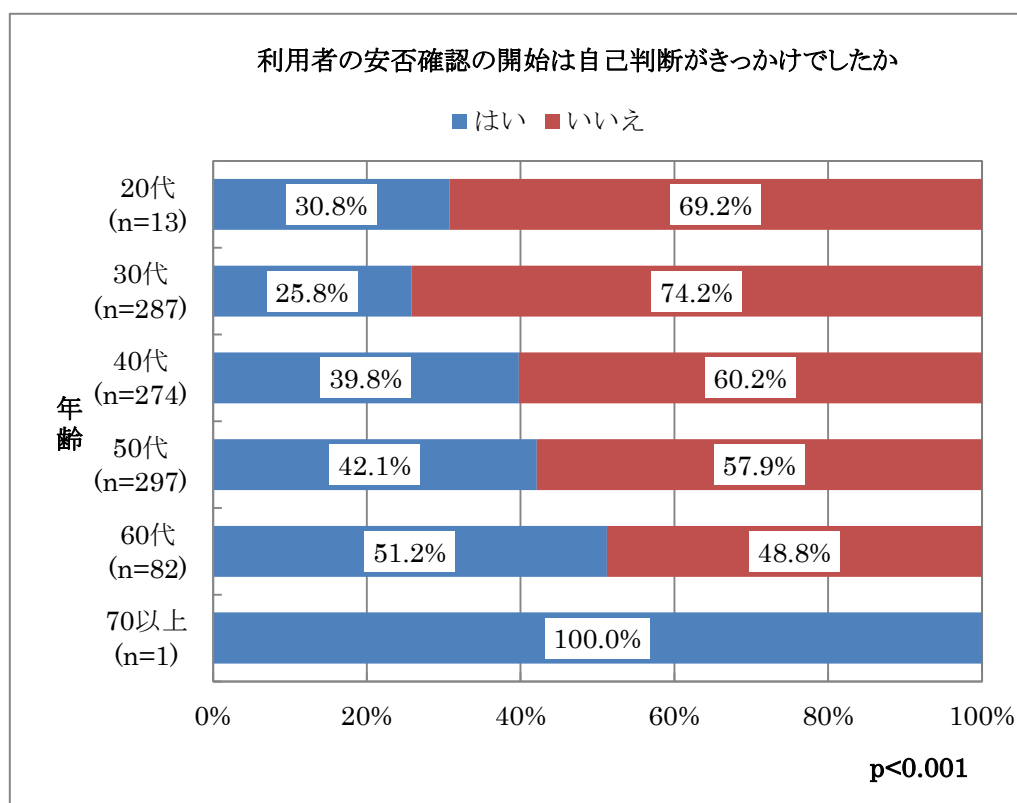


図 4-2-1-1 年齢と利用者の安否確認の開始のきっかけは自己判断であったか

上図は利用者の安否確認の開始のきっかけが、自己判断だったかどうかを年齢別に表したグラフである。

このグラフを見ると、年齢が上がるほど自己判断で利用者の安否確認を開始した人の割合が高くなっている。つまり、経験値が高いほど自己判断で動こうとする人が多く、年齢が低く、経験が浅いと自らの判断で動くことが難しいことが分かる。

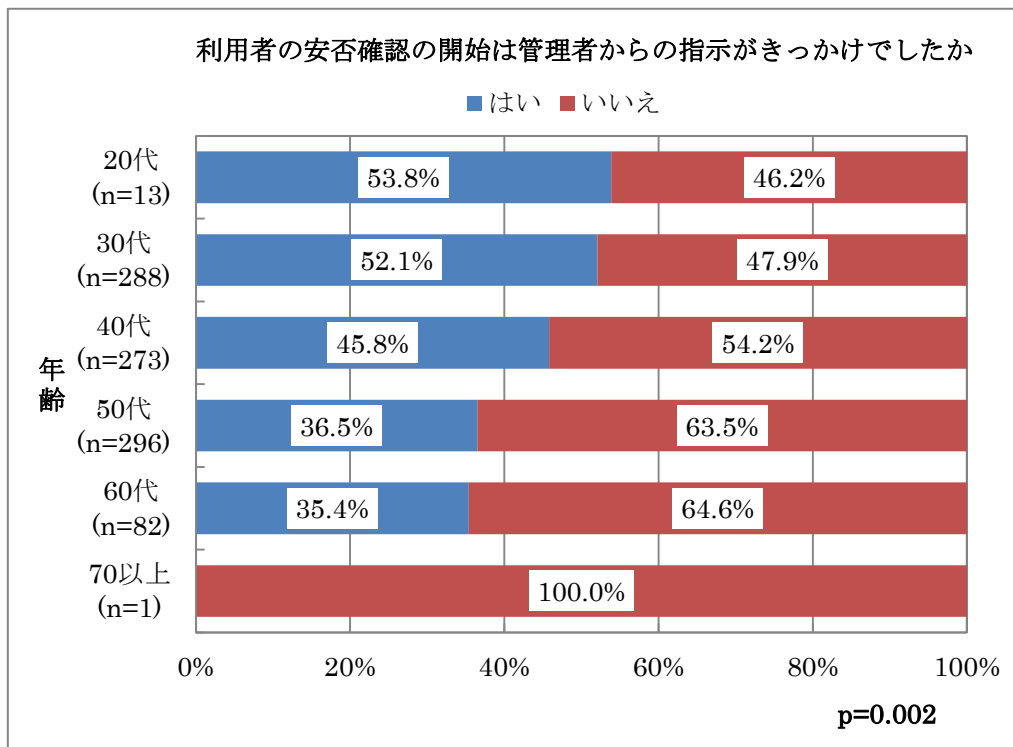


図 4-2-1-2 年齢と利用者の安否確認の開始のきっかけは管理者からの指示であったか
 上図は、利用者の安否確認の開始のきっかけは管理者からの指示であったかを年齢別に表したグラフである。

この図を見ると、年齢が若いほど、利用者の安否確認のきっかけが管理者からであると答えた人の割合が高くなっている。つまり、図 4-2-1-1 と逆で、年齢が低く経験が浅い人ほど、管理者からの指示で安否確認を開始していることが分かる。

図 4-2-1-1 と図 4-2-1-2 の二つの図から、経験値が高い人ほど、自らの判断で行動を始め、経験が浅い人ほど管理者からの指示を待つ傾向があると考えられる。

4-2-2 性別

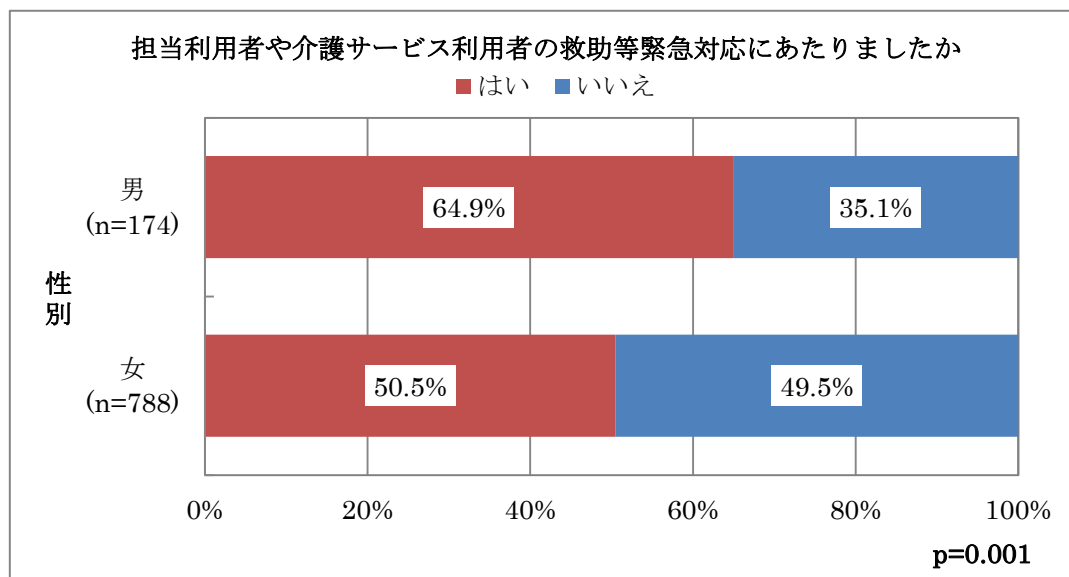


図 4-2-2-1 性別と救助等緊急対応にあたったか

『性別』と『救助等緊急対応にあたったか』については統計的有意差が認められた(p=0.001)。男性は救助等緊急対応にあたった割合が女性より14.4%多かった。女性より男性の方が利用者の救出のような力仕事に当たる機会が多かったことや、緊急対応に積極的であったことが推測できる。

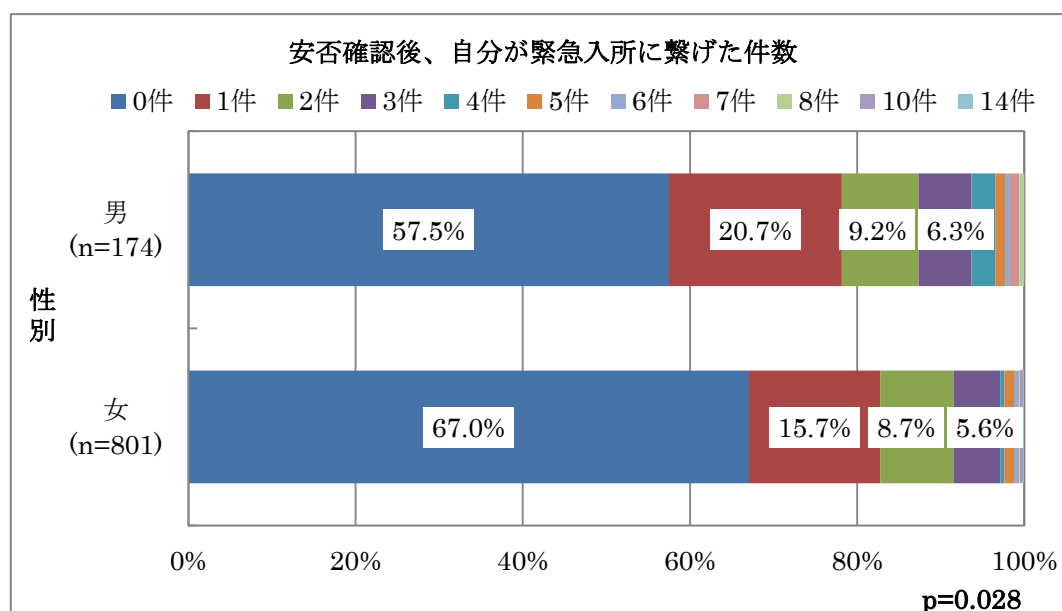


図 4-2-2-2 性別と安否確認後自分が緊急入所に繋げた件数

『性別』と『安否確認後緊急入所に繋げた件数』については統計的有意差が認められた(p=0.028)。1件以上と回答した男性が女性より9.5%多いことから、男性は女性より緊急入所へ繋ぐことに意欲的であったと推測できる。

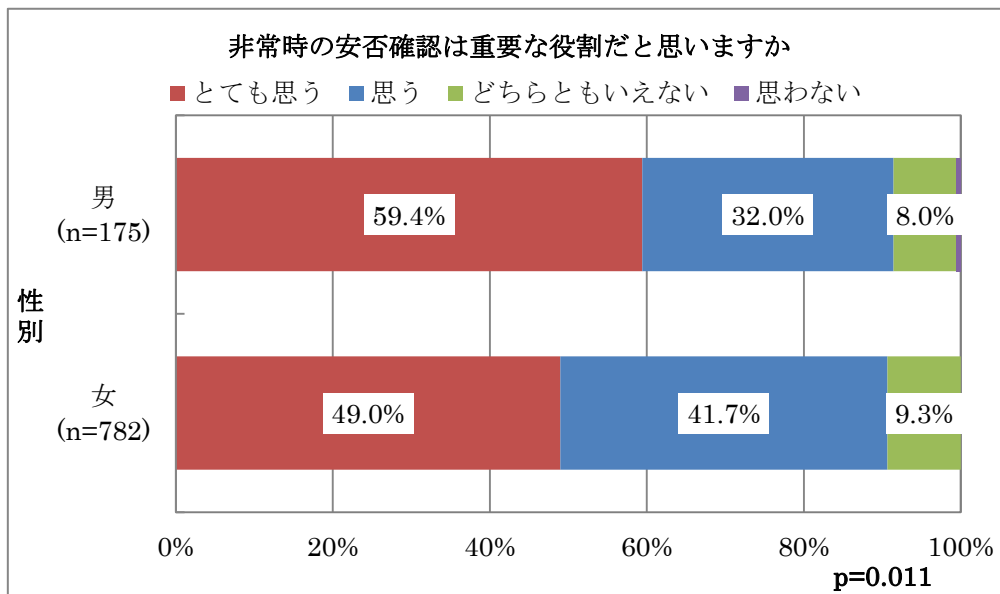


図 4-2-2-3 性別と非常時の安否確認は重要な役割だと思うか

『性別』と『非常時の安否確認は重要な役割だと思うか』については統計的有意差が認められた($p=0.011$)。「とても重要だと思う」と回答した男性が女性より 10.4%多いことから、男性は役割の重要性をより実感していると考えられる。

4-2-3 勤務年数

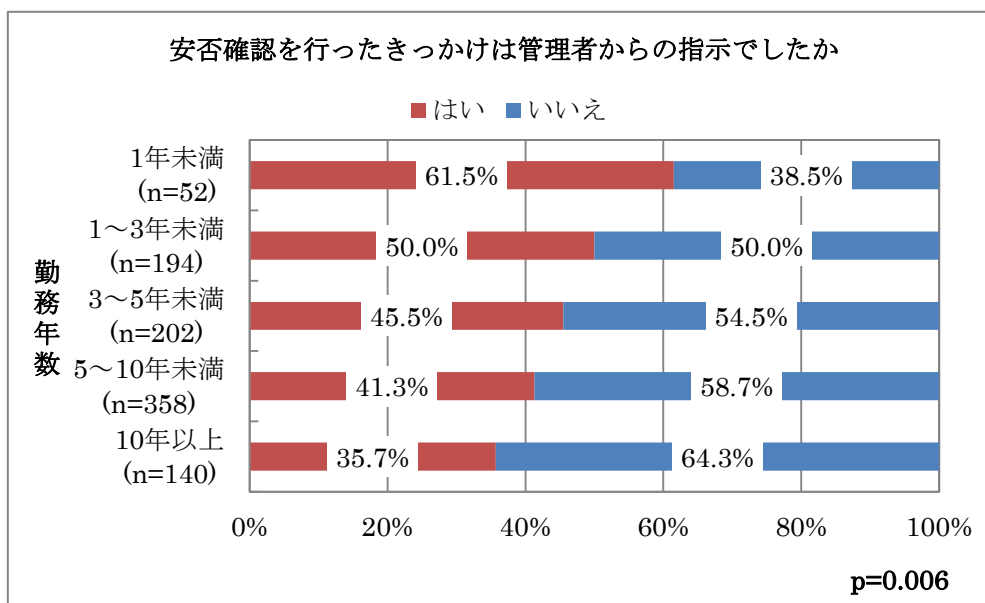


図 4-2-3-1 勤務年数と安否確認のきっかけ(管理者からの指示)

勤務年数と安否確認のきっかけが管理者からの指示であるというクロス集計で統計的有意差が認められた(p=0.006)。この結果から、勤務年数が短いほど管理者からの指示を待つて行動し、勤務年数が長いほど、他の判断基準を持っていることが推測された。

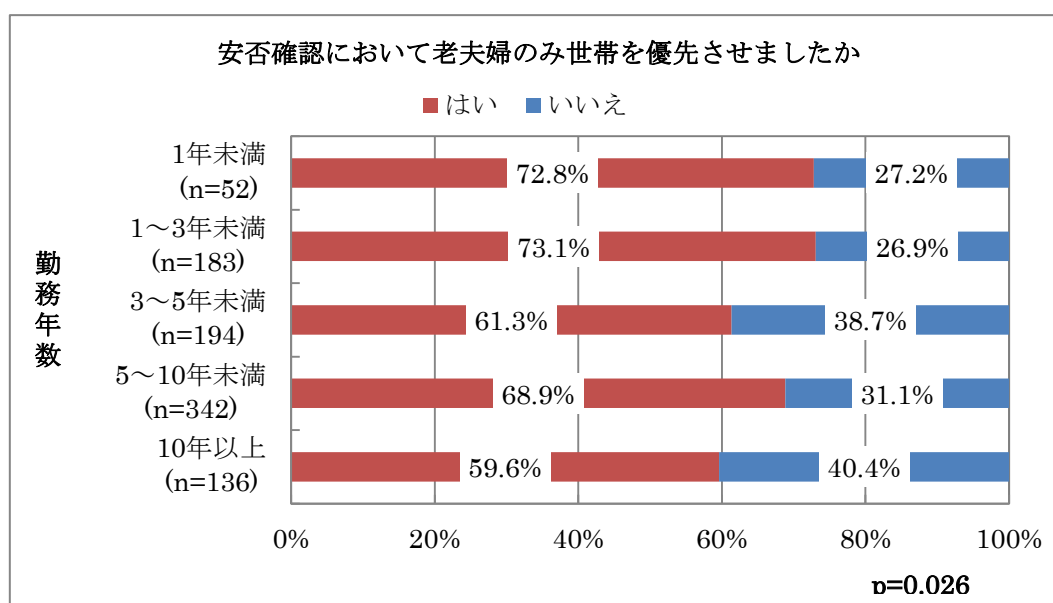


図 4-2-3-2 勤務年数と安否確認の優先順位(老夫婦)

勤務年数と安否確認において老夫婦だけの人を優先させるかどうかについて統計的有意差が認められた(p=0.026)。この結果から、家族と同居している利用者より老夫婦のみで生活している利用者の安否確認を優先させたことがわかった。

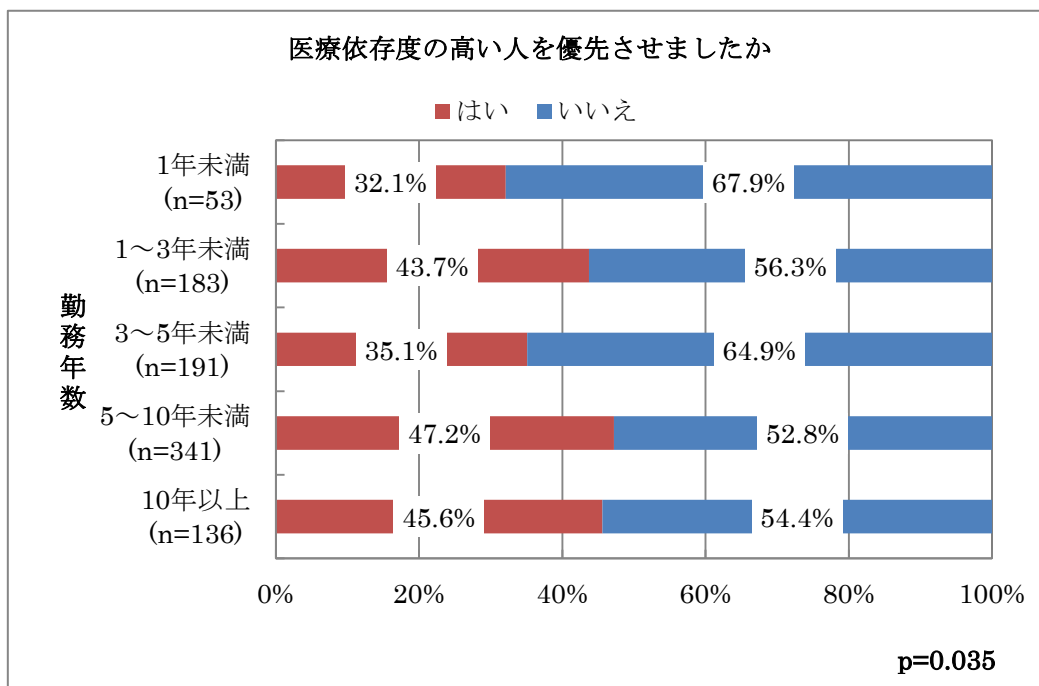


図 4-2-3-3 勤務年数と安否確認の優先順位(医療依存度)

勤務年数と安否確認において医療依存度の高い人を優先するかどうかについて統計的有意差が認められた($p=0.035$)。この結果から、ベテランのケアマネジャーの方が、要介護高齢者の中でも医療依存度が高い利用者の安否確認を優先させたことがわかった。

4-2-4 自身の被災状況

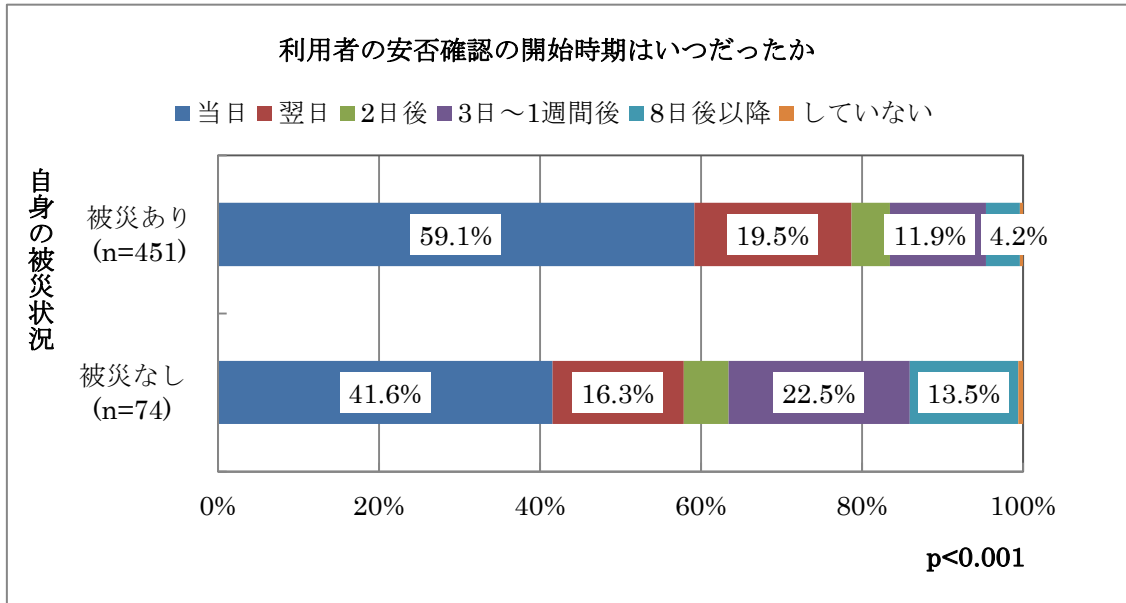


図 4-2-4-1 自身の被災状況と利用者の安否確認開始時期はいつだったか

『自身の被災状況』と『利用者の安否状況の開始時期はいつだったか』に統計的有意差が認められた ($p<0.001$)。図から、自身の被災状況が『被災あり』だった人ほど『利用者の安否確認を開始する時期』が早かったということが分かった。

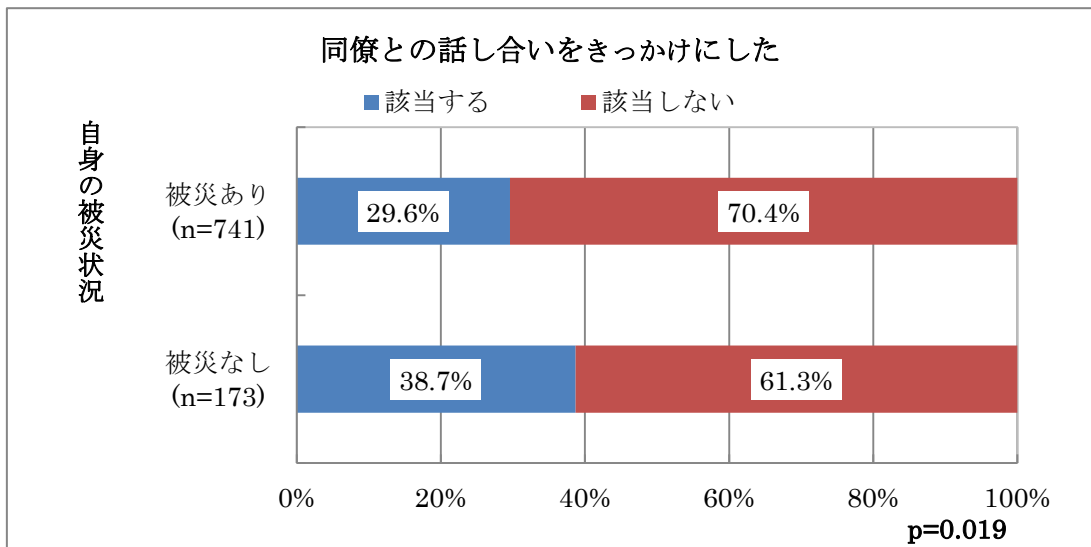


図 4-2-4-2 自身の被災状況と利用者の安否確認開始のきっかけが同僚との話し合い

『自身の被災状況』と『利用者の安否確認開始のきっかけが同僚との話し合いか』に統計的有意差が認められた ($p=0.019$)。図から、自身が『被災なし』の人の方が『同僚との話し合い』を利用者の安否確認のきっかけにしていたことが分かった。

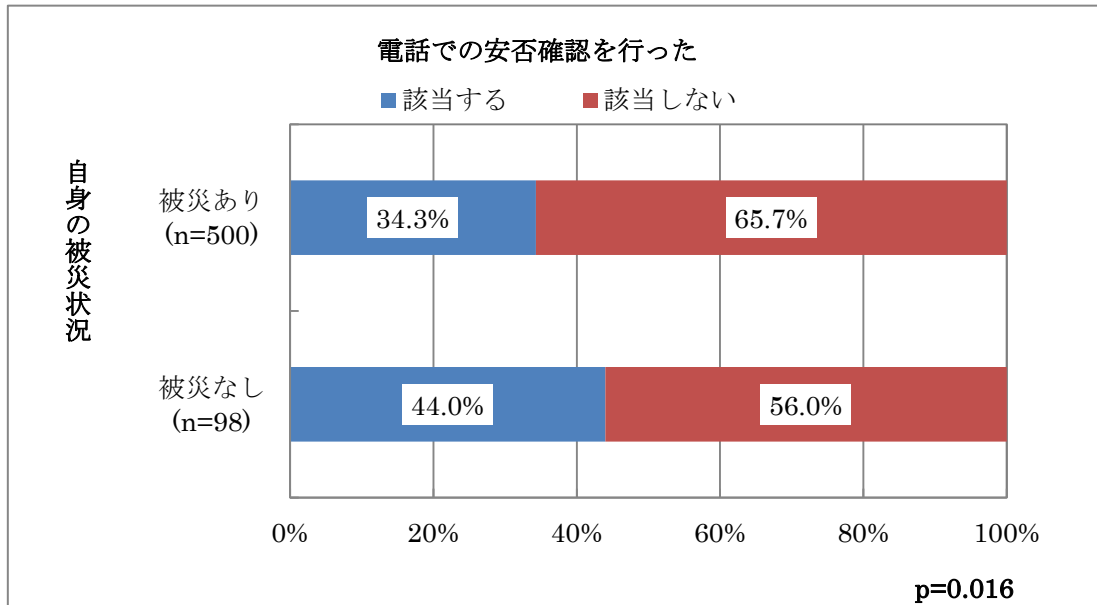


図 4-2-4-3 自身の被災状況と主なる安否確認の方法

『自身の被災状況』と『主なる安否確認の方法』に統計的有意差が認められた(p=0.016)。図から自身の被災状況が『被災なし』だった人ほど『電話』での安否確認を行っていたことが分かった。

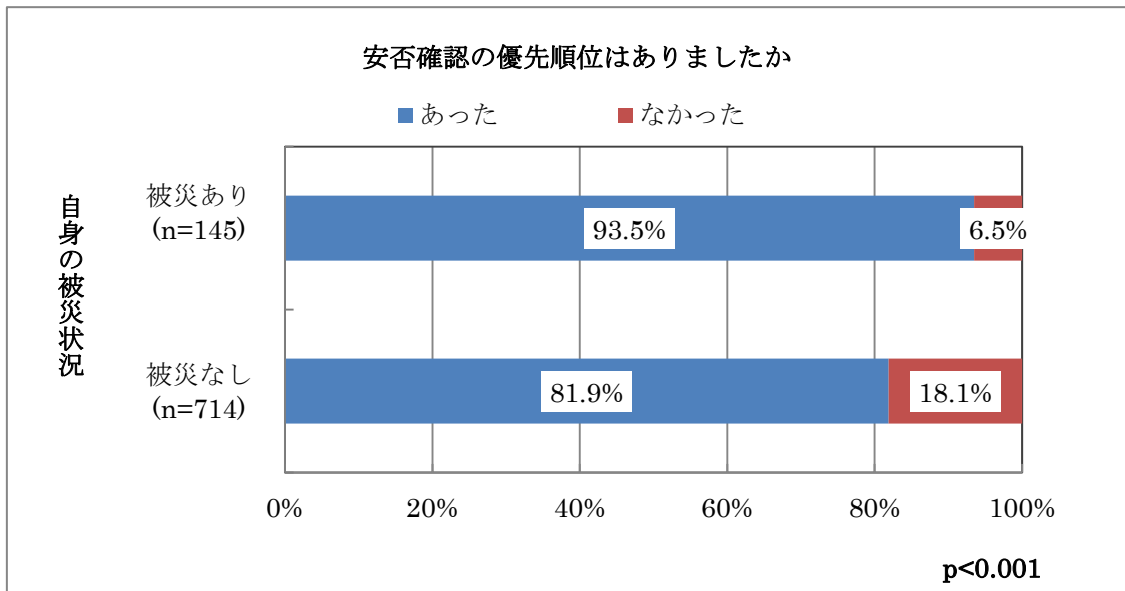


図 4-2-4-4 自身の被災状況と安否確認の優先順位はあったか

『自身の被災状況』と『安否確認の優先順位はあったか』に統計的有意差が認められた(p<0.001)。この図から、自身の被災状況が『被災あり』だった人ほど『安否確認の優先順位』があったことが分かった。

4-2-5 自宅の被災状況(但野)

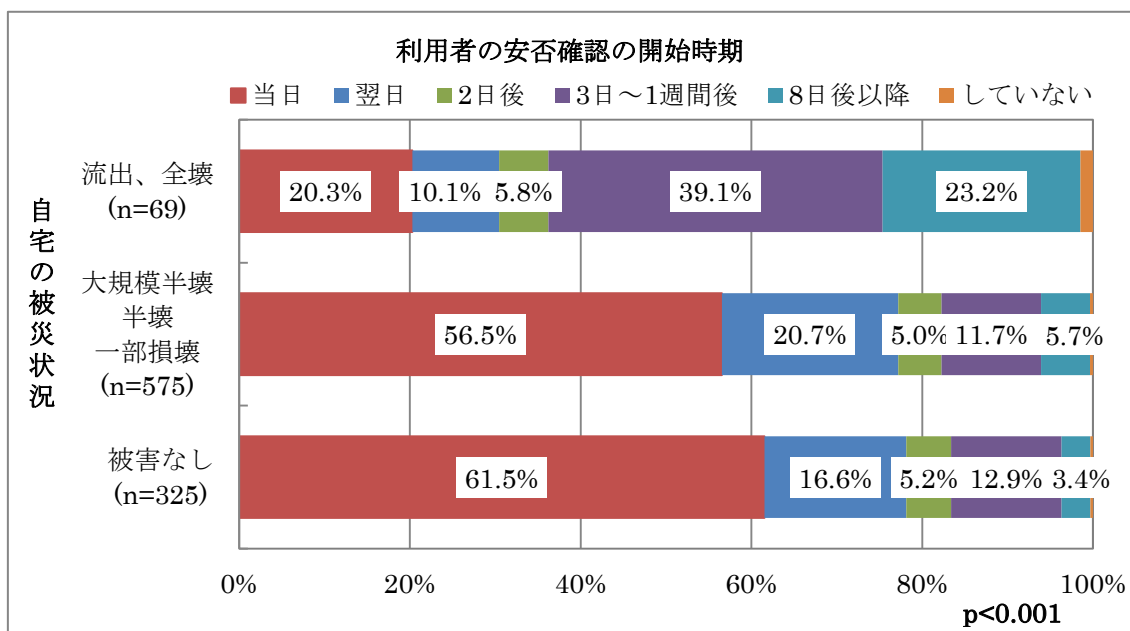


図 4-2-5-1 自宅の被災状況と利用者の安否確認の開始時期

『自宅の被災状況』と『利用者の安否確認開始時期』については統計的有意差が認められた($p<0.001$)。流出、全壊被災者は安否確認に3日～1週間かかった人が最も多く、全体的に安否確認開始することに障害があったことが分かった。大規模半壊、半壊、一部損壊、被害なしの被災者は当日もしくは翌日に安否確認を開始した人が約8割と、全体的に早めに対応することができる状況にあったといえる。ケアマネジャー自身の自宅の被災状況の大きいほど、利用者への安否確認開始時期が遅れてしまうと考えられる。

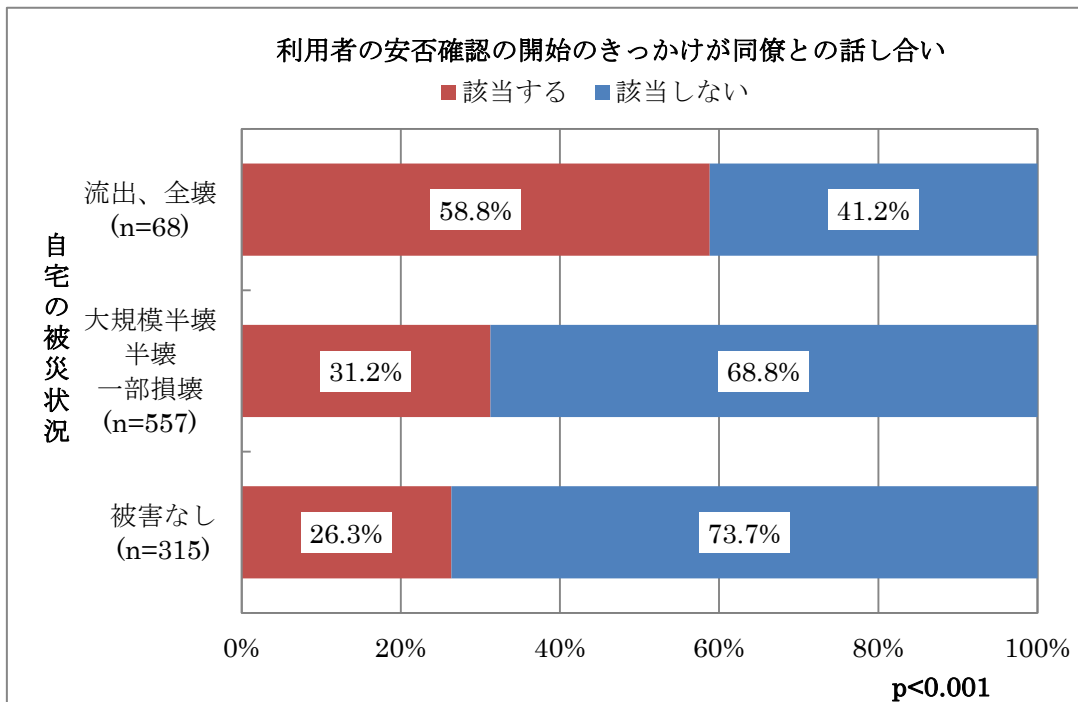


図 4-2-5-2 自宅の被災状況と利用者の安否確認の開始のきっかけが同僚との話し合い

『自宅の被災状況』と『利用者の安否確認の開始のきっかけが同僚との話し合い』については統計的有意差が認められた($p<0.001$)。流出、全壊被災者は利用者の安否確認の開始を同僚との話し合いをきっかけとしたと回答した人が全体の約 6 割であるのに対し、大規模半壊、半壊、一部損壊、被害なしの被災者は約 3 割前後の回答と、流出、全壊被災者と比較するとほぼ正反対の回答が得られた。よって、自宅の被災状況が大きいほど同僚との話し合いをきっかけに安否確認を開始することから、個人のみ判断よりも他との話し合いを重視して行動したということがいえる。

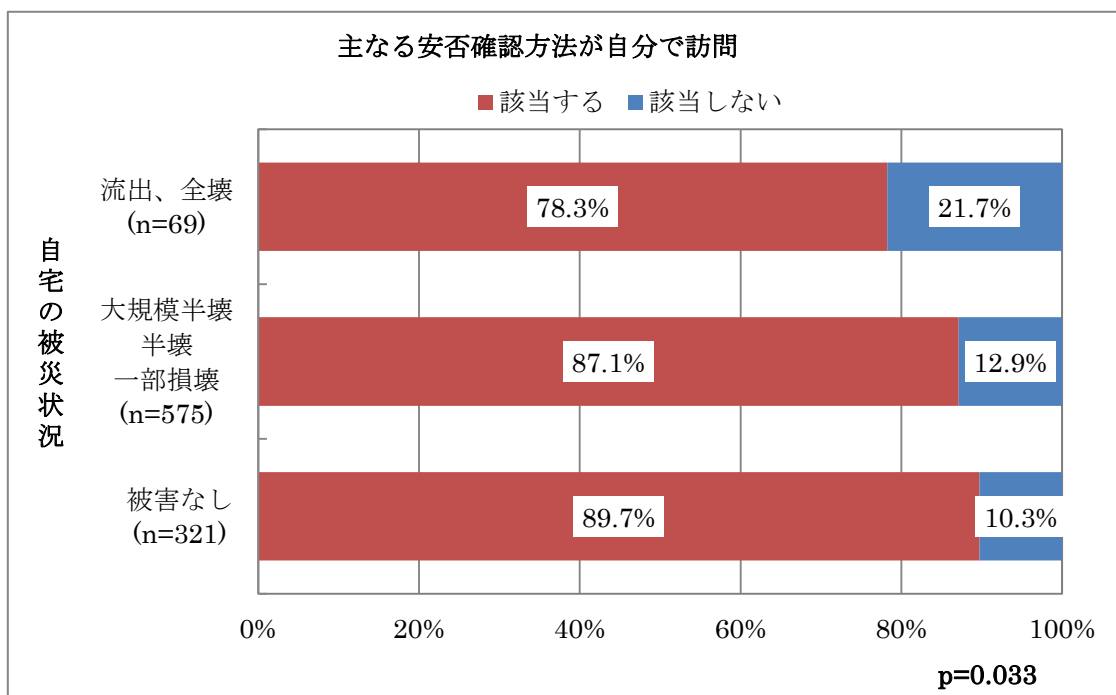


図 4-2-5-3 自宅の被災状況と主なる安否確認方法が自分で訪問

『自宅の被災状況』と『主なる安否確認方法が自分で訪問』については統計的有意差が認められた($p=0.033$)。自宅被害がない被災者が主に自分で訪問する方法で安否を確認している。逆に主に自分で訪問して安否確認をしたと回答した人が少ないものが、自宅被害が流出、全壊の被災者であった。これらの結果より、主なる安否確認方法として自分で訪問をしたか否かという結果は、ケアマネジャー自身の意思による判断よりも、自分で訪問して安否確認をできる状況にあったか否かが大きく影響するものだと考えられる。

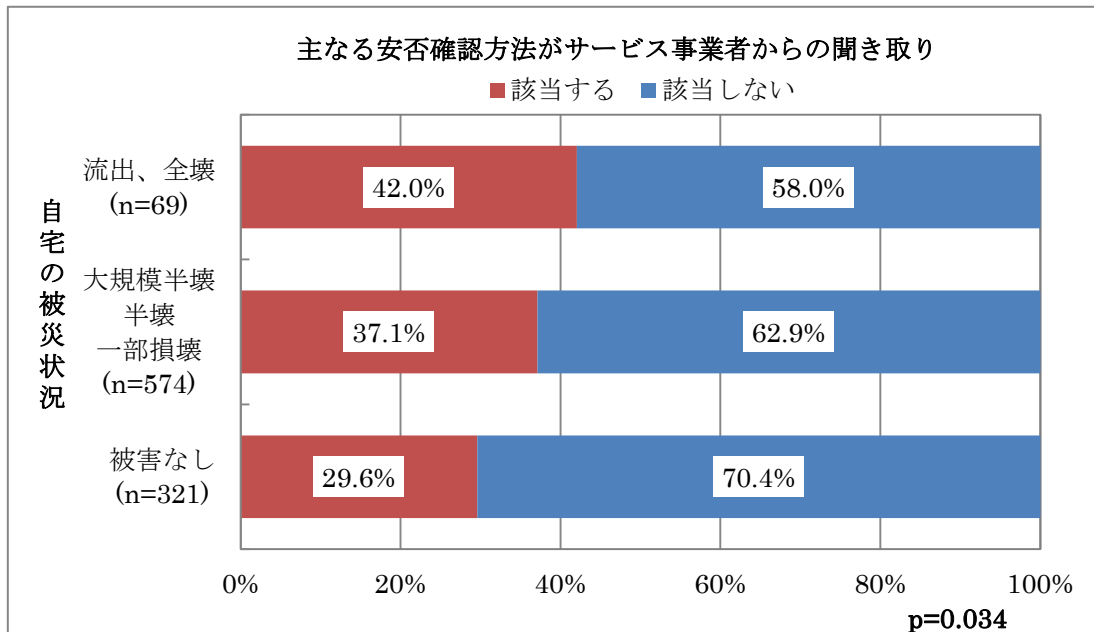


図 4-2-5-4 自宅の被災状況と主なる安否確認方法がサービス事業者からの聞き取り

『自宅の被災状況』と『主なる安否確認方法がサービス事業者からの聞き取り』については統計的有意差が認められた($p=0.034$)。流出、全壊被災者が最も高い割合で主なる安否確認方法がサービス事業者からの聞き取りであると回答しており、続いて大規模半壊、半壊、一部損壊が 2 番目に割合が高く、被害なしの被災者が最も割合が低かった。よって、自宅の被災状況が大きい人ほど主なる安否確認方法がサービス事業者からの聞き取りであることが分かった。流出、全壊被災者は自分で訪問をできる環境にいない分、他の人からの聞き取りによって安否確認を行ったのではないかと考えられる。

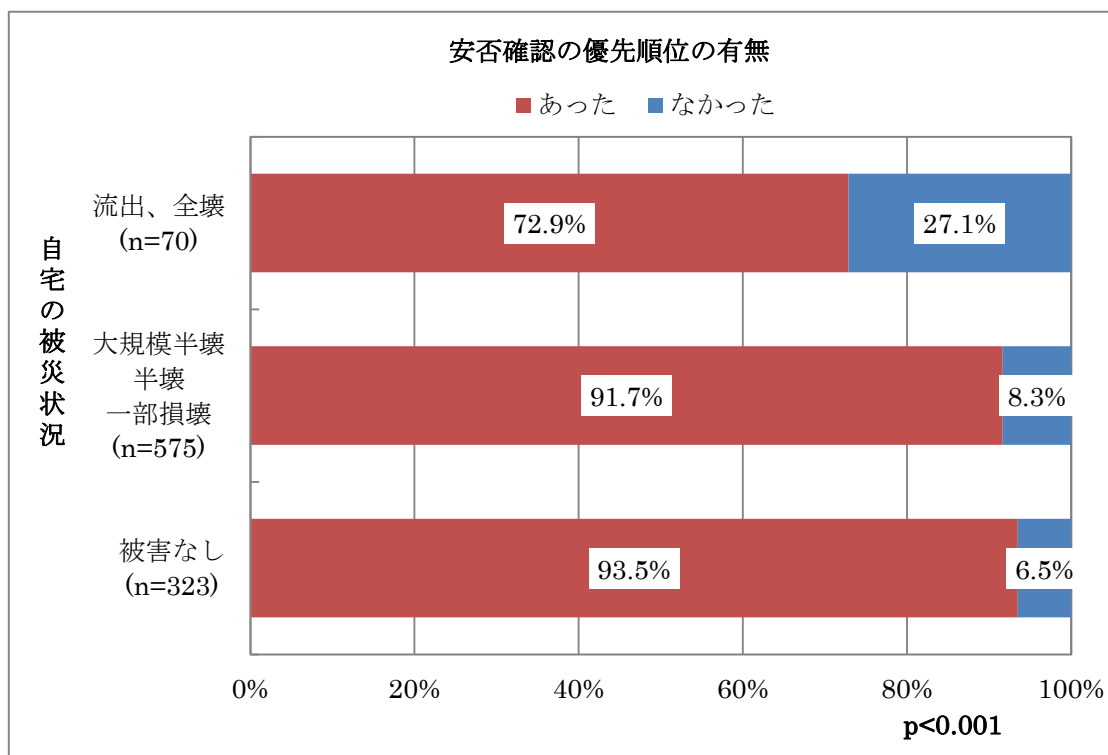


図 4-2-5-5 自宅の被災状況と安否確認の優先順位の有無

『自宅の被災状況』と『安否確認の優先順位の有無』については統計的有意差が認められた($p<0.001$)。被害なし、大規模半壊、半壊、一部損壊、流出、全壊といった自宅の被災状況が小さいものから順に安否確認の優先順位があったと回答した割合が高くなっていることが分かった。しかし自宅の被災状況の規模の大小が、安否確認優先があったという回答の割合の高さに影響しているが、被災規模ごとの回答の割合はどれも高かった。したがって、全体としても優先順位を持って安否確認にあたったことが分かった。

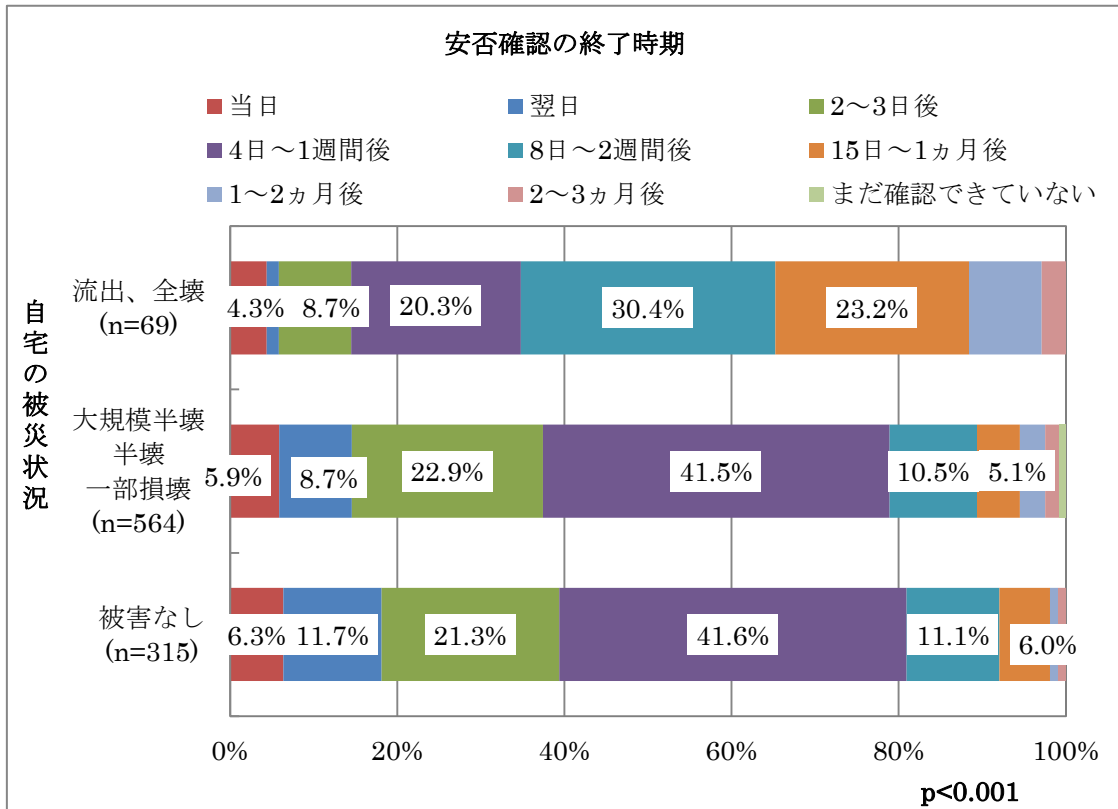


図 4-2-5-6 安否確認の終了時期

『自宅の被災状況』と『安否確認の終了時期』については統計的有意差が認められた ($p<0.001$)。安否確認開始時期の割合と比較してみると、大規模半壊、半壊、一部損壊、被害なしの被災者は安否確認の開始を、震災が起きた当日や翌日といった早い時期からしていたようであったが、終了時期はいつかという質問に対して当日や翌日という回答が割合として非常に低いということがわかった。よって、利用者安否確認開始時期と終了時期の間には関係性はないと考えられる。

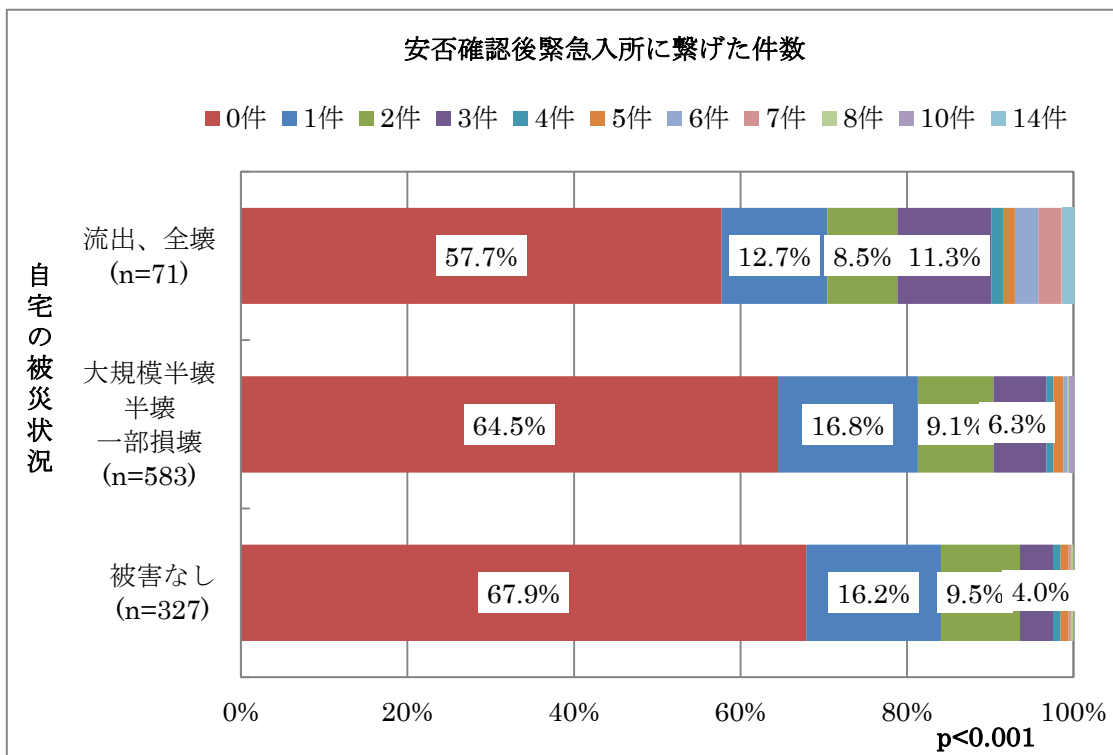


図 4-2-5-7 自宅の被災状況と安否確認後緊急入所に繋げた件数

『自宅の被災状況』と『安否確認後緊急入所に繋げた件数』については統計的有意差が認められた($p<0.001$)。全体として自宅の被災状況の大きさに関わらず、安否確認後に緊急入所に繋げた件数は0件と回答している人が最も多かった。自宅被害が小さいほど0件と回答した人の割合が高い傾向が見られた。また、最も多く緊急入所に繋げた件数として14件という回答があった。流出または全壊と自宅被害が大きい被災者の回答した件数であることから、自宅被災状況による安否確認の方法の違いがある中で、緊急入所が必要な利用者を実際に入所へ繋げていることがいえる。

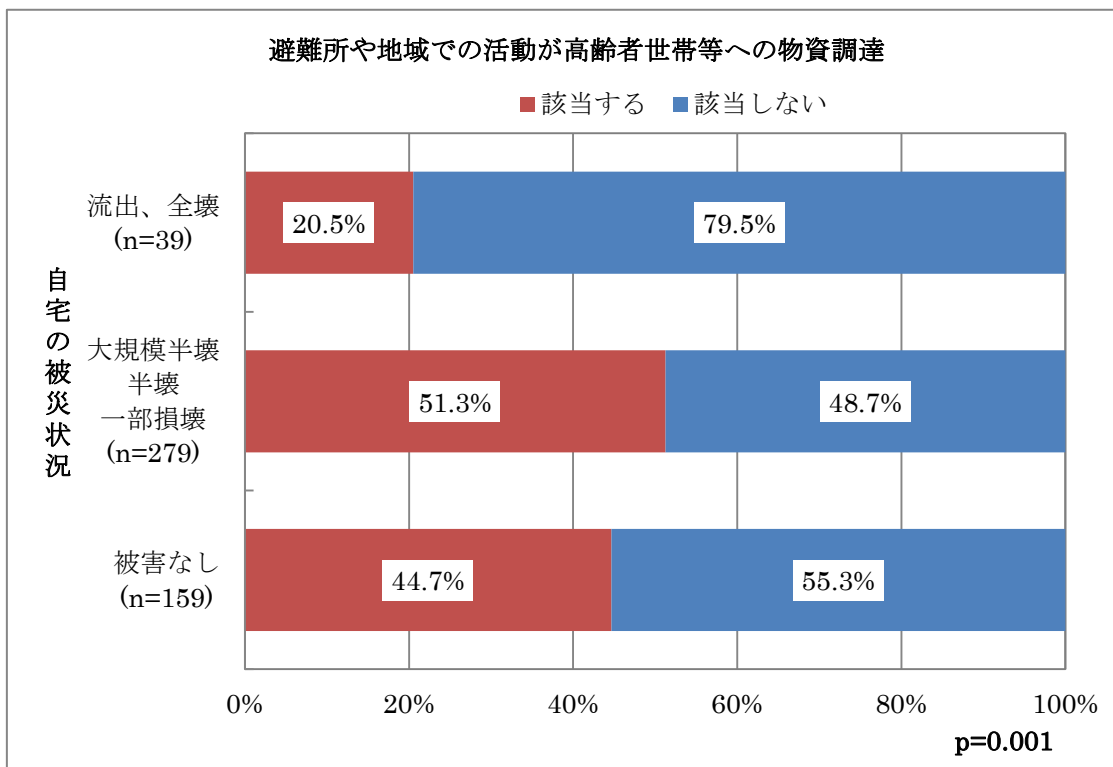


図 4-2-5-8 自宅の被災状況と避難所や地域での活動が高齢者世帯等への物資調達

『自宅の被災状況』と『避難所や地域での活動が高齢者世帯等への物資調達』については統計的有意差が認められた(p=0.001)。最も高齢者世帯への物資調達を行ったのが大規模半壊、半壊、一部損壊の自宅被災者で、続いて被害なしの人が続く。自宅被災状況が流出、全壊と被害の大きい被災者は高齢者世帯への物資調達を行っていないと回答した人の割合が最も多かったことが分かった。自宅被災状況が大きい流出、全壊被災者にとっては物資調達するにあたって困難な要因があったものと考えられる。

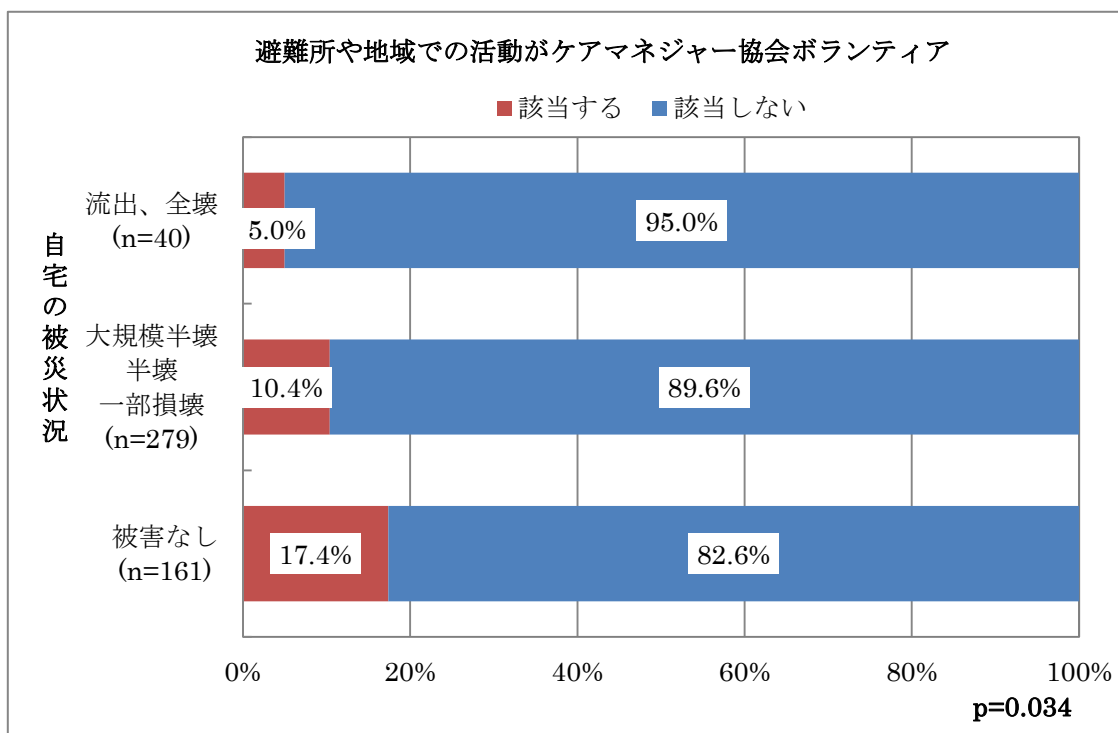


図 4-2-5-9 自宅の被災状況と避難所や地域での活動がケアマネジャー協会ボランティア

『自宅の被災状況』と『避難所や地域での活動がケアマネジャー協会ボランティア』については統計的有意差が認められた(p=0.034)。自宅被災状況が小さい順番に、ケアマネジャー協会でのボランティアを行ったと回答した割合が高くなっていることが分かった。

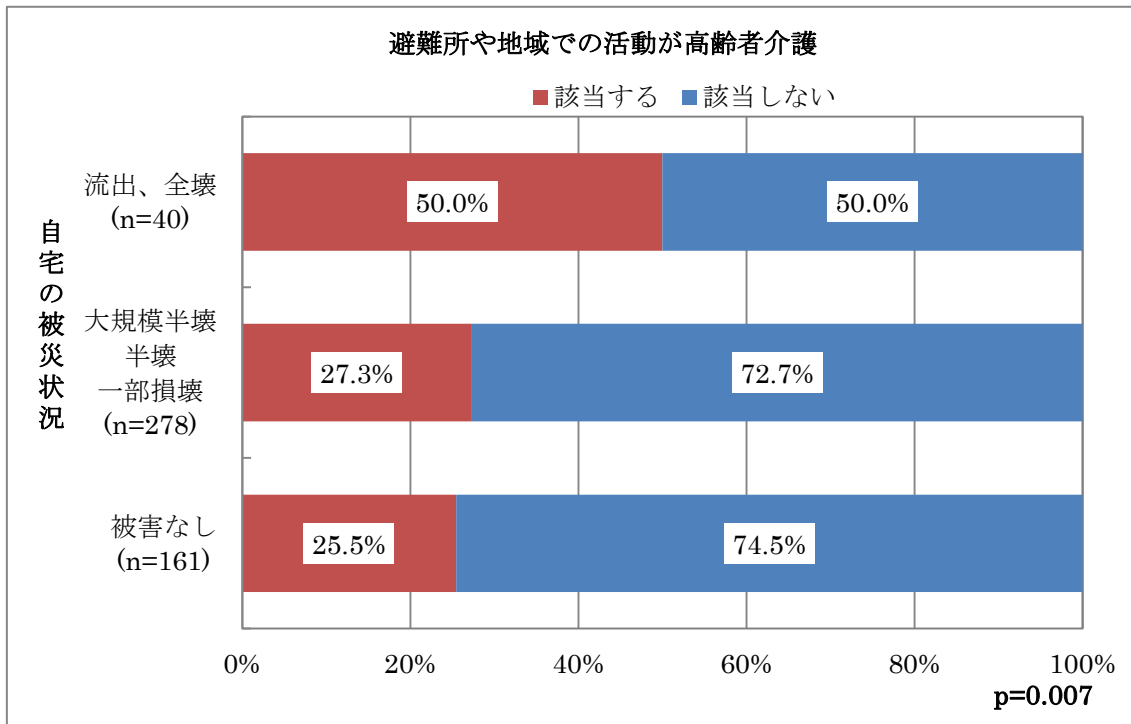


図 4-2-5-10 自宅の被災状況と避難所や地域での活動が高齢者介護

『自宅の被災状況』と『避難所や地域での活動が高齢者介護』については統計的有意差が認められた($p=0.007$)。自宅被災状況が大きい順番に、高齢者介護を行ったと回答した割合が高くなっていることが分かった。自宅被災状況が最も大きい流出、全壊被災者のうち半数が積極的に高齢者介護にあたっている。避難所や地域での活動として高齢者介護を行ったと回答した割合が最も高いのが、自宅被災状況が大きかった流出、全壊被災者である。このことから、被災状況が大きい人ほど高齢者に身近で最も高齢者との時間を共にする活動を行っていたことが考えられる。

4-2-6 所属法人の提供するサービス

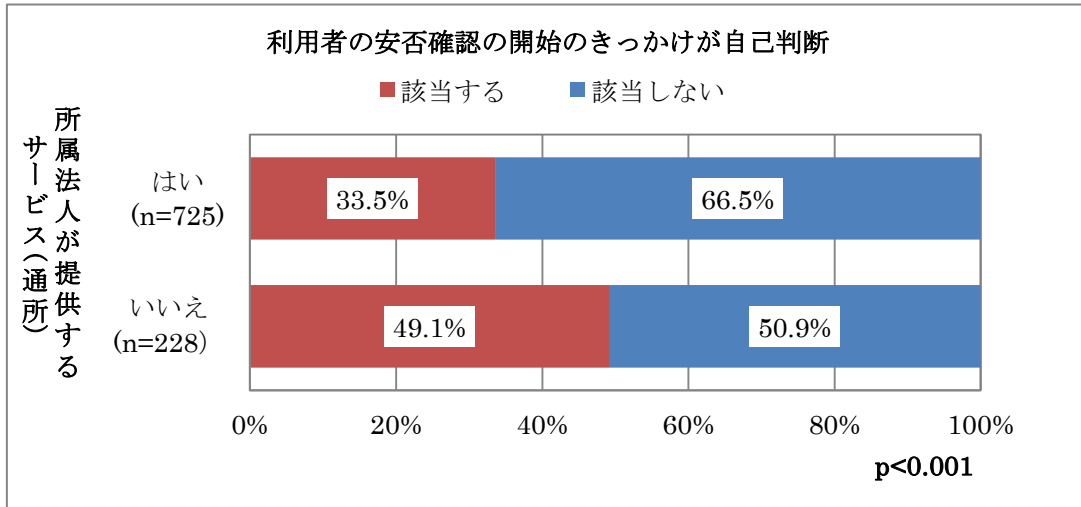


図 4-2-6-1 所属法人が提供するサービス(通所)と安否確認の開始のきっかけが自己判断
所属法人で通所サービスを提供していると回答した人で、安否確認の開始のきっかけが自己判断と答えた人は約 3 割だった。一方、通所サービスを提供していないと回答した人は提供している人に比べ、自分から安否確認の行動をとった人が多かった。このことから、通所サービスを提供していた人は、通所サービス利用者の支援が優先された可能性がある。

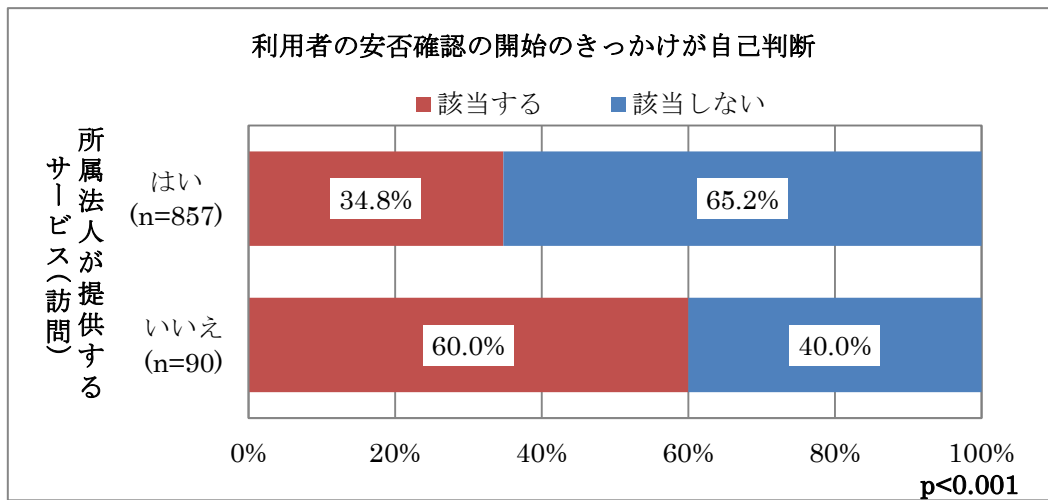


図 4-2-6-2 所属法人が提供するサービス(訪問)と安否確認の開始のきっかけが自己判断
所属法人が訪問サービスを提供していると回答した人で、安否確認の開始のきっかけが自己判断と答えた人は約 3 割だった。一方、訪問サービスを提供していないと回答した人は提供したと回答した人に比べ、自分から安否確認の行動をとった人が多かった。通所サービスと同様に、訪問サービス利用者の支援が優先された可能性がある。

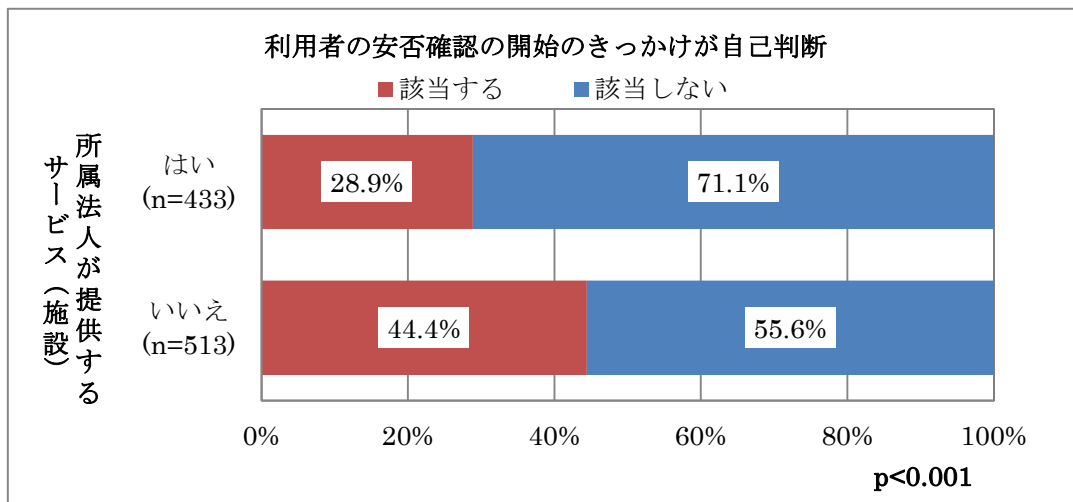


図 4-2-6-3 所属法人が提供するサービス(施設)と安否確認の開始のきっかけが自己判断
所属法人が施設サービスを提供していると回答した人で、安否確認の開始のきっかけが自己判断と答えた人は約 3 割だった。一方、施設サービスを提供していないと回答した人は提供していると回答した人に比べ、自分から安否確認の行動をとった人が多かった。施設サービス利用者の支援が優先された可能性がある。

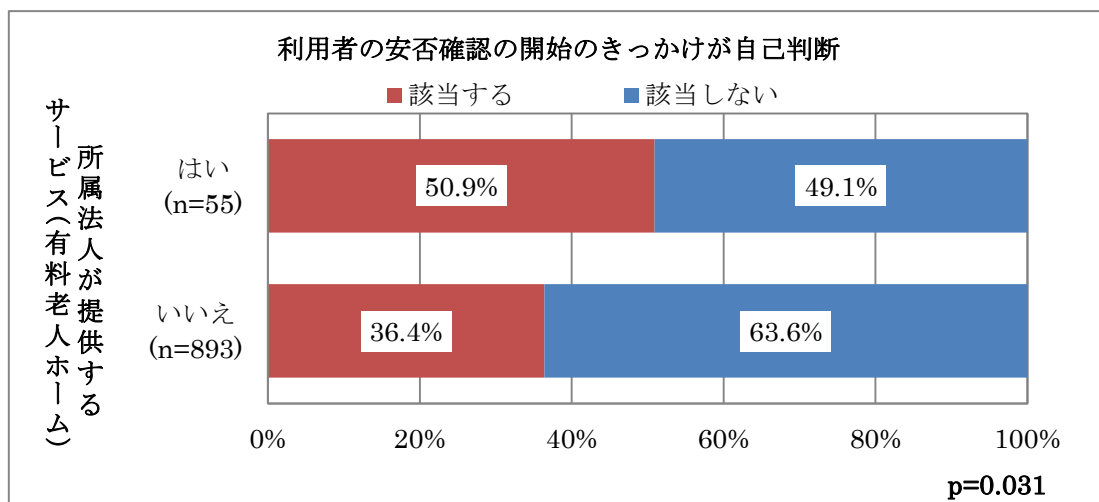


図 4-2-6-4 所属法人が提供するサービス(有料老人ホーム)と安否確認の開始のきっかけが自己判断

所属法人が有料老人ホームのサービスを提供していると回答した人で、安否確認の開始のきっかけが自己判断と答えた人は約 5 割だった。一方、有料老人ホームサービスを提供していないと回答した人は提供している人に比べ、自分から安否確認の行動をとった人が少なかった。図 4-2-6-1 から図 4-2-6-3 までのグラフとの差が出ているが、n 数を見てわかる通り、有料老人ホームを提供している事業所のケアマネジャーが少ないことが影響していると考えられる。

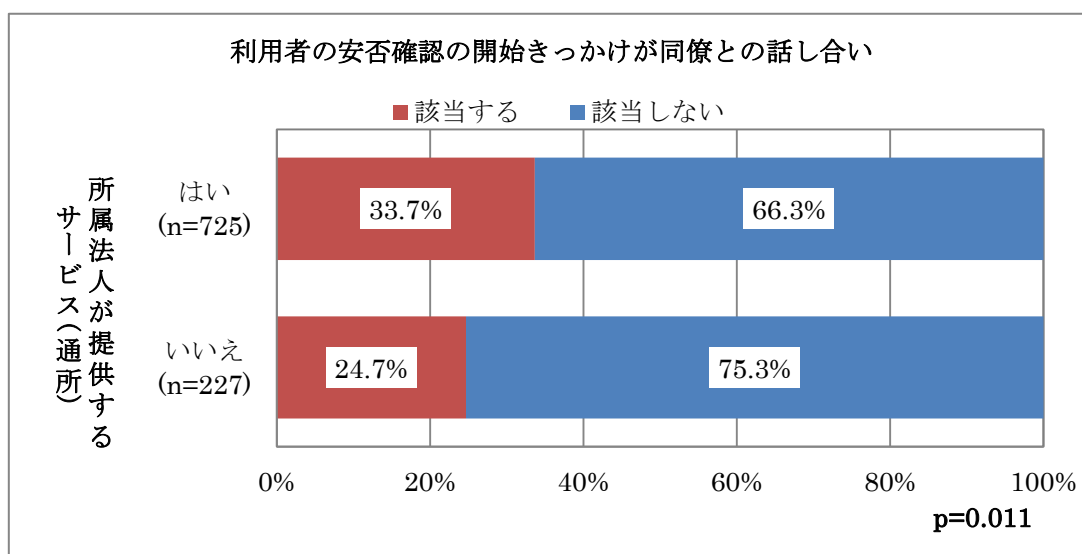


図 4-2-6-5 所属法人が提供するサービス(通所)と安否確認のきっかけが同僚との話し合い
所属法人が通所のサービスを提供している方が同僚との話し合いが安否確認の開始のきっかけの割合が多い。ケアマネに限らず、スタッフの人数が多いことが要因と考えられる。

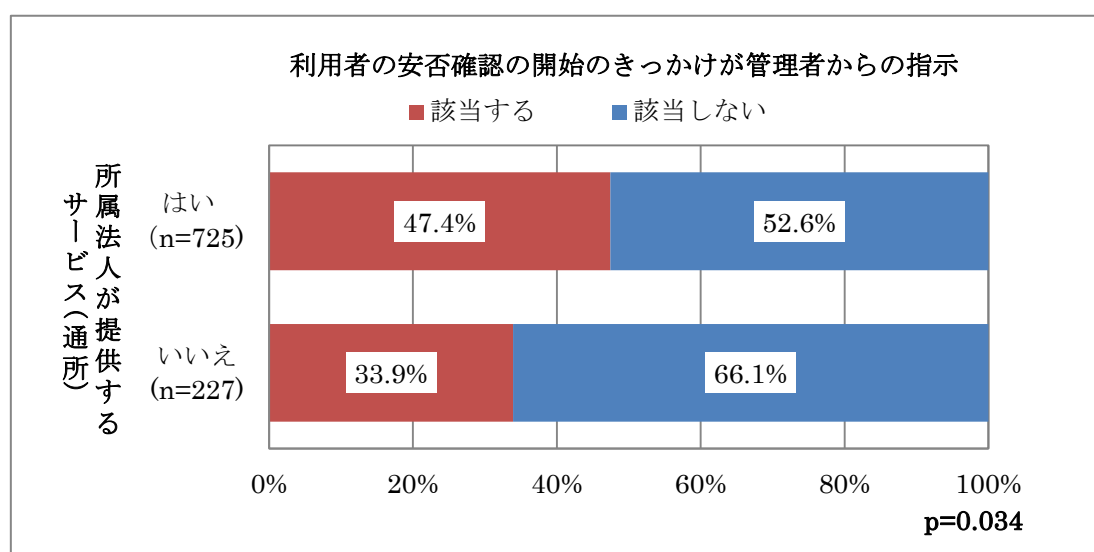


図 4-2-6-6 所属法人が提供するサービス(通所)と安否確認の開始のきっかけが管理者指示
所属法人が通所サービスを提供していると回答した人で、安否確認の開始のきっかけが管理者からの指示と答えた人は約半分の割合であった。
通所サービスでは、管理者を含めスタッフの人数が多くその場に同席しており、指示も話し合いもできる状況であったことが要因と考えられる。

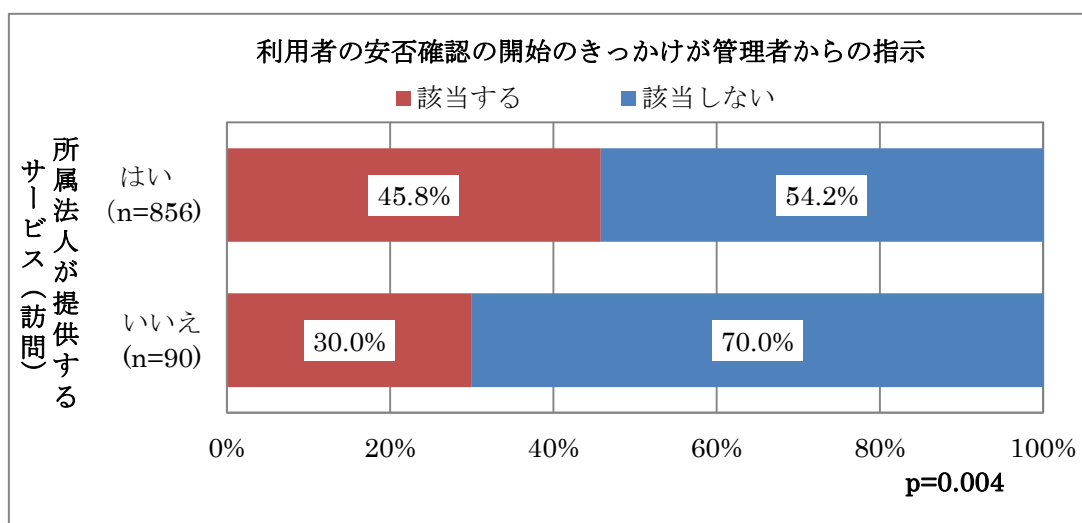


図 4-2-6-7 所属法人が提供するサービス(訪問)と安否確認の開始のきっかけが管理者指示

所属法人が訪問サービスを提供していると回答した人で、安否確認の開始のきっかけが管理者からの指示と答えた人は約半分の割合であった。

サービス提供責任者からの指示体系ができていたためと考えられる。

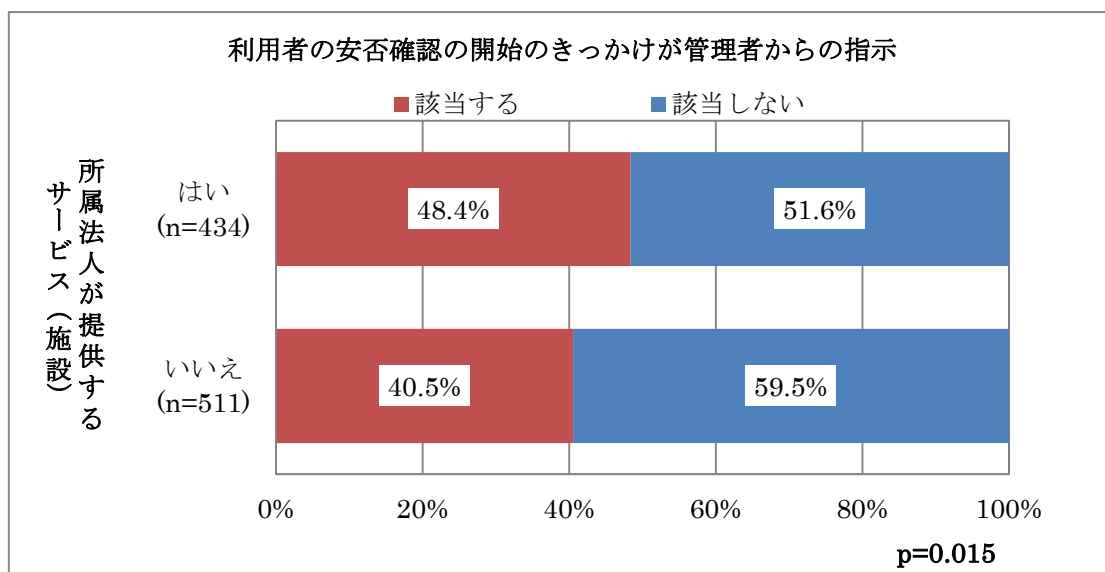


図 4-2-6-8 所属法人が提供するサービス(施設)と安否確認のきっかけが管理者指示

所属法人が施設サービスを提供していると回答した人で、安否確認の開始のきっかけが管理者からの指示と答えた人は約半分の割合であった。また施設サービスを提供していないと回答した人でも、図 4-2-6-6 および図 4-2-6-7 の結果に比べて、安否確認のきっかけが管理者からの指示と回答した人の割合が多かった。

職員の人数も多く、責任者からの指示体系ができていたためと考えられる。

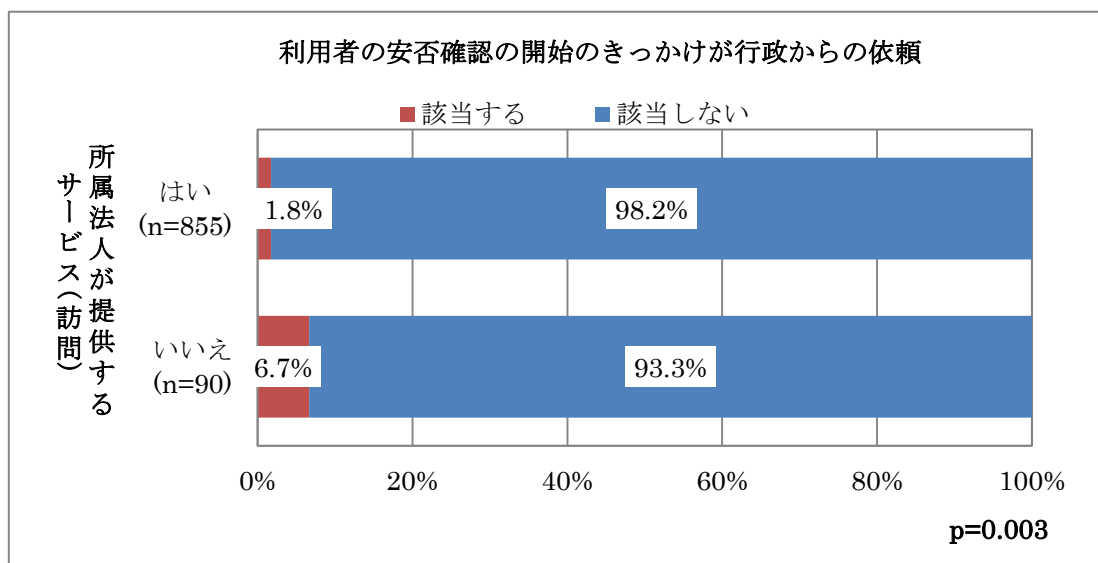


図 4-2-6-9 所属法人が提供するサービス(訪問)と安否確認のきっかけが行政からの指示
所属法人が訪問サービスを提供していない方が、行政からの依頼で安否確認を開始していたが、安否確認の開始のきっかけが行政の依頼と回答した人は少なかった。

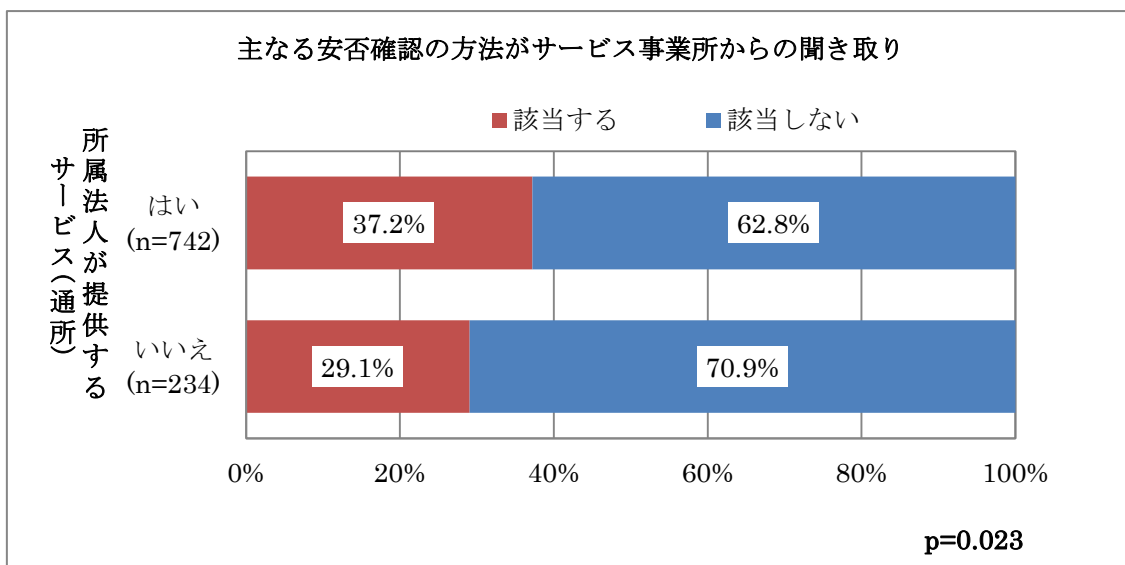


図 4-2-6-10 所属法人が提供しているサービス(通所)と
主なる安否確認の方法がサービス事業者からの聞き取り

所属法人が通所サービスを提供していると回答した人で、安否確認の方法がサービス事業者からの聞き取りと答えた人は約 4 割だった。このことから、通所のサービスを提供していると、やや安否確認の聞き取りがしやすかったと考えられる。

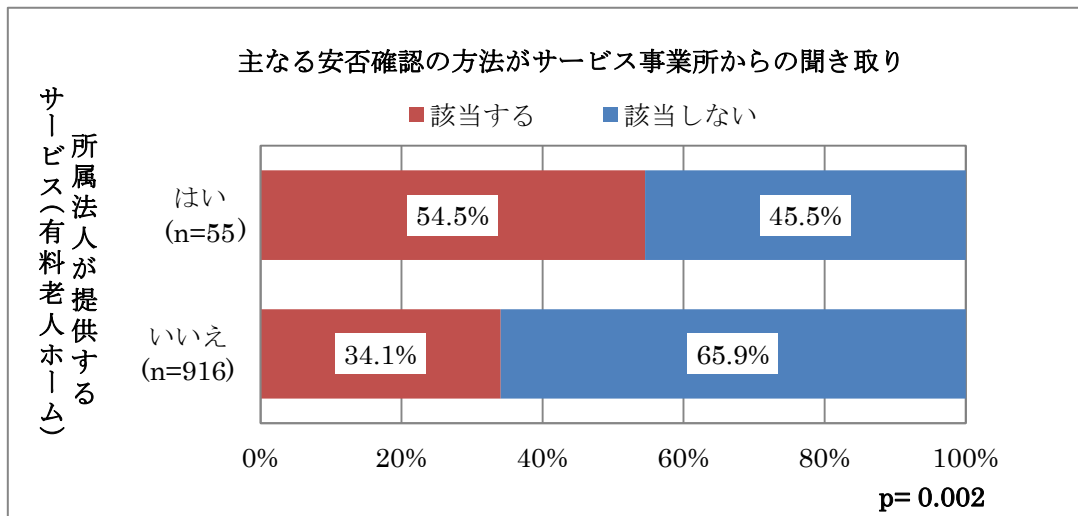


図 4-2-6-11 所属法人が提供するサービス(有料老人ホーム)と主なる安否確認の方法がサービス事業者からの聞き取り

安否確認が事業所から聞き取りによると回答した人は、所属法人が有料老人ホームサービスを提供している方が多かった。利用者が有料ホームに偏っていることが理由として考えられる。

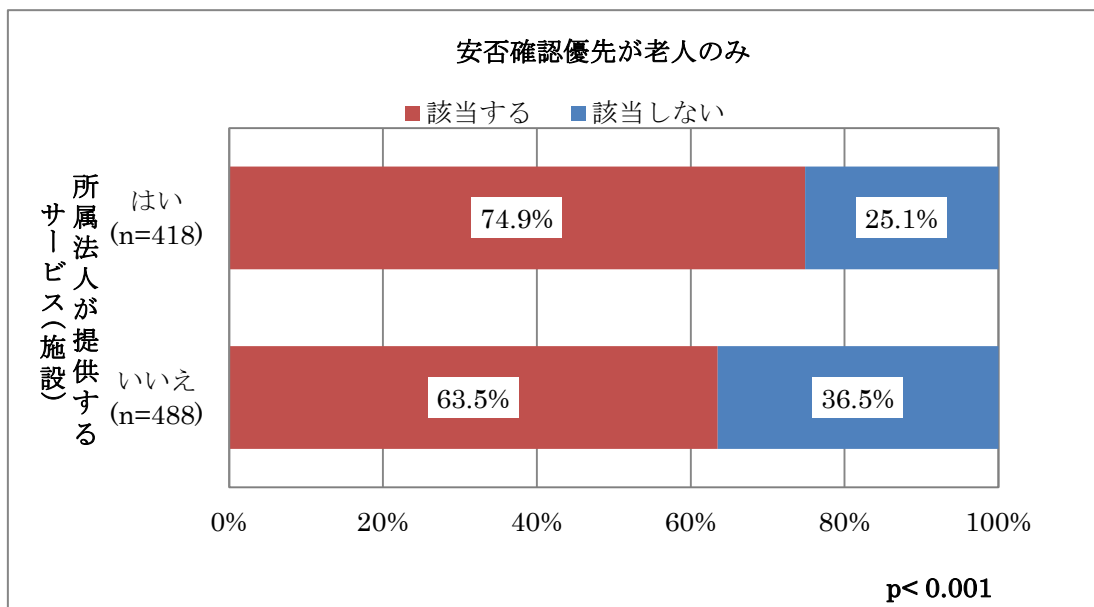


図 4-2-6-12 所属法人が提供するサービス(施設)と安否確認優先が老人のみ

所属法人が施設サービスwお提供している方が、安否確認優先が老人のみと答える人が多かった。

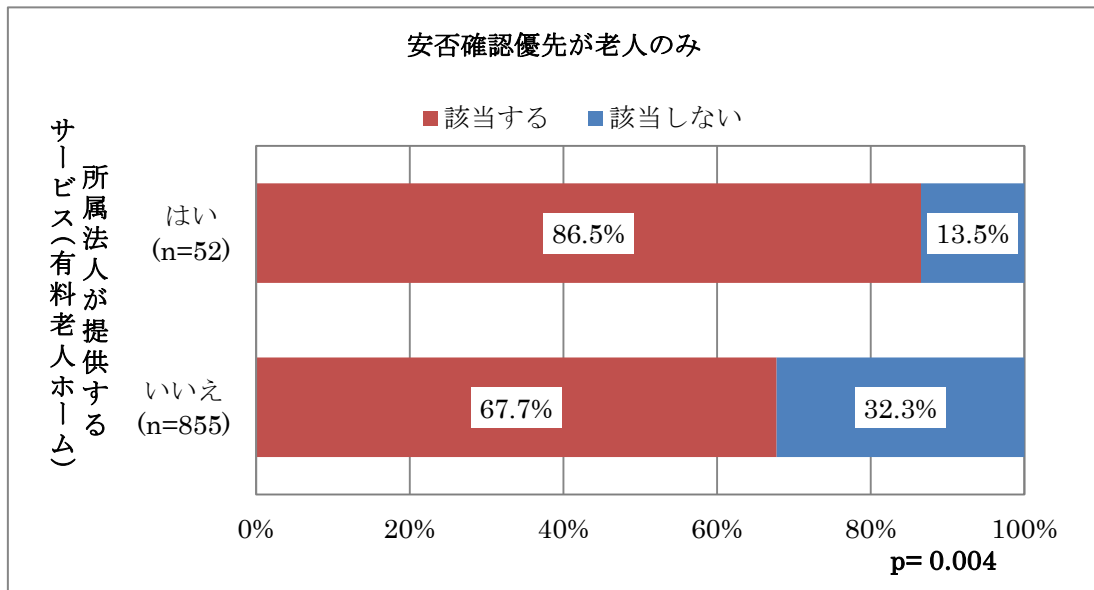


図 4-2-6-13 所属法人が提供するサービス(有料老人ホーム)と安否確認が老人のみ
所属法人が施設サービスを提供している方が、安否確認優先が老人のみと答える人が多かった。

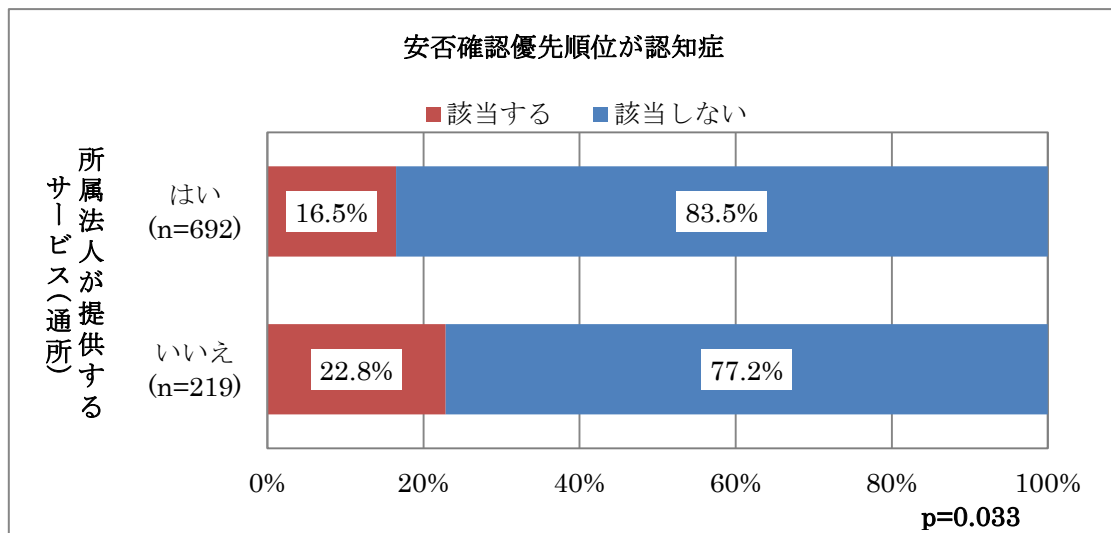


図 4-2-6-14 所属法人が提供するサービス(通所)と安否確認優先順位が認知症
所属法人が通所サービスを提供している場合、通所サービスを提供していない場合と比較して、安否確認優先が認知症と答える人が少なかった。

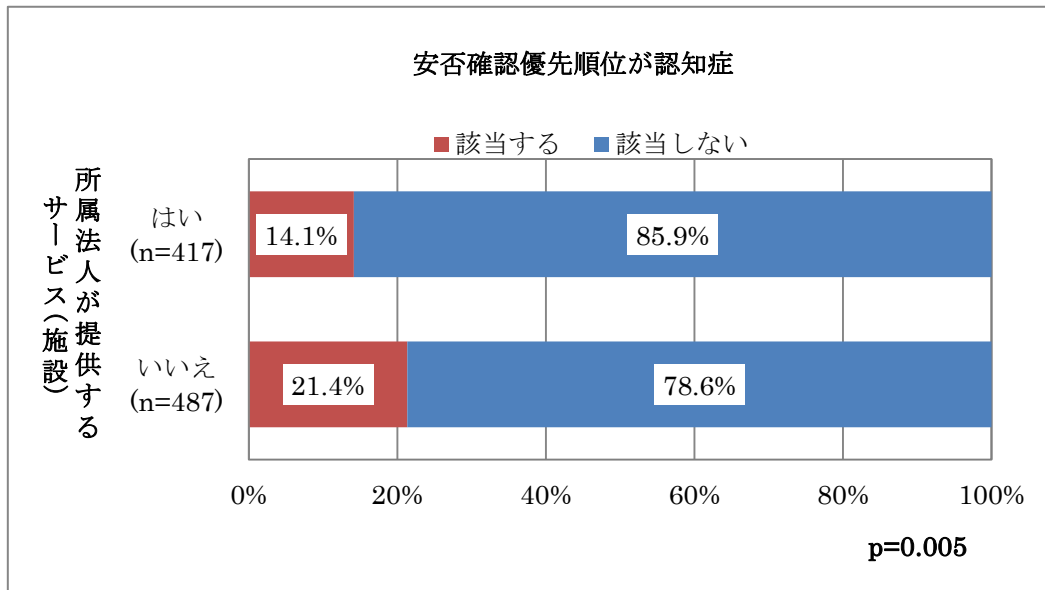


図 4-2-6-15 所属法人が提供するサービス(施設)と安否確認優先順位が認知症
所属法人が施設サービスを提供している場合、施設サービスを提供していない場合と比較して、安否確認優先が認知症と答える人が少なかった。

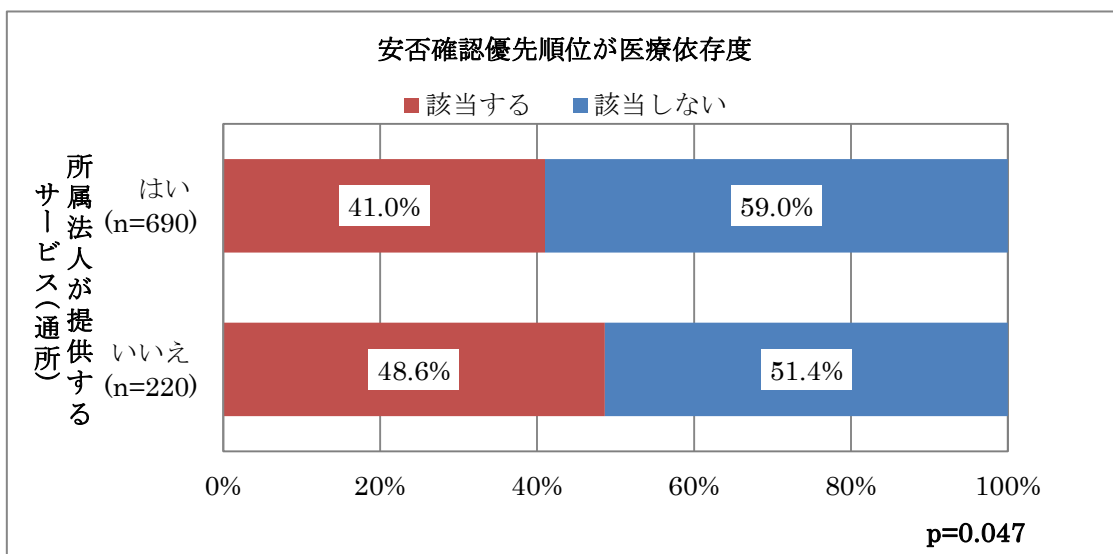


図 4-2-6-16 所属法人が提供するサービス(通所)と安否確認優先順位が医療依存度
所属法人が通所サービスを提供している場合、通所サービスを提供していない場合と比較して、安否確認優先が医療依存度と答える人が少なかった。

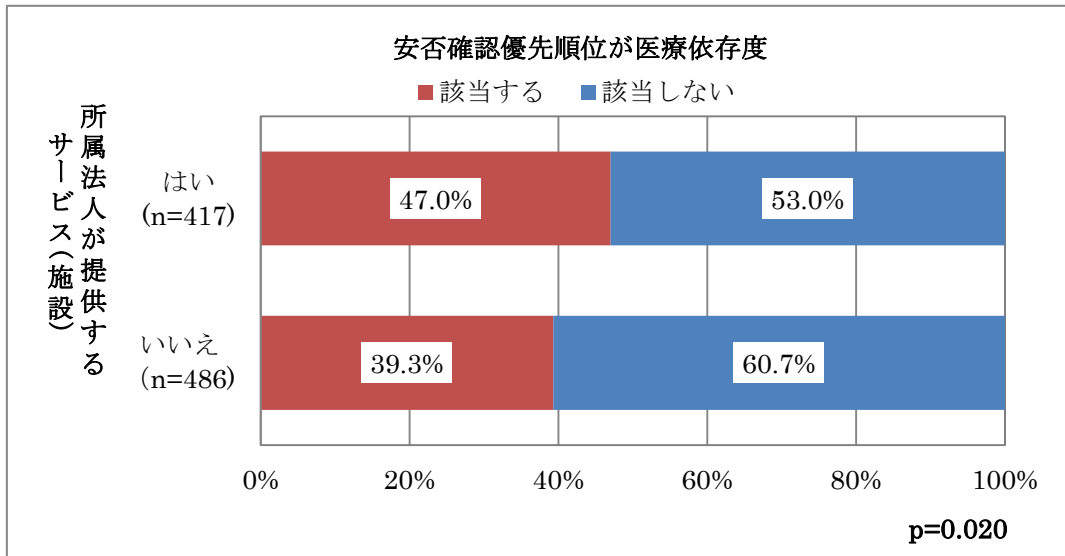


図 4-2-6-17 所属法人が提供するサービス(施設)と安否確認優先順位が医療依存度
所属法人が施設サービスを提供している場合、施設サービスを提供していない場合と比較して、安否確認優先が医療依存度と答える人が多かった。

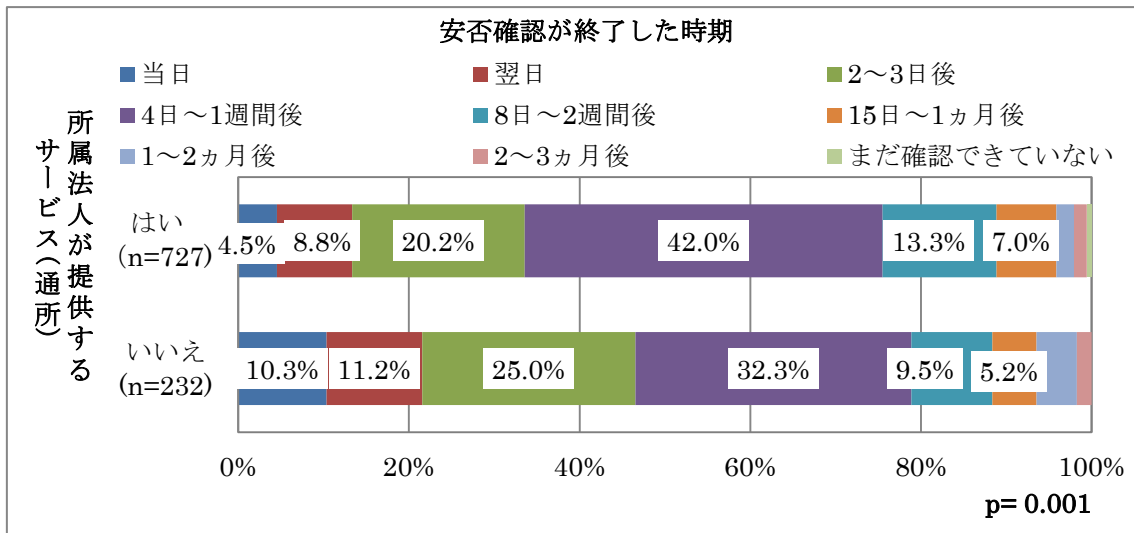


図 4-2-6-18 所属法人が提供するサービス(通所)と安否確認が終了した時期
所属法人が通所サービスを提供していると回答した人は安否確認が終了した時期について、通所サービスを提供していない場合と比較して安否確認終了が遅れる傾向にあった。直後はケアマネジャーとしてというより、通所の利用者が優先されたと推測される。

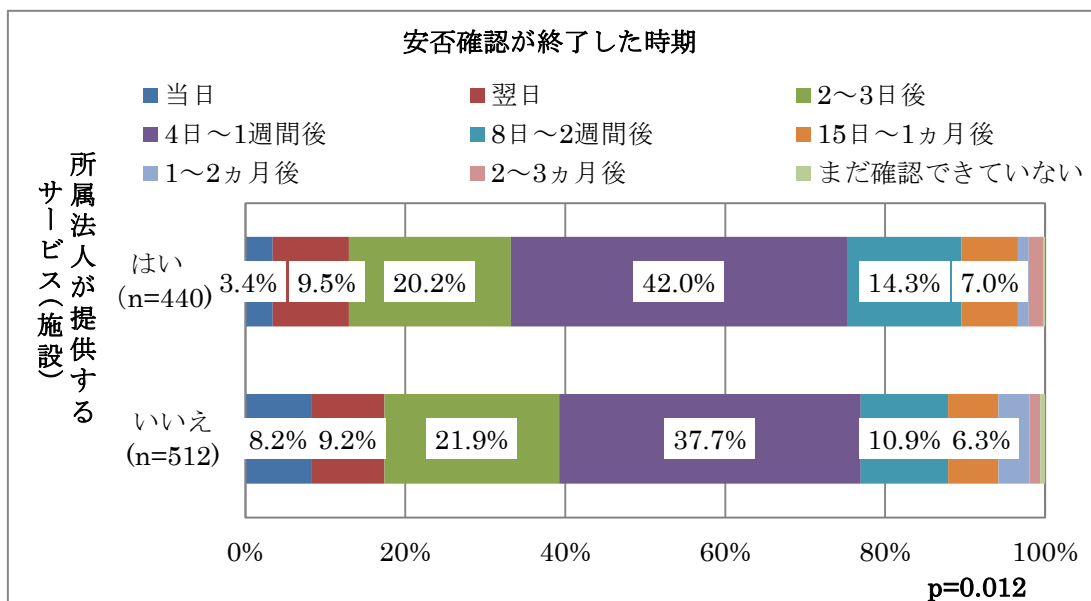


図 4-2-6-19 所属法人が提供するサービス(施設)と安否確認が終了した時期

所属法人が施設サービスを提供している人は安否確認が終了した時期について、図 4-2-6-18 と同様と思われる。

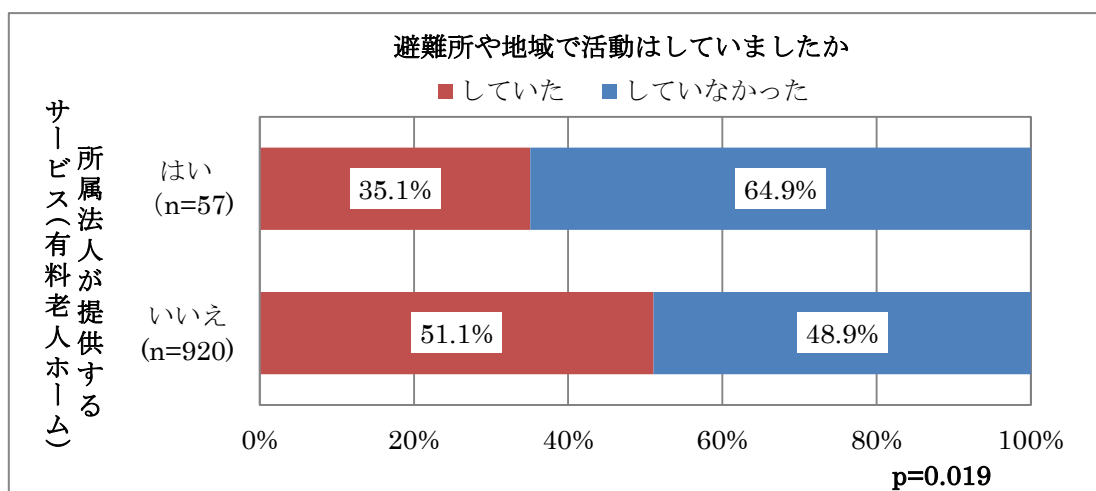


図 4-2-6-21 所属法人が提供するサービス(有料老人ホーム)と避難所や地域で活動していたか

所属法人が有料老人ホームサービスを提供していると回答した人において、避難所や地域で活動していたと答えた人は約 4 割だったことから、地域より所属施設を優先する傾向にあったことがわかる。

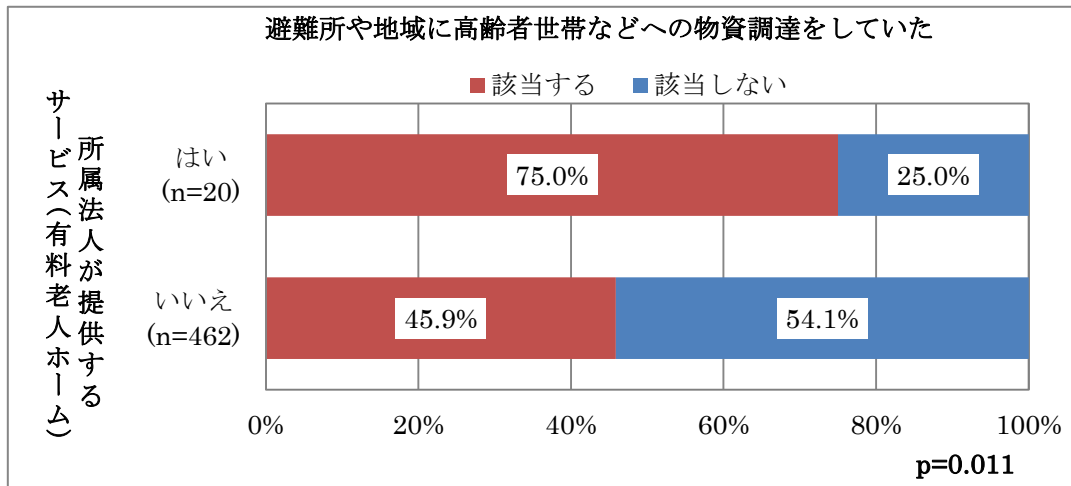


図 4-2-6-22 所属法人が提供するサービス(有料老人ホーム)と
避難所や地域に高齢者世帯などへ物資調達をしていたか

所属法人が有料老人ホームサービスを提供していると回答した人において、避難所や地域に高齢者世帯などへの物資調達をしていたと答えた人は7割以上だったが、有料ホームの入所者が物資調達の相手先と考えられる。

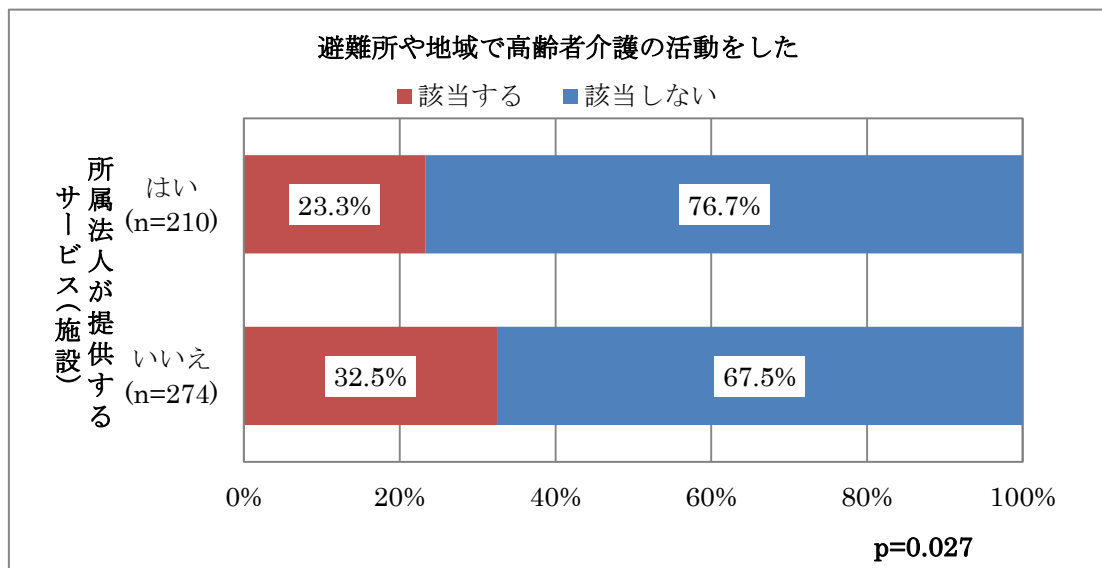


図 4-2-6-23 所属法人が提供するサービス(施設)と
避難所や地域で高齢者介護の活動をしたか

所属法人が施設サービスを提供している場合は、提供していない場合と比較して、避難所や地域での活動が少ない。所属施設でのケアが優先されたことが要因と推測される。

4-2-7 居宅介護支援事業所の所在する市町村

居宅介護支援事業所の所在する市町村を地形の特徴別にカテゴリー分類した。カテゴリーは、平地(山元町, 亘理町, 岩沼市, 名取市, 仙台市宮城野区, 仙台市若林区, 七ヶ浜町, 多賀城市, 塩釜市, 松島町, 東松島市, 石巻市)と, リアス式(女川町, 南三陸町, 気仙沼市)と, その他となっている。

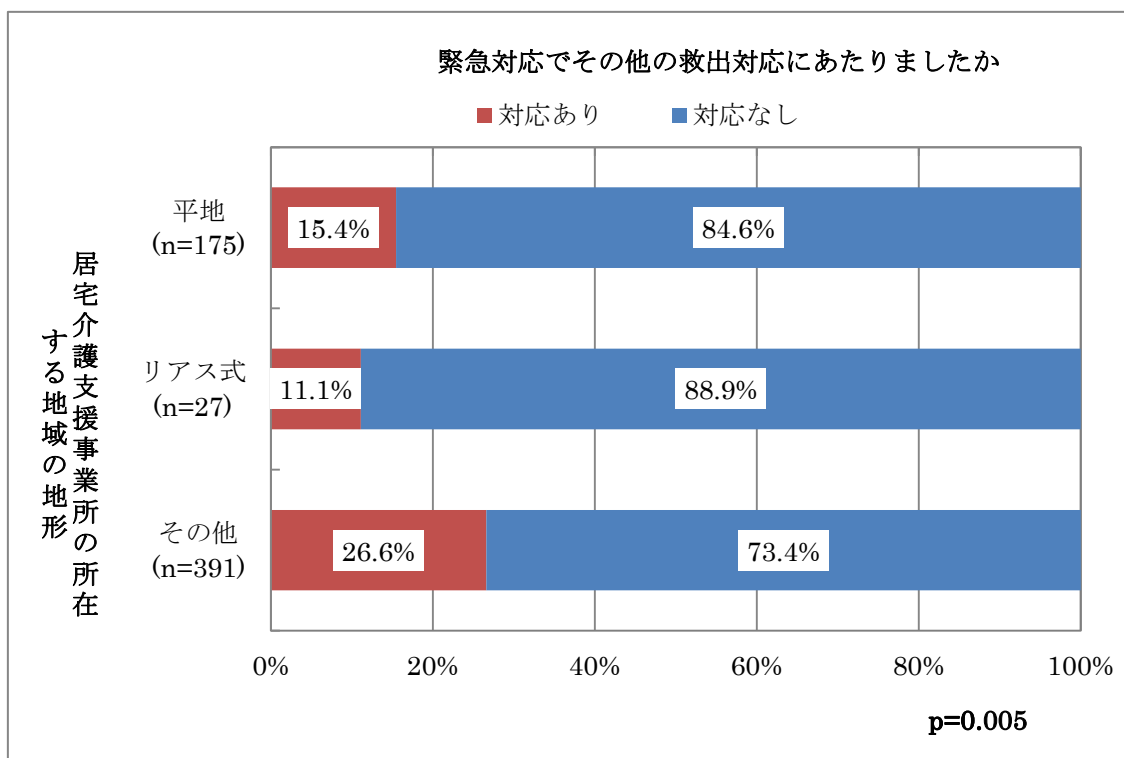


図 4-2-7-1 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と救出の有無

居住介護支援事業所の所在する地域の地形と, 救出の有無について統計的有意差があった(p=0.005)。

担当利用者や介護サービス利用者の救助等緊急対応に, 避難誘導介助と救出以外の対応をとったというケアマネジャーは平地で 15.4%, リアス式で 11.1%, その他で 26.6%いた。

リアス式の地域の被害の甚大さが影響していると考えられる。

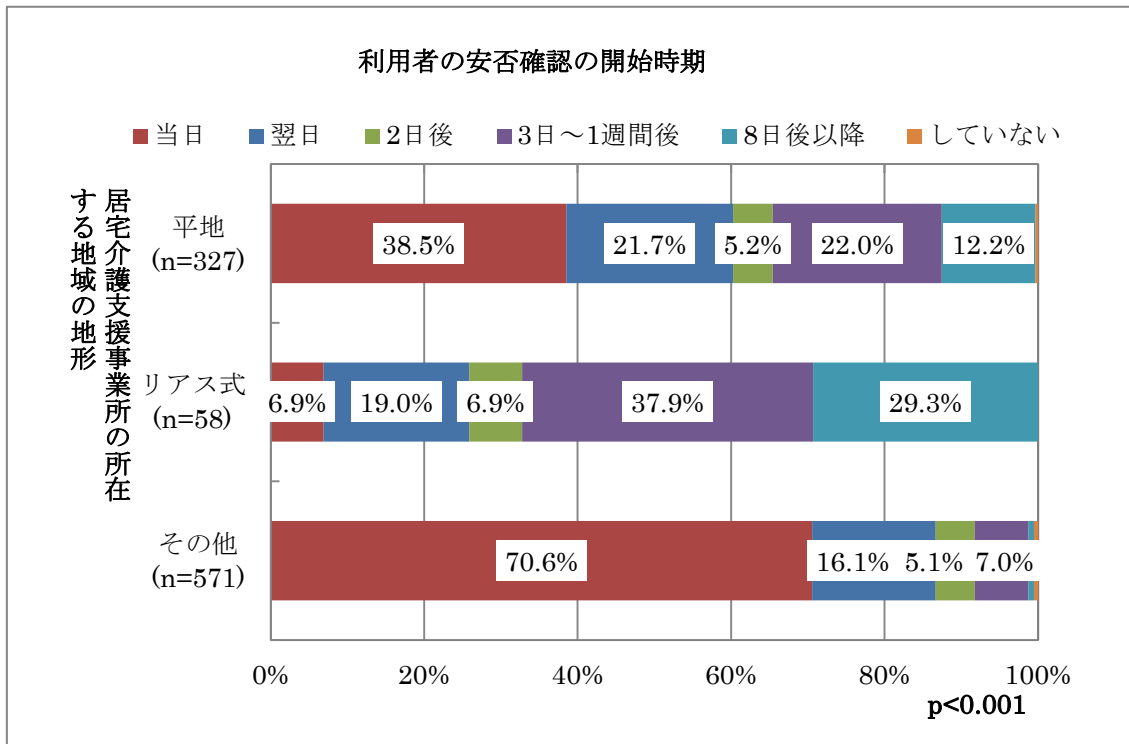
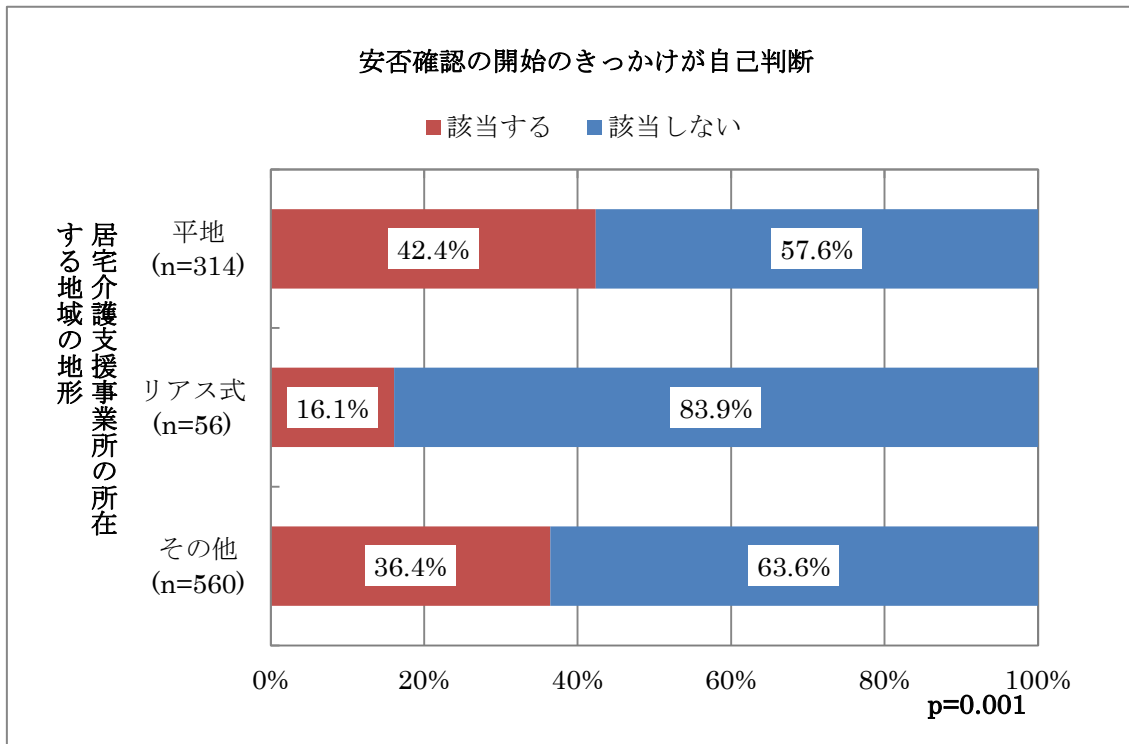


図 4-2-7-2 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と利用者の安否確認開始時期

居住介護支援事業所の所在する地域の地形と利用者の安否確認開始時期について、統計的有意差があった($p<0.001$)。

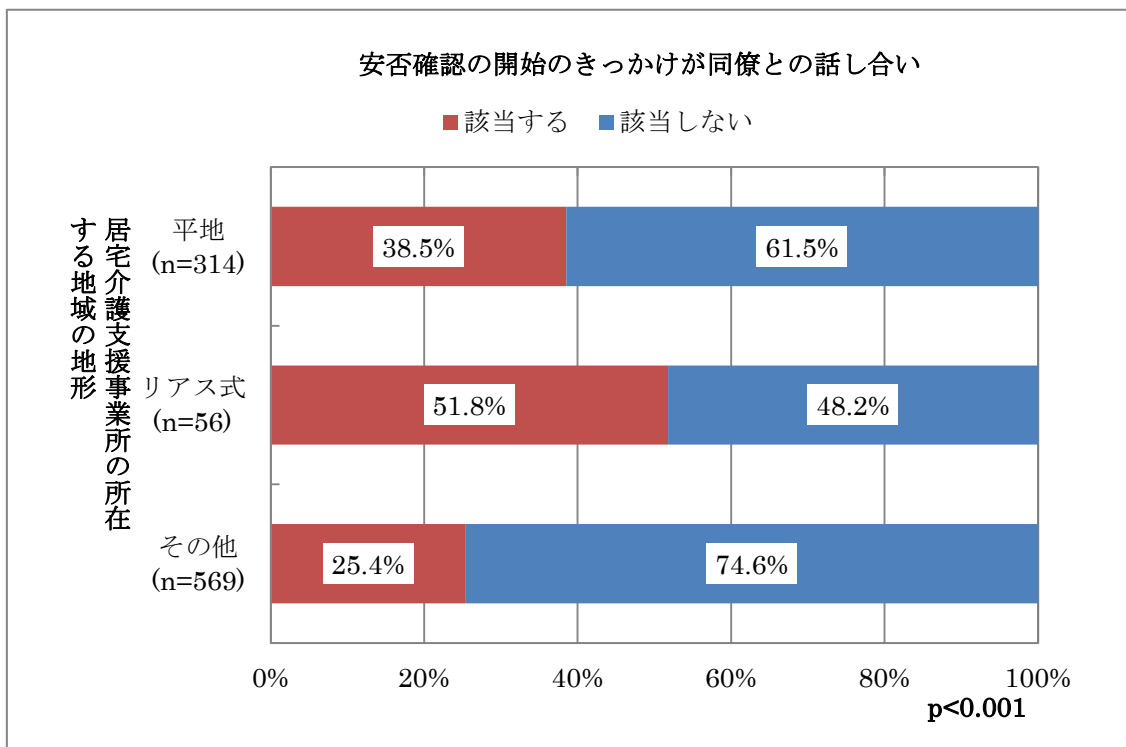
平地で一番多い開始時期は当日であり、38.5%であった。一方、リアス式で一番多い開始時期は3日～1週間後であり、37.9%であった。その他では一番多い開始時期は当日であり、70.6%であった。リアス式の地域は被害と居住地が海岸沿いに集中していたことが影響し、安否確認の開始時期が遅くなったと考えられる。



**図 4-2-7-3 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と
安否確認の開始のきっかけ(自己判断)**

居住介護支援事業所の所在する地域の地形と、利用者の安否確認の開始のきっかけが自己判断との間に、統計的有意差があった(p=0.001)。

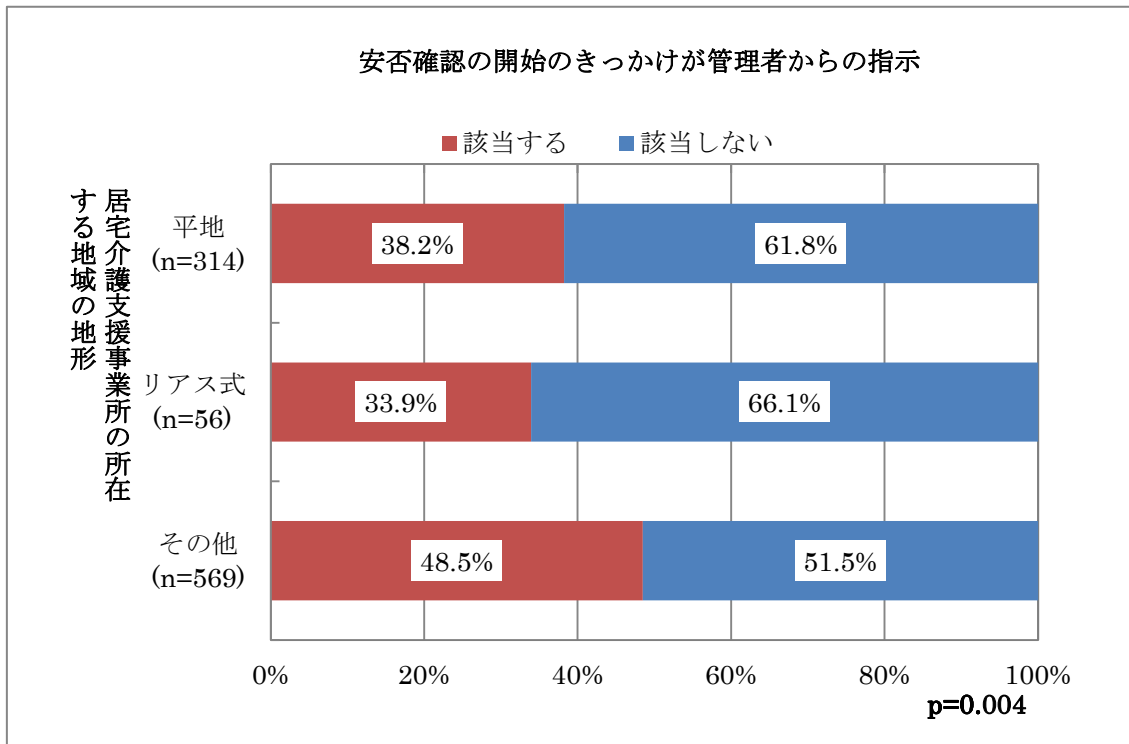
安否確認の開始のきっかけが自己判断だったのは、平地では 42.4%、リアス式では 16.1%、その他では 36.4%であった。平地やその他の地域と異なり、リアス式の地域では、被害が集中し安否確認を自己判断で開始できる状況になかったのではないかと考えられる。



**図 4-2-7-4 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と
安否確認の開始のきっかけ(同僚との話し合い)**

居住介護支援事業所の所在する地域の地形と、利用者の安否確認の開始のきっかけが同僚との話し合いとの間に、統計的有意差があった($p<0.001$)。

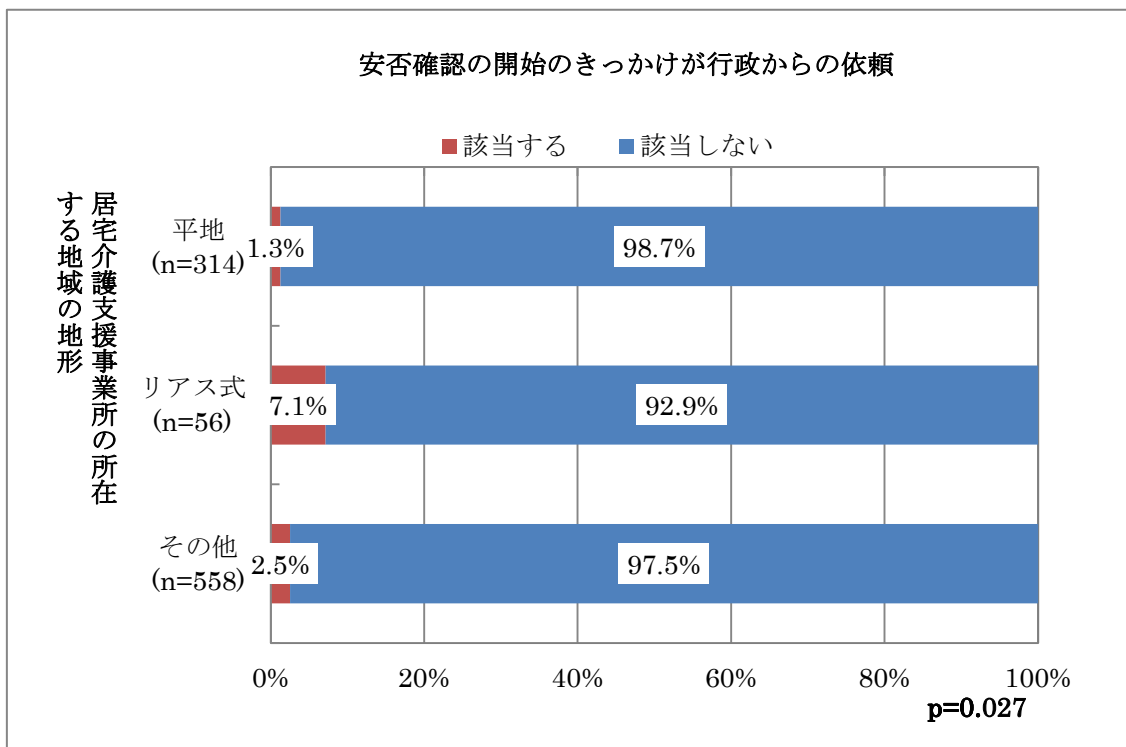
安否確認の開始のきっかけが同僚との話し合いだったのは、平地では 38.5%、リアス式では 51.8%、その他では 25.4%であった。図 4-2-7-3 の結果にも表れているように、平地やその他の地域と異なり、リアス式の地域では自分一人で安否確認を開始できる状況にいた人が少なく、同僚などに確認を取らなければ行動できない状況にいた人が多かったのではないかと考えられる。



**図 4-2-7-5 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と
安否確認の開始のきっかけ(管理者からの指示)**

居住介護支援事業所の所在する地域の地形と、利用者の安否確認の開始のきっかけが管理者からの指示との間に、統計的有意差があった(p=0.004)。

安否確認の開始のきっかけが管理者からの指示だったのは、平地では 38.2%、リアス式では 33.9%、その他では 48.5%であった。その他の地域では、管理者が指示待をすることができる、いくらかの余力があったと推測できる。



**図 4-2-7-6 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と
安否確認の開始のきっかけ(行政からの依頼)**

居住介護支援事業所の所在する地域の地形と、利用者の安否確認の開始のきっかけが行政からの依頼との間に、統計的有意差があった(p=0.027)。

安否確認の開始のきっかけが行政からの依頼だったのは、平地では 1.3%、リアス式では 7.1%、その他では 2.5%であった。リアス式の地域では、行政からの地域と回答した人が平地やその他の地域に比べて若干多かったが、これは行政などの指示がないと安否確認などの行動ができないほど余力がなかったことが要因ではないかと考えられる。

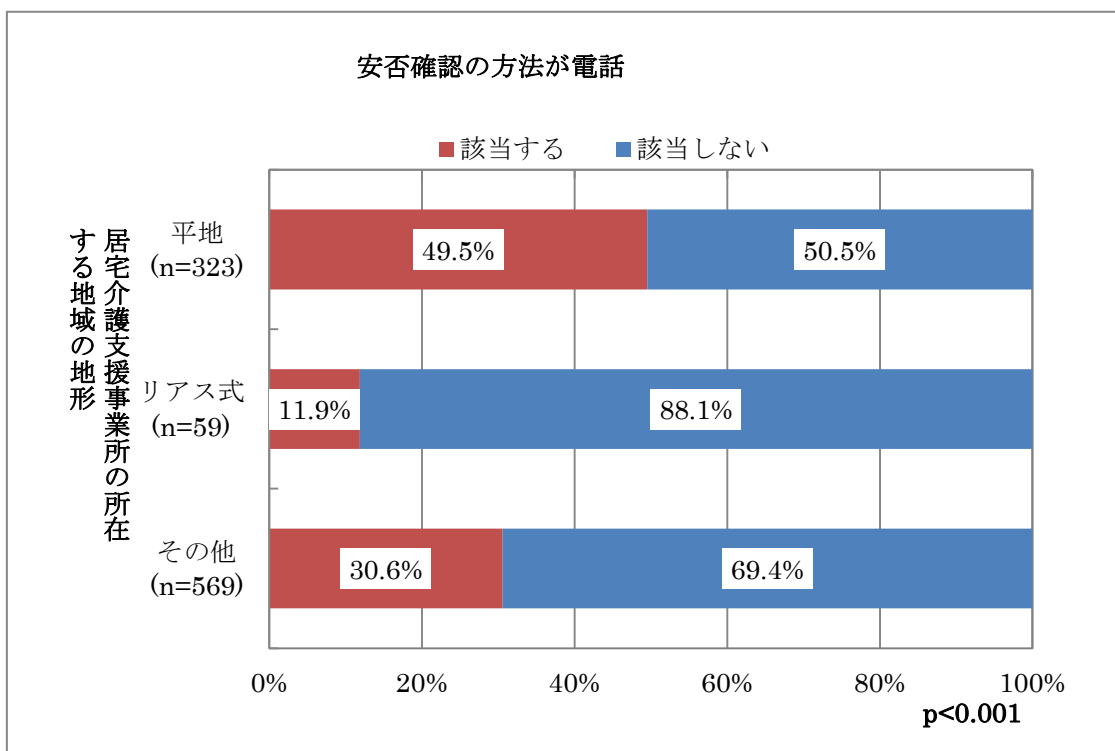


図 4-2-7-7 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と安否確認の方法(電話)

居住介護支援事業所の所在する地域の地形と、利用者の安否確認の方法が電話との間に、統計的有意差があった(p<0.001)。

安否確認の方法が電話だったのは、平地では 49.5%、リアス式では 11.9%、その他では 30.6%であった。平地やその他の地域に比べて、リアス式の地域では基地局も被災し、電話を連絡手段として使うことができなかつたと考えられる。

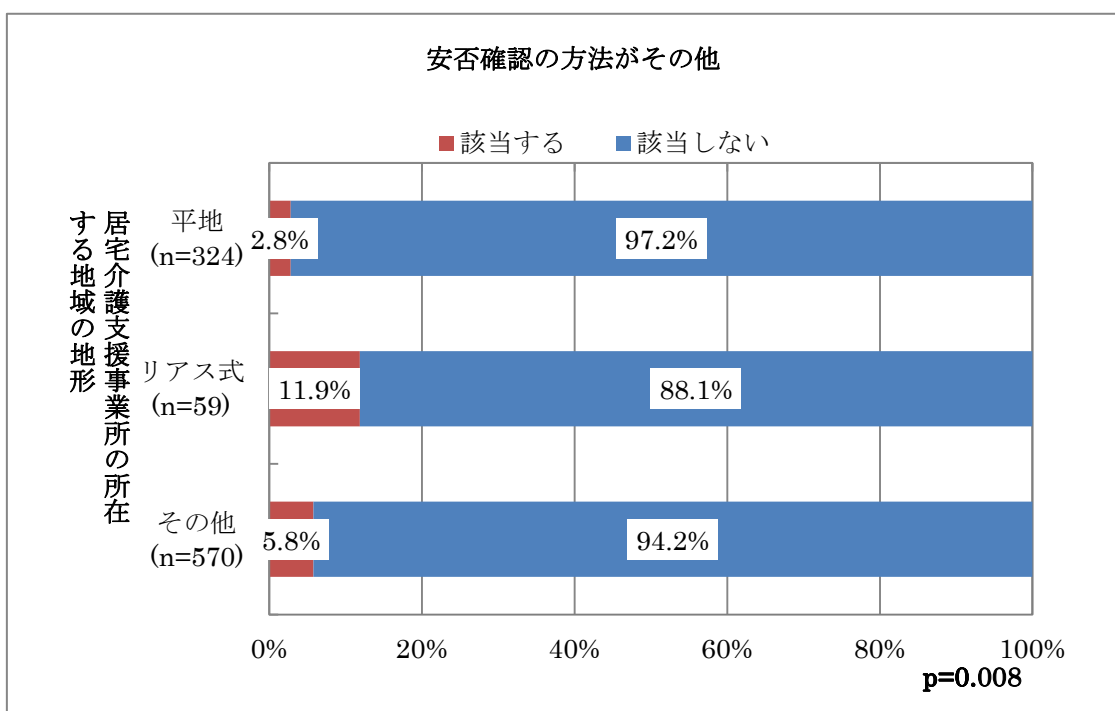


図 4-2-7-8 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と安否確認の方法(その他)

居住介護支援事業所の所在する地域の地形と、利用者の安否確認の方法がその他(自分での訪問やサービス事業所からの聞き取り、電話以外)との間に、統計的有意差があった(p=0.008)。

安否確認の方法がその他だったのは、平地では 2.8%、リアス式では 11.9%、その他では 5.8%であった。

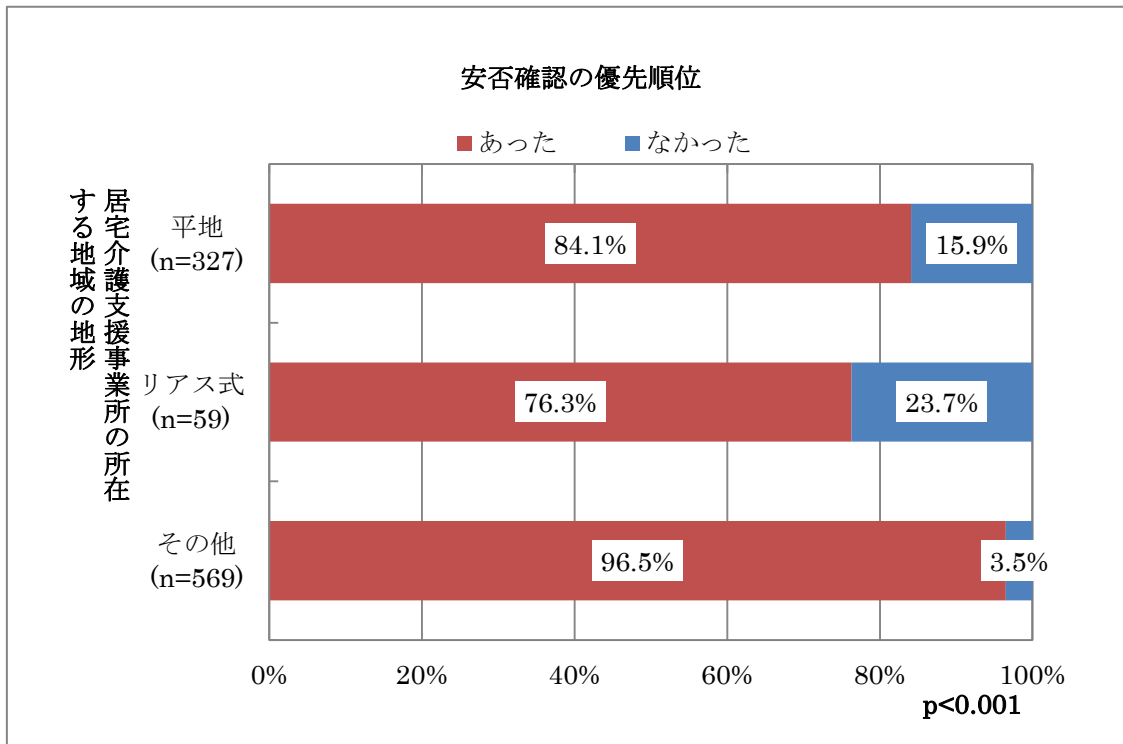


図 4-2-7-9 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と安否確認の優先順位の有無
 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と、利用者の安否確認の優先順位の有無について統計的有意差があった($p<0.001$)。
 津波の被災地の方が、安否確認の優先順位がなかったと答えた人が少ない理由は不明。

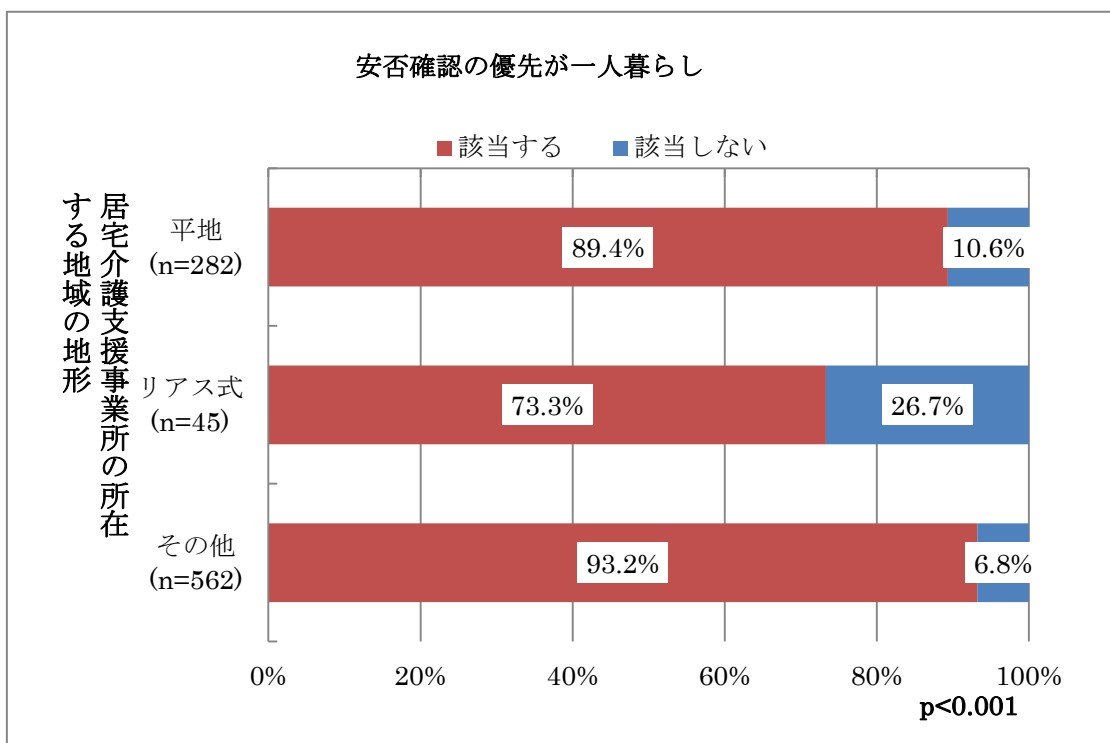


図 4-2-7-10 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と安否確認の優先順位(一人暮らし)

居住介護支援事業所の所在する地域の地形と、利用者の安否確認の優先順位が一人暮らしとの間に、統計的有意差があった(p<0.001)。

安否確認の優先が一人暮らしだったのは、平地では 89.4%、リアス式では 73.3%、その他では 93.2%。リアス式の地域で一人暮らしの安否確認の優先順位が低かったのは、その地域で一人暮らしをしている人自体が少ないためなのか推測しかねる。

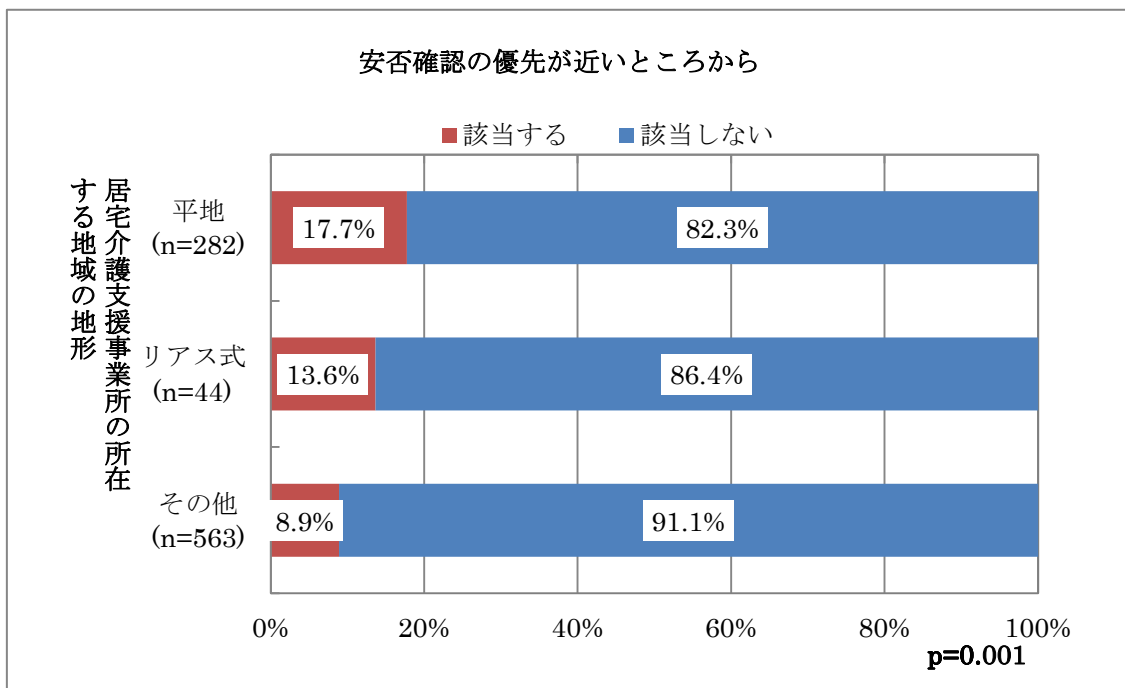


図 4-2-7-11 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と安否確認の優先順位(近いところ)

居住介護支援事業所の所在する地域の地形と、利用者の安否確認の優先順位が近いところからだったについて、統計的有意差があった(p=0.001)。

平地では17.7%であり、リアス式では13.6%であり、その他では8.9%であった。

その他の内陸部は安否確認の優先が少ないが、平地の沿岸部は比較的優先が高く、理由は推測できない。

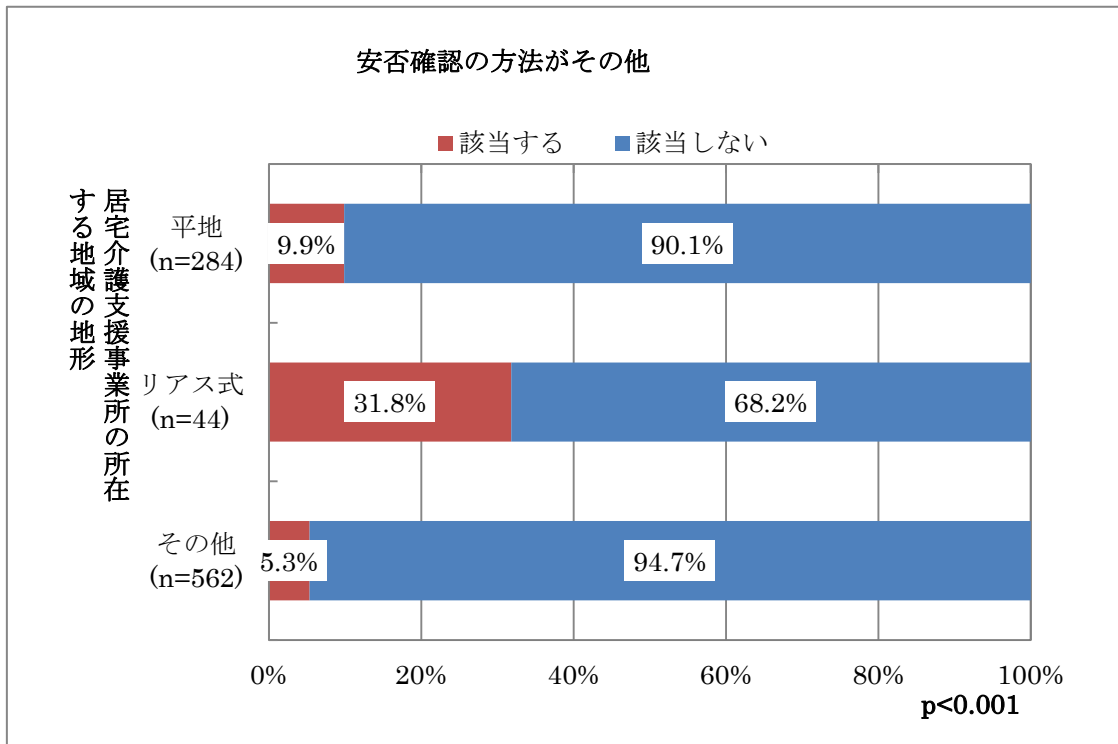


図 4-2-7-12 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と安否確認の優先順位(その他)

居住介護支援事業所の所在する地域の地形と、利用者の安否確認の優先順位が一人暮らし、老夫婦のみの世帯、認知症、医療依存度、近いところ、遠いところ以外のその他との間に統計的有意差があった($p<0.001$)。

安否確認の優先がその他だったのは、平地では 9.9%、リアス式では 31.8%、その他では 5.3%であった。

リアス式の地域のその他の優先は不明。

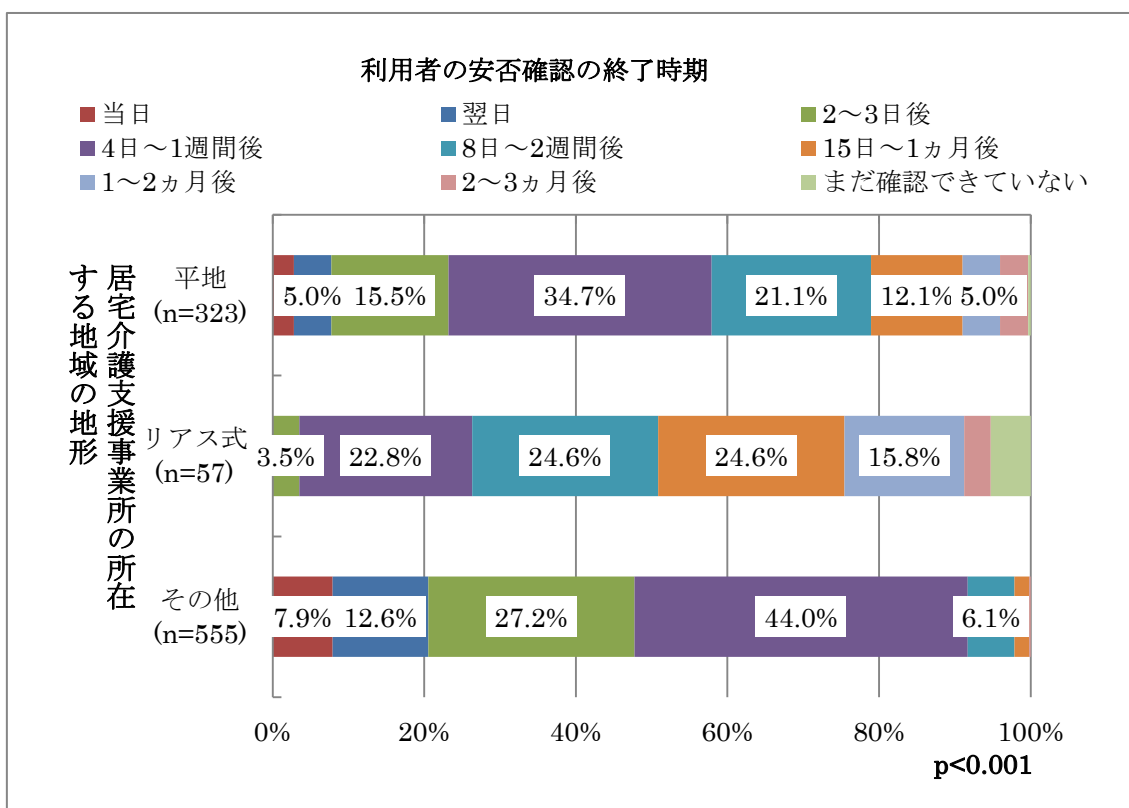


図 4-2-7-13 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と安否確認の終了時期

居住介護支援事業所の所在する地域の地形と、安否確認の終了時期について統計的有意差があった($p<0.001$)。

平地で、一番多い安否確認の終了時期は 4 日～1 週間後の 34.7%であり、リアス式で一番多い安否確認の終了時期は 8 日～2 週間後と 15 日～1 ヶ月後の 24.6%であり、その他で一番多い安否確認終了時期は 4 日～1 週間後の 44.0%であった。

リアス式の地域ではやはり被災度が高かったこともあり、安否確認の終了時期が平地やその他の地域よりも遅くなったと考えられる。

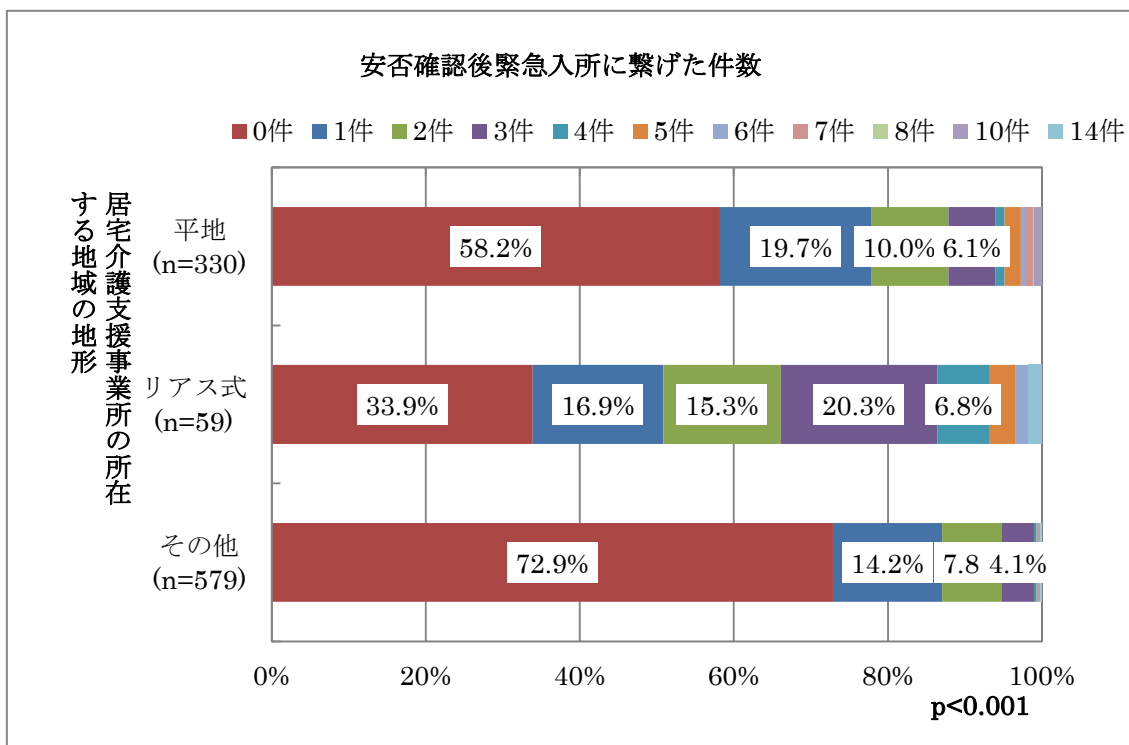
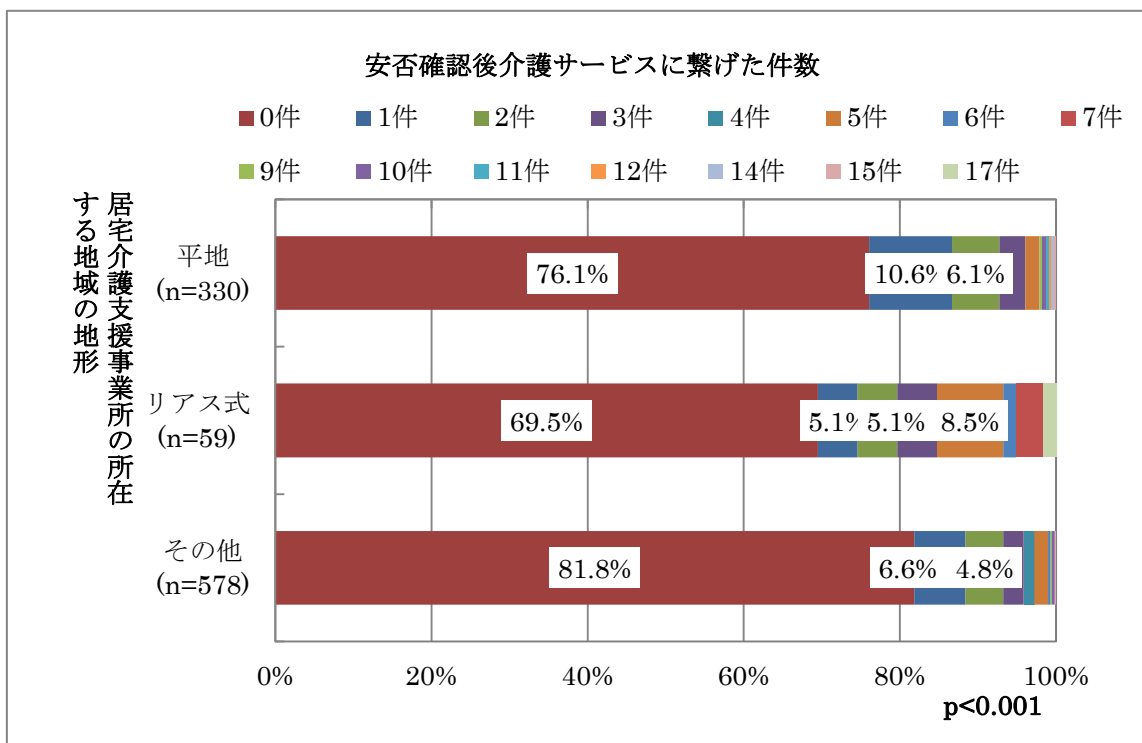


図 4-2-7-14 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と安否確認後緊急入所に繋がった件数

居住介護支援事業所の所在する地域の地形と、安否確認後に緊急入所に繋がった件数について、統計的有意差があった(p<0.001)。

安否確認後に緊急入所に繋がった件数で、リアス式 65%、平地 40%強、その他 25%と、被害の甚大さに比例して対応が必要だった。



**図 4-2-7-15 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と
安否確認後介護サービスに繋がった件数**

居住介護支援事業所の所在する地域の地形と、安否確認後に介護サービスに繋がった件数について、統計的有意差があった(p<0.001)。

安否確認後に介護サービスに繋がった件数は、平地では約 24%、リアス式では約 30%、その他では約 18%であった。

安否確認後に介護サービスに繋がった件数も、被害の甚大さに比例して対応が必要だった。

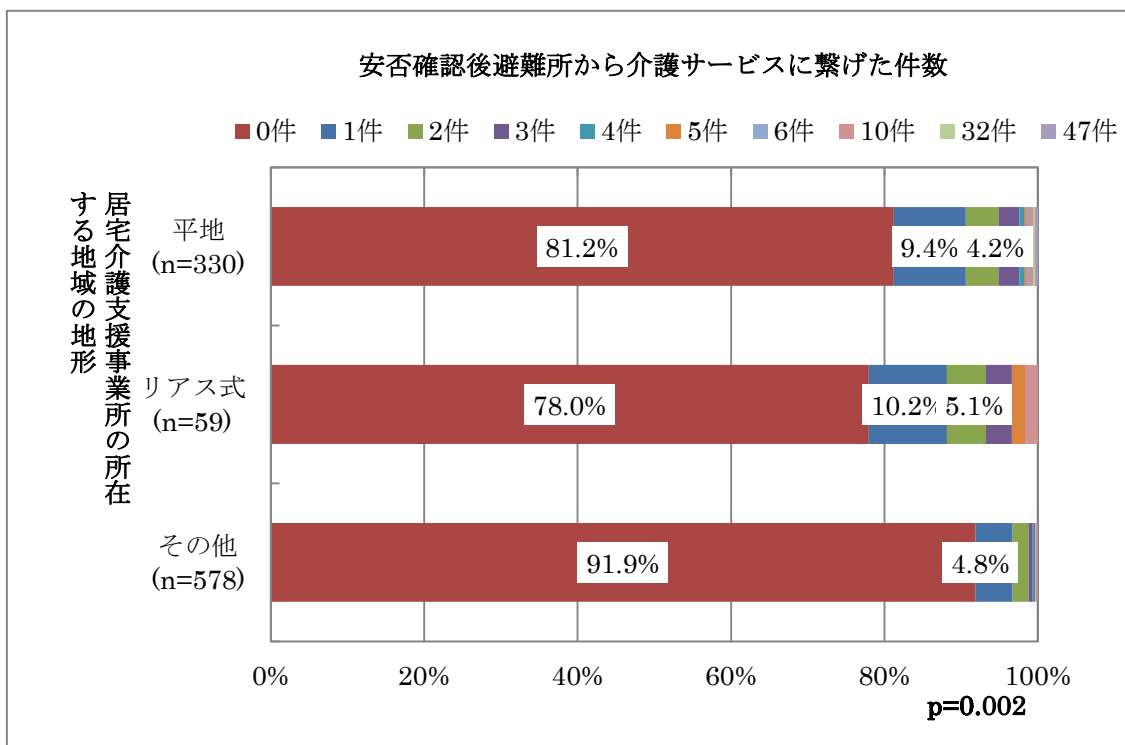


図 4-2-7-16 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と
安否確認後避難所から介護サービスに繋がった件数

居住介護支援事業所の所在する地域の地形と、安否確認後に避難所から介護サービスに繋がった件数について、統計的有意差があった(p=0.002)。

安否確認後に避難所から介護サービスに繋がった件数は、平地では約 19%、リアス式では 22%、その他では 8%だった。被害の甚大さに比例して対応が必要だった。

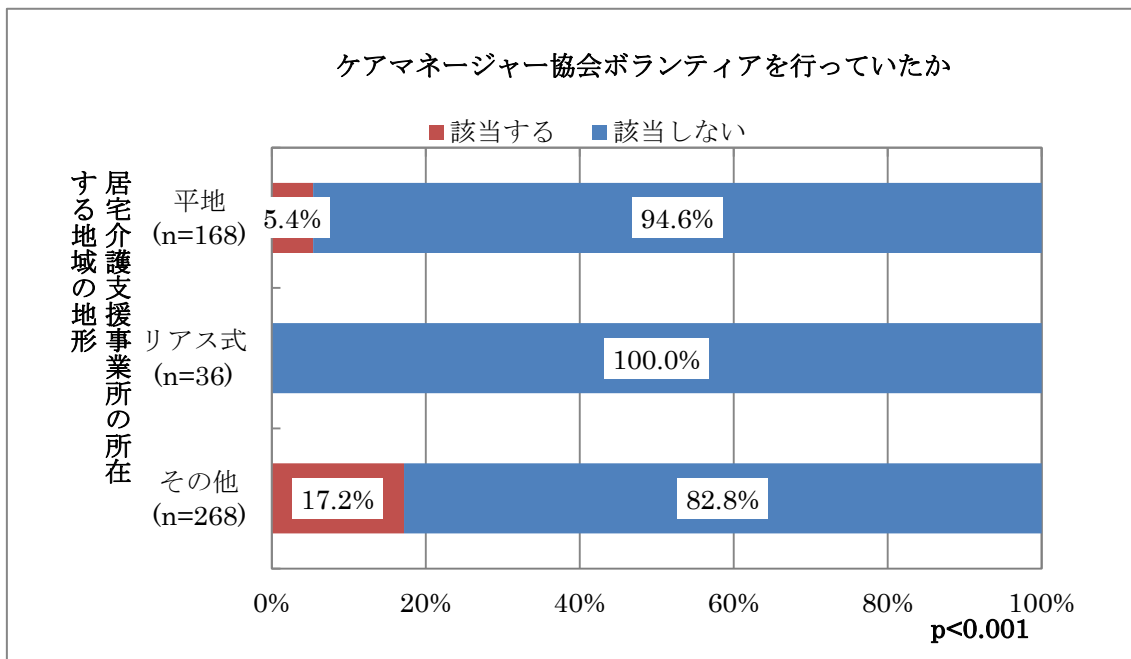


図 4-2-7-17 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と
ケアマネジャー協会ボランティアを行っていたか

居住介護支援事業所の所在する地域の地形と、ケアマネジャー協会ボランティアを行っていたかについて、統計的有意差があった($p<0.001$)。

ケアマネジャー協会ボランティアを行っていたのは、平地では 5.4%、リアス式では 0.0%、その他では 17.2%であった。

津波被害のない地域のケアマネが、津波地域の支援に入るという活動をしてきた。

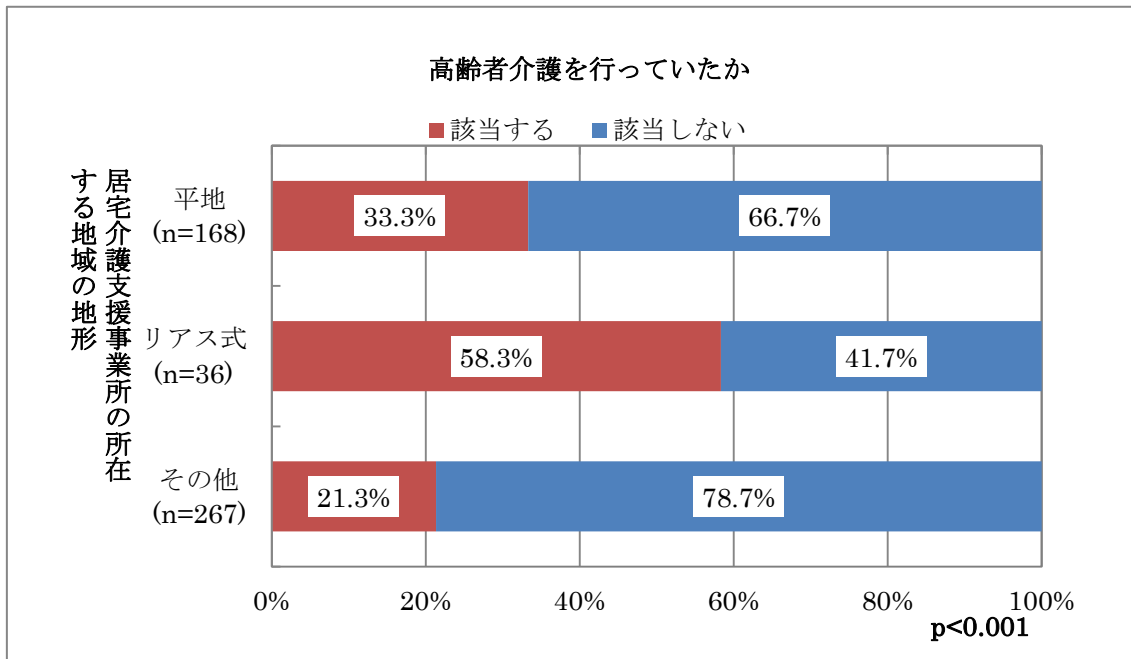


図 4-2-7-18 居住介護支援事業所の所在する地域の地形と
高齢者介護を行っていたか

居住介護支援事業所の所在する地域の地形と、高齢者介護を行っていたかについて統計的有意差があった($p<0.001$)。

高齢者介護を行っていたのは、平地では 33.3%、リアス式では 58.3%、その他では 21.3%であった。

被害の甚大な地域では、ケアマネジャーは、介護支援だけでなく直接介護の必要性があり対応していたことが明らかになった。

4-2-8 災害対応マニュアルの有無

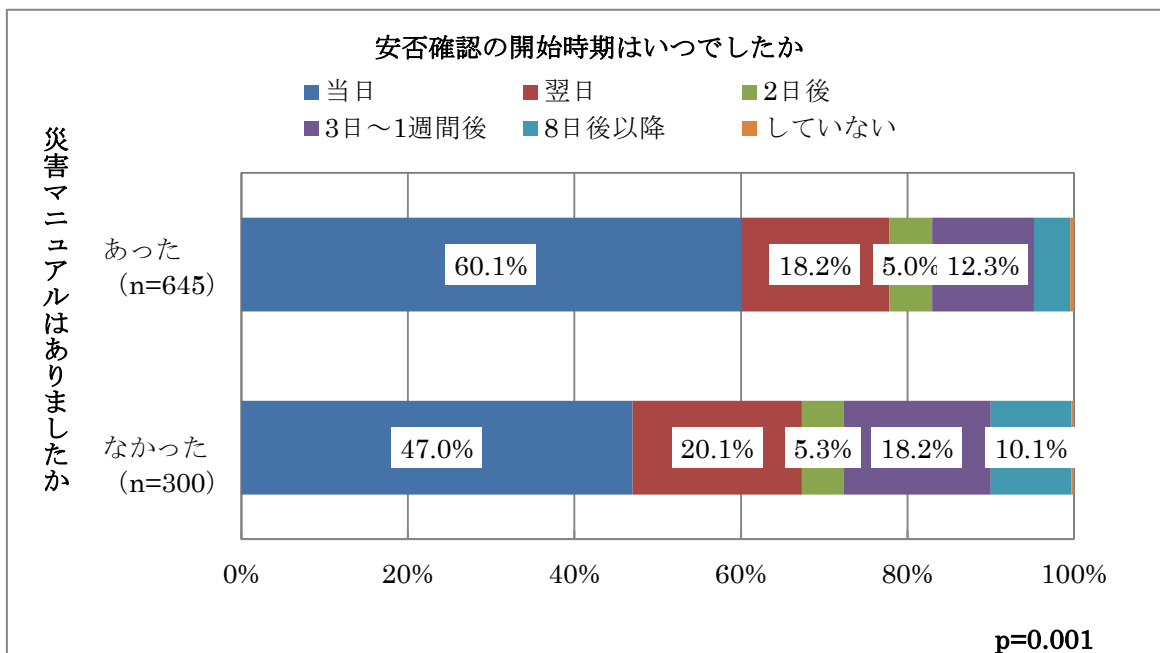


図 4-2-8-1 災害マニュアルの有無と安否確認の開始時期

災害マニュアルがあったケアマネジャーは、災害マニュアルがなかったケアマネジャーに比べて安否確認の開始時期が早かったことが分かる。

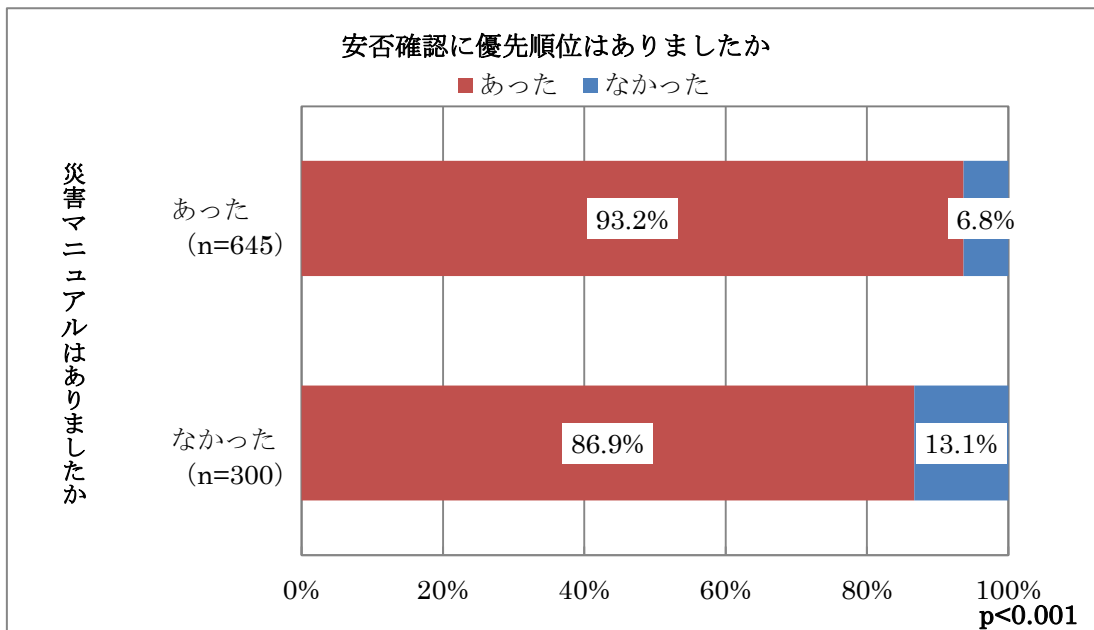


図 4-2-8-2 災害マニュアルの有無と安否確認に優先順位があったか

災害マニュアルがなかったケアマネジャーに比べて災害マニュアルがあったケアマネジャーは安否確認の優先順位がきちんと定められていたことが分かった。

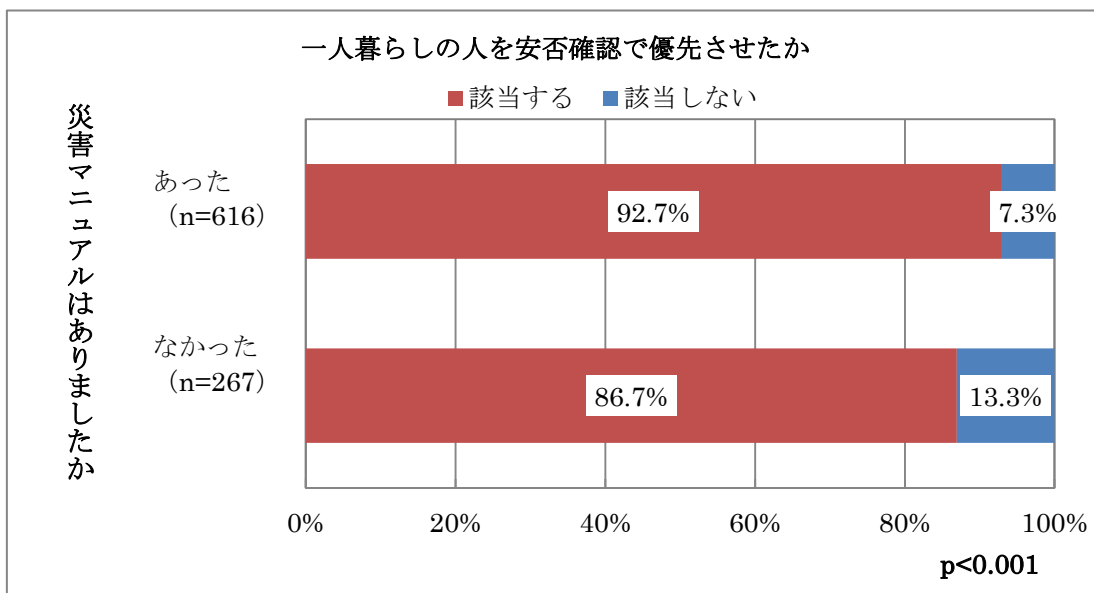


図 4-2-8-3 災害マニュアルの有無と一人暮らしを安否確認で優先させたか

災害マニュアルがあったケアマネジャーは災害マニュアルがなかったケアマネジャーに比べて安否確認において一人暮らしの人を優先していたことが分かった。

災害マニュアルにて一人暮らしを優先させることとしていたのではないかと推測できる。

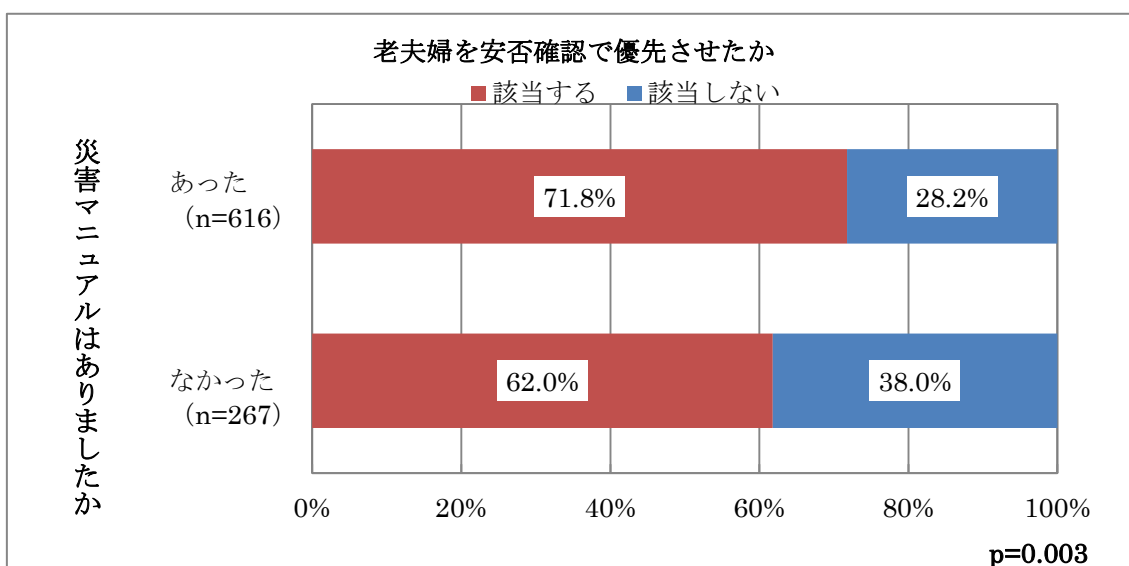


図 4-2-8-4 災害マニュアルの有無と老夫婦を安否確認で優先させたか

災害マニュアルがあったケアマネジャーは災害マニュアルがなかったケアマネジャーに比べて老夫婦のみの世帯を安否確認において優先させていたことが分かった。

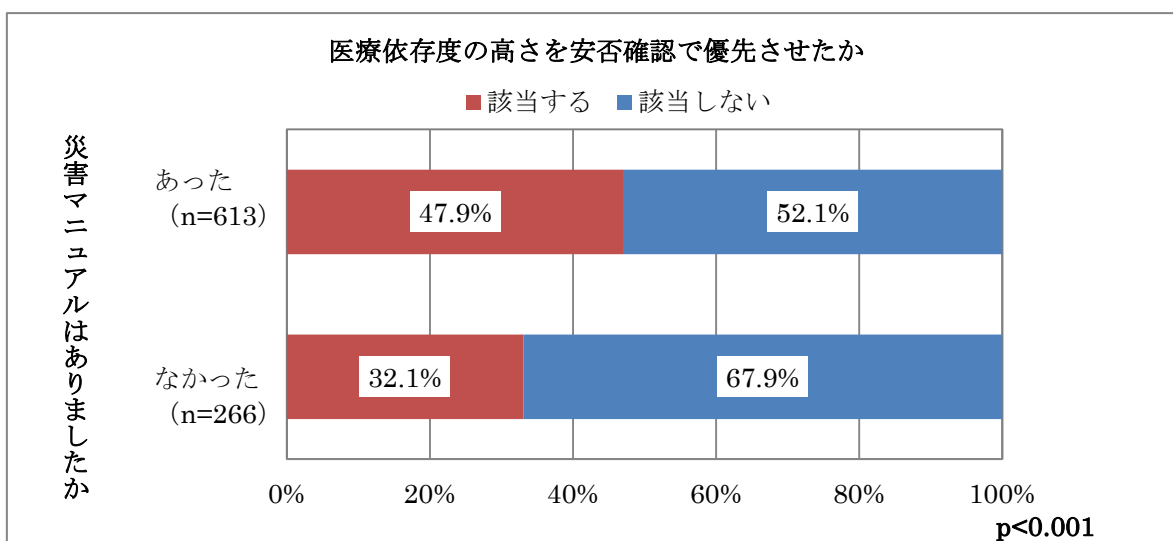


図 4-2-8-5 災害マニュアルの有無と医療依存度を安否確認で優先させたか

災害マニュアルがなかったケアマネジャーに比べて災害マニュアルがあったケアマネジャーは安否確認において医療依存度で優先していたことが分かった。

4-2-9 災害対応マニュアルは震災で役に立ったか

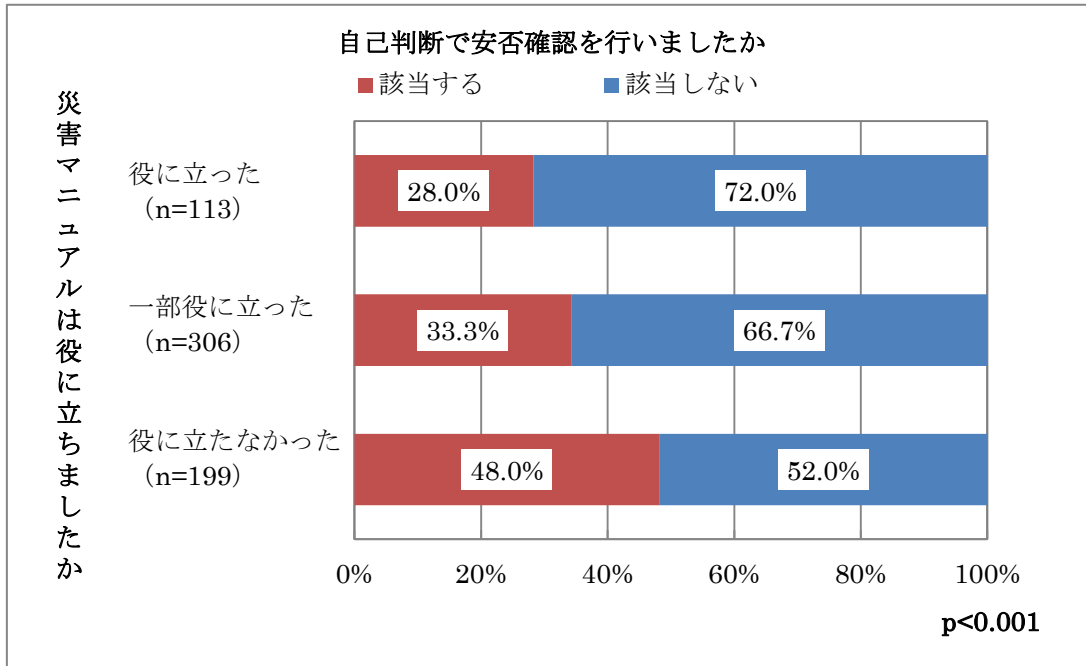


図 4-2-9-1 災害マニュアルの効果と自己判断による安否確認のきっかけか

安否確認が役に立たなかった人ほど、安否確認を自己判断で行っていた人が多かったことが分かった。

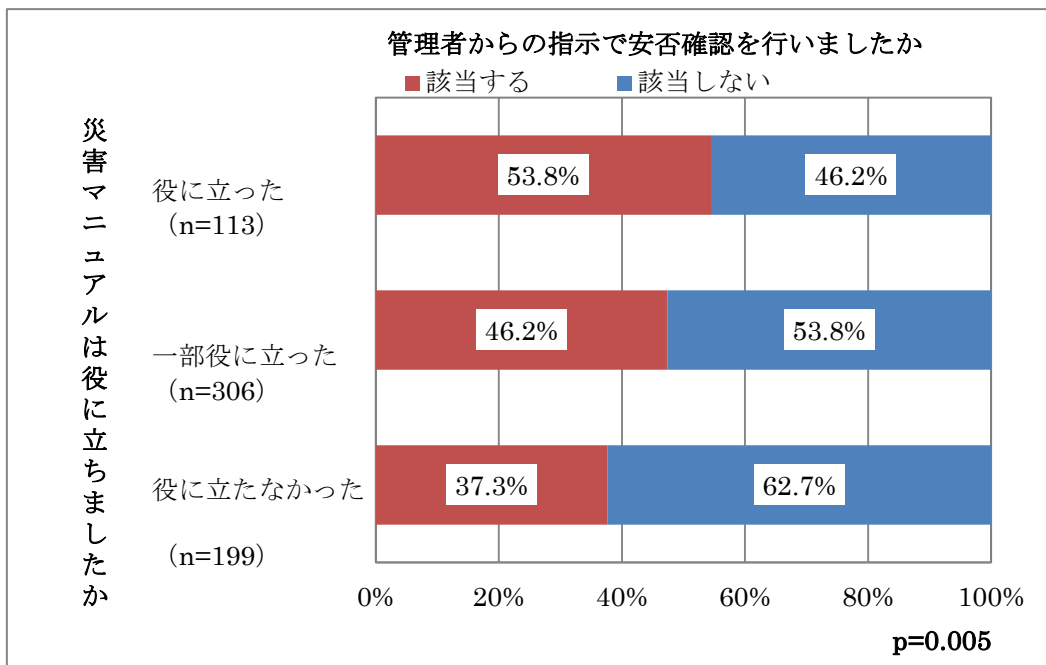


図 4-2-9-2 災害マニュアルの効果と管理者からの指示による安否確認のきっかけか

災害マニュアルが役に立った人ほど管理者からの指示がきっかけで安否確認を行っていたことが分かった。

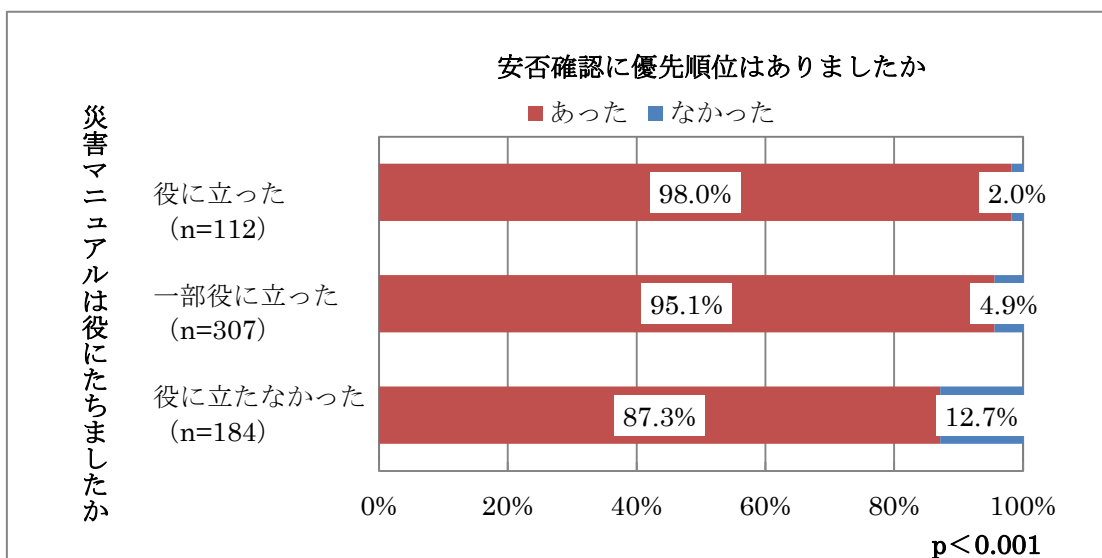


図 4-2-9-3 災害マニュアルの効果と安否確認に優先順位があったか

災害マニュアルが役に立ったケアマネジャーは安否確認に優先順位があったことが分かった。

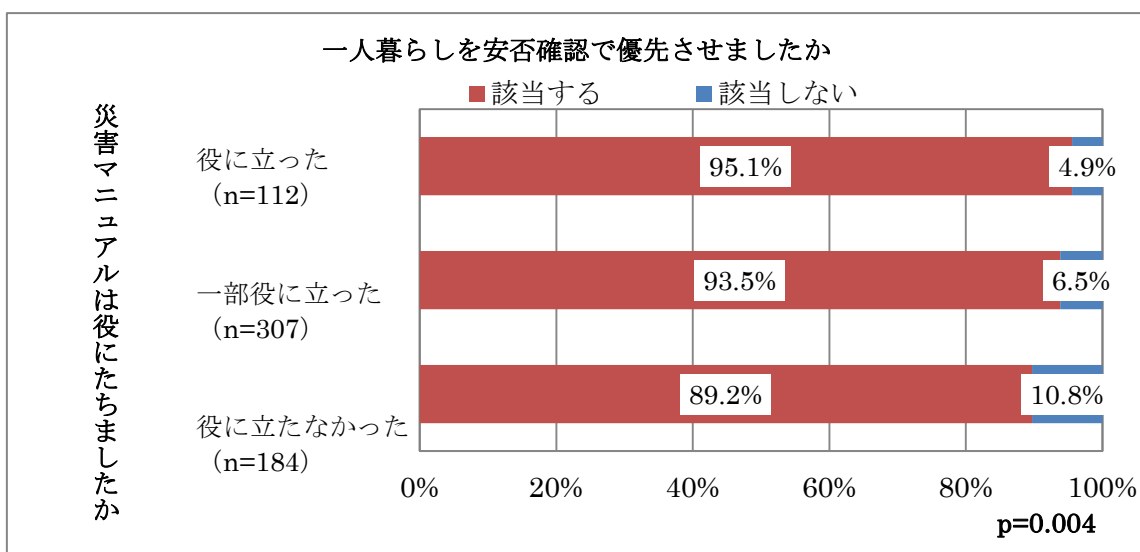


図 4-2-9-4 災害マニュアルの効果と一人暮らしを安否確認で優先させたか

災害マニュアルが役に立たなかったケアマネジャーよりも災害マニュアルが役に立ったケアマネジャーの方が、一人暮らしの人を安否確認において優先させていたことが分かった。

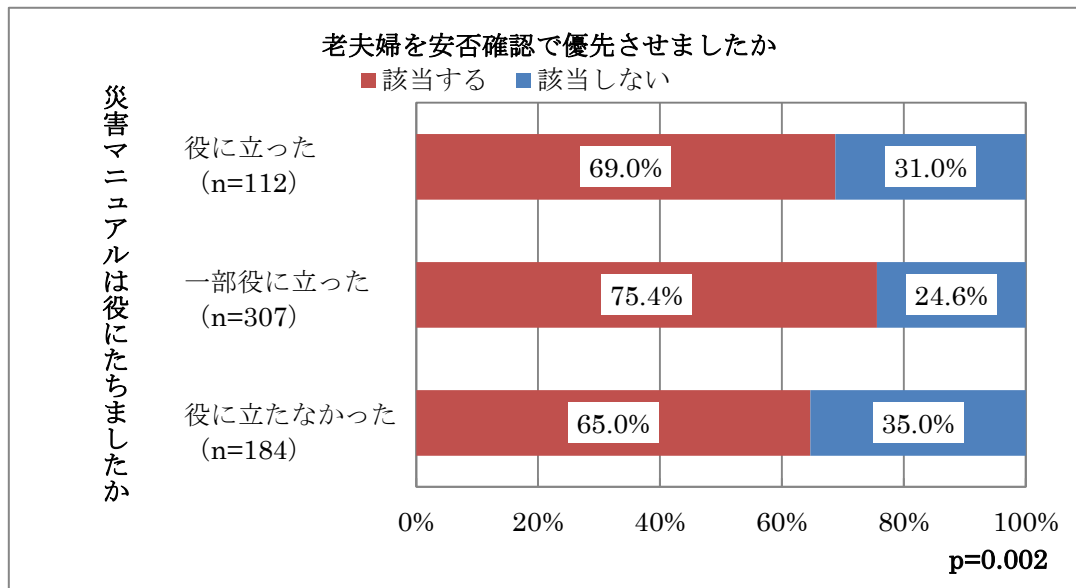


図 4-2-9-5 災害マニュアルの効果と安否確認で老夫婦を優先させたか

災害マニュアルで一部役に立ったと感じたケアマネジャーは他のケアマネジャーよりも安否確認において老夫婦世帯を優先させていたことが分かった。

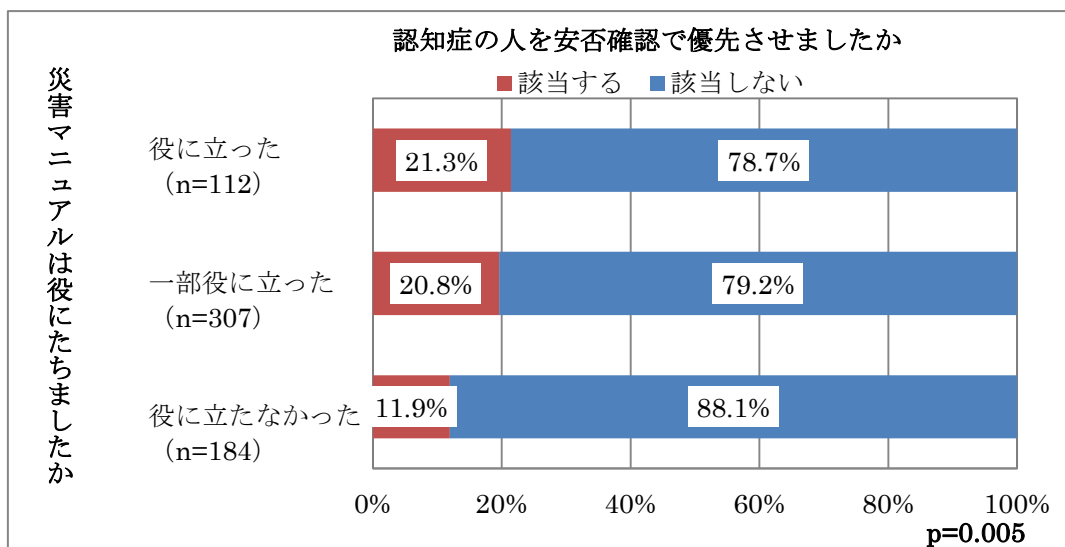


図 4-2-9-6 災害マニュアルの効果と安否確認で認知症を優先させたか

災害マニュアルが役に立ったと感じたケアマネジャーほど、認知症の人を安否確認において優先させていたことが分かった。

4-2-10 ケアマネジャーの仕事のやりがい

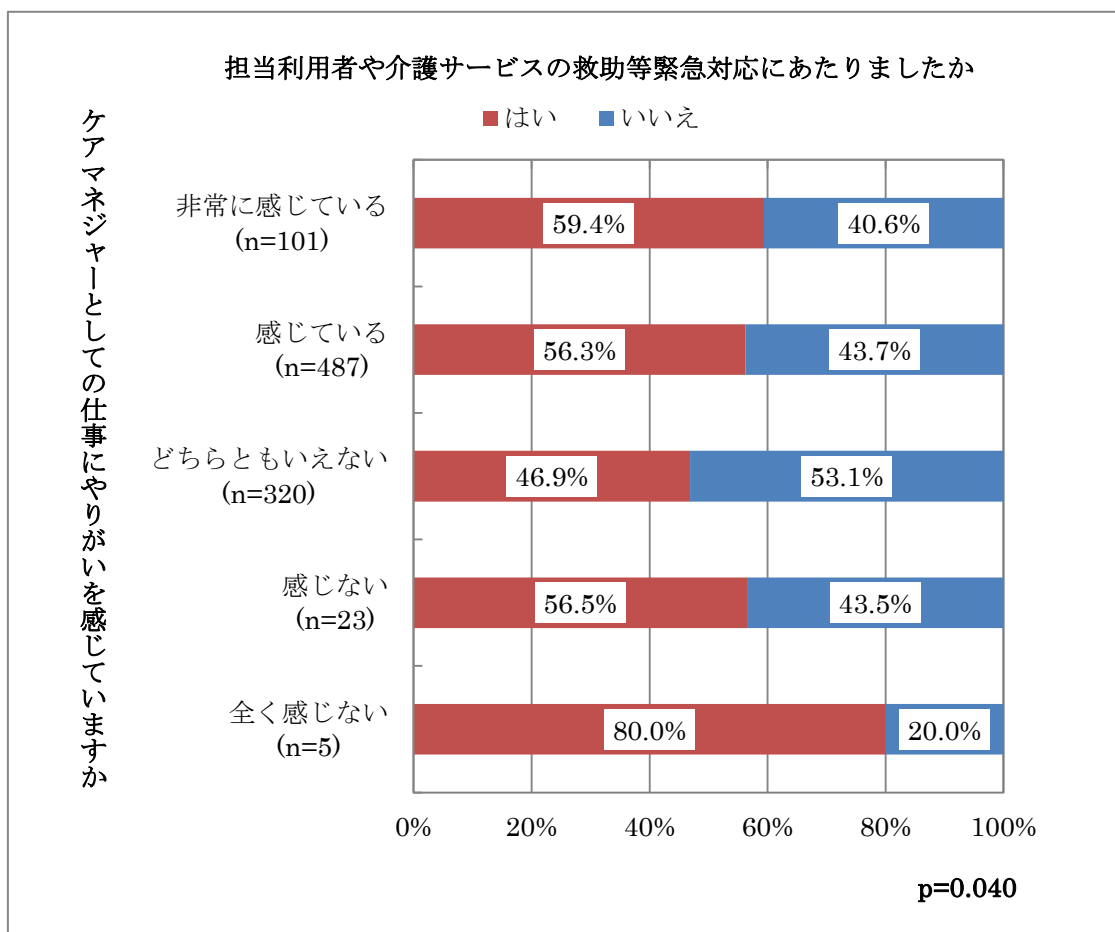


図 4-2-10-1 ケアマネジャーの仕事にやりがいを感じているかと
救助等の緊急対応にあたったか

『ケアマネジャーとしての仕事にやりがいを感じているか』と『担当利用者や介護サービスの救助等緊急対応にあたったか』について統計的有意差が認められた ($p=0.040$)。ケアマネジャーのやりがいを感じている人ほど緊急対応にあたっているということがわかった。

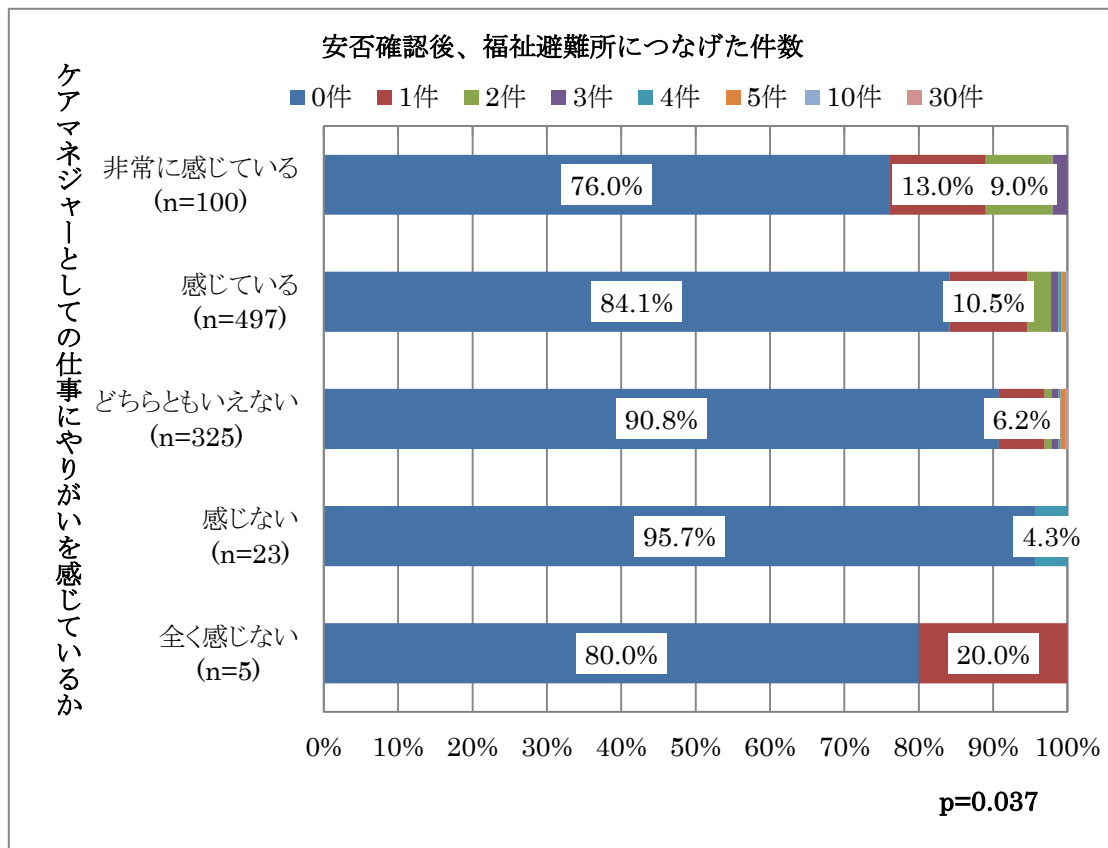


図 4-2-10-2 ケアマネジャーとしての仕事にやりがいを感じているかと
安否確認後福祉避難所に繋げた件数

『ケアマネジャーとしての仕事にやりがいを感じているか』と『安否確認後、福祉避難所につなげた件数』について統計的有意差が認められた ($p=0.037$)。ケアマネジャーとしての仕事にやりがいを感じている人ほど安否確認後、福祉避難所に繋げた件数が多いということがわかった。

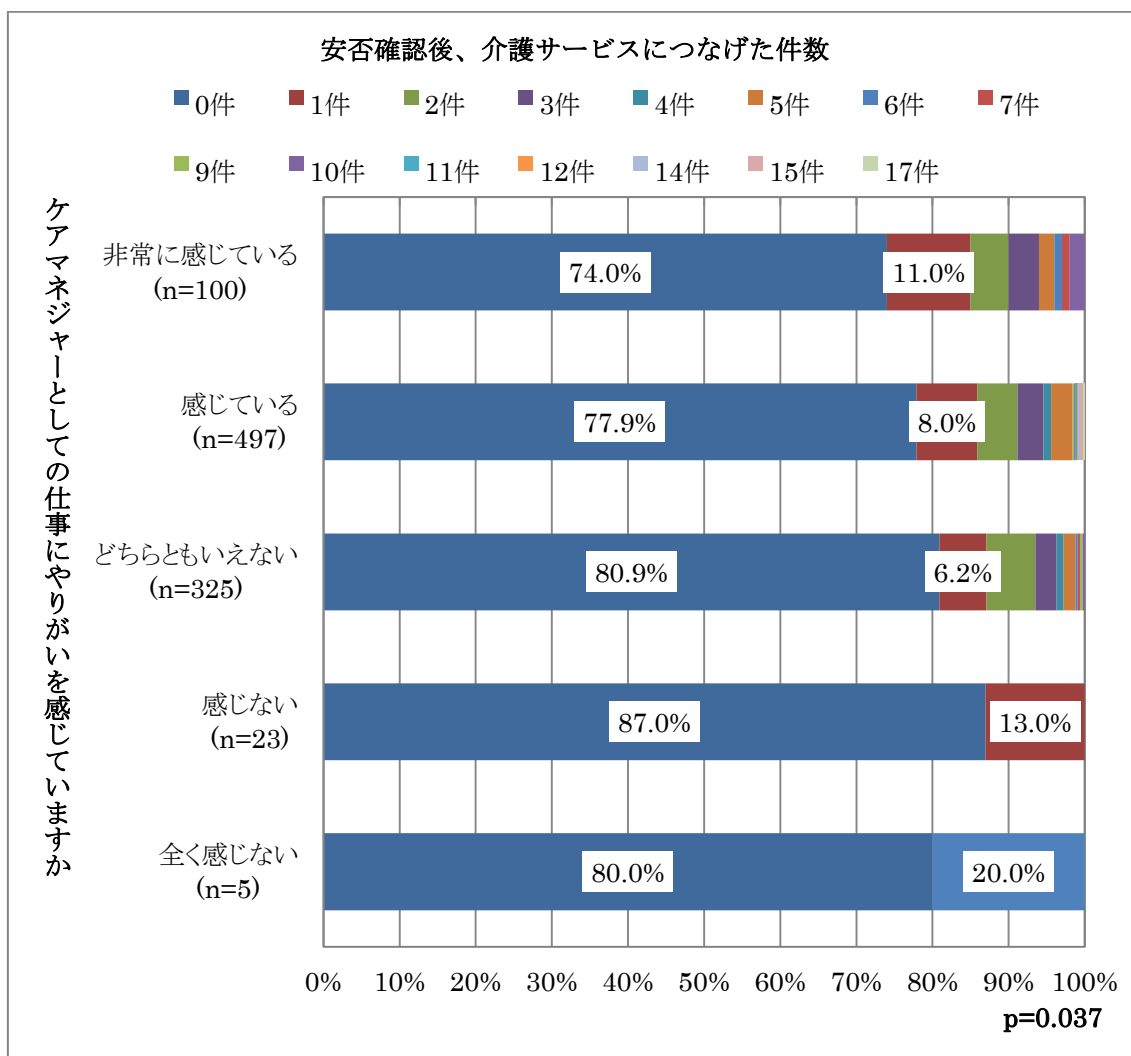


図 4-2-10-3 ケアマネジャーとしての仕事にやりがいを感じているかと
安否確認後、介護サービスに繋げた件数

『ケアマネジャーとしての仕事にやりがいを感じているか』と『安否確認後、介護サービスにつなげた件数』について統計的有意差が認められた ($p=0.037$)。ケアマネジャーとしての仕事にやりがいを感じている人ほど安否確認後、介護サービスに繋げた件数が多いということがわかった。

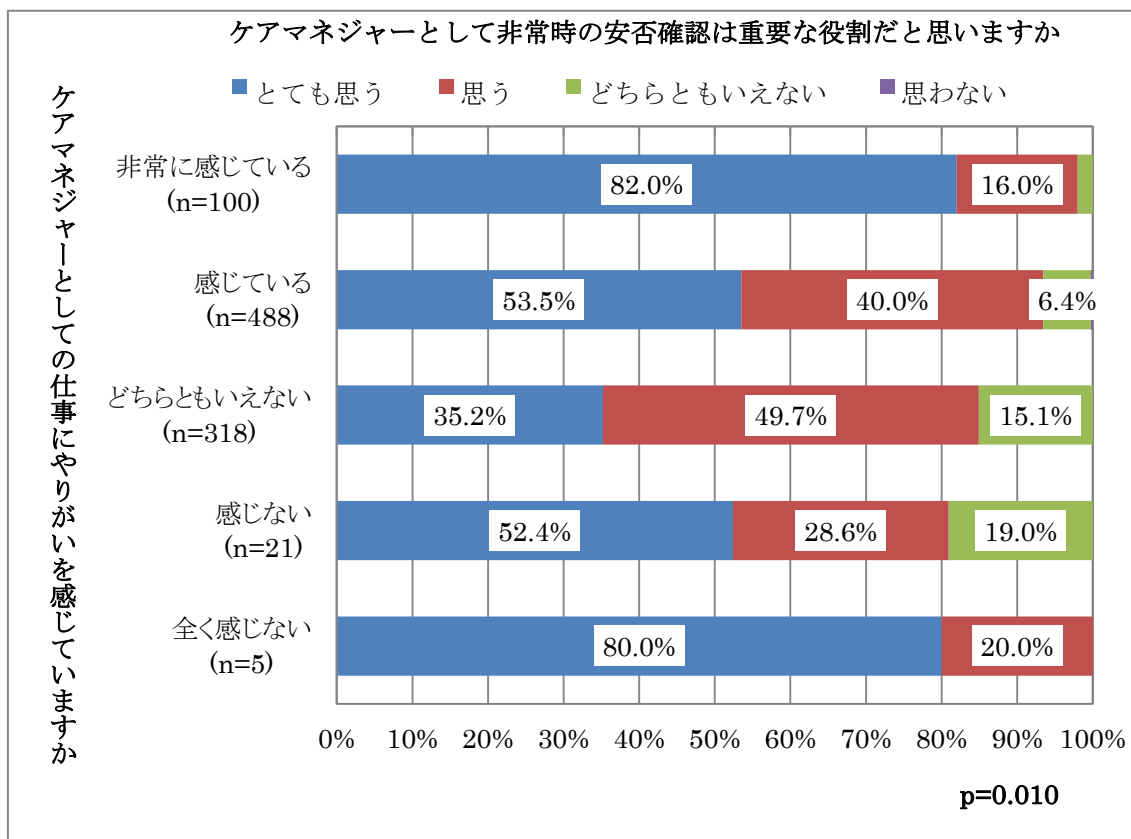


図 4-2-10-4 ケアマネジャーとしての仕事にやりがいを感じているかと
ケアマネジャーとして非常時の安否確認は重要な役割だと思うか

『ケアマネジャーとしての仕事にやりがいを感じているか』と『ケアマネジャーとして非常時の安否確認は重要な役割だと思うか』について統計的有意差が認められた ($p=0.010$)。ケアマネジャーとしての仕事にやりがいを感じている人ほど、ケアマネジャーとして非常時の安否確認を重要な役割を思っている人が多いということがわかった。ケアマネジャーとしての仕事にやりがいを感じている人のうち、ケアマネジャーとして非常時の安否確認は重要な役割だととても思っている、思っていると答えた人は 98%であった。

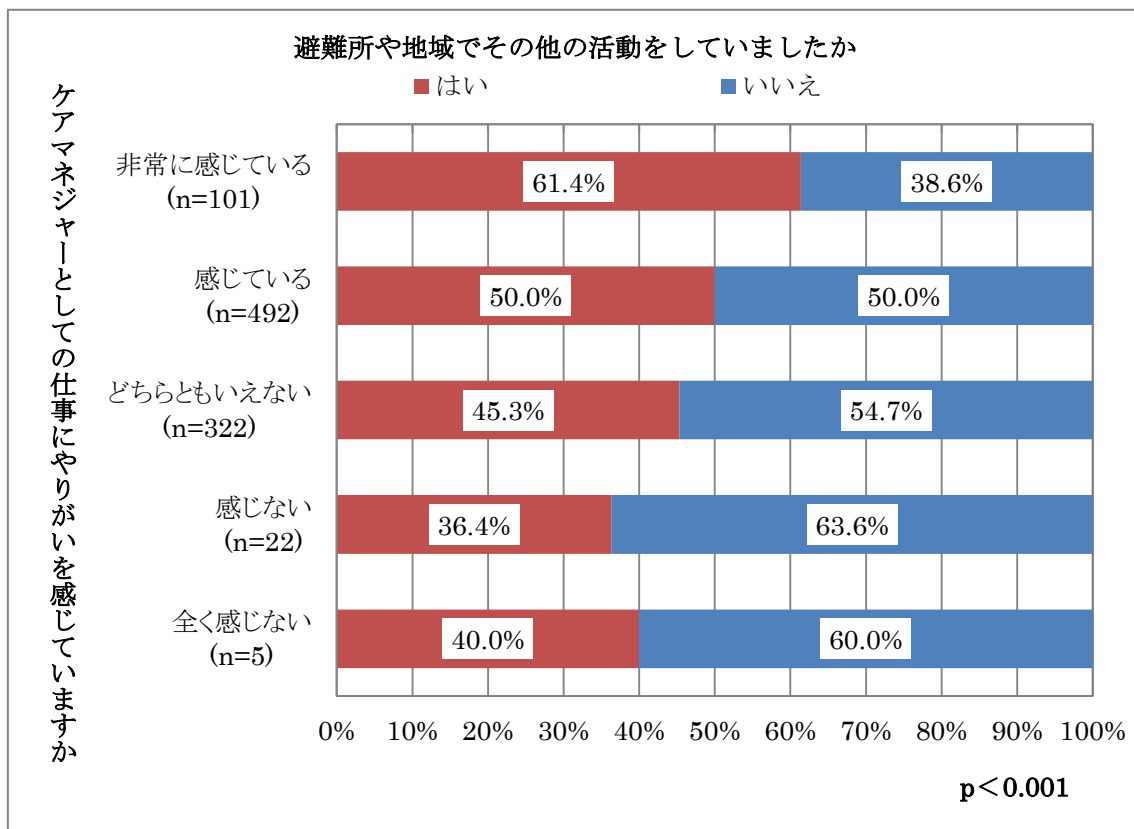


図 4-2-10-5 ケアマネジャーとしての仕事にやりがいを感じているかと
避難所や地域でその他の活動をしていたか

『ケアマネジャーとしての仕事にやりがいを感じているか』と『避難所や地域でその他の活動をしていましたか』について統計的有意差が認められた ($p<0.001$)。ケアマネジャーとしての仕事にやりがいを感じている人ほど避難所や地域でその他の活動をしていたということがわかった。

4-2-11 ケアマネジャーの仕事の満足度

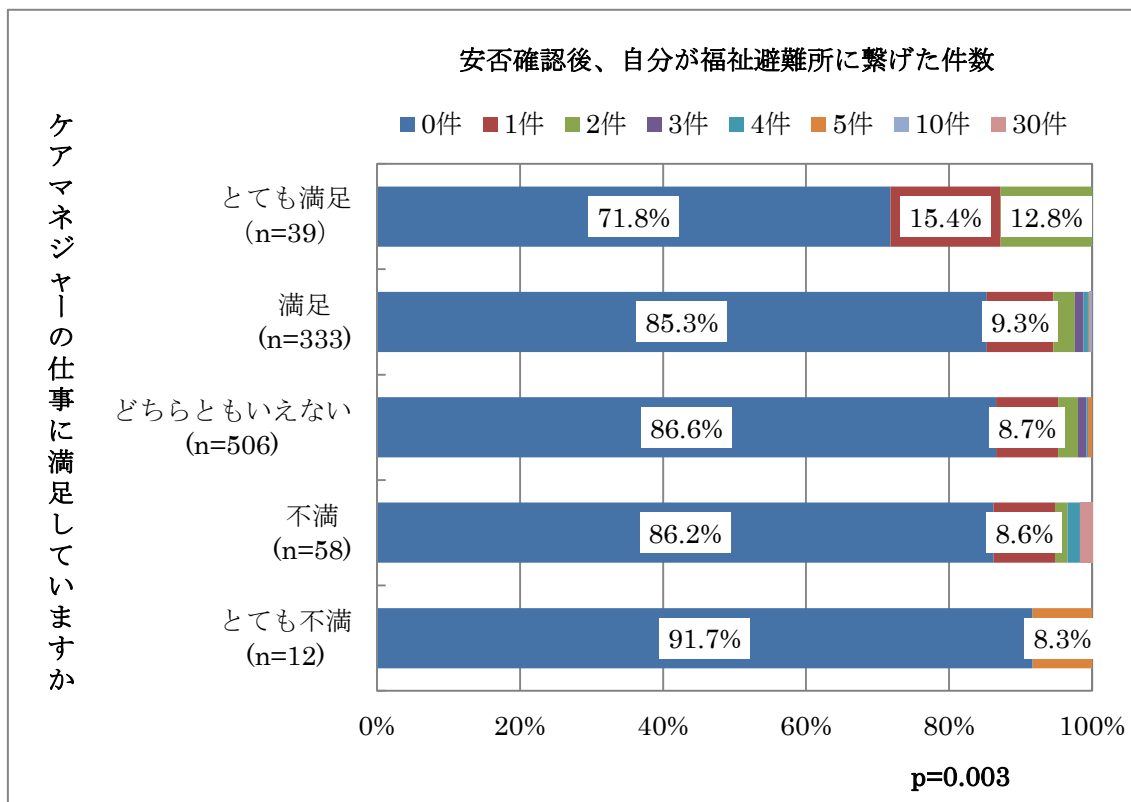
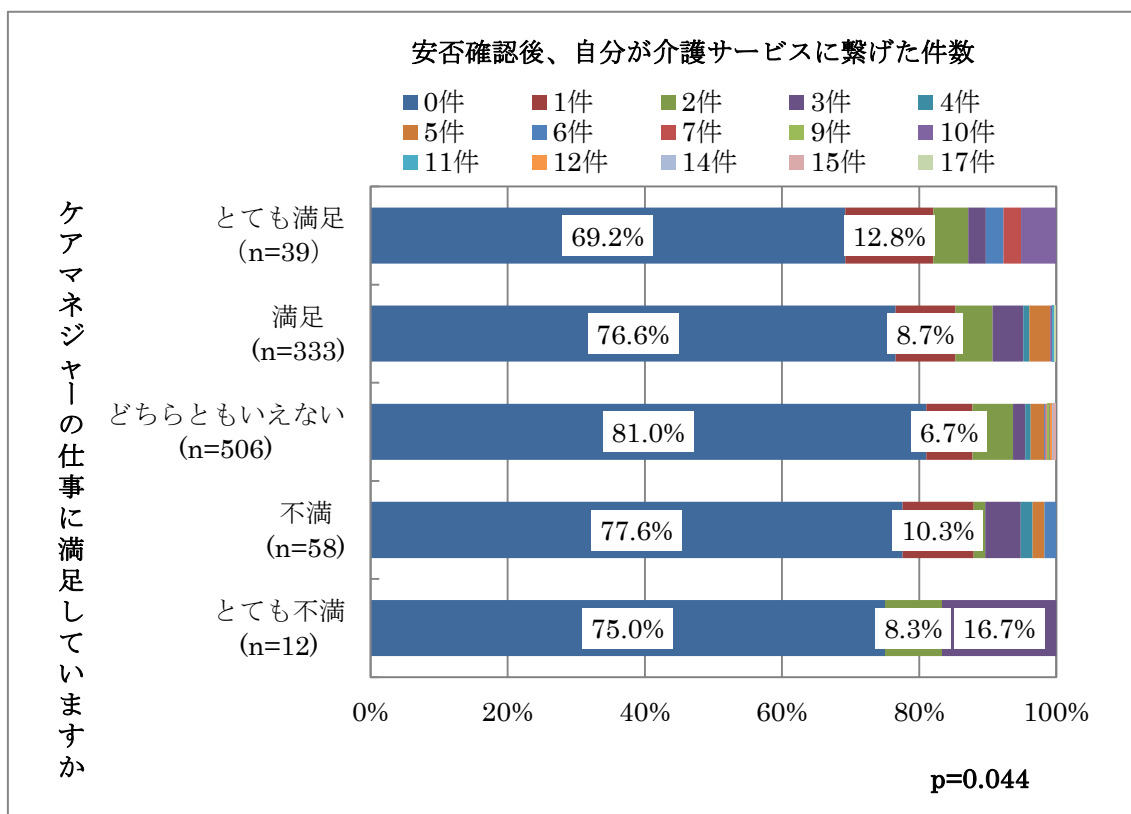


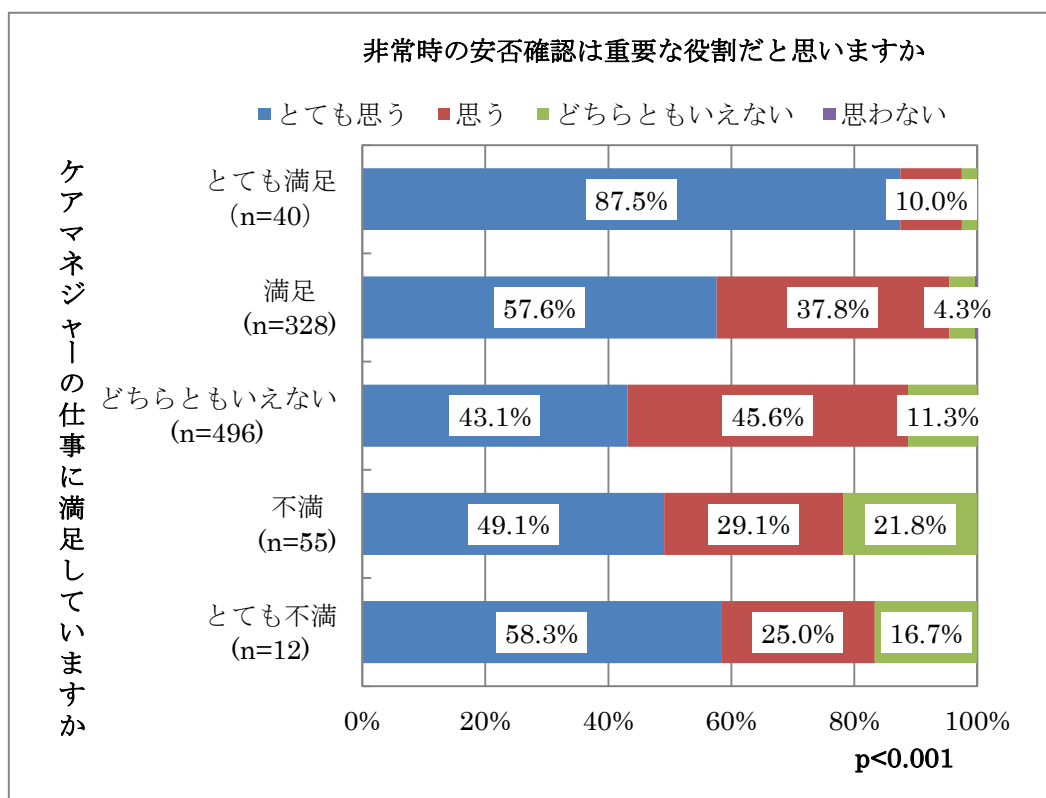
図 4-2-11-1 ケアマネジャーの仕事に満足しているかと
安否確認後自分が福祉避難所に繋げた件数

『ケアマネジャーの仕事の満足度』と『安否確認後、自分が福祉避難所に繋げた件数』について統計的有意差が認められた ($p=0.003$)。どの満足度でも 0 件が最も多いが、ケアマネジャーの仕事にとっても満足している群が 0 件の割合が約 7 割と最も少なかった。この群は 0 件と 1 件と 2 件のみで構成されていることも特徴である。ケアマネジャーの仕事にとっても不満がある群は 0 件が 9 割を占め、残りは 5 件となっていた。このことより、ケアマネジャーの仕事の満足度が高いほど安否確認後、福祉避難所に繋げた件数が多いということが分かる。



**図 4-2-11-2 ケアマネジャーの仕事に満足しているかと
安否確認後自分が介護サービスに繋げた件数**

『ケアマネジャーの仕事の満足度』と『安否確認後、自分が介護サービスに繋げた件数』について統計的有意差が認められた ($p=0.044$)。どの満足度でも 0 件が最も多いが、ケアマネジャーの仕事にとっても満足している群が 0 件の割合が約 7 割と最も少なかった。しかし、どの満足度を見ても 0 件の割合は約 7~8 割で大きな差はなかった。特徴としてはケアマネジャーの仕事にとっても満足している群から不満がある群にかけては 4 件以上繋げたとしている答えがあるのに対して、ケアマネジャーの仕事にとっても不満がある群は 0 件のほかに 2 件と 3 件のみで構成されていることがあげられる。このことによりケアマネジャーの仕事にとっても不満がある人は介護サービスに繋げた件数がほかの満足度に比べ少ないことが分かる。



**図 4-2-11-3 ケアマネジャーの仕事に満足しているかと
ケアマネジャーとして非常時の安否確認は重要な役割だと思うか**

『ケアマネジャーの仕事の満足度』と『非常時の安否確認は重要な役割だと思うか』について統計的有意差が認められた ($p<0.001$)。

ケアマネジャーの仕事にとっても満足している群は非常時の安否確認が重要な役割だと思うかという質問に約 9 割が“とても思う”としていた。これはその他の満足度群と比べて高い割合だと言える。

4-2-12 ケアマネジャーの仕事が続きたいか

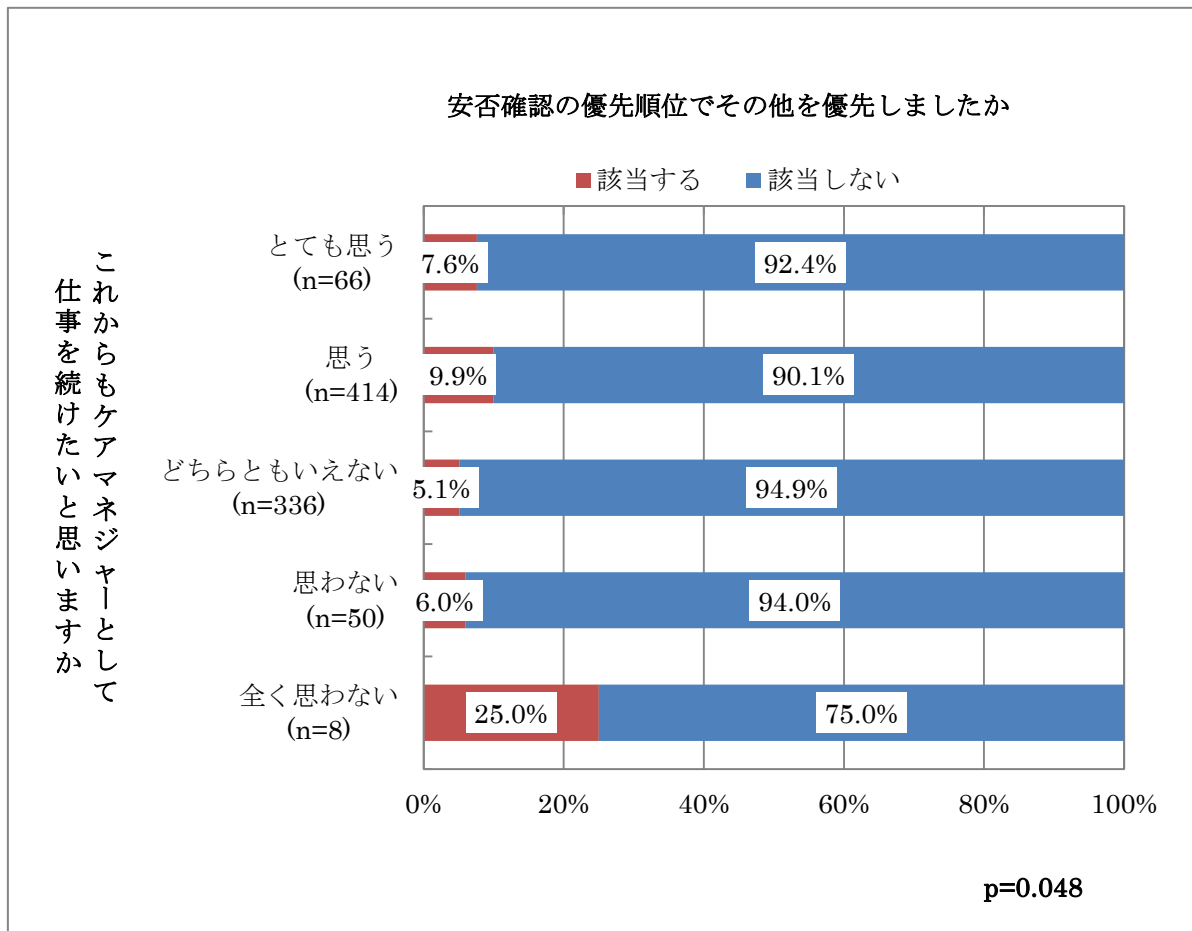


図 4-2-12-1 ケアマネジャーの仕事が続きたいかと
安否確認の優先順位でその他を優先したか

問 44『これからもケアマネジャーとして仕事が続けたいと思いますか。』と問 25『安否確認の優先順位があった場合、優先したのは何でしたか。』の『その他』の回答においては統計的有意差が認められた(p=0.048)。

これからもケアマネジャーとして仕事が続けたいと全く思っていないと回答した人が安否確認の優先順位でその他と回答する人が多かった。

ケアマネジャーとして仕事と続けたいととても思う、思う、どちらともいえない、思わないと回答した人でその他と答えた人は5~10%であったが、全く思わないと回答した人はそれらの倍以上も上回る25%であった。

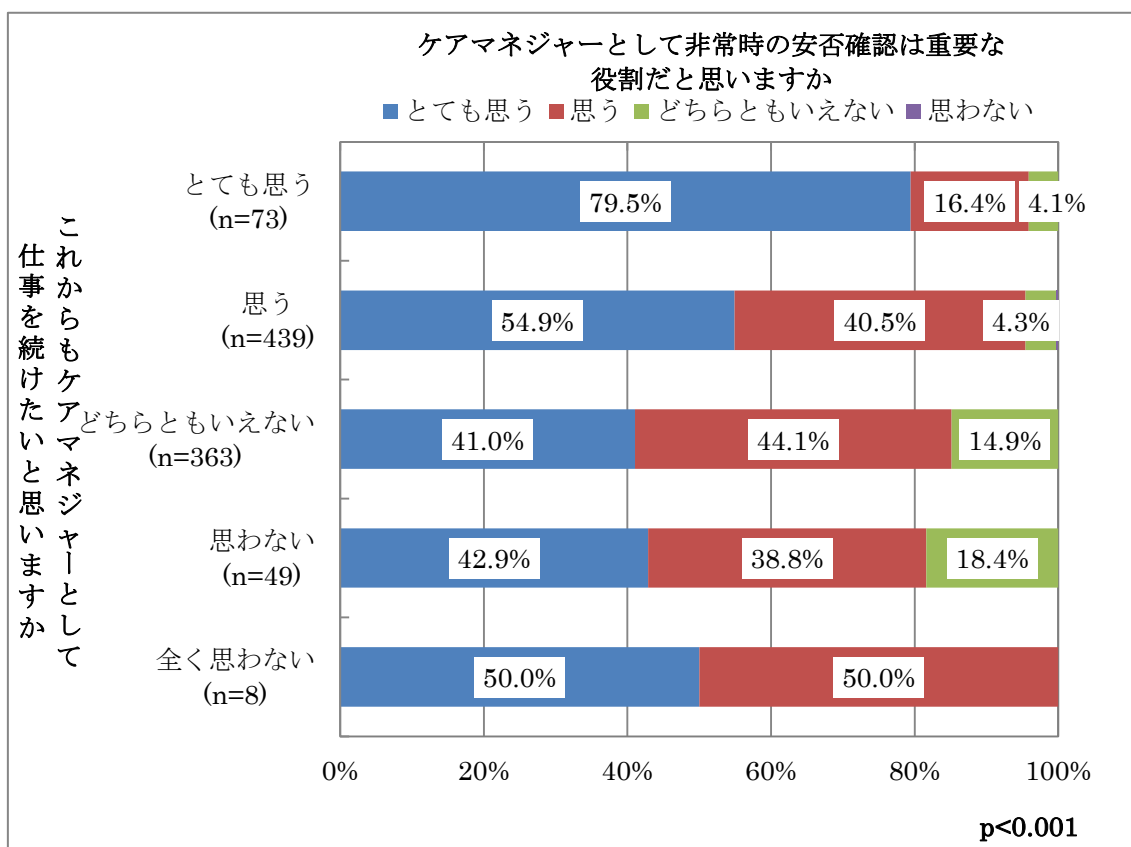


図 4-2-12-2 ケアマネジャーの仕事を続けたいかと

ケアマネジャーとして非常時の安否確認は重要な役割だと思うか

問 44『これからケアマネジャーとして仕事を続けたいと思いますか。』と問 32『ケアマネジャーとして非常時の安否確認は重要な役割だと思いますか。』においては統計的有意差が認められた(p<0.001)。

これからケアマネジャーとして仕事を続けたいととても思うと回答した人で、非常時の安否確認は大事な役割だととても思うと回答した人は 79.5%であった。これからケアマネジャーとして仕事を続けたいと思うと回答した人で、非常時の安否確認は大事な役割だととても思うと回答した人が 54.9%であった。いずれも 50%を超える高い割合で非常時の安否確認は大事な役割だと考えていることが分かる。

一方、これからケアマネジャーとして仕事を続けたいかはどちらともいえないと回答した人で、非常時の安否確認は大事な役割だととても思うと回答した人が 41.0%、これからケアマネジャーとして仕事を続けたいと思わないと回答した人で、非常時の安否確認は大事な役割だととても思うと回答した人が 42.9%であった。これからケアマネジャーとして仕事を続けたいと全く思わないと回答した人で、非常時の安否確認は大事な役割だととても思うと回答した人が 50.0%であった。いずれも 50%は超えない結果となり、ケアマネジャーの仕事を続けたいと思っている人よりも低い割合となった。

ケアマネジャーの仕事を今後も続けたいと思っている人ほど、自らの仕事が非常時の

安否確認において重要な役割を果たしているという考えを持つ割合が高いということが分かる。

第5章 おわりに

この東日本大震災，要介護高齢者一人ひとりに担当のケアマネジャーがいて，非常な混乱の中で居宅や避難所で様々な支援をしていたことが確認できた。要介護高齢者支援の専門職としての社会的役割を担うことができたのではないかと思う。

大災害，特に津波は逃げて自分の命を守ることが最優先であるが，ケアマネジャーのできたこと，できることは，①担当利用者の安否確認とアセスメントに基づく支援と保護，②実際に現場を見ての被災状況実態把握，③行政，地域包括支援センター，専門職団体，施設等との非常時の要介護高齢者支援のための組織化，④要介護高齢者支援の専門職としての被災ケアマネジャーと地域包括支援センターの支援，であった。

「普段も非常時も，ケアマネジャーはケアマネジャーとしてできることをする。」その普段力を蓄えることが，非常時の備えとなると確信している。（宮城県ケアマネジャー協会：小湊純一。）

1 利用者救助に関するエピソード

- 1.研修に参加する為女川町立病院にいて地震にあった。女川老健のデイケア利用者を駐車場へ避難誘導行った。その後大津波警報が発表され、病院の2階以上へ避難する事となった。エレベーターが止まっていた為1階の階段下で順番を待っていた所に津波が入ってきた。自分の身長を超える程の津波で、車椅子を押していた手を離し自分も必死で泳ぎトイレの洗面台に上がった。柱に掴まっていたおじいさんを同じ洗面台の上に抱え上げた所、引き波であつという間に水が無くなった。二波・三波の危険があり上の階へ避難を急ぎ、横になっていたデイケア利用者の救出を行った。
- 4.二次災害の恐れあり、安否確認等を含む外出は禁止される。ライフラインが全く使用できない中自分達が生きていく上で必要な水等を運搬している中、偶然にも利用者家族に会い、じょく創が悪化、フォーレも濁ってきているが大丈夫か？との事で訪看と法人に内緒で訪問し状況を確認。必要な処置をして事業所に戻る。
- 15.津波よりも自宅の損壊がひどく、家にいる事が危ない為に市民センターへ避難。内服薬がなくなってしまうが、医療機関や薬局が動いていない為どうする事も出来ない。その後、避難所から賃貸住宅へ移住する際、どの住宅にするか、住宅改修が必要か等、落착くまで大変だった。
- 16.3件とも独居の利用者で、施設へ当日夕方までに移動させた。市営住宅の方を訪問すると、同じ棟の若者が窓から入って利用者をいつでも脱出できるよう玄関に座らせ、私が着くまで一緒にいてくれ、とても助かりました。
- 17.あの時事業所の事務所において、併設のデイサービス利用者の方（12名）利用中にて、目の前の方々の安否確認に追われていた。すぐテレビをつけ、大津波警報が映し出されているのを知り、最初は皆さんを送り届ける事にしてあったが、その情報を入手してからは非常災害時のマニュアルに添い、役場に避難する事に決めた。公用車に利用者の方々を乗せ、それぞれ職員も分乗し利用者のバックや緊急連絡ノート等を持ち出して出発。途中地盤沈下してマンホールが飛び出しており、それに1台が乗り上げたりして止まったりしたので少し焦ったりもしたが、比較的スムーズであったと覚えている。役場で利用者と共に一晩過ごし、次の朝早くに家族の元へ引き取りに来て頂くように依頼し、全員が帰宅したのは午後になってからであった。寒々と余震の中、紙コップ少しの野菜スープを介助しながら、声かけしながらの状況であった。
- 18.事業所でデイサービスも併設されていたので、当日と翌日はその対応をしていた。利用者全員避難させ、ご家族にお返しするまでの対応に追われていた。救助等の緊急対応はできなかった。
- 19.併設デイサービス利用者の避難誘導で精一杯でした。マニュアルにより役場駐車場へ避難したものの何処のご家族とも一切連絡が取れず、結局職員も利用者も全員そのまま夜を過ごす事に。「寝たきり」の2名は各々助手席を倒して職員が1～2名ずつ付き添い、残りの方は役場が提供してくれたバスに移動して、利用者以外の避難してきたお年寄りも一緒に2～3名の職員がケアしました。翌日、私とデイサービスセンター長とで利用者の家族を訪ね歩き、全員を昼頃までに迎えに来てもらう事が出来ました。ご家族自体があちこち避難している状況なので大変でしたし、デイサービスが海の側という事と連絡がなかなかなかった事から、殆んどのご家族はてっきり駄目だと思っていたようで無事を伝えるととても喜んでくださいました。
- 23.電気の消えたホールで利用者の不安を解消できるよう懐中電灯を点々と置き、皆で楽し

- い雰囲気になる歌を合唱しました。避難所への誘導は、通所介護の送迎車で行く為乗車介助を行いました。その際も明るい気持ちになれるよう楽しいお話をしました。
- 24.利用者宅訪問直前に震災にあった為そのまま訪問して家族へ安否確認を行った。
- 31.管理者の立場上、事務所待機での活動になり必要な時は他のスタッフに指示し動いてもらっていた。
- 32.当日は、代表取締役としての活動となり、利用者対応は職員が行った。
- 37.訪問後、事業所に戻る途中に被災。事業所到着後は利用中の利用者の避難誘導、自宅までの送迎を分担して行った。
- 40.安否確認で自宅訪問した際、自宅倒壊の危険性があった為、車椅子で七郷小学校へ避難誘導を行った。
- 45.在宅酸素をしていた利用者がいたので、家族から病院のベッドの確保の依頼を受ける。災害対策本部→救急隊→病院と連絡をとってもらい確保する。その後利用者の家族より体が弱っていて搬送するリスクを考えると止めておくと言われる。気仙沼・石巻より、こちら名取の親戚を頼られ、施設が被災して行く所がなく、こちらの施設を希望され老健紹介、入所可能となる。その後施設の再建が決まり、そのまま地元で生活するようになる。
- 46.研修で女川包括に行った際被災する。包括と同じ建物にあったデイサービス利用者の避難誘導を行った。一時駐車場に避難したが、雪が降ってきた為町立病院1階に入るよう指示あり、町立病院1階に誘導。
- 49.担当で気になる方はメール等で家族や事業所と連絡を取り合って確認をした人が数件いた。電話はほとんど通じず、メール等や何回も電話をしてやっと話をした。担当者が友人の家に避難しており、その人の友人の連絡先が分からず、市の人や事業所と手分けして探して2週間後に連絡がとれた。その友人の事は情報としてなかったため確認を取るのに苦労した。
- 57.救助はしていないが、当センター利用中（デイ・ショート）の方と避難所に避難している。地震後即全員避難を相談し、小学校へ避難誘導、無事に行えた。備品・食糧の持ち出しも行えている。
- 71.電話も繋がらず、ガソリンもなく、本当に被災していた地区に住んでいる方に訪問出来ないのがもどかしく思った。
- 77.大津波が来るという事で海の方に近い利用者宅に行った。独居で、結局津波は来なかったが、救出し避難所へ連れて行った。認知症もあったので、置いてきた後心配で心配であった。
- 86.高齢者世帯の方や独居の方で海沿いの方等、避難場所に誘導。
- 88.石巻のグループホームに勤務していました。入所者全員高台に避難してもらいました。
- 95.当日通所利用中で自宅・家族と連絡がとれない方々を避難所まで移動支援後、食事・排泄・夜間の対応を行う。利用者の安否確認の為訪問。当日緊急入院3日後やっと自宅に帰宅確認後の避難所への誘導介助。安否確認の為の避難所訪問。
- 101.施設内にいた。デイサービス、ショートステイの利用者と共に地震発生後車にて避難場所である体育館に避難し、帰宅できるまでの4日間排泄介助や水分及び食糧の配布や家族留守中の見守り等を行っていました。
- 105.安否確認（ガソリンあるだけ）、お握りや味噌汁・野菜（お浸し）を配る（お菓子・おむつ・リハビリパンツ在庫分）。
- 114.当日は月半ばであり事務所に居た。隣接する通所に行き利用者の安全を図った（担当利

- 用者も数名いた)。地震が落ち着いてから車での移動(独居宅・老々宅へ)をするが車の混雑にてなかなか動けず、暗くなって身動きができなかった。
- 115.訪問看護と合同で安否確認を行った(出せる車が限られていた為)。家族と一緒に居る家は後回しになってしまった。病院に次々患者さんが搬送され病院の業務に追われた。
- 130.交通機能麻痺の為、普段車使用だが徒歩で対応しかなり時間がかかりました(ライフライン停止の為)。
- 134.在宅酸素(5L)利用中の利用者を訪問し、ボンベの残数を確認するも1日ももたない状況。携帯電話が何とか酸素会社と繋がったものの、在庫も少ない、配送もできないと言われた為直接受け取りに行く。往復2時間半かかりボンベを届ける。翌日入院しました。
- 139.独居老人の家族(長男)が沿岸部で被災し連絡がつかず、近所の親戚やヘルパー等で支援できる限り対応しました。3/15以降は次男宅へ避難させてもらいました。ライフラインが止まり、電気(IH)も使えず、ヘルパー車もガソリン切れで訪問には限界を感じました。市役所にも相談に行きましたが、認知症のある老人の対応は難しく、ショートステイもいっぱい、避難所も対応できないとの判断でした。
- 146.通所介護事業所にて自宅に戻れない利用者2名を泊め、同じ所で過ごしました(1名1泊, 1名2泊)。
認知症の方で落ち着かないと家族から連絡有(携帯がたまたま繋がった)。ガソリンがなかったので自転車にて訪問。ベッドの周りは硝子を割って、すごい力で襖も破れていた。訪問したら「今やっと寝たところです」と家族が話していたので呼吸を確認したら(一)。すぐに主治医を迎えに行き、その間側に付き添っていた。主治医の往診を受け死亡が確認された。夜電気が点かなかつた事等が不安となりパニックになったようです。髪を梳かし、着物の裾を直して辞去しました。
- 150.震災時のショックか3/11 17時頃死亡。3/16火葬等行う事になったが連絡体制取れず身内で行っていた。
停電が長く、緊急に病院で酸素を受ける。入院ではなく外来扱いの為電気が通るまで病院に居たが、食事等は家族が運ぶ事になっていた。利用者は独居だった為その対応が難しかった。
- 155.独居老人で家族が遠方在住で車の運転不可の家族だった為、一人で家におけない状況。避難所暮らしも無理な為併設事業所に連れて来てライフラインが復旧するまで泊めてもらった。家族との連絡ができない為携帯のアドレスは確認していなかった為送信できるかどうか不明だったがショートメールにて送信。連絡が取れ施設に避難している旨を伝え安心してもらった。親戚や地域の方が心配して訪問してくれる事を予測し、自宅には避難先に住所とか連絡先を貼り紙して来た為、それを見た親戚が施設を訪ねて来てくれた。その後家族が迎えに来てくれ引き取ってもらった。
透析・胃ろう・要介護5の利用者、息子との二人暮らしの方、屋根の瓦が損壊し本人を家に一人置いて水汲みや買物等外出できる状況ではない為施設に息子さんも一緒に避難してもらい難をしのいだ。透析移送は社協が施設に来てくれ行えた。その後4月の地震時は自宅で過ごしたが、水汲みの支援をケアマネが行った。
- 156.人工呼吸器の方はバッテリー(2h)の限界があり、何とか病院へ搬送して頂く。その間医師への連絡も病院の連絡も取れず、訪問看護の方や機械メーカーの方、仙南保健福祉事務所の方の連携で何とか乗り切れました。このケースに時間がかかった事、保育所からとりあえず子供を連れて来なければいけなかった事で当日最低限“この人は”とい

- う人に対応しました。入院後電気が復旧しすぐに退院になりましたが、水道も衛生材料も乏しい中、家族・サービス関係者の連携は必須でした。
- 165.日頃から老朽化が著しく助けが必要と思い、震災直後に自宅へ向かった。ヘルパー訪問中で、そのヘルパーさんが送迎して公会堂へ避難していた。
- 167.事業所も利用者も避難場所の把握ができていなかった。避難場所が被災し変わっていた。独居の方は避難所までの交通手段がなかった人もいた。介助者が付けられない人は一般の避難所で受け入れてもらえなかった。
- 173.認知症の妻と高齢の夫の世帯は、避難所誘導を拒否された為親戚の家へお泊りをお願いした。
- 認知症の母と脳梗塞の障害のある世帯（2人暮らし）は、布団や薬、おむつ等を持って近くの避難所へ連れて行った。
- 認知症の母と息子さんの2人暮らしは、息子さんがこだま病院へ受薬に行ったまま連絡が取れず、デイサービスから事務所へ「このまま自宅へ送って良いか」と聞かれたが、息子さんと連絡が取れないので避難所へ連れて行くが徘徊あり、周りの皆さんにちょっかいを出したり、排泄の介助を行う人がおらず避難所よりクレーム。施設をあちこちあたたか夜遅い時間で既に満床。電話が繋がらない為役場の方や消防団の方が施設へ車で行って直接交渉したがらちがあかず、市の職員と一緒に市内の遠い所ではあったが直談判「市からの要請です」と言い老健へ緊急入所をお願いし3泊4日受け入れて頂いた。
- 181.併設デイ利用者が帰宅困難（自宅損壊・送迎・家族迎えがなく）。その方と一緒に避難所へ移動し付き添い介助を行った。
- 182.自分の担当ではなく、併設のデイサービス利用者の避難誘導していました。帰りの送迎も対応しました。
- 183.地域包括や市での配給のお知らせが頻繁にきたので、その情報を素に色々な物資を届けた。高齢者世帯や独居世帯を中心に届けたが、みなさんにとっても感謝して頂いた。
- 185.3/11 14:00 退院の方の自宅で担当者会議が終わってすぐ震災に遭いました。両手引き歩行しかできない方だったので、座っていた椅子から動けず戸棚の上に置いてあったスチール製のレターケースが今にも頭の上に落ちてきそうだったので、頭に座布団を掛け、レターケースが落ちないように押さえたり、玄関のドアを開けたりという事を行っていましたが、夢中で何が何だか分からず、ただ地震がとても長いという事しか思い浮かばないのが現状です。入院中は「早く家に帰りたい」と言っていたのが「今日退院しなければ良かった」と言って手を合わせて泣いていたのが印象的でした。
- 186.独居生活であり、地震により半壊状態だった為ショートステイ先を探す。遠方に家族がいた為民生委員と協力して食料を運ぶ。16日にショートステイに入るまで支援を続けた。
- 190.片付けを始めていたので、暗くなる前に暖房、寝る仕度、灯かり、食事を準備するようお手伝い。一人暮らしの方は近所の方をお願いして避難所へ。
- 198.日中独居宅へ訪問し車に戻ったところで地震発生。すぐに自宅内に戻り利用者はベッド上で動けず怯えていたので、側に寄り添い揺れが治まるかと様子を見たが揺れが激しくなったので車椅子に移乗介助し屋外へ避難誘導する。外は寒かったので車に乗せてラジオをかけて状況を確認しながら余震が治まるのを待った。20分～30分経過し少し余震の間隔が空いてきて、近所の方々が利用者の事を心配して来てくれ自宅内への移動を手伝って頂けた。家族の緊急連絡先を伝え、夕方ヘルパー支援が入る事も伝え様子を見て頂けるとの事でお願ひする。自宅は鉄筋だから大丈夫との事であった。余震が強くて続

- いていた時、利用者が怖がって側で励ましながら一緒にいたが、こちらの方が励まされました。
- 203.利用者をデイサービスから自宅に送ってもらったが、自宅が壊れかかっていた為、避難所に送った。また利用者の家族が怪我をしたので受診に同行、手当てをしてもらい避難所へ送った。デイサービスから自宅に送迎してもらったが、家族が全員、車の外で待機しており、利用者を受け取れないと不安を訴えたので、一家で避難所へ行くよう誘導した。
- 206.震災時グループホームでケアマネをしており、併設の特養への避難誘導を行っていました。
- 219.在宅酸素の方の酸素残量を確認しながら、一時病院へ酸素確保をすすめ実施した。
- 223.夫婦2人の生活、石油ストーブが無かったので暖がとれず、毛布に包まり動かないでいた。脳の損傷で麻痺があったため、何日も動かないでいて、引きつるような痛みで夜も眠れなくなった。自宅で入浴できなかった（ライフラインが切れていた）ので、デイサービスの車で迎えに来てもらい（当時、デイは完全復活していない）入浴で体を温めマッサージを施行。その後、石油ストーブを入れて部屋を暖め、痛みを和らげることが出来た。家の被災が無くてもライフラインが切れると、老人世帯は生活にも困ります。
- 225.当事業所は町営の為、包括支援センターや福祉課と共に、身障者、1人暮らし、透析患者などのケースを巡回しました。病院からの依頼もあり、心臓薬などの利用患者の残薬確認、透析患者の透析状況の確認など行いました。1人暮らし困難者は避難所へ送るなど行いました。酸素使用者、吸引必要者は病院に連絡し、入院方向で対応させていただきました。
- 226.居宅半壊と吸引必要な為病院入院。当センターの車にて搬送入院となる。独居、高齢者世帯については、各サービス事業所と連携の下安否確認実施する。
- 227.震災翌日に安否確認に伺ったところ、前日よりヘルパーさんの訪問がなく、飲まず食わずで過ごしていた。直ぐに自分の所属する施設に連れて行き、ショートステイの受け入れを行い、地域包括支援センターに相談し、2人特養等に入所できた。
- 229.家具が倒れ、その間に挟まれ消防に助けられた。主介護者が他県の自宅の介護に行ってしまう、残された姉弟(要介護者)が置き去りになっていたため保護した。
- 230.独居の方を優先し訪問、避難場所へ誘導しました。(不安と心細さで眠れなかったと話していました。)
- 234.ライフラインの復旧がいつになるか分らず、訪問しながらも、自分の事業所スタッフの安否確認、利用者の情報を集めていた。次にいつ訪問できるか分からないので、管類(尿管、胃ろう、気管切開)利用者の処置を優先して訪問した。物品が不足した際、近医で状況を伝え、物品をもらって病状悪化を免れた方もいた。他事業所との連携で助けられた部分も多い。
- 255.家の倒壊に伴い避難所への誘導、体調確認。透析患者への通院確保。避難所閉鎖で各区役所担当より連絡があり、病状説明、移転先の確保。体調悪化の利用者の入院調整。
- 257.震災時は訪問先におり、そこから事務所に戻って、同事務所内のデイ利用者対応をしなければならぬ状況になり、利用者への対応を図れたのは夕方近くであった。その日の内に、安否を確認するのは困難と考え、独居、家族等の支援が望めない方、身体的に重度の方(避難できない)を中心に車で訪問、一軒だけパニックを起こしている方(独居、身寄りなし)がおり、そのまま車に乗せて本部まで避難させる。その際着替え等の準備のほか防寒具、布団、あるだけの食料を持参。幸い津波や自宅崩壊等の被害はなかった

- が、日頃準備していなかったこともあり、暗い中での救出や物品そろえに時間を要した。また自宅の鍵が見つからず、施錠しないまま避難することになった。
272. 当時は、初回利用の高齢者2人家族の処へ訪問中で、遠方から来ていた娘さん、ヘルパーさんと一緒に2人を抱きかかえるようにして室外へ避難させ揺れが落ち着くまで付き添いました。揺れが落ち着いてから、ヘルパーさん、娘さんと自室に移動させましたが、ガラスなど危険なものが散乱していないか確認しました。その後、車で近くの独居の男性宅を訪問しましたが、ガスの臭いがして自宅内のガス台からガス漏れしており、外へ誘導し、窓を開けるなどし、ガスを外に出しました。男性の住んでいる地域で、避難所になっているところはどこか、民生委員、区長などに、助けを求めている方はいるか等を確認しました。
282. 利用者宅訪問中地震に遭い、とにかく揺れが治まるまでコタツの中に入るように指示するが、妻は液晶テレビを押さえ、本人は犬を連れて自力で広い庭に出てしまい、どうしようもなかった。揺れが治まった時点で安全な場所に公用車を移し、2人を車に乗せラジオで現状確認した。まもなく2人を自宅に戻し、車で10分の所に事務所があるので、自分の所在を報告した。管理者より、近くの一人暮らしの安否確認するように指示され、町営住宅に住む女性宅（弱視、糖尿でインスリン注射施行）を訪問する。本人はベッドサイドに座り「怖い、怖い」と泣いていた。避難所を確認し、必要な物（薬、インスリン等）を持ち、避難所へ誘導した。担当保健師に状態報告した。
289. 訪問介護やサービス事業所との連携にて利用者の安否確認をした。定期でショートを利用している人が、避難所でそのショート事業所が守ってくれ、保護してくれた。
294. 震災時、認知症の利用者宅を訪問中、利用者は事の重大さについて何も分らず、家の中に戻ろうとするが、頭の上に何も落ちてこない場所へ、お嫁さんと二人で、交代で声掛け、見守りをした。「室内から大事なものを持ち出すのに一人ではとても出来なかった。」「傍に居てもらい心強かった。」とお嫁さん。屋根から瓦が落ち、物が倒れ、いつまでも続く揺れの中、利用者とお嫁さんだけではとても不安。誰かが居てくれる。きてくれる。この思いが心強かったのでは。
301. 事務所の近所の利用者（独居）を避難所まで誘導する。
307. 自宅訪問しながら安否確認を行い、状況により家具等の移動、片付けを行う。利用者の安全確保に伴いサービス調整等を行う。
310. 自宅損壊のため、短期入所生活介護への緊急入所。
311. 当日、震災直後は事業所内にいたので、併設のデイサービスの利用者を安全な場所に避難誘導することを優先しました。全員を送迎の体制までもっていった所で、今度は自分の担当の独居利用者宅をまわり（柴田・大河原・角田・村田）、安否確認をしました。当日は道路の渋滞で、独居宅しか回れませんでした。翌日も翌々日も安否確認やおむつの配給などをしてまわりました。独居の利用者には水も届けました。
313. 人工呼吸器装着している利用者の所へすぐ行きました。停電だったので、とりあえず予備のバッテリーを準備していたが、4～5時間程度しかもたないものだったので、会社からガソリン使用の発電機を持っていきました。2日後には緊急で大崎市民病院に優先的に入院できました。痰の吸引器を使用している利用者に対し、手動の簡易吸引器を持っていきました。電動の吸引器は隣家がたまたま太陽光発電をやっていたので、震災翌日から充電してもらうことができ、助かりました。
315. 震災により避難所に避難したが、認知症により集団生活の受入対応が困難であるため、施設にてのナイトケア受入要請が多く、担当しているケアマネジャーと連絡も取れない

- 状態での支援だった。同一法人通所施設にてデイサービス利用者・訪問介護利用者など合わせて、一週間程度にわたり、支援行う。
- 316.通所介護利用中であり、訪問し、安否確認行った。また同事業所のグループホーム・通所介護事業所の危難介助を行った。
- 321.サービス利用中の利用者の自宅への送迎。
- 322.サービス利用（通所）中の利用者の自宅への送迎。
- 327.高齢者専用賃貸住宅にて、担当者会議終了後、地震被害にあう。2階建、津波情報を聞き、14名の利用者の安否確認。全員を2階に避難。スタッフ・ケアマネ・事業所担当者8名により、話し合い、食料確保、排泄保温、服薬管理の役割を決め行った。3日目に自衛隊のボートにて全員脱出。利用者は同会社の高専賃へ避させることができた。
- 329.当時は訪問介護のヘルパーをしていた。地震時に一緒にいた利用者は近所の人をお願いして一緒に避難していただき、無事だった。次の訪問先に行き、避難準備をしている最中に海の方を見ると、津波が迫ってため逃げた。救助できず。
- 335.①翌日安否確認に訪問した所、半壊している自宅から避難しようとしめない独居老人（担当利用者）、身内の方とも連絡が取れなかったため、近所の方に声を掛けて、保護連絡先を書いた貼り紙をして所属の特養に保護した。②翌日の安否確認の際、高齢世帯でライフライン（電気・電話・水道）使えず、要介護3のご利用が不安なため、椅子に座ったまま一晩過ごされており、ご家族よりショートステイの依頼あり、所属の特養に保護した。
- 337.地震があった時、ちょうど訪問入浴の最中で、お風呂から上がったばかりだった利用者が居ました。自宅は全壊でめちゃめちゃ。入浴車のスタッフはエアマットごと、その利用者を浴槽に入れ、家族と一緒に避難所へ避難所の公民館も被害を受けており、仕方がないのでケアマネがいる特養へ、そのままショートステイで受け入れてもらう。自宅は住めない状態となったため、4/16長期入所となりました。
- 343.3/11の地震では、自宅内の乱れはあったものの、自宅での生活が何とか可能の状態であったが、4/7の2回目の地震で生活出来るような状況ではなくなり、避難場所への受入を町に確認したが、介護状態の方の受入は無理と断られる（当初、避難所で介護保険サービスを利用しながら過ごし、その間に受入先を探そうとしていた）。数日間ショート利用出来る施設が見つかり、その間にグループホーム受入施設が見つかり、入所に結びついた。
- 347.職員全員で避難後、主任ヘルパーと2人で近所の独居利用者を迎えに行く（計3名）。避難所に行く途中、津波に遭い逃げる（山方向へ）。2日間山奥の旅館に留まった。
- 348.数日前から状態は良くなかったが、震災でライフラインが遮断され、低体温になる。電話がつながらず、救急車も呼べないので、家族がどうしたら良いかわからなくなっていたため、相談にのり救急搬送に至る。
- 349.高齢者二人暮らしの方（共に要介護）、避難所での対応が難しく、ショートステイの利用で対応した。
- 352.倒壊しているにも関わらず、余震が続き明らかに危険な自宅に居て、避難を拒む利用者を避難所に連れ出すまで、何日もかかった。やっと連れて行ったら、市の避難所の担当者・保健師まで「こんな状態の人を連れてきて、ここで生活させられると思うの？」と心ない言葉を浴びせられた。自分の自宅、子供（2歳）を二の次にしてやっとの思いで、危険な家から避難所まで離す過程がどれだけ大変だったかを考えると憤慨する。市の高齢者のデータを考えれば、介護が必要な方のための福祉避難所をなぜ設定しないのか、

- 担当者に意見を述べたい。
- 356.併設デイサービス利用者を安全な場所へ誘導。
- 359.要介護1・多少認知症ある一人暮らしの方。自宅周辺の家屋倒壊があり、自宅も散乱している状況。唯一の親戚（弟）に保護していただくようお願いするも、断られ近くの特養に依頼し、引き受けていただいた。
- 363.家族と連絡が取れないので、車で現地に向かい近くにいる親戚をお願いして、避難所に移動してもらった。
- 364.独居利用者が親族やサービス事業者の協力が受けられない状況に陥り、集会所を避難場所として設けることになり、避難所へ貴重品と内服薬・毛布を持ち、車に乗せて誘導する。地震で自宅が傾き、住むことが危険にさらされる。地震発生日より老健に調整。しかし、4日後退所を迫られ、福祉避難所へ誘導、10日後特養のショート枠を利用させてもらう。
- 366.独居の利用者を福祉避難所の入所に繋げた。事業所として契約利用者宅をまわり、安否確認を行った。
- 373.夫婦二人暮らし利用者の施設入所申込のため、東京に住む姪が山元町に来られ、申請手続きをしている最中であった。姪はパニックをおこし、「電車で家に帰る」と言い、亙理駅まで送ったが、電車は止まっており亙理町に知人がいるとの事で、知人宅まで送った。
- 377.ヘルパーサービス責任者と同訪し、高齢者専用住宅に独居の方を、地区民生委員の方がお持ちの空きアパートへ避難のためお連れした。
- 378.当日、訪問介護事業所と連携し安否確認をした。訪問介護事業所から。一人暮らしの方のアパート2階ベランダが落下し、危険な状態との連絡があり訪問。避難先を探した。担当民生委員ではなかったが、空いているアパートを提供してくださる方がいて、避難してもらった。認知症があり、自分のアパートに戻られた為、保護課に連絡、台原の施設に受け入れてもらった。現在高齢者用賃貸住宅に入居されている。
- 383.近隣・家族など、素早く対応しており、その後の訪問であった。
- 384.被災時、デイサービス職員が巡回中だったので、デイサービスの避難誘導にあたった。
- 388.独居の男性を避難所まで事業所の車で誘導した。電気と水道がストップし、訪問介護もストップしたため（3/14）。布団も避難所まで運び、弟と区長に連絡した。区長には、電話が通じなかったため置手紙をした。4/7の余震でも断水し、給水に行き、自宅まで水を運び、ヘルパーに支援に入ってくださいよう依頼した。
- 393.独居利用者宅を訪問した所、寒い中過ごされており、凍死の可能性もあった。
- 400.同建物内で、デイサービスを利用していた利用者の方々を外へ誘導。その後、他施設へ搬送した。
- 404.電話連絡が取れないため、メモ等を残した。包括支援センターから連絡を市役所にして頂いた。また、移送も行って頂いた。
- 405.独居をポイントに行った。
- 414.当日、研修で出向いていたが、地震後、隣のデイサービスの利用者が避難してきた。その中に担当していた利用者がいたので、車椅子を押して2階への避難を手伝おうとしたが、間に合わず津波が来てしまった。自分も利用者も流され、首まで水に浸かったが波の勢いが弱まったあとに、2階に避難することが出来た。
- 415.認知症の利用者さんが避難所から、自宅に戻ってしまい、冠水し出られなくなってしまった。包括・警察官と訪問し救出。
- 423.近隣の避難所に避難させたが（ライフラインが断られたので）、認知症があり、集団生

- 活ができないということで緊急入所ということで、ショート対応してもらった。
- 426.併設老健施設の避難誘導を行いました。その後、老夫婦世帯や独居老人の安否確認を行っています。他事業所へサービス利用中の利用者の安否確認も行っています。
- 431.自宅のライフラインが停止し、要介護5の利用者及び介護者を同法人の特養で緊急入所として受け入れてもらった（震災翌日）。
- 435.当日、一人暮らしの方を二人体制で訪問。道路に亀裂が入っている所などもあり、危険だった。奥の居間にベッドで寝ていた人の所までは、ドアが開かず入れないトラブルもあった。ヘルパーさんが入っており、対応していた。メモを残して、何日か通い、安否を確認した。
- 437.一人暮らしの担当利用者のマンションを訪問、全壊状態だったので、所属の病院に連れてきて、家族が迎えに来るまで、病院の外来で宿泊してもらった。避難所での生活は無理だった。
- 463.震災直後、もともと老朽化した自宅にお住まいの要介護3の利用者宅へ訪問し、安否確認後、余震による被害を予防するため、町内会長宅に継ぎ、避難所に誘導して頂く。
- 467.地震後、一人暮らし・高齢者二人暮らしの方を優先に安否確認を行う。一人暮らしの方を近くの集会所に避難させ、もう一人の方は小学校に避難させるが、石油コンビナートの火災のために、町の公民館に避難させる。一人の方は、お嫁さんが東京に行かれ留守だったため、10日間一人で自宅にいたため、毎日熱いお湯と食事を持って訪問して無事であった。
- 476.翌日、一人暮らし・二人暮らしの高齢者の安否確認にまわりました。当日はデイケアのガラス破損などの片付けに終わりました。
- 478.自宅の被災状況により、在宅生活の継続が難しい方、介護者や家族の状況により、自宅での介護が難しい方がいらっしゃった。そのため、利用中のサービス事業所、ご家族などと相談し、当法人の特養へ移動、福祉避難所としての対応を5名の方をお願いしてもらった。連絡手段なく、自宅へ伺っての相談が主であった。
- 482.併設デイのお客様対応をしました。レクリエーション中で、全員ホールに集まっていたので、スタッフと共に落下物や避難通路確保に努めていました。浴用タオルを配りました。全てのライフラインが通じず、国道が渋滞していたので、駐車場に送迎車、スタッフの車を並べ、お客様を移動できるよう待機していました。車のラジオから情報を集めました。スタッフ・お客様共に帰宅できないことが想定されたので、近くのコンビニへ食材を買いに行きました。居宅で担当しているお客様に関しては、担当者会議などで緊急時の対応を決めていたので、各事業所や家族・本人に委ねました。
- 489.2人暮らしで、寝たきりの人を抱え、エアマット使用、又ベッド45°位にアップにしたまま電気が止まってしまった。オムツ交換をするのも出来ない。2人組で訪問したため、ベッドから降ろし、布団に横にしてきた。たまたまショート中の人は、そのままショートを延長してもらっていた（これは施設の方と介護者が連絡）。また電話が繋がらないため、処置の方法を、施設まで行きお話してきた。
- 490.訪看のサービス提供中での震災で、家の中の状況、帰りの交通状況、周りの状況などから、これはただならぬ事態と感じました。運転中、頭の中で、一人暮らしのTさんの事が思い浮かび、とにかく安否確認をしなければと自己判断でお宅に行った。Tさんはデイから今帰って車から降りられたばかり、と心体は無事であったが、住宅は玄関・サッシ窓が外れ、茶の間の茶箆筒・テーブルが外に倒れている。光景を見て、更に「これは一体どうした事なんだろう」と今までに体験したことのない場面に一瞬あ然となった。

- 504.避難所から入所してきた際、「温かい物が食べたい・・・」と訴えられ、涙が流れた。
- 505.地震直後より2人1組となり、独居・高齢者世帯を中心に安否確認を行っている。そういった中、高齢者世帯で2人とも要介護者のお宅が余震で崩壊の恐れあり家の中も家具などで散乱しており、危険と判断。近くの避難所へ誘導している。当時はまだ、避難所としても機能も果たしていなかったため、夕食の買出しにも行き、対応している。
- 506.高齢者世帯であり、息子達も遠方に居る方で、すぐに駆けつけることは難しく、家屋も古い建物で余震による倒壊の恐れがあった。二人とも要介護状態であり、自力で避難所に出向くことは難しいため、避難所までの移送介助と当日の夕食は持参とのことで、買出しを行った。避難所生活中には、トイレ介助が必要な方などの対応が難しかったため、市の担当者と連携を図り、福祉避難所への受入調整を行った。
- 509.デイサービス内から近くの避難所へ誘導したが、避難先がたくさんの人でいっぱいであったため、またデイサービスに戻った。その日はデイサービスで一日を過ごし、次の日また、避難することになり（食料・燃料がないため）、避難所にて介護を行っていたが、避難先である体育館では車椅子の移動が困難・車椅子用のトイレがない・狭い・寒い・介護スペースがないなどの理由で、またデイサービスに戻った。避難先を何度も変更し、移動の介助なども大変であった。
- 514.独居の利用者（家事援助のみ利用）宅を安否確認のため訪問した際、食器棚が傾き、中から飛び出して床中に散乱した食器の破片などを片付けた。
- 519.エレベーターなし、中層階に住む、寝たきり一人暮らしの利用者を安否確認で訪問したが、物が倒れて側まで行けない状態。近隣への助けを求めたが、近隣も高齢者のみの住宅で援助が得られず、当日の食べ物（バナナ3本・お茶ペットボトル1本）をベッドまで投げ入れ、本人の意識確認と次の日朝の訪問を約束し、12日朝ヘルパーと一緒に訪問し、物が倒れガラスや瀬戸物が壊れている中を本人の寝ているベッドまでケアマネが行き、おむつ交換・食事の援助を行った。息子と連絡が繋がり自宅に向かっている途中だった。息子宅へ引き取られた。
- 528.訪問中に震災。独居老女宅へ、包括の職員・まもり一歩の方々と4人で室内にいた。とりあえず、近くの駐車場へ皆と避難した。隣家の老女と共に、最寄の避難所へ送り届けた。
- 529.各避難所をまわり、認知症のひどい方・介護度の重い方を福祉避難所に移動させた。一人暮らしの方・老老暮らしの方に食品等を運んだ。
- 539.施設入所者、利用者をまず優先に避難誘導した。居宅の利用者の確認があとになり、救助出来なかった。避難後、高齢者のADLはぐっと下がった。軽度者であるはずのケアハウスも特養に入所している方々と介護の量はさほど変らなくなった。それ位、皆疲れてきていた。又、高齢者は帰れると思っていた。
- 544.要介護者の2人暮らしの方の家族と連絡がつかず、老健施設に緊急入所させて頂いた。
- 547.入浴中の利用者様のライフラインがストップし、寒くてカイロで体を温めた。
- 560.①透析利用者を主治医指示下で、透析できる市民病院へ搬送した。老々介護（二人暮らし）で自家用車や携帯電話の所有がなく、ケアマネが訪問した際にはぐったりして寝ていた。歩けなくなっていた。かかりつけ医にケアマネ一人で訪問し、本人の状況を説明すると、自家発電がなく透析できないため、市民病院への搬送を医師から依頼された。透析は火木土を利用しているが、3/11日震災で、12日の透析ができなく、ケアマネが訪問したのは13日だった。13日に透析ができ、翌週は週2回市民病院で透析ができ、元気になった。②独居（男性）、避難所で寒さで動けなくなって寝たきりになってい

- た人を病院に搬送し入院させた。避難所で急に認知症が悪化して、周囲の人はどうしていいかわからない状態になっていた。
- 577.一人暮らし・要介護状態（車椅子使用）の87歳の女性宅訪問中。震災後、津波のおそれありで雪の中、毛布をかぶせ車椅子をひいて高台へ移動する。そうしている途中消防署があり、そこへ駆け込み、消防署員に3階までおんぶして頂き無事避難する。女性は家を出るときより、寒さと呼吸不全、動悸等を訴え、心配な状態であったが、行き先が消防だったのでいざと言うときは救急対応が可能であるという安心はあった。少しずつ体調も落ち着いてきた。その後、10日ほど避難しており、遠方の息子さんが迎えに来て一緒に息子さん宅へ帰った。
- 580.当施設に当日利用していたデイ・ショート利用者が数日間に渡り、避難し介護などの対応をした。帰る家がなく、家族も亡くなってしまい、そのことを本人へ伝えることが出来なかった。先が見えない状況でした。当施設ではありませんが、近くの施設で救助に行った知り合いケアマネは皆さん流されてしまいました。
- 583.①間質性肺炎を主傷病とし自宅にてデイサービス・訪看を受けていた78歳女性。84歳の夫との二人暮らし。避難所に3/11. 12日と来ていたが、13日自宅に帰った。理由を聞いてみると人の中に居るのが嫌だ、疲れるとのこと。自宅に戻って3時間の午後3時頃、訪問すると37.5℃の発熱と呼吸がやや荒く、会話も辛そうだったので訪看に連絡するも電話不通。主治医も同様だった。この時点で救急車を呼ぶことを勧めていたが、夫は「時々こういうことがあり、少し様子を見てれば良くなるのでそれはしなくて良い」と言っていた。市役所支所に走り、保健師の訪問を依頼し、すぐ来てもらい、放置できないということで、市役所を通じて救急車を依頼してもらい、病院へ搬送された。病院に着いた時点では意識はほとんどなかったという。その後2週間で退院した。訪看・主治医と連絡がとれず、一般の救急車要請も出来ない中、別ルートでの救急搬送が出来たと思っている。②72歳男性・独居・支援1。3/12日安否確認を行い、異常なし。15日本人より電話で包帯はないかとの問い。どうしたか聞くと、ストーブにかけていたやかんの湯を足にかけてしまい火傷したとのこと。急行してみると両足背を中心に15×10センチの第2度熱傷をおっており、表皮剥離していた。痛みのため歩行困難となっていたため、病院受診を勧めたが金がないから拒否。包括と連絡を取り、説得受診させ、3週間の入院となった。包括には経済面の支援の申請をお願いした。
- 594.デイサービスにて声掛け・見守り・保温、その後居宅利用者一人暮らしの方、安否確認にて訪問。暗くなり、それほど回ることは出来なかった。
- 614.病院併設により、当初院内の患者の避難誘導に当たっていた。3～6階の患者、介護サービス利用者の1階への誘導です。全館水漏れが発生し、エレベーター停止の中、4人1組で車椅子のまま階段利用し、階下へ誘導しました。
- 618.特養など入所者の避難誘導。
- 619.調査中の被災で、調査宅もいろんなものが壊れ、倒れ、高齢者が2人居たため、その方の避難と居場所の確保を行った。
- 622.包括支援センターの担当者、他の事業所のケアマネと遅い時間まで、受け入れてくれる施設の検討をした。施設への移動の手伝いで、避難所でその人の使用している寝具を持っていこうとしたら、「置いていけ」と言う人もあった。反対に「良かったね」と喜んでくれる人もおり、極限状態になると一時的ではあると思おうが、人は何をするのかわからない。
- 623.互理町と地域居宅ケアマネと会議を開き、避難先を確認して優先をつけて、施設や福祉

避難所への誘導を行った。

624.助けに行った時はとても安心な表情であった。

625.自宅が被災し、物品の破損などにより、自宅で過ごせなかった方のショートや避難所の紹介を行った。デイ送迎の補助では、家内（玄関）の整備をできる範囲で行い、移動経路の確保に努めた。

626.デイに通われている方を緊急的に自宅に帰宅する際に介助についた。1軒1軒の状況を聞きながらまわった。入院された方や怪我をされた方にホールで休んでいただき、その後見守りを行った。

627.在宅酸素している利用者さんの電気がとまり、病院へつなげました。

628.併設に病院と施設があるため、居宅として単独行動でなく、目の前にいる患者さん・利用者さんの支援にすぐ法人として動いた。泊り込みで介護（夜勤手伝いも）。地域の方も集まり、施設内で支援していた。

633.一人暮らしの方の自宅に伺い、避難所へ誘導しました。

639.タンスに頭をぶつけるなどした。

640.棚など倒れていた。物を片付けて動線を確保した。

653.訪問し、安否確認。

661.一人暮らしの利用者さん、不安が強い方であったため、荷物をまとめ、避難所に行くことにしました。小学校が避難所だと思い誘導中、地区の民生委員さんにあったので避難所の確認をしましたが、小学校は避難所ではないと言われ、民生委員さん宅に避難しました。

662.認知症の二人暮らし夫婦を避難所に誘導した。海のすぐ側の利用者を救出に行き、そのまま次の日までそこから動くに動けない状態になり、次の日、山を越え事業所のある方向に戻った。

672.自宅へ訪問、玄関・部屋の窓を開け、避難路を確保。大きな揺れがおさまったら、貴重品をもっていただき、屋外へ。近隣の方と本人へ、避難所を確認し向かう。家族へ連絡とるが、電話繋がらず。途中、町内会長さんと会い、避難することを伝える。30分ほどで家族が本人を迎えに来て、引継ぎをする。

674.避難所で家族がインフルエンザにかかってしまい、介護が出来なくなったとの相談を受け、急遽居宅支援の届け出を行い、通所介護を利用した。

679.老健・デイケア併設であるので、まずは目の前の利用者様の避難を優先に行いました。あの状態（建物の破損が激しく、120名を1階フロアに集めた）で、居宅の安否確認は難しかったです。入所が2・3階で、1階がデイケアのため、地震直後は2.3階の利用者様を階段を使って全員（80名）を1階に誘導したため、男手が必要であり、その後も施設の修繕や今後の避難生活をどのようにしていくかの話し合い、食料・水道・トイレの確保など、人手が足りない状況でした。電気・水道・食料・暖房・ガラスがない状態。余震が続く、あの恐怖や絶望の中から施設の利用者様を守ることが最優先でした。事前に民生委員が災害の時に安否確認（老々や独居）をしていただくとのことだったので、甘えてしまいました。

681.当日、デイケアを利用していた方々、施設に入所している方々を優先して避難誘導した。3階建の施設であり、階段を使用し、3階→1階、2階→1階への避難誘導。

690.①89歳・女性・独居・認知症・生活保護受給者。毎日ヘルパーの支援を行っていた。地震発生後、自宅をヘルパー管理者と一緒に訪問。玄関先が陥没、自宅も傾いているように見えた。町と施設に相談、緊急入所となる。②80代・男性・独居。亡くなった妻

の担当ケアマネジャーだった。町外に住んでいる娘より携帯に電話あり。「父が一人で被災している。自宅の2階に住んでいる。食料もほとんどなくなっていると思う。自分はガソリンがなく行けない。本人とても頑固で行きたがらないと思うが、説得をしてなんとか避難所へ連れて行ってほしい」との内容だった。自宅は危険区域になっており、次長に相談。次長が消防署に電話したが繋がらず、直接ケアマネジャーが消防署に行き、救助の要請をした。レスキュー車2台で現場に駆けつけた。救急隊からは一緒に同行して欲しいと言われ、ケアマネ2名が同行した。瓦礫の山になっている所を救急隊員の誘導で行動し、自宅に到着。本人はドロだらけの服装のまま2階にいた。ケアマネが娘さんから頼まれたことを話し、本人納得の上で、安全な道を救急隊に指示してもらい、避難所に送り届けた。

- 691.当日、休日で石巻市内にいたため、自宅と事業所があった町に入れたのは5日目（道路が寸断されていた）。その後事業所に入り、併設している特養の入居者・デイ・ショートの利用者の介護に当たり（泊り込み）、担当利用者・その家族の安否確認が出来なかった。
- 694.当時は事業所（2階にある）で業務にあたっていた最中で、階下にあるデイサービスで利用者の避難誘導にあたった。30名程度の中に、自分の担当する利用者が3名おり直接緊急対応できた。
- 695.呼吸器を装着されている方は、家族がすぐに集まり、区役所に家族で連れて行き、そこから救急にて病院へ搬送した。津波地域の方の所へは立ち入り出来ず、自分も逃げるのみとなってしまった。
- 709.家が半壊、高齢にて市の保健師さんと連携してショート入所の対応をした。
- 724.地震が治まらないうちに（地震時事務所にいた）事業所所属のデイサービス・小規模多機能を利用して利用者を車に誘導、車が出たのを確認後、事業所近隣の老人を自分の車に乗せ高台に避難。高台への道路がわかっていた事もあり車の渋滞している所を突っ切って逆走し坂道を上がり（車の通行がなかった）高台へ。
- 733.独居・二人世帯訪問（震災後即時津波がくる前まで）、被害状況の確認・応急的対応。
- 734.利用者宅訪問中に一度家族と利用者とは外へ飛び出したが、二度目の揺れがきた時は近所の方が駆けつけて下さり、きちんとサポートの体制が出来たのに驚いた。地域の方々も日頃から訓練されていた。
- 735.事業所の近くで在宅酸素をしている利用者を病院へ避難させた。
- 737.震災時利用者宅訪問中で、ストーブを消し避難経路の確保をし利用者がすぐ避難出来るよう介助しました。幸い建物内外の被害はなく自宅内で防災無線を聞き津波警報を確認しましたが、かなりの高台に建っていたお宅なので（避難しないとご家族も話されていたので）事務所に戻る事としました。
- 739.ケアハウスに併設している為、震災時は主に入居者の援助を行いました。道路は寸断され燃料も手に入らず、電話も全く使えない状況だった為出来る事と言えばそこで生活されている方への援助と考え対応しました。震災当初は施設も避難所として開放した為避難者の受け入れにも追われ安否確認等は数日後となりました。
- 740.他事業所の通所送迎車輛が走行困難の状況にあり、救助を行い避難所として利用者・職員を受け入れた。
- 744.女川町立病院1Fにおり社協のデイサービス利用者・外来患者を担当スタッフと一緒に誘導しました。
- 748.日中独居の利用者について安否確認時家屋の損壊がひどく避難所に誘導。近隣の家族宅への連絡、避難誘導。

- 751.人工呼吸器の電圧の問題あり、病院の車で人工呼吸をしながら2名を病院に搬送した。
- 758.自宅にいる事が不安な利用者を避難所に連れて来て介助にあたった。
- 760.在宅酸素や吸引が必要な利用者なので停電による医療器具の利用ができず病院に搬送した。
- 761.利用者の安否確認を電話やら訪問で確認し、家屋の損害の状況により自宅で過ごせない方は町の公民館・地域福祉センター等へ避難して頂きライフラインが通るまでお世話をさせて頂いた。我が町では家屋全壊が幸いにもなかったので、ライフラインが通る1週間から10日間お世話をしました。寝たきりで全面介助の方・排泄ケアの必要な方・食事介助の必要な方も全て介助させて頂きました。避難所の食事はお握り1個かパン1個の食事ですが、私達はいろいろ材料を調達し豚汁・牛乳等を食べてもらいました。
- 764.緊急入所1名、緊急退院利用者のサービス調整1名対応。
- 765.市営住宅にお住まいの独居利用者の避難所誘導を試みる（災害当日）。建物自体は大丈夫であったが、家具・食器棚が倒れ家の中は食器・ガラス等の破片だらけ、かろうじてベッド周りだけは動ける空間がある。勿論ライフラインストップ、雪混じりの寒い日、二人の職員で訪問し避難所への誘導を行うも「避難所には絶対行かない」「ここで死んでもいいんだから」「自分の思い通りにさせて」と叫ぶような訴え、「自分の我がままを通せるような状況でないでしょう」とこちらの方も興奮して言うてしまうような状況。おんぶしようとしたり、車椅子に乗せようとしたりするも、ますます本人は絶叫するばかりでとうとう誘導を断念した。同じ市営住宅にもう一人避難所誘導を拒否された独居者がおられた。行政に報告、当日よりヘルプを毎日入れて支援を行った。
- 766.自分が自分の受診の為仙台市内の病院で震災に遭い、帰宅困難者として避難所へ誘導された。その後21時過ぎ、一か八かで街に出て幸運にもタクシーに乗れたが実際家に着けたのは翌日の朝1時。手探りで家族（要介護者2人含む）を確認し、辺りが明るくなってから事業所に出た。このため地震発生直後の確認作業には加われなかった。
- 770.地震の被害がひどく、自宅に住めなくなりショートステイを利用したり娘さんの所に移ったりした。
- 773.震災の2日前にも大きな地震があり、その時は事務所のすぐ近くの独居の利用者の家に安否確認に行ったのですが震災当日は自分が避難するのに精一杯でした。
- 776.出先から何処にも行けず、近くの避難所に一晚避難していたので直接の救助はできない状況でした。
- 778.地震発生後、防災無線で津波警報が発令された為事務所に居合わせた職員に直ぐ隣接する指定避難所に避難するよう声掛け一緒に避難しました。その後津波の為3日間避難先で過ごしましたが、施設自体孤立状態であり救助等は行えませんでした。
- 780.事業所内で勤務中被災。通所介護併設している為施設内より送迎用の車中へ避難し、その後利用者を自宅へ送り午後10時過ぎに家族が避難している小学校体育館へ移動しました。
- 781.地震発生時、独り暮らしの高齢者（認知症あり）を訪問中であった。怯えるご本人を励ましながら、室内での避難誘導と声掛けを行った。また、危険に対する認識が甘くかなり動揺されていた為隣人にこの後の食事提供と見守り・近隣の避難所への誘導をお願いした。室内に散乱していたガラスや家具を片付け危険を排除。お世話になっているヘルパー事業所に出向き今後の支援物資ができる調整と準備をお願いした。その後も区役所や市の支援物資を独居中心に配布して歩いた。
- 782.併設の通所リハを利用していた利用者や老健へ入所中の利用者の方を、津波対策の為1

- 階から2階へ誘導した。
- 783.救助等は無かったが、緊急対応までに至るまでの対応も出来ず心苦しい思いをした。津波発生もあり、地域に近づく事すら出来ず歯がゆかった。訪問が出来るようになり、利用の状況・環境を判断し最低限の対応はしたが、もっと早く色々な事が出来たかもしれないと今だから思える事が沢山出てきます。
- 784.併設デイサービスのエレベーターが止まり1階まで階段で搬送した。
- 785.認知障害のある利用者で一人暮らし、自宅内の食器やガラスの損壊があるが切迫感がない。説明と準備に20分を要し同法人の施設に緊急対応をお願いする。転倒しやすい方でライフラインもなく石油ストーブで過ごしている。施設側へ避難を呼びかけるが「寒いと駄目だ」と自宅に残る。15分位説得するが避難なし。近隣の家族も来たのでお願いするが一人でいる事となる。
- 790.同法人内の施設に入居している方の介助を応援した。
- 792.震災時グループホーム（同じ法人）で勤務中、津波を避ける為ケアハウス4階に入居者さんと避難。4日間入居者さんはそこに滞在する。
- 794.初めは避難先が分からず四方八方手を尽くし探す結果となってしまった。携帯電話を持っている方とはメールでやり取りができたが、連絡がなかなかつかない方へは直接訪問して確認している。特に独居と日中独居の方へは訪問し後片付け等を行い、とりあえず寝て食べる空間を作った。
- 797.水道が止まった為給水に行く。一人暮らしの安否確認時ロウソク等不足分を調達。
- 799.3/11 ヘルパーとして別事業所に勤務しており、訪問中で台所において利用者をテーブルの下に入ってもらい利用者に覆いかぶさるようにしてガラスを浴びないようにし、2回目の縦揺れが終わってからガラスの中を靴を履いてもらって外に逃げました。自宅はめちゃくちゃ、雪が降ってきたので車の中に入ってもらい暖気して待機、家族が来るのを待ちました。20分後家族が来た為に引渡し事業所に帰宅。社長の命令にて解散になりました。
- 800.一人暮らしの方の安否確認をするも自宅内散乱にて住める状態ではない。本人は避難場所が分からず混乱していた。避難場所を確認し同事業所のヘルパーステーションに連絡し誘導して頂いた（常にケアに入っているヘルパーさんが対応する事で安心してもらった）。
- 805.訪問中地震発生。崩れ落ちる壁や落下物から利用者を抱きかかえて守った。地震が治まった後、家族全員の無事を確認。今後の指示に従うよう伝えた（カーラジオで津波警報発令されている事も伝えた）。その後津波により利用者宅は大規模半壊（約1m）。利用者と家族は全員避難して無事だった。
- 819.透析治療の利用者に対して、受け入れ先病院の状況について包括や行政と連携をとりながら透析の実施体制の確認を行った。
- 820.独居男性要支援2、在宅酸素を使用し酸素ボンベを車から搬出した。トイレまでの通路を確保しガラス・破損した物の片付け、娘宅へ安否の報告をした。
- 821.震災翌日に退院予定の独居の方がいて家族の方が退院を2～3日延ばしてもらおう様病院に頼んだ。その後ライフライン停止中にアパートに戻って来てしまう。夜間転倒するのが心配で、退院した夕方に福祉避難所にこちらで連れて行った。避難所もいっぱいだったが何とかぎりぎり置いてもらった。
- 824.訪問から事業所に移動時に震災、事業所に車を置き徒歩で訪問できる利用者宅に訪問。車椅子1名は建物から避難所へ連れて行き、他2名は近所の子供宅へ徒歩で送った。事

業所はデイも併設の為、帰宅できない利用者（8名）と共に避難所で一晩過ごし翌朝に家族に渡す。

- 825.訪問中であったので訪問先利用者宅の本人・家族の安否確認と対応。吸引及びエアマット対応の寝たきりの方だったので手動吸引器の確認・エアマットの緊急対応を指導・確認。今後の2～3週間の対応方法を指導し事務所へ戻る。事務所下にある通所介護利用者さんの救助を行う。自宅に送迎できる方は自宅まで送り、蒲生・若林区方面の方は自宅に戻れる状況ではなく家族とも連絡がつかない為特養に依頼し対応してもらう。
- 827.実際震災のあった時間、私は東部道路の真下でちょうど赤信号で止まっていた。その時グラグラときて信号は止まり車の渋滞が少しずつ始まりました。次の訪問先には15時の予定で担当者会議を予定していましたが、大津波がくると確信したので、その地域は確実に津波のくるエリアだと直感で分かり利用者さんやご家族の状況を分かりつつも、そちらの方に足が向きませんでした。やはり津波が到達しており私はその2日後によくご自宅の方に行けましたが、本人は既にお亡くなりになっておりヘリコプターでご遺体を運ぶ所でした。申し訳ない気持ちでいっぱいでした。ライフラインが全て止まってしまいエアマット使用していたのですが、エアマットもほとんど萎んでしまい暖も取れず冷え切って凍えて亡くなったのではないかと思うと今でも切ない気持ちになります。
- 832.一人暮らしの利用者さんが、民生委員さんの協力で近くの公民館に避難できたが3/13には皆自宅に戻った為一人となり民生委員さんが直接ケアマネに連絡してくれた。隣町に住む娘さんに直接連絡に行き、娘さんの家で過ごす事ができた。
- 833.気管切開・痰吸引必要な方を病院まで搬送。病院に搬送されて来た患者さん方の対応等。
- 834.医療依存度の高い人の入院に対応した。院内で急患の患者さんの対応にあたった。
- 837.利用者（日中独居）宅を優先に安否確認を行う。訪問時（地震直後）利用者は自宅駐車場で被災、ご本人に怪我はなかったが自宅内は仏壇の花瓶や台所用品が散乱しており、その中で室内犬が身動きが出来ない状況で吠えていた。犬を助け出し、ご家族は仙台勤務で帰宅できない事も考えられる為部屋をある程度片付け、水・食糧・ラジオ・緊急時の避難先を確認し伝えた。
- 844.一人暮らしの方に訪問した際、自宅の室内が足を踏み入れる事ができない状況で、利用者は玄関先に座り込んでいた。幸いにも利用者に怪我等はなかったので貴重品等を持参して頂き地域の指定避難所へ避難させた。
- 848.併設のデイサービス事業、宅老事業の利用者の避難誘導や事業所（サービス）が避難者を受け入れた為夜勤業務にあたった。また、自宅で一人で留守番をしていた利用者宅に行って、不安の為動けない利用者を避難所へ誘導した。
- 850.併設の事業所のデイサービス・宅老利用者の避難誘導にあたり、その後も夜勤業務にあたった。
- 854.避難所誘導介助は、独居や老夫婦世帯で安否確認をした際に自宅では過ごす事が困難と判断した人達を家族・施設と連絡調整し緊急入所した。その他の対応では、全担当者をスタッフ二人一組で2日間かけて車で廻り安否確認を行った。
- 857.一人暮らしの方（要介護1）、電気も水道も止まり食糧もなかったのでヘルパーさんに食糧を届けてもらい福祉避難所（当法人で運営）に来るよう勧めもらった。
- 858.3/16一人暮らしの利用者（要支援2）と最寄の避難所まで誘導した。その方は震災当日近所の方の車で避難していたが、自宅（床下浸水）に帰宅したいと3/15自宅に戻っていた。道路の水が引いて、まずは一人暮らしの方の安否確認に出ていた時偶然このような状況になっていた。また、避難所へはすぐ入れると思っていたが、そこの管理者

- が「こういう人（高齢者）はここにおけない」と最初は拒まれたが説得し何とか入れてもらった。
- 869.当日は併設する特養ホーム利用者の安全確認後、担当利用者の安否確認をしました。その後、ガソリン不足で身動きがとれず上司命令で特養ホームの介護職員の手伝いをしていましたが、担当利用者の事が気にかかり歯がゆい気持ちで暫く過ごしていました。今思うともっとしなければならぬ事があったのではないかと反省しています。
- 880.救助には当たらないかもしれませんが、インシュリン朝夕投与している独居の方の対応として、訪問介護も通所介護も対応困難となり自宅の食材も無くなったので避難所か…と思ったが、低血糖にならない位の食糧が手に入らず、インシュリン（血糖値確認）を定時に対応できるスタッフも配置できないと断られ、介護保険施設にも対応できるか相談しても同じように1日2食しか提供できないとの事。家族も仙台でガソリンが手に入らず支援にも来れず、何とか病院入院をさせてもらう事になりました。タクシーも呼べない状況で、ケアマネ公用車もガソリンギリギリのところまで病院へ送って行ったという事がありました。
- 883.同事業所にあるデイサービスを利用されている方への対応で誘導援助（送迎等）を行いました。その後二人一組となり安否リストに従い安否確認に廻りました。
- 886.医療度の高い方は直に市へ問い合わせ、病院へ運んでくれた事を幸いに思いました。
- 887.地震当時、利用者訪問中の為地震後家族と本人に津波があるかもしれない事を話し高台に逃げるように誘導・声かけをした。
- 889.災害救助法での福祉避難所の事が当時知識不足でした。当時電気の復旧目途がたたなかつたので、在宅でエアマット・電動ベッド等が使えずにいる方々の悪化を心配し、地元の訪問看護もガソリン不足で十分な活動ができていなかったため、訪問看護事業所全てを廻り在宅で電気を必要としている方々を集めて発電機で電源確保をしたり、家族もそこに来てもらい介護の提供と不足する分の支援を目的に各関係機関との調整をしました。市福祉事務所・市役所・市社協本部・市社協支所・訪問看護ステーション・市内主たる居宅事業所。何度も会って話し（電話が通じるまで）何度も打ち合わせを行い、その為関わる人も段々増え段々メンバーも変わり、当時現地には市からの大量の食材搬入が行われ、建設業者から市の支所全て賄える発電機を設置し、対象者の絞込みも終了した最後の打ち合わせの時に、場所提供予定の市社協から良い返事がもらえず、地元協会支部長からも相談受けていないとの発言があり、その時は電気・電話も復旧となった事もあり今回の件は実施しない事と会議で決めましたがこれだけ調整するのに時間と労力を要し、地元の地域の方の為に今回のような時にでも事業所や組織の壁の厚さを実感できたエピソードです。
- 890.家族や近所の人で避難誘導等ができており安否確認できた。
- 892.一人暮らしの方で家の中へ入れる状況ではなかった為避難する場所が決まるまで近所の方と本人が車の中で過ごす。区長さんや近所の方と連絡を取り合いながら公民館へ夕方方に避難となっている。
- 894.認知症重度で独居の方（84歳）の自宅が大きく被災し住める状況ではなく町内の集団避難所に誘導されていたが、不穏興奮顕著で対応不能となっていた。幸いと言っては失礼だが、母体の施設で亡くなった方（震災かなり前から危篤状態にはなっていた）空きベッドが生じた為当該集団避難扱いを実行し、保護し速やかに母体の施設へお連れし緊急的ショートステイ開始した。次にこの方の被災した家に出向きガラクタや埃の山をかき分け衣類・寝具等使える物をかき出し施設まで搬送している。尚この方が無事ショー

トステイ開始後夜中は停電で真っ暗になり不穏・徘徊顕著で私が毎晩同室の簡易ベッドで添い寝し、なだめてトイレ誘導・照明確保等をしております（3/18電気復旧してようやく解放）。

- 896.初めてショートステイを利用した利用者様の所に面会に行った際に地震に遭う。ベッドに横になっておられベッド毎揺り動かされた状態だった為に利用者様の身体を支えながら怪我をされないように「大丈夫」との声かけをしながら地震の揺れが治まるまで付き添い、その後車椅子に移乗介助を行いホールまで誘導し他の利用者様の見守りも兼ねて待機して居りました。
- 899.デイサービスを併設している為、まずデイ利用者の救助避難にあたった。津波が近くに迫ってからの避難であった為車椅子を押し近くの山に逃げるので精一杯だった。その後暗くなる前に民家に移動させてもらい利用者と一緒に泊めて頂くが、夜間は一人が排尿を訴えると次々連鎖し一睡もできない状態であった（民家がなければあの寒さで私達も利用者もどうなっていたかわからない）。
- 900.勤務場所がデイサービスの隣にある為10数名の利用者と職員、デイ・居宅等合わせて15名程いた。津波がくるとの情報で外に出たものの近くに高台はなく、とにかく利用者をワゴン車に乗せられるだけ乗せ残った方は車椅子に乗せ走った。山の麓まで来た時車椅子ごと道路から少し高い所に避難させるのがやっとだった。幸いにも水は道路まで来たが避難した所まではこなかった。その後夕方になり雪が降ってくる中、食事の事、寝る所は？どうすれば良いのか不安になった。一緒に避難していた若い方が「私の家に入って」と声をかけてくださり一夜利用者と共に泊めてもらいました。次の朝別の場所へ移動。最後の利用者を家族へ引き渡したのは一週間後。
- 904.併設施設入所者への避難誘導を実施した。屋外へ誘導後施設内の確認をし、雪の降る天候だった為再度屋内へ誘導を行った。
- 905.同僚が担当していた利用者の安否確認という事でその同僚と二人で利用者の住むアパートへ向かった。向かう途中瓦礫の山でアパートまで辿り着けるのか心配であったがアパートまでは津波は来なかった様子。同僚が声を掛けながらアパートのドアを開ける（施錠はされていなかった）。すると、微かに“はい”と声がした。その利用者はライフラインが停止した寒い部屋の中のベッドに腰掛けていた。顔色は不良で震災後からまともな食事はしていない様子であった。私達は本人に避難するよう話し福祉医療チームが滞在している避難所へ移動させた。その後間もなく入院した。アパートから救出できて良かった。
- 907.津波浸水地域に居住する独居の方がおり、道路等が寸断され一週間程訪問（安否確認）する事ができなかった。気温が低く、またライフラインも寸断されていたので諦めながら訪問した。衰弱しながらも意識ははっきりしており、直ぐに要介護者対応の避難所へ搬送している。一週間飲まず食わずだったとの事。
- 912.当日2階事務所にて勤務、大きな揺れに動く事も出来ずストーブを消し、掴まった机も大きく動き、ストーブ・コピー機・机全ての物も動き出し棚から書類が落ち普通ではないと、地震が少し落ち着いた時1階へデイサービスの事業所を見回った時は既に避難して誰も居なかった。皆さんの居る所へ避難。ドームへ雪が降り寒く毛布を取りに戻ったスタッフ5人、事務所に着いた途端2階屋根から波が襲ってきたと、ドームに避難し数十分、道路には出ないでとの声、もっと上に上がってと道路に出ず2～3m位の斜面を車椅子・杖・利用者さんを引っ張ったり、押し下ったりでスタッフ全員夢中だった。車に乗せ上の方へ、その時一時避難のドーム前道路に車や家・瓦礫が流されて来ていた。3回

- の移動で中学校へ。2日より利用者さんの精神状態に変化、徘徊の始まり、他の避難者も400～500人いる中で食べる物・水分もなく過ごした。4～5日後から家族が迎えに来たが最終的に迎えの来ない方々は28日まで市にお願いし施設へお願いした。
- 913.すぐに認知症のご夫婦のお宅に行き被災状況を確認しましたがお二人は普通に過ごされていました。本棚から落ちた本もご自分で戻され怪我もない事にほっとしました。ただ、電気が点かない事をすぐ忘れ、訪問したヘルパーに「君が壊した」等とおっしゃる事に困りました（ヘルパー談）。懐中電灯等が見つからず事務所から持参し水道も出なくなった為持参したりしました。3月11日16時からの訪問介護の予定通りにヘルパーさんが訪問してくれた時には感激し涙が出そうになりました（私がヘルパーさんに代わりお二人の食事・おむつ交換等をしようと思って訪問した為）。何回も続く余震に家が壊れないかと不安でした。
- 914.地震当時から3日間かけて担当ケース宅全家族訪問するが全員無事。自宅損壊も比較的少なかった。ケアマネの自宅損壊が一番大変であった。
- 923.3月11日14時46分には岩沼市で認定調査を実施中でした。その日の16時、名取市内在住の独居の方宅で近所に住む長女同席の元サービス担当者会議開催の約束をしていました。地震の状況から会議の開催は頭の中から消えていましたが、本人宅が築50年以上と古く、家屋と本人の身に何かあるのではと頭をよぎり岩沼から真っ直ぐ駆けつけました。通常の倍以上の時間がかかりましたが何とか本人宅に到着。本人宅は地震の揺れによりやや傾いており、玄関も開閉できず中に入れなかったです。長女も合流しガラスを叩き割って何とか中へ入りベッドで震えている本人を屋外へ出し長女宅へ搬送しました。建物の外観の異常もさることながら、自宅内も足の踏み場がなく本人のベッドの直ぐ側には大きい仏壇と箆箆が倒れていました。今思うとぞっとします。
- 924.マンション7階に担当利用者（要介護5、経管栄養）が住んでおり、ライフラインがストップした為併設施設職員の手を借りて担架で施設に誘導し家族と共に宿泊してもらった。経管栄養はお湯に溶かすタイプなので水が止まって7階迄の配給が難しく、またエレベーターも止まっているので電気が復旧する迄入所していた。施設は平成2年開設だが担架の出動は初めてで取り扱いに不慣れだった為手間取ってしまった。
- 925.自分の担当で一人暮らし・高齢者世帯を順次廻って確認したが、避難が必要な人は既に家族やヘルパーが対応しており避難誘導までには至らなかった。統合失調症の方で毎日ヘルパー対応している方がおり、ヘルパー訪問が困難となる為施設に避難するよう呼びかけるも強い拒否があり避難できなかった。その後は夫（要支援1）や近所・民生委員に協力してもらい何とか生活する事ができた。
- 933.当日（3/11）事務所で調票作成中（2階で）。地震直後避難指示が出た為1階のデイサービスを利用している利用者さんと近くの避難場所（小学校）に誘導し、その日は体育館で自宅に帰れなかった利用者さんと1泊した。余震も多く自宅にいた利用者さん宅には、その日は安否確認できなかった。自分の車も流され、また、ガソリンも限られていた為出勤する事も出来ず電話での安否確認を実施。
- 936.電気が止まったままの在宅酸素を行っている利用者を、電気が通電している長男宅へ避難させている。車の手配、ガソリン不足となっている状態で濃縮器と一緒に移動するのは大変。家族からは自家発電の必要性。高齢者二人暮らしとなっている認知症も伴っている利用者の対応が難しい。
- 941.まずケアマネとしてではなく、法人の職員として併設施設の入居者・利用者約120名の安否確認と安全確保を最優先にしなければならなかった。その中には勿論担当利用者

もいましたが…。

- 944.通所介護利用者を指定避難所へ誘導、約30名を家族が迎えに来るまで対応した。家族が来ない利用者については泊まり対応したが、3日目になると夜のみ避難所ボランティアに支援を願った。ALS人工呼吸器利用者、停電の為ロウソクを持ち人口呼吸器を照らし自家発電機が届くまで交替で人工呼吸実施。その際訪問介護員・家族・薬局管理者の協力を頂いた。
- 946.通常は自力で歩く事のできる左片麻痺の男性利用者にスムーズに移動ができるように車椅子を一時的に貸し出した。それにより主たる介護者の妻の負担が軽減された。
- 950.認知症のある一人暮らしの方、長男は東京在住。震災当日はヘルパーさんが訪問。部屋は物が落ちてきて散乱し寝る場所も無い為、隣の住人に本人の対応をお願いする。翌日ケアマネが隣の所の所に訪問し東京の長男と仙台の親戚に連絡し早急に迎えに来てもらうように連絡する事を伝える。電話が繋がらない為、公衆電話に並び東京の長男・仙台の親戚に連絡を取るがなかなか繋がらず、何度も公衆電話に並び連絡を取る（これだけで何時間も時間がかかる）。隣の方からは早く迎えに来てほしいと要望があるが、なかなか連絡が取れずご迷惑をかける。近くの小学校の避難所からは認知症の方は利用出来ないと断られてしまった。
- 956.認知症の一人暮らしの方、ホームヘルパー利用中で避難所に誘導避難を受けたが、避難所で不穏になり地域住民の安眠を守れなかった。家族は東京に暮らしている為家族と連絡調整し迎えに来てもらうようにし、その間ショートステイの手配をした。手配後本人に説明し不安がる本人をショートステイに連れて行った。
- 957.担当利用者の大半が併設の在宅型有料老人ホームの入居であった。施設倒壊の危険性、ライフラインの遮断もあり施設近くのコミュニティーセンターへ避難した。当日は施設からの救助、避難場所への誘導を施設スタッフらと一緒に行った。エレベーターが使用出来なかった状況で歩行困難な利用者様はシートを担架代わりにしたり、車椅子を抱えたりして救助した。自家用車で利用者様をピストン誘導した後、物資を運んで当日夜は利用者様と避難所で過ごした。
- 959.所属法人の老健入所者・通所リハビリ利用者全員の施設内から外への移動、その後施設内への移動に参加しました。介護者が体調を崩し避難先（集会所）からショートステイ利用の支援。
- 960.所属法人の老健入所者・通所リハビリ利用者全員の施設内から外への移動（3F・2F→1F・外へ）、その後外から施設内への移動に参加しました。仮設ベッド・仮設トイレの設置、物資の移動・確保等。
- 961.併設している通所リハビリや介護老人保健施設の利用者を建物の外へ避難誘導した。2階や3階から車椅子の方や寝たきりの方を避難するのはなかなか訓練通りには出来ず時間がかかった。
- 964.震災当日は夜間に地域に入ったが、浸水がひどく場所まで辿り着かなかった。近所の方々や当日入っていたヘルパーさんがいて、避難所へ誘導してもらった。
- 967.当日通所リハビリを利用されていた方の避難誘導をする。2階に避難したが、2階の1m40cm位まで浸水した為全員が津波にアップアップした状態で何とか助かった。ずぶ濡れで大変な状況になった為、また、津波も繰り返していた為施設内から動く事も出来ず一晩居室の瓦礫を取り除いた所に1部屋30人位入って声掛けながら、また、おむつパットを服の中に入れ冷えを防ぎながら過ごした。
- 971.高齢者向け賃貸住宅の中の一室が居宅介護支援事業所・訪問介護事業所となっている為

職員で手分けし、エレベーター停止に対し入居者全員を1階の食堂を避難所として3階・2階・1階から全ての人に付き添い、寝たきり・車椅子の方々は毛布を使い、背負ったり・担架のようにしたりして約40名避難誘導を行った。その日から約2週間、避難生活となりケアマネ仕事より現場の職員が足りないので介護を行い、1日おきに泊りがけで当たった

- 974.デイサービスを利用していた独居のお年寄りを長期間宿泊出来るようにした(デイの施設に泊まる)。
- 975.一人暮らしで難病の方の緊急入所を包括や市に協力してもらい、当日の21時頃短期入所療養介護に繋げた。連絡がお互いに取り合えず大変だった。
- 976.利用者の住む自宅も危険だったので、近くにある老健に緊急で受け入れ願い出たが返事をもらえず利用者はそのまま自宅に戻った(以前その施設を利用していた)。市町村が違うと待遇が違うのかと失望した。
- 977.独居の方を身の回りの大事な物を持って近くの避難所まで送って行った。デイサービス利用時だった為、家までは送ってもらわず敷地内のショートステイの方でライフラインが復旧するまでお願いしました。
- 985.施設長の職務を主にしており、利用者件数は0件でしたので施設の利用者に関わっていた。
- 990.要介護5、在宅中で家族は物資配達があり不在。室内はガラスの破損・家具の転倒あり、余震の中、見守り等の必要があり避難させた。私も二晩一緒に泊り込み介助に当たった。
- 995.事業所併設のデイ利用者の方々をエレベーターがストップした為車椅子を抱えたり、付き添いをしながら出入り口まで誘導した。
- 996.震災当時は施設の入所相談員として勤務していた為施設内での利用者の安全確保等の対応をしていた。
- 997.震災当日、自宅へ帰れない方の避難場所の確保等を行った。
- 1003.独居・女性・認知症、町の避難所では対応困難(誰か付き添ってほしいと要請)な為、福祉避難所に移動するが、そこでも同じ。結局、普段利用していないデイサービスで夜ケアを受けてくれる事になり、お連れして一晩過ごさせた。この間迄4時間付き添う。次の日仙台在住の息子さんが来てくれ仙台へ移動した。
- 1006.訪問リハビリの担当者と担当者会議を行う為に訪問中であった。取り止めて各々事業所に帰る事を促す。利用者宅に介護者だけでない事、他に孫が居た事を確認。本人家族が無事である事を確認後、ケアする上でのアドバイスをを行い早々に事業所へ帰る。救う側がきちんと体制が取れないと大変な事。
- 1010.私自身が研修の為仙台に居たので3日間自宅に戻れず、利用者の安否確認がすぐに出来なかった。電話が通じない為不安でした。
- 1012.大きな揺れが治まった直後に独居の利用者宅を訪問する。玄関の鍵が閉まっていた為庭へ回り戸を叩き来訪を知らせ、玄関の鍵を開けてもらう。怪我はしておらず、玄関の扉を開け放しクローゼットから上着を取り着させ、リビングから本人の携帯電話を探し出し揺れが治まるのを玄関で利用者の手を握り待つ。その間にデイの職員の携帯電話へ電話をし、怪我の有無を確認し事業所での待機を伝える。
- 1014.地震の時直ぐに停電になったので、在宅で医療器具を使用している利用者の顔が浮かびました。当時遅い昼食を購入する為にコンビニに居ましたが、停電と物の流出(店から)と同時に高齢者が2人外へ飛び出して来て、1人は足が震えて歩けなかったので自宅まで送りました。その後医療器具使用の担当宅に向かいましたが“家まで津波はこな

- い”という担当ケースを説得し歩行通路のガラスの破片等を除け自分の車に乗せて近隣の病院まで移しました。毛布は1枚持ちましたが、余裕が無く薬や衣類等を十分に頭が回らず、同僚が1人同じ地区にいて手分けして避難するよう担当のお宅に行く事にしました（1件ずつでしたが・・・）。次に独居の方を・・・と坂を下りた時には大津波に街が流されている所で、ただただ無念さだけで、ぼーっと30分間は言葉も出ない状況でした。
- 1015.訪問中に地震に遭い津波警報が出されました。とにかく寝たきりの方を避難場まで移動させなければという思いで1件目は家人の車に運び入れ、とりあえずの毛布やおむつ・薬を入れて家人に移動をお願いしました。近くの2件目の3人の介護者がいる家へ向かい、一人では車に運ぶ事ができない為息子さんの帰りを待っている間に波が押し寄せました。一瞬の出来事で、近くに居た一人だけ何とか2階に引き上げられました。1階の天井近くまで水が入り、階下に居た2人は助ける事が出来なかったのですが、奇跡的に床上で水に濡れず（ベッドごと浮いた為か？）助かりました。翌朝ベランダより救援を呼んで3人を自衛官に運んで頂くところまで関わりました。
- 1019.ALSの利用者2名について、往診担当の病院へ行き受け入れ確認。救急車の手配をし搬送時援助。
- 1021.訪看との兼任にて震災時対応は訪看として対応。
- 1029.自宅に子供と居た為利用者救助に関しては上司から出勤しなくていいと指示がありお任せしました。

2 安否確認に関するエピソード

- 1.電話や電気が繋がる前は事業所2～3名組み担当利用者の家や避難所を廻った。ガソリン不足にて車の使用が限られていた為、徒歩や自転車で訪問した。日が暮れるのが早かった為暗くなる前の16時頃には業務終了していた。
- 4.ケアマネジャーの前に一人の人間としてまずは自分の命。ライフラインが全く使用出来ない中事業所の近隣を廻るので精一杯。また病院や施設の利用者の介護にあたり毎日が夜勤のようなもの。安否確認等満足に出来る環境ではなかった。
- 5.各利用者宅へ自家用車で訪問した。
- 11.ガソリンが無く思うように動く事が出来なかった。利用事業所を訪問したり、地域ごとに担当ケアマネ関係なく利用者の安否確認を行った。
- 15.車が使えないので1時間以上かけて歩くか自転車。老健内にある居宅なので、正直施設を維持する事で精一杯。自分は居宅のケアマネなので在宅優先なのも分かるし、その通りにしないといけないが、老健だからという理由で行政からはほとんど支援がない中在宅まで手が回らない。現実はとても大変だった。
- 16.他町の利用者で、避難所を3ヵ所廻っても見つからず、町役場でも把握されていない方で4月初め仙台の居宅事業所が役場に来た事で仙台の親戚宅にいる事が確認できた。
- 17.独居で住所登録が東京にある方で、東京の娘さんから母の安否がわからないと連絡を受ける。自分の車が津波に遭い、移動手段もなく、ガソリンもなく自転車を借りて震災後8日経ってから訪問。その方の敷地内に遺体発見し、確認はしたが後で人違いと判明。その10日後に自宅の室内にて帰省した娘さんが発見という事がありました。後に浜沿いにあったケアハウス（大勢の方が亡くなった）の方が流されて亡くなった人とわかりましたが、高齢の方の判別は難しいです。
- 18.電話の使用ができるようになってから、もっぱら電話で確認をした。ガソリンがなく、

- 自分の車も流されたので動きがとれなかった。町から緊急車輛のステッカーを事業所に2枚もらい、優先的にガソリンが入れられるようになった。自分も被災しており時間的には自由になる時間が少なかった。確認後も転居される方が多く状況確認が難しかった。
- 19.当日はデイサービスから避難させた利用者の事だけで正直頭が一杯でした。医療依存度が高く独居の方が一人担当していましたが、幸い訪問看護師と民生委員がいち早く駆けつけてくれて避難所内の救護所に運んでくれた事をその日のうちに知る事が出来安心しました。他の方とは一切電話が繋がらず、優先度の高い数名は2～3日中に訪問したものの、その後はガソリンも気がかりで結局近い方から歩いて訪問して廻りました。
 - 21.サービス事業所と協力して安否確認したが、ガソリンがなく遠くの方は行く事が出来ず、電話も繋がらず苦勞した。デイケア・デイサービスを利用していた人はそのまま戻り、泊まっていたのを確認できるまで心配した。
 - 22.自社サービス部門の方で訪問してくれており安否確認ができた。
 - 23.車のガソリン不足で使用できず自転車で訪問した為、逆に利用者が心配して下さった。サービス側も安否確認して下さい、こちらの確認訪問が後になってしまった利用者もいた。その時「ケアマネ何やってんだ・・・しっかりしろ！」と冗談で言ったり、笑ったりして下さいお互いが安否確認できてホッとした・・・という暖かい気持ちになれた。
 - 24.会社や他のケアマネとも連絡が取れなかった為、一人暮らしや高い者のみの方を自転車で訪問して廻った。
 - 25.管理者から指示なしで確認。その後管理者より自宅待機との指示に対して不安がでた。
 - 27.サービス（同事業所）を利用しているケースについてはサービス側と分担して行った。電話が不通で確認に時間がかかった。
 - 29.安否確認に訪問したいが、ガソリンがなく行けない事があった。
 - 31.利用者のエリアが広い（仙台市全域・富谷町）の為、直接訪問し確認する事がすぐに来なかった（ガソリンの問題）。電話での確認が主で、自宅訪問はガソリン調達が出来てからであった。
 - 37.電話が使えずガソリンもない為に安否確認には時間がかかった。自分の事業所から少し離れた場所は津波被害があり近づけない状況。情報がない中で、自分の安全も図りながらの訪問の際、他の事業所や介護サービス事業所との連絡交換は大切であった。
 - 40.電話が不通だった為一件一件自宅訪問し安否確認を行った。医療依存度が高く訪問看護の利用者については、訪問看護で優先して安否確認を行った。
 - 43.安否確認取れず、流されたかも（？）と思ったところ、電話が通じるようになり“今、病院にいる”と伝言がありびっくり感激しました。津波が来てエアーマットが浮いて助かったとの事。介護者がエアーマットが流されないようにしがみ付いて一晩明かし、夜が明けて救急車で病院へ搬送してもらえて、低体温・脱水という事で点滴をしてもらい、やっと元気になったの！と聞きました。
 - 44.認知症の利用者で息子さんと二人暮らし。食料・水の確保の為外に出なければいけないが、不安に強く思う為出かけられない。早くデイサービスが始まればとても助かる・・・と言われ、非常時こそサービスが切に必要と感じました。
 - 45.震災時、東北大学病院に入院中で退院日に当たっていて、当日来ていた妹さんの福島へ一緒に行った。その後依頼を受け、当面福島で生活するので介護サービスを使いたい、使えるように連携をとる。
 - 46.仕事で外出中であり、何処とも連絡が取れない状態だった。携帯電話が使えるようになってから電話連絡を始めた。

- 56.震災当日、研修参加の為事業所不在。ライフライン停止の為事業所との連絡は10日後でした。交通機関ストップの為事業所には20日後に出勤となりました。
- 57.震災時センター内の利用者と避難。数日他の職員と利用者のお世話をしながらの避難生活。避難所にて他の利用者と家族の安否確認にもなっていた。他の利用者宅訪問は、当日センター利用中の利用者を家族等にお返しした後、その後も避難所暮らしされる独居の方や老夫婦家族等の見守り介護をしながら、2名以上で安否確認。デイ職員と共に居宅介護支援事業所利用者全員と在介で訪問相談の方も含め道なりに廻っている。その後、居宅介護支援事業所として職員が揃った際に再度様子伺いで訪問を行い、必要なサービス等に繋いでいる。
- 58.私は管理者をしています。マニュアルにも安否確認は「指示があってから」にしています。今回は震災当日には近所以外は指示出せませんでした。今回は、海沿いの居宅で安否確認に行った為に津波に流されてしまったという話も聞いて、スタッフの命を守る事も大切だし、その責任もあると思っています。災害→(即)安否確認で良いのだろうか?と思います。ただし、スタッフの安全が確保出来るなら、安否確認は大事だし必要な事だと思います。後に福祉避難所に来る人が少なくて、余裕があったと聞き(高砂)市に問い合わせても「申し込み多数で入れるか分かりません」と対応された事に窓口と現場の違いが大きいと感じました。
- 59.今回の震災のように大規模な災害時は、家族も仕事が出来ずに側にいてくれた。サービス事業所もサービス提供が出来ず話を聴く事しか出来なかった。すぐの訪問時よりも、状況が長引いてからの訪問時の方が相談事は多かったように思う。担当利用者に家屋の損壊や怪我人等がなかった事もあります。
- 61.一人暮らしで生活保護を受給、身内も沿岸部在住で被災している状況。本人の自宅アパートは全壊。行政に相談するも、ショートステイや施設入所等はケアマネでしてほしいとの事。混乱している状況で行政も大変だとは思いますが、情報提供やもう少し相談にのってくれても良いのではないかと思った。事業所の電話が停電と故障で利用出来ず、無料だったので近くの公衆電話より取り急ぎ利用者や家族へ連絡。その後訪問する等行った。同法人内での各サービス提供事業所や地域のサービス提供事業所との安否確認の情報を共有出来た。
- 62.震災翌日から徒歩や自転車だけだったので、とても時間がかかった。他事業所と連絡が取れない事もあったので安否の確認の情報共有がスムーズにできなかった。代替えのサービスを色々頼まれる事もあったが、安否確認を優先したのですぐにサービス調整出来なかった。
- 63.震災当初は通信・交通手段がなく、道路さえも通れない状況で身動き出来ず途方に暮れていましたが、少しずつ道が通れるようになってきた時、メモ帳と一本のペンを持って道路状況の悪い中徒歩や自転車で廻れる所から確認し始めました。家も人もいなくなっている所もあり確認の仕様のないお宅も多くありましたが、確認出来た状況をそのままメモ書きで記録していました。自分も避難所生活をしていたので、班に頂ける1日1部の新聞を見て死亡者名簿の中から利用者の名前がないか探したりもしました。
- 69.自分の娘が安否とれず、情報を求め移動しながら、そのルート近くに住んでいる方から安否確認を始めた。携帯復旧した3/17~携帯番号で登録している所へ安否確認(自宅の固定電話が復旧していなかった為)。
- 70.事業所は電話・パソコン・書類は全て水没してしまったが、本社サーバーで一括バックアップしていた為情報は免れた。NTT・携帯ともに不通となり、パソコン内に入力し

- ていなくても書類に記入していたNO3, NO4・・・の存在となる家族への連絡先も失ったのは残念。災害時や異常気象時は独居及び老老世帯から順次安否確認しているが、今回は名簿共に片っ端から連絡したり、避難所を廻った。
- 73.地震直後から自己判断で安否確認を試みたが、津波が襲来した為断念した。3/12 未明、事業所としての方向性を定め、12日の夜明後から安否確認を開始した。77.優先順位を考え、ガソリンの事も考え効率よく廻るよう努めた。事業範囲内に自宅があるので、自転車でも廻れた事が良かったと思う。
- 85.電話が繋がらず歩いて廻りました（ガソリンもなかったのも車も使用できず）。
- 86.利用者受診同行の際に被災。その為に無事に送り出してから事業所に戻るまでの独居・高齢者世帯を徒歩で確認。翌日から徒歩で七ヶ浜～塩釜～多賀城～仙台市を確認行う。
- 88.在宅は高専賃がほとんどだったので安否確認はすぐに出来ました。
- 90.当時道路は混雑しガソリンも不足していた為、徒歩又は自転車が移動手段でした。しかし、安否が分かり無事である事が分かった事には、ほっとしたのと同時にやりがいはありました。
- 91.自転車で訪問できる所は直接利用者に会いお互いに安心できたが、遠くの方には携帯電話から安否確認をとりあえず行い、後から車で訪問した。利用者・サービス事業所との電話での連絡が出来ず、燃料不足で車を使用出来ず自転車で廻るのは時間がかかり歯がゆかった。
- 92.アパートの玄関が開かず閉じ込められた人がいた（結局自力で玄関を開けた）。
- 95.安否確認の為歩いて行ける所は当日より行うが、当日サービスの利用がない利用者は避難をしていた為確認するのがとても難しい状況だった（避難先がいろいろだった）。訪問介護利用者はヘルパー→主任、主任との話。通所介護利用者は相談員との話。ショート利用者とは相談員とのメールやラジオでの連絡依頼。自宅訪問で不在時にはメモを残して確認、連絡依頼等を行う（再訪問等について）。電話が通じるようになってから本人との会話による確認を行う。Cメールの利用が早くから出来ていたため家族との連絡に利用。
- 96.津波の為近づく事が出来ない方が多かったので、浜通りの方を優先に確認する為に役場や避難所に大きな紙に部落と名前を書いて持ちながら大きな声で尋ねたら、皆さんからたくさん情報を頂きました。津波被害のなかった方はガソリン確保出来てから確認して廻りました。
- 101.2チーム一組対応で訪問し、安否確認や不足等の確認もしました。
- 108.ガソリンがなくなり車での安否確認が出来なくなった為、近くは自転車や徒歩で廻った。優先的に行った所は一人暮らしや老夫婦のみの世帯。
- 111.優先順位を決めてからまとまった地域へ安否確認した。利用者の周りの地域の方が高齢者お湯を配る等援助していた事が確認できた。
- 112.当日独居、日中独居、在宅酸素の利用者を優先的に確認。3/12はガソリンが少ない中1日で全ての利用者の所に廻ろうとした。4号線の道路が混んでいて大変だった。
- 114.特にライフライン（電気・電話）が中断された時、人力での動きがない事（車も燃料に限り有り）、自転車と体力が必要と感じた。独居や老々またはその方の家族環境を常に十分に知って即対応できる事が大切。
例：あそこは家族が多いから大丈夫とか隣に娘夫婦がいるから大丈夫と思わない。
- 115.病院の手伝いの為自分の担当者の安否が気がかりであったがどうしようもなかった。電話が通じて安否が確認できほっとした。事務所づてに聞く事もあったので連携の重要性

を感じた。

118.ガソリンが少なく、1台の車に乗り合わせ同じ方向を廻って歩いた。他の人が担当するケースについて知る事ができた。

130.電話が駄目なので徒歩で対応し時間がかかった。

132.車が利用できなかったので自転車・徒歩等で訪問した。

144.老夫婦世帯、一人暮らし世帯はその日のうち安否確認し、食料等の確保等連絡調整をした。

145.安否確認に行った際、ライフラインが止まっており懐中電灯がなく、認知症により不穏状態になっていた為電灯やろうソクを届け、部屋を明るくした事によって少し落ち着いた。

老人世帯の為水が無く、暫く水と食料を運んだ。近隣の知人が雪をお風呂に入れてトイレ用の水を用意したりしてくれ、近隣との関わり的重要性を感じた。

日中独居で、トイレで被災して水が足元まで上がってきた。ADL↓の利用者を近所に住むヘルパーさんがおぶって助け出し一命を取り止めたが、その後体調を崩し急遽おむつを届け自宅で様子をみていたが難しくなり施設入所へ繋げた結果、病状の悪化により入院・死亡した。

筋ジスの方は酸素供給がうまくいかず入院となったが、結果著しい機能低下となった。安否確認に行った際歩けなくなった為おむつ使用となるも、物品がなく事務所よりおむつを届ける。

デイサービス利用中だった為何とか避難できたが、家族（夫・長男）が流され一人になった為グループホーム入所に繋げた。

146.一人暮らし、または老夫婦のみでは買物や給水に並ぶ事もできず困っていらっしやると判断。事業所にあった水や食料持参で安否確認しました。顔を見てこちらがほっとしたところです。隣近所の手助けもあった方もいらしてコミュニケーションの大事さを改めて感じておりました。

148.寝たきりや独居の高齢者をヘルパーと二人で福祉避難所へ誘導した。

149.水を汲みに出かけられない利用者が多数であり、頻回な訪問が必要。

151.地震発生直後、自法人の災害対策要綱に基づき利用者の安否確認を行う。最優先に医療面の強い方、一人暮らし・老世帯、日中独居・日中老世帯へ電話での安否確認。翌日同法人でのサービスを重複している利用者もあり、安否確認が重複しないようリストを作成、ガソリン不足もあった為各サービス事業所等と協力し手分けして訪問。効率よく安否確認の訪問が行えた。

152.地震発生直後、災害対策要綱に基づいて責任者の指示に従って利用者の安否確認を行う。一人暮らし・老々世帯・日中独居世帯へ訪問で安否確認を行った。ガソリン不足もあった為、各サービス事業所と協力をし、手分けをしての訪問で安否確認を行った。

153.サービス事業所、特にヘルパーさんの動きが早かった。

155.電話が繋がらない為、訪問して自分の目で確かめた。訪問すると既に避難所に誘導してくれている事例もあり、近所の方がその旨を教えてくれた。

156.とにかく移動範囲が広い中、ガソリンが手に入らないのは苦しかったです。家族が来て連絡までとったにも関わらず、独居の方がそのままの状況になっていた事が数日後に分かり（以前から家族間での責任の譲り合いのある状況）、今までの自分の対応について考えさせられました。地域包括へ大変迷惑をかけてしまいました。

157.道路の亀裂にタイヤが挟まれて立ち往生。通行途中の方に助けて頂いた。自身の安全を

確保しながらの安否確認。今後不安である。

- 159.独居で認知症の方の所在が分からず探した。地域包括支援センターや区長さんと連携し地区の集会所に避難していた事が確認できた。
安否確認の行動はできる限り2人で行った（管理者指示）。
- 166.一人暮らしの方をすぐに訪問しました。とりあえず避難所になっている公民館と一緒に行こうと思い防寒着・菓等を準備し、玄関に娘さん（仙台在住）宛に怪我もなく、お元気である事と避難先の場所を書いて出ようとしたところに近くの民生委員さんが来て下さりお願いしました。日頃から民生委員さん、区長さんに顔を繋げておく大事さを感じました。
- 167.ガソリン不足の為車で自由に動けなかった。所属法人の他のサービス事業所からの情報で知る事ができた。
- 172.自分の父親が震災後体調を崩して亡くなってしまい、自分の業務に戻ったが4月で担当利用者の確認等何もできなかった。
- 173.地震後すぐ事務所に戻りヘルパーと協力し、一人暮らしと高齢世帯の利用者の家を二人一組になって訪問し安否確認を行った。志津川病院へ入院していた方の安否が心配でした。1名は翌日死亡。もう1名は数日後転院したが2週間後死亡しました。全て電話が使えるようになってから死亡連絡が届きました。
- 176.電話も不通になり、移動手段も車もガソリン不足により片道10km程離れている利用者宅へ行くのに自転車で訪問をした。
- 177.家屋倒壊の恐れがあった居宅へ避難支援で訪問。既に訪問してもらっていたヘルパーさんも心配し来宅しており、近所の男性の協力を受けて78kgの寝たきりの方をヘルパーさんの車の中に介助。避難場所へ向かうも、その場所も被災しており入室困難。泊まれる所を見つけるまで市内を探し回り受け入れ先を探しました。道路が通れず迂回しながらの訪問やガソリンが不足し自転車で雪の中を訪問しました。自宅が空で家族とも連絡が取れず避難場所を探し回っていました。
- 178.3月11日の地震で屋内に被害があったが、本人の意向で一人暮らしを継続するも、4月7日の余震により下駄箱やボード類の転倒により移動が困難となり、自宅内の環境整備が整う間緊急ショートステイに繋げる。
- 181.サービス利用が震災まで全くなかった方が、震災を機に避難所生活となり、そこからサービス（入所施設）に結びつけるのに苦労した。震災まで全くサービスを使っていなかったので事業所の協力を得づらかった。
自分も被災者である場合（大小ありますが・・・）の安否確認や業務の優先、開始時期の判断が難しい。使命感・責任感の強さに頼らざる得ないのか？
- 182.当日はデイ、翌日からグループホームへ泊り込みしケアや水・食料確保に走っており、安否確認はガソリンが落ち着いてから廻りました。約1ヶ月はグループホームへ泊り込みました。
- 183.当日は電話もできなかったので、サービス事業者の報告、自転車での訪問を行った。
- 184.私が行った時は親戚が来ていた。民生委員も来てくれた。同じ人の所に色々な方が来る事になり、役割を決める事が必要と思った。
- 185.電話が通じたのが3/18で、それまでは近場の方しか確認が取れておらず、その間所属しているグループホームの利用者の介護や食料・水の確保等で担当の利用者まで手が回らず3/18以後電話が通じた際に全員の確認が取れましたが、その間に集会所やお寺に避難していた事を後から知った例もありました。

- 189.当日の安否確認時、老夫婦二人暮らしのお宅。夫が寒くて耐えられない、具合悪くなりそうだとので一旦事務所に戻り、事務所にあった石油ストーブを持参しお貸しする。事務所ではその時点では水が出たので、1.5ℓのペットボトル5本に水を入れて持参する。訪問する前に、このような事を想定していれば車に積んで行けたのにと失敗感。ガソリンももったいなかった。
- 190.一人暮らしの方はたくさんの事業所や民生委員、近所の方がダブって訪問。老夫婦のみの世帯は通所のみの場合安否確認が遅くなってしまった。安否確認は共同してできるだけ早く廻る必要あり。ダブるのは時間の無駄。電話がストップしていたので、携帯で遠くの親族に安否を連絡した。
- 191.ガソリン不足もあった為、できるだけ効率良く訪問できるように同法人の重複する利用者も合わせてリストを作成し分担して訪問した。
- 193.ショートステイ先の施設を利用者と共に回り、緊急入所させて頂いた。
自転車で高齢者宅を回り安否確認を行った。
- 197.ガソリンがない中で自分の利用者を一人で廻るのは不可能で、事業所内で分担して廻った。
- 198.電話が不通だったので訪問しか方法がなかったが、ガソリンも不足しケアマネで乗り合わせて訪問した。
- 203.当日は、転倒等の事故がないか確認しながら、家の中を移動できるよう、ガラスの破片や散らかっているものを最小片付けた。海岸沿いが、津波の被害があったと事を聞いて、次の日、自宅に向かったが、途中で道が無くなっており、役場で確認したが全て流されたようで、利用者も家族とも連絡が取れない状況で何も分らなかった。電話が通じるようになり、子供さんに連絡をとることができ無事で居ることが分った。
- 205.確認手段の方法（電話連絡、訪問）がライフラインの切断でできない。ガソリンが無い等の理由で確認するまで時間がかかった。家族が居るので大丈夫と思い優先順位を下の方にしていたが、安否が確認できた時には、認知症状が急に悪化して家族だけの対応では困難になってきた。地震後直ぐに訪問したが、「ここで大丈夫だから」と避難を拒否された（独居で家具等も倒れている状況だったにもかかわらず拒否された）。当日は余震も強く、自分の身の危険を感じ訪問を途中で中断した。
- 207.当日自分が休日であった為、遠方に出ており帰宅困難者となってしまった。その為、直ぐ安否確認ができなかった。幸い、利用者には大きな被害や緊急対応が必要な方が居なかったが、もしもの場合、担当CMだけではなく、事業所としてどう対応するか検討が必要だと感じた。また、ガソリン不足とライフライン（電話）が使えず、安否確認に手間取った。
- 210.職務上、利用者優先だとは分っているが、あまりにも震災の規模が大きく正直、自分の家族の安否確認の方が大事だった（幸い利用者が少なく、直ぐ安否確認が取れ家族との連絡に時間を費やすことができたが…）。
- 216.3人のケアマネが居るが、2人体制でスムーズに安否確認を行った。ルート上で次々安否確認を行いチェックした。留守宅には、メモ紙に訪問した事を記した。何かあった際の連絡先を明記した。
- 218.電話が繋がらない為、直接訪問にして安否確認したが、車のガソリンが貴重な為、自転車で安否確認をしていた。
- 220.震災の時は移動中で車中でした。信号が停止し大渋滞となった為、通常事務所まで30分で帰れるところを2時間掛けて戻り、それから安否確認開始。事務所から近く、独居

又は高齢者世帯の方から回り始めたが、やはり渋滞で思うように回ることができなかった。19:00近くまで掛けて10件程度安否確認を行った。中には親類の方がいち早く駆けつけ自宅へ連れて行ってくれたケースもあったが、大きな災害になっている事を知らずにいつものように布団に入り寝ている独居の方もいた。夜になり信号が止まったままで道路の路面状況も分らないまま車を運転するのは危険と判断。他にも心配な方は居たが、翌日安否確認を再開することとし帰宅。翌日以降も安否確認を続けたがガソリンの補給もままならず、雪の中、両手に水、食料を持って歩いて利用者宅を回ったこともあった。全員の安否が確認できたのは1週間近く経ってからであった。

- 221.徒歩で回ったが限界があり、利用者宅で自転車を貸してくれた。
- 222.安否確認に自転車で回っていたら雪が降ってきて、予定通り終えたら全身びしょぬれだったし寒かった。
- 223.人工呼吸器を使っている人について、ヘルパーが歩いて病院に連絡、入院の許可を得た。病院から迎えが来るまで、マンションの自家発電の電気を優先的に使わせてもらった。
- 224.連絡手段がなかったが、事業所さんからの情報が大変助かり、本人に連絡伝言することが出来ました。後から感謝の言葉を頂きました。
- 225.ガソリンの関係や連絡、その他の事を考えると、2人体制で安否確認に巡りました。近所の連携が取れており、涌谷町では、訪問時には、近所の避難所に居る人が多かった。
- 226.行政と連携の下の行動でしたが、時間の制約等ありました。事務所として話合っって優先順位は決めて行動しましたが、行政と一緒に行動は気をもむ所もありました。
- 230.電話が繋がらないところがほとんどだったので、ケアマネジャーが一台の車を利用し各自訪問、隣近所や友達などに確認したが、緊急の際の安否確認は家族だけでは難しい面がありました。むしろ友人や近所の方からの情報が役に立ちました。今後はその人達の連絡先も取り入れて行こうと思っています。
- 234.ケアマネだからという動きは無く、看護師として動いた。自分の担当でなくとも、看護で関わっている利用者の調整にも働きかけを行っていた。
- 237.私の居る事業所は、複合施設のため「ケアマネジャー」としての動きは自由にできなかった。安否確認は事業所全体で行った、確認漏れが多く見られた。直接安否確認したい所も、上の指示通りでないといけなかった為、後から「来なかったね」と言われた。
- 238.複合施設ということもあり、在宅サービスを利用している方全てピックアップし、職員2名一斑となり、担当地区を決め安否確認に車で巡回した。自分の担当していない利用者宅にも行くことになったし、逆に自分の担当の方でもいけない方がいた。吸引の必要な方一名、かかりつけ医と連携し入院させて頂く。
- 238.水は各方面（地域の井戸のある家、他県からのボランティア）から届いた為、特に不便はなかった。ガスボンベがあったので、それで調理を行う。食材は在庫と地域からの差し入れがあり対応。夜は懐中電灯使用。石油ストーブは数に限りがあったので、日中は衣類で調整。電話の使用はできないので、直接利用者宅や病院等へ出向く。その際近場は自転車を使用了。
- 243.安否確認をしたくても遠方の利用者さん（家族あり）とは連絡が取れず、ガソリンの関係で訪問できなかった。そのような中、ショート予定だった方が事業所判断でキャンセルとなっていた。それは事業所から家族、ケアマネには伝えられていなかった。（短期入所事業所は機能しており、他の方の利用を優先していた。）
- 246.電話確認で（電話が復旧したのは4日後）確認取れない方は、事業所で相談しガソリンの残量を見ながら自宅を訪問しました。（ガソリンが正常に入手できたのは1ヵ月後でし

た。)

- 247.優先度の高い方は、ピックアップして訪問したが、ガソリン不足のため事業所の車両の使用に制限があり、また施設内での支援や連絡係として事業所内に留まるようにと指示があった為、担当者全員を訪問することができなかった。法人としての立場もあると思うが、個人的には歩いてでも早いうちに、全員の安否を直接訪問して確かめたかった。
- 250.震災当日は回線が繋がらないところが多く、直ぐには動ける状況でもなかった。何度か電話確認を行い、翌早朝に自宅を訪問し、安否確認を行った。
- 251.災害時は住宅型有料老人ホームに勤務していました。当初は自宅に帰宅しましたが、家族の安否確認後施設に戻り、入居者ケアにあたりました。食材が関東のほうから納品されていた為、食材の確保とオムツの在庫がなかったので、連日、雪の中自転車で薬局を回り購入したり、食料品確保の為に買出し等、他のヘルパーと同様に、排泄介助、他全て生活に関わることについて行いました。施設の庭で、木を燃やしてご飯を炊いたりしました。
- 254.震災後電話も通じず、職場から自転車で動ける近くの特に独居の方の自宅へ訪問した。近所の方が声をかけたり、差し入れなどが有ったようでよかった。また震災後は余震も多く当日は、家族の安否を優先した。職場へはバス、地下鉄を利用して行っていた為3/14(月)から出勤、利用者に電話(自転車で遠くて訪問できない方)で安否確認をした。また施設から安否の電話が入りホッとした。ショートステイ利用していた人:独居、要介護4、電話に出られない。タイミングよく震災時利用していたので排泄、食事など確保されていた。1人で動く事が多い、こういった非常時には、地域包括等連絡をとり、チームで動き、どんな役割をしたら要介護者が安心できるのか、もっと考えられるのかなと思った。
- 257.自宅が被災し出勤する事も困難であったので、携帯から利用者に連絡をとった。次の日には車で各利用者宅を訪問、状況確認の他、事務所の連絡先を本部一本にまとめている事も伝える。(後に事務所全壊判定の為本部へ移転)地域、家族の協力体制もあり、サービスに繋げなければならないケースはなかった。
- 258.施設内災害対応マニュアルに基づき、独居、高齢者世帯を優先に安否確認を行う。
- 259.管理者として、自宅が崩壊している職員に対して、安否確認をしろとは言えない。
- 262.安否確認するにも、道路が割れていたり、夜間の緊急招集時も、慎重に運転しながら職場に向かった思いがあります。
- 263.人工呼吸器使用の人は、県スタッフ、主治医連携の下、電源ギリギリで病院へ緊急搬送できた。人工呼吸器、在宅酸素療法使用者の対応等、日頃から関わるスタッフ全員で、共有し、確認をしていくことが必要と痛感した。民生委員等の協力で独居の方も環境を変えず在宅で過ごせたことは評価できる。災害は突然やってくるものだが、日頃から対応の仕方をスタッフ間で話し合う必要があると思った。(震災当日、1人で安否確認となったが、出来れば2人一組での行動がより安全と思われた。)
- 272.ガソリンが不足しており、行動範囲も限られ、電話も使用できない状況でした。事業所の戸に大きな紙を貼り、ボールペンを置き、連絡ごとを記入し連絡を取り合いました。町役場までは自宅から自転車でいける距離でしたので、町役場へ1日、2日は通い情報を集めました。
- 274.私有車にもガソリンがなく、公用車の使用も上司から使用許可が出ず、直ぐに全員確認することができませんでした。丸森は、役場主導で民生委員が高齢者世帯の安否確認を行ったり、在宅酸素や透析の方を集めるなどしてくれたので助かりました。

- 274.通電しガソリンが入手できるようになってからは、既に民生委員で確認ができており、包括で把握できていた。
- 277.大震災の時はガソリンの供給ができず、町内の独居の方の安否確認しかできなかった。訪看が医療依存度の高い独居宅を訪問し、「今、ケアマネが迎えに来てくれるから」と、着替え等を行ってくれていて、とても助かりました。
- 284.行方不明になった方はデイサービスを利用して一人でした。デイサービス崩壊情報が入ってから探し続けた。1週間後死亡説も届いたが、ある日家族より電話有り、母を引き取ったとの報告あり安心。自宅は流され何も無い状況でした。
- 293.独居者の自宅訪問をした。ベッドから動かないようにするので、自宅に居ると言われたが、2、3日後に転倒しヘルパーに発見され入院。その後施設利用となった。
- 301.各関係機関が、それぞれ安否確認を重複して行っていたことがあったが、その情報が統括されていないことが、今後の課題と思う。
- 306.若林区利用者宅が津波で流され、避難所へ避難していたが、どこの避難所に居るかわからず、いろいろ回った。結局確認できず、その後包括より連絡があり無事を確認できた。家族同居の利用者は、家族が対応していて問題なかった。また一人暮らしでも、娘や孫が対応していて特に問題なく済んだ。
- 307.サービス事業所との連絡が取れなかった為、各事業所判断にて安否確認となり、重複したケースがあった。サービス事業所からの安否聞き取りにより、利用者訪問は落ち着いてから行くが、逆に家族からクレームになったケースあり、居宅変更となっている。(遠方の為、ガソリン不足により訪問まで日数がかかった。)
- 310.当日、独居の方の安否確認をした。
- 311.当日や翌日は、既に不在宅が多く、本人の居場所がよく分からない(避難所なのか、子供や親戚宅へ避難したのか・・・など)ことが多くありました。また、同事業所内では安否確認も重複することなく行えましたが、他事業所とは大分重複してまわっていた印象があります。効率化を図ればもっと違う事もできたように思います。
- 313.電話が通じないため、自分の足で訪問するしかありませんでした。暗くなってからも安否確認に車を走らせたが、家に着くと誰もいないため、近所の人に様子を聞きに行くところかの避難所へ行ったかもしれないとのことでした。当時、避難所は大小100ヶ所以上あったようで、その利用者の安否が確認できるまで2日間を要しました。
- 315.広域支援のため、ガソリン確保が非常に大変であった。自宅に訪問した際、避難所に移った方がいたが、実際の指定の避難所でない所にいたケースもあり、確実な安否確認に手間取った。
- 316.当日の安否確認が比較的行えたが、後日ガソリン不足にて訪問ができなかったりした。自分の通勤も難しくなり、行政にかけあったが、ガソリン不足が解決できず、近い職員に自分の利用者へも確認に向かって頂いた。快く引き受けてくれて、利用者も安心したとの報告あり。
- 321.事前に通常の連絡先・緊急時の連絡先を把握していても、連絡がつくまでに時間がかかったケースもあった。自宅訪問しようにも、車の燃料が確保できず、結局自宅訪問で来たのは1週間～10日後という状況だった。
- 322 電話連絡がつかず、自宅訪問しようにも車も燃料の確保が難しく利用できず、自転車を利用。家族宅などへ避難された利用者の安否確認がなかなか取れず、連絡待ちのケースもあった。
- 327.電話が不通な利用者がほとんど、居宅事業所も津波により全壊。パソコン他、書類など

- も流出。本社が水被害に遭わなかったため、バックアップしていた情報を元に、本人・家族へ電話をした。家族が本社へ連絡くれる場合もあったが、被害が大きかった地域は確認できず、会社の車が利用出来るようになってから毎日安否確認に出掛け、各避難所をまわった。避難所では色々情報を得ることができた。市内・県外へ避難した利用者も多数、居宅変更のため情報提出した数は多数であった。
- 328.出勤することが出来た職員だけ本社に出勤し（居宅の事務所は被害にあったため）、電話が通じるところは電話で確認した。でも電話はほとんど通じなかったので、車で行ける所は訪問してみたり避難所に回って安否確認をした。また各事業所・他社とも連携を図った。私個人は自宅被害にあり、ライフラインも断たれ連絡が取れず、ようやく連絡が取れたのが震災約2週間後だった。その後から自宅でできる範囲で、利用者の安否確認や自転車で行ける範囲で訪問した。
- 330.車に家族ごと避難している方、家が崩れかかっている方、ライフラインが停止して食事もままならない方などを緊急入所へつなげました。老健併設なので、緊急性のある方は布団や食料などを持ち込みで宿泊利用していただきました。
- 331.住宅型有料老人ホームのため、各居室をまわり一人ずつ安否確認を行った。
- 337.ケママネより、事業所の方が安否確認に早く訪問しており、独居でない方に電話で安否を確認したら「随分遅いね」と言われた。
- 338.利用者さんの安否確認に伺いたい気持は十分ありましたが、電話が繋がらない・ガソリンが手に入らないため、なかなか思うように動くことができなかった。
- 340.当日、当事業所の通所利用者の安否確認し、今後の対応（施設に宿泊）を確認。他は3日後から確認。全部確認できたのは電話が繋がった18日だった。
- 343.津波が来た場所への安否確認がなかなか出来なかった。サービスに入ろうとしても、立入を禁止されたため提供できなかった。
- 345.併設している訪問介護職員と分担して、安否確認を行った。
- 349.併設施設の他サービスとの連携を上手く行えず、同じ家に何度か行くことがあった。
- 350.3/18安否確認で訪問すると不在。電話も繋がらず。3/19ある特養より電話あり。3/11自宅崩壊の危険を感じ、本人（介護4）・家族で避難所へ。だが車椅子使用者であり、体育館で過ごすのは大変となり、たまたま避難所にいた保健福祉課の人へ相談し、行政判断で特養利用。3/22ようやく家族と連絡繋がる、4/4ショートステイを退所、4/5本人と面談。
- 352.数日前にも震度5の地震があり、優先的に安否確認することは行っていたので、3/11も同様に指示をしようとしたが電話が繋がらず実際に訪問し確認した。しかし、あれだけの被害の中、安全を確保できない所に職員に指示命令をすることは避けざるをえなかった。これまでの地震と同じに対応してはいけないと判断した。使命感にかられて、安易に動くのは適切だとは思えない。毎日、市の対策本部に通って情報確認に行った。長期戦と構え、私の判断であえて職員を自宅待機にさせ、メールでのやり取りとした。救急医療と同じ位置付けとして、移動手段のためのガソリンの優先給油など、社会全体として認識を高めるべきだと思う。
- 353.ライフライン使用不可、ガソリン不足のため、遠くの方への訪問に時間がとてもかかった。ガソリン調達もとても難しく、上司が何度も行政へ足を運び状況を説明したが、なかなか優先車として認めてもらうことが出来なかった。1週間後位から少しずつ、ガソリンも確保出来るようになったが、遠くの方への訪問が出来るほどではなかった（個人調達もしながら）。

- 354.電話が繋がらなかったため、直接行って確認した。
- 356.2日で各自抱えている全利用者を回った。ホームヘルプ・デイサービスと分担した、避難所へ避難している方の所在確認が大変だった。
- 363.電話連絡ができないため1軒1軒家を車で移動し確認した。ガソリンの確保が大変だった。
- 365.ライフラインがストップし電話が繋がらないので、実際に訪問する手段を取ったが、ガソリンの供給もままならない状況で、広い範囲をカバーするために優先順位を決め、手分けして安否確認をした。徒歩や自転車も活用した。予め、独居や高齢世帯のリストを作成していたので、リストに上がっている方はスムーズであった。近所の方や親戚の手を借り、避難所に行っている方も多く、なかなか所在がつかめない方もいた。携帯電話が繋がるようになってからは、その他の利用者の安否確認を始めたが、自宅電話番号しか分からない（パソコンには情報が入っているのに見られない）方も多かった。
- 366.事業所として、緊急時の訪問リスト（フェイスシート・地図など）が作成されており、それを活用して訪問に回った。
- 370.安否確認の優先順を設け確認したが、終えるまで時間がかかった。民生委員らの協力も得にくいなど、これまで考えていた方法やルート以外の工夫が必要と感じている。
- 371.避難所を変更しているために、確認が遅くなった方がいた。避難所からどこに移動しているか名簿の記載が欲しかった。仙台の娘さん宅に避難しているものと思いきってしまった（ケアマネ）が、公民館→保健センター→農業改善センター（移動する際、介護ベッドが必要との連絡で確認）→転倒し骨折入院→仮設住宅
- 373.私は12月に出産したばかりで、2月に仕事復帰したものの、震災によりベビーシッターさんに保育を断られ、事務所で子守しながら安否確認を行った。時には事務所のスタッフに子供を見てもらいながら訪問したり、自分自身思うように動けないことがとても辛かった。家族が事務所に来られ、「施設に入れて」というケースが2件あった。角田市の①はくあいホーム、②あんしんホームに繋ぐ。どちらもすぐに対応してくれ、書類の提出求られず、口答で全てOKだった。ホームページはとても役立った。
- 374.行方がわからない方がおり、確認できたのが3ヶ月後になってしまった。ガソリン不足のため、思うように動くことができなかった。訪問介護からの安否確認の情報があり、助かりました。
- 377.当日は徒歩で可能な範囲のみ、利用者宅を訪問。3/14より徒歩・自転車で可能な範囲を訪問。その他、電話・携帯などにて、家族・事業者と連絡し安否確認。固定電話のみの方は連絡がつくまで1週間かかった。
- 387.当日は一人暮らしの方を優先に訪問した。ガソリンの関係で回れる所の確認をし、サービス事業所からの連絡で確認できた所も多かった。
- 383.独居・高齢者世帯が中心であったが、介護者が怪我をしており、介護に当たれないなどの状況があった。
- 389.安否確認については、事業所内で確認の必要のある方を担当に関わらず確認した（ガソリン不足もあり、直接訪問出来なかった）。担当利用者の安否確認は電話が繋がってからしか出来なかった。
- 392.ガソリンの供給が不足していたため、限られた燃料で安否確認をした。また、電話も通じず、直接出向かなければならず大変だった。
- 393.電話が通じなかったり、ガソリンの流通がストップしたため、なかなか思うように動けなかった。

- 397.ガソリンが限られていたので、遠い所から複数のケアマネが同乗して行った。
- 401.自宅が半壊であるが、老々介護のため入所できず、避難所で生活したが避難所では十分に対応がとれず(人手が足りない)、結局状態悪化。夜間の安否確認は微妙な問題がある。電話ではつながらないので直接訪問しかないが、電気がついていなければ起こす訳にいかず、何で確認するか困ってしまう。無事のサインを外部に知らせる仕組みが必要か？
- 402.ライフラインが使用出来ず、思うように安否確認が進まなかった。ガソリンの調達ができないため、遠方への訪問がなかなか出来なかった。
- 404.安否確認は大切だと思うが、自宅の事や他のサービスが利用できないため、自分でオムツ交換や家事援助を行った。
- 405.道路状態の確認が出来なく、確認に戸惑った。
- 407.遺体確認の際、家族(独居のため別居の兄弟より)から、当時どのような服を着ていたか、体の傷や特徴の情報を教えてほしいと依頼があり、把握していた情報を提供した所、遺体が本人と判明できたと感謝の言葉を頂いた。
- 410.災害地域へ入るのに制限があり、思うように確認出来なかった。
- 413.地域の避難所(本当は避難所でなかった)にいた夫婦(妻:視力障害、夫:認知症)が、同じく避難していた人たちとその建物の管理者から、(認知症の夫が他の人達に迷惑をかけているため)早く出て行って欲しいと言われ、早急に荷物をまとめ、入所施設を探した。、夫婦別ではあるが、一日がかりでそれぞれその日のうちに入所が決まった。
- 417.通信手段がなく、自分で移乗もできない人が福祉避難所への移動や何か必要なことを伝える事ができないので、ケアマネ自らが足を運ぶのが一番の通信手段となるのではと思った。
- 421.余震も続いている中、不安が精神的にも負担が大きかった。家が壊れそうなのに避難しない人もいて心配だった。自分の対応に正解がないので、「これでいいのか」と言う思いはずっとあった。
- 435.一人暮らしの方は通所に居たため、そのまま通所にとどまってもらった。遠くにいる家族に連絡が取れず困った。次の日ショートを利用する予定の人もいた。市営住宅に一人暮らしの認知の方は、ヘルパーがいち早く対応して集会所へ連れて行ってくれた。訪問に道路が渋滞して、なかなかどりつけなかった。ガソリンスタンドめがけて、長蛇の列だった。とりあえず病院や通所で過ごした方のその後の対応に苦慮した。ショート利用者はそのまま利用していただいたが、利用していなかった方のショート先が探せず、区役所等と相談したが、がちがあかなかった。避難所や遠方のショートを利用しながら、高専賃に入居した方もいた。
- 436.①夫は通所リハビリで被災して、施設から自宅に戻るようと話しあったが、要介護3の夫婦だったので、困って行政に相談し福祉避難所へ繋げた。妻はお試し通所介護利用中で、ヘルパーが行き先を確認した。②一人暮らしの方は、看護師・ヘルパー・往診・ケアマネで食事・ケアをみんなで対応。もともと一人暮らしが困難だったので、急いで高齢者賃貸住宅に入居(3/19)。玄関先に安否確認など必要な情報を共有できるようにした。
- 437.自動車などで安否確認に行く時は食べ物を持参したので喜ばれた。
- 438.電話が繋がらず、かなり遠くまで自転車で訪問していました。
- 439.優先したのは独居の方(日中独居を含む)。震災直後にて、余震が続き、危険かと思われたので二人組になり、安否確認をした。医療依存度が高い方や要介護度の高い方に關しては吸引などの対応で訪問看護師(同法人の訪看)が入ることや、ご家族の方がしっ

- かりされていることもあり、ケアマネサイドでの結果的に安否確認は後の方になってしまったが、これに関してはもっと早くケアマネからも確認をすべきだったと反省している。
- 440.自分はその日は休日でした。公共交通機関はストップ。遠方にて勤務できませんでした。同じ法人の診療所で出来ることはお手伝いしていました。その訪問看護ステーション、ヘルパーステーションでは次の日おにぎりを作り、ホッカイロを買い求め訪問していました。ポットのお湯と布団をもって。私はおにぎりを作って届けたり、ポットにお湯を入れて届けたりしか出来ませんでした。自分の利用者さんの安否確認はすぐに出来ませんでした。
- 441.独居の2号生保。ケアマネ各事業所とも安否確認し向かったが、ヘルパーさんが避難所に避難させた事が伝わらず、情報共有できず、一時行方を把握できなかった。ただ、避難所では服薬の介助が十分に行えず病状悪化し、役所の介入で福祉避難所にも移動したが、最終的に入院となった。
- 456.日中独居の方を訪問した時、自宅は留守になっており心配しました。電話連絡が取れず、別の方の安否確認中にご家族と会うことができ、避難所に連れて行ったことを確認できました。とても安心いたしました。ガソリンも不足しており、1台に2人で乗り、お互いの利用者宅を方もさせていただき、安否確認しました。ケアマネジャーの顔を知ってもらい、今後の電話対応もしやすくなると思えました。
- 457.一人暮らしや日中独居者は、誰とも話す人がおらず不安が大きく感じられた。人と会話することで、気持ちが落ち着いた様子があった。余震があったり、利用者を訪問して急な対応も必要な場合もありえるため、二人体制で行動した方が良いと思われました。地区担当の民生委員や区長さんが、一人暮らしの方を後日避難所に連れて行ってくださった方もおり、大変助かりました。後日、一人暮らしの方は親類の所に行ったり、娘さんの所に生活環境が安定するまで過ごされました。
- 459.当日は公休で自宅にいました。翌日、出社し居宅内での話し合いにより優先順位を決め、安否確認を行いました。自分のケースに限れば、被害はありませんでした。一人暮らし・老夫婦世帯のケースは、家族が来ていたり、町内会・民生委員の訪問があったりしました。本人・家族のマンパワーや地域の力の重要性を感じました。
- 460.ケアマネやサービス事業所が単独で動くと非常に効率が悪い。町内会や包括支援センターなどと協力できると良い。例えば、どこかで安否確認が済んでいる家庭には「済」等の印を貼るとか、旗を掲げるとか。自助努力を促すことも必要と感じた。
- 463.医療依存度の高い方、常時吸引が必要な方、停電のため家族が交替で注射器利用して吸引をしていました。訪問看護師さんより方法を教えて頂いたので、どうかしのぎました。入院にも至りませんでした。4日目には家族も疲労困憊の状況でした。
- 465.電話が通じてから1件ずつ連絡し、連絡がつかない家についてはガソリンが入るようになってから車で訪問した。
- 468.ガソリンが不足する中、徒歩や自転車で訪問する件数が多かったです。訪問するとほとんどの方から、「わざわざ来てくれてありがとう。大丈夫だから、自分の事をして」と言われました。ご近所の方の支援が早かったようです。私の担当する方々は皆、落ち着かれています。
- 470.電話が繋がってからの安否確認となった。自分にも家族がおり、訪問できなかった(ガソリンもないため、動けなかった)。結局、全て電話でのみの対応しか出来なかった。
- 472.震災当日は、道路状況も分からないため男女ペアで徒歩で行ける範囲で独居・老人世帯

- を中心に活動。次の日から5人中2人の同僚が出勤できなかつたために、家族情報などの洗い出しをし、優先順位をつけ活動。各事業所との（同法人内）連携を図り、安否確認を交換。またサービス利用中の利用者もいたので、事業所をまわり安否確認。
- 474.事業所内で方面や業務を手分けして、安否確認を行った。
- 478.ライフラインがストップしている中、一人の人に対して、ケアマネジャー・各サービス提供事業所・民生委員の方々・ご近所の方・様々な人たちが動いていることがあった。電話連絡が難しい中、足を運んで時間をかけてる人たちがほとんどだったため、うまく連携を図れればと思った。
- 482.国道がものすごい渋滞になり、身動きが取れませんでした。徒歩や自転車で行けるお客様宅が少なく、訪問確保はできませんでした。サービス事業所が訪問し、避難所への移動など支援してくれました。医療依存度が高い方は、病院スタッフが一時入院移動へ誘導してくれました。ケアマネ自身が勤務先から遠い所に住んでおり、連絡がとれなかつた状況です。併設デイサービススタッフが安否確認のため、避難所へ来てくれました。
- 486.電気など、ライフラインがストップした為、訪問での安否確認となった。しかし、ガソリンの調達も出来なくなり、緊急性の高くない方は1週間後位の安否確認になってしまった。その間は、各地域での区長さん・民生委員さんの情報で確認できたことで安心する事も出来た。エアマットが使用できなくなったが、福祉用具貸与事業所の訪問確認もあり、応急的に敷布団対応して頂きながら、床ずれも悪化することなく、利用者さんも過ごすことができた。
- 487.安否確認は2人組で行うことになっていたので、常に揺れている中での訪問も心強く、訪問することができた。利用者はケアマネ他、ホームヘルプ・デイサービススタッフにより安否確認が行われていた。皆さんに来ていただき、ありがたかったという言葉をお伺いしている。安否確認は“重要な役割がある”と思っではいるが、自分の家族との連絡も取れない中、不安だった。自分の家族にとっても同じ思い。夫も責任ある立場にあり、家に帰れず、年寄りや孫達が不安の中に待っていた。
- 488.通所介護利用日で安否確認のため、自宅訪問したが不在だった。被災当日、自宅一部損壊のため親戚宅に避難するが、翌日家族が直接ショート利用している施設へ行き、そのまま緊急でショートとなった（日中独居者）。家族と同居の方は安否確認のみ。
- 489.訪看の利用者と居宅の利用者を同時に行った。またガソリンの関係もあり、方向を決め順番で訪問。家族のいるお宅はご家族にお願いしたり、また高齢の方のお宅はこちらで（2人）エアマットから布団に移す作業を行った。在宅酸素をしている方が心配でまわった。すでに病院に行かれています方もいたが、空の酸素ボンベで苦しいと訴えていた方もいた。この方は家族が仕事をしているため、日中は一人暮らし、酸素のない事に気づかないでいた。
- 490.同僚の担当の利用者さん宅に訪問した所、妻が途中から自転車に水を積んで帰ってきたが、こちらの姿を見つけ、手を振ってやってきた。笑顔で「あー、来てくれたの。ありがとね。大丈夫だから」と初めての私に、本当に嬉しそうに語ってくれたことに、このような事態においては何もできなくても、ただ顔を見に行き、声をかけ、確認し合う事の大事さをとても強く感じました。あの奥さんが遠くから水を積んだ自転車を押しながら、手を振ってくれた光景は今でも忘れられません。
- 491.事業所にヘルパー事業所・訪問入浴・福祉用具貸与事業所があるので、連絡を取るようにし、訪問が重ならないようにするか、一緒に訪問するなどした。
- 494.利用者リストを元に職員で手分けして、一軒一軒訪問し安否確認し、サービスが必要な

方は調整して繋いだ。

504. 4/7日深夜、震度6弱の地震の後、電話が繋がらずに独居利用者宅の安否確認をした。3/11日の震災後は娘宅で過ごしており、本人の意思から自宅へ戻って2日目の事だった。娘の方からも相談を受け、本人の強い意志で自宅へ戻った後の地震だった。停電し、懐中電灯で照らし、声掛けをしながら訪問したつもりが、逆に本人はかなり驚いていた。
506. 当日は、独居や高齢者世帯、医療依存度が高い方を優先に訪問したが、地域特性か、自分達が訪問した時には、近所の方がすでに来て、安否確認をしている方が多く見受けられた。しかし、在宅酸素などの電子機器を使用しているケースには訪問し、対応を検討した例もあり、ケアマネの安否確認の重要性を感じた。訪問は、単独ではなく、万が一に備え二人一組で対応した。
507. 研修中に地震が発生、上司と電話で一旦事務所に戻ることにしたが、道路状況が悪く、事務所にもどった時は夕方だった。安否確認も、訪問するしか方法がなく、まず独居の方の自宅に訪問したが、普段の倍以上の時間を要した。利用者宅に着いた時は、すっかり日も暮れており、真っ暗な中で暖も取れずに横になっていた。ライフラインの復旧の見通しもつかず、ヘルパー事業所との連絡もつかないことを説明し、嫌がる本人を説得し、区長さんに状況を説明、玄関に避難所にお連れする旨の貼り紙をして避難所にお連れした。
508. 安否確認したくても、ライフラインの停止・ガソリンストップもあり、出来ない状況だった。また、法人内で事業所が何ヶ所もあるとそちらの応援に行き、自分のケースが後回しになりました。
509. 同事業所でデイサービスを2ヶ所行っており、1ヶ所のデイに職員が集まって仕事をしていた。デイ2ヶ所の利用者と居宅支援事業所の利用者を合わせ、その人たちをケアマネの他、デイの職員と分担して安否確認にまわった。
516. 地震当日、安否確認のため自宅を訪問しました。お一人暮らしであり、認知症を患っている点が心配でした。自宅を訪問しましたが、誰もいない状態であり、よく見ると隣人によるメモが残されていました。「地震後、不安を感じたご本人が冷蔵庫内の食品を持って助けを求めてきたので、一緒にいます」とあり、住所・名前が書いてありました。隣人宅を訪問した所、笑顔で過ごしているのを見て安心しました。その後すぐ親戚2ヶ所で保護支援を受け、自宅に戻ってらっしゃいました。
518. 電話を何度かけても不在であり、訪問しても自宅にはいなかったため、親戚に電話しても不明だったのですが、その後数日後本人より「友人宅に避難している」と言う連絡がありました。
519. 訪問介護事業所・地域包括支援センターと連携を図り、利用者を確認した。
524. 透析患者の安否確認をしたが、病院が被災し電気と水道が止まり、透析が出来なくなった。他の病院に問い合わせをしようとしても、電話不通のため連絡取れず。また介護タクシーとも連絡取れず、どうしようもなかった。結局は病院側で直接自宅に向かえに来て、透析可能な他施設へ連れて行ってくれた。ケアマネとしてはどうしようもなかった。利用者の安否確認に向かう途中、道路がひびわれ、水が噴出した入りして、身の危険を感じた。道路も渋滞しており、動き回るのはかえって危険かも知れないと思った。
526. 高齢者世帯の安否確認に行った所、家の中は散乱し、そのまま生活できる状況ではなかったため、所在場所（避難場所）を書き残し、施設（自分のいる）に避難させた（一般避難所では困難と判断したため）。
527. 学校の避難所に安否確認時、大変な混雑で探せなかった。学校側の配慮で要介護者の方

- を誘導していただき助かりました。
528. ケアマネ2人で安否確認に車で回った時に、アパート1階に独居の老女の姿が確認できず、家の中は足の踏み場もない状態。避難できたかどうかは、3日後に判って一安心した。
529. 電話が使えず、ガソリンも少なく、自転車で移動しながら安否確認にまわった。
533. 重複するところはあったが、事業所内で連携を取り、利用者の安否確認を迅速に出来た。
535. 震災後すぐに独居・老々世帯の利用者宅を回り、安否確認をしたが、駆けつけた時には、近所の方々が声をかけあい、安否確認していたので、普段は見ない地域の力を見たと感じた。また、ヘルパーさん達が同様に駆けつけてくれたので、とても安心できた。
537. 安否確認しに利用者のお宅を回ると、けっこう家族がいてくれたり、「私達は大丈夫だから、他の方の所へ行ってあげてください」との声が多く聞かれた。
538. 管理者に指示は待機でしたが、どうしても我慢できず、近く of 家庭に安否確認に走りました。信号が止まり、大変恐い思いもしましたが、利用者との信頼関係が更に深まったように感じます。ただし、組織の一員としては失格と思いました。優先順位・緊急連絡先の確認を行っていたお陰で割りとスムーズに確認作業が終えることができたのは良かったことです。
539. 事業所のデータも全て失った。事業所2名のケアマネが持たされている携帯電話に残っている利用者のリストだけが連絡を繋ぐものとなった。しかし、充電器も流した。使っている携帯が特殊な機種で、どの充電器にも合わないものだった。充電器を購入するまでの間は、たまたま同機種の方がいて、その人から借りた。事務所の電話も使えない中、必死で連絡した。車の燃料もないので、自転車など回った。
541. 災害時、市からの要請で法人の施設が福祉避難所となるため、避難所の介護を行わなければならない、居宅介護支援事業所の利用者の安否確認がすぐに行えなかった。
543. 市役所による避難所の情報が錯綜、また親戚宅への避難者については、情報が得られず、確認が遅れた。
544. 壊滅地区にあった施設にショートステイしていた利用者の所在が不明になり、行き先が判明したのは2週間を過ぎていた。施設→病院→自衛隊へりで自衛隊の病院入院していました。施設職員とは連絡取れず、病院に訪ねても不明、病院から移動した施設や病院に連絡をとり、やっと見つかりました。病院も市役所も施設も混乱した中で、本人が認知症であったこともあり、家族も大変不安な日々を過ごしました。
551. 地震がおさまり、所員の無事を確認してから、一人で安否確認に出てしまい、却って周りに心配をかけてしまいました。
552. 職員全員事務所に戻り安否確認が取れてから、一人暮らし・老々介護の方を優先に職員二人一組で訪問し安否の確認をしました。「ラジオで情報収集しながらの訪問でしたが、津波注意とアナウンサーが言っても理解できず津波の地域に向かいましたが、交通渋滞と警察官からの制止で二次災害が免れました」。私の訪問より早くご家族が来て連れて行ってくださった方で、玄関に「〇〇宅にいます。」と貼り紙されていたので安全確認でき安心しました。デイサービス・ショートステイ利用中の方は送迎時間になっていなかったため、事務所の方で安全確認していただき、家族と連絡取れなかった方は留めて置いてくださったり、避難所に連れて行ってくださったりととても力になりました。
553. 余震の中、家族の安否も不明、自分自身の身の安全もわからず、移動に2時間もかかり歩いて帰宅。2時間真っ暗の中を帰った。とても不安だった。
556. 認知症の独居、仙台在住の息子と連絡がとれず、利用者は何が起きていたのか認識でき

- ず、いつもの通り食事準備されないことへの不安があった。おにぎり・水を担当のヘルパー事業所で届けてくれた。一人にしておけず、ヘルパー事業所の事務所（セントケア利府）で2日間、預かってくれた。3日目にご家族が迎えにきたが、利用者様の自宅に一人おいて仙台に帰宅した。おにぎり2個とペットボトル（水）1本こたつにおいてあった。涙がでてしまった。ガソリンなどなく、交通手段も苦勞していたが、ヘルパー事業所で一定復旧するまで、福祉施設で生活させていただきました。→5/11日肺炎の悪化で死去。
- 560.どの避難所に行ったか分からず、何ヶ所か探して回った。地域住民やサービス事業所と連携して探した。
- 564.安否確認については、事業所として関係する同一法人のヘルパーステーション・訪問看護ステーション・デイケアなどで情報を共有したり、事業所内の同じ地域の人たちと一緒に訪問して確認しあったりしました。
- 565.優先的に医療依存度の高い利用者や老世帯・一人暮らしの安否確認は勿論必要であるが、どこの事業所でも優先されているらしく、同じ利用者に複数の事業所が安否確認に訪れていた。サービス担当者会議開催の際、災害時の対応の仕方などについても話し合いを持ち、今後活かしていく必要があると思う。
- 559.複数のサービス事業所が関わっている場合、それプラス民生委員さん地域の人の安否確認が頻回でかえって疲れたという声が聞かれた。
- 580.全てライフラインがストップし、瓦礫状態だったため、安否確認したくても出来ませんでした。
- 581.震災当日は公休で、諸事情により2日後にやっと事業所に行くことができた。サービス提供事業所が各々、安否確認や緊急対応をしてくれており、とてもありがたかった。やはり普段からの連携は大切だと感じた。
- 583.4/8日0：30、82歳女性・認知症自立度Ⅲb。2回目の6強後、安否確認に向かった。小高い丘の上にある家でアクセス路は車1台通れるだけの道しかなく、その道に亀裂が走り段差も出来ていたが、まだ走れる状態だった。利用者は無事でいたが、家屋の状態が暗くて確認出来ず、アクセス路にも不安があったので、ケアマネの車に乗せ、10キロほど離れた長女宅に搬送した。2日後利用者宅に行ってみるとアクセス路は段差が大きくなっており、車が通れないようになっており1キロくらい徒歩でお宅まで行くと、壁の崩落が各部屋にあり、危険な状態になっていた。
- 584.1人暮らしの利用者様宅に、翌日安否確認に行った所、玄関に貼り紙がしてあり、「〇〇は、親戚の〇〇方に居ます」と書いてあるのをみて安心した。数日後、連絡をとり訪問した。
- 585.安否確認に訪問した時、出入口に本箱があり、その場に在宅酸素の本体が置いてあり、倒れていたの取り出すのが大変だった。
- 586.電話がかかりにくい状況で、車で移動するしかなかったが、渋滞のため安否確認が思うように進まなかった。2日目以降、ガソリンの入手が困難になったため、携帯電話を頼りに連絡をとっていたが、ほとんどつながらなかった。
- 587.携帯電話は繋がりにくく、自宅の電話もFAXもだめ、電気が通じるまで使用できなかった。ガソリン入手困難だったり、自分自身も介護をしており、臨機応変に対応することが出来なかった。
- 588.2名1組、車1台で当日は行動した。数日後から自転車で自宅・避難所を巡った。電話が復旧してから全員宅に連絡した。

- 589.燃料がなくなり、訪問できなかった。又電話も通じず安否確認ができず、上司に相談し訪問していただいたら、息子さんが岐阜より駆けつけていた。震災当日は、一人暮らしを心配して隣人宅に身を寄せていたようだ。岐阜の息子さんはその後の燃料不足で長期間の滞在となった。
- 593.当日は暗くなるまで車でまわり、信号も中断していたため終わりにした。その後はガソリンが少なくなり、主に自転車で行った。子供も学校が休みのため、子供と2人で自転車で回った事もあった。
- 594.同じ事務所の他部門（ヘルプ・デイ）利用の方と重複してしまい、反省点として他部門と協力、それぞれの安否確認にむかう方を決めた。自分の車でも動くので、ガソリンが心配となり、自転車で行けるところは自転車で訪問した。
- 603.当時37名の利用者中11名が津波で死亡、生存者26名中、運良く当法人のデイサービス利用中だったのが7名、他通所リハ利用1名、ショート利用1名で、この9名は安否確認が容易に出来ました。残り17名中9名は自宅の被害は少なくライフラインの断絶のみで、町内の8割方が壊滅状態の中では恵まれた状況に居られました。しかし、避難所において食料その他の配給を受けられた方々と違い、給水や配給を自力で取りにいけない、介護サービスも訪問できない中で、ボランティアにつなげたり直接お手伝いしたり。残り8名は家族と共に避難し、病院や各避難所に散らばって行方がなかなか分からなかったり・とありましたが、その後は病院や各避難所から福祉避難所への紹介など行われました。震災後数日は道路も瓦礫に埋まった状態で、すぐには安否確認も行えない状況でした。
- 607.信号がダメになり、大渋滞の中、余震も続き大変危険な状態だった。当日に利用者の安否確認が出来なかった。
- 609.物資を届けに行き、他の仕事を頼まれ、嫌とは言えず引き受けて、ボランティアで活動してしまった（勤務中にも関わらず）。
- 611.包括支援センター（サービス事業所を含む）との連携がうまく出来ていなく、同じ利用者に重ねて対応してしまったケースがあった。
- 614.当日、サービス事業者が送迎の際に、一人暮らしの方に訪問、安否を聞き取る。翌日以降、自宅へ訪問、一人暮らし・老夫婦のみ・医療依存度の高い方を中心に全戸訪問。不在の方で近所住民により安否確認出来ている。介護状況に変化のあった利用者1名（自衛隊勤務により帰宅できず、独居となる）。約1名老夫婦のみ世帯、連絡が取れず、近くの避難所の町内名簿に記載あり。民生委員の訪問で確認でき安否確認できた。急遽独居となった方の安否確認できたものの、懐中電灯はじめ食料など詳細確認が翌日となり、心細い思いをさせてしまった。施設入所者（老健）は直接訪問し確認している。地域によって自宅前に「無事です」の安否確認用の旗を提示しているところがあり、助かりました。また安否だけでなく、主介護者のメンタル面の確認し、パニックになっている方に随時訪問予定としました。
- 615.安否確認に伺った時、独居の方が電話の紐を直そうとして転倒してしまい、骨折してしまいました。動けない状態で排泄もビニール袋に入れている状態でしたので、緊急搬送してもらいました。
- 620.事業所が被災してしまったため、移動手段（車）がまったくなく、自分持ちの車でも移動困難であったため、避難所に訪問していた。包括支援センターや同じ地域のケアマネ仲間と協力してもらって、安否確認を行った。
- 624.優先順位を決めておくべきである。

- 625.電話で状況を確認していても、その後訪問して顔を見るまで安心できなかった。震災後に体調を崩して入院してしまった人もいた。
- 626.優先的に回る方や地域ごとにマップを作成。ペアになって使用できる車を交代で各家々を回り、安否確認を行った。
- 627.顔の分かるケアマネが行くことで安心していただけました。
- 628.人数が多く、担当として動くのではなく、地域に分かれてまとめて動いた。酸素や吸引など医療依存度の高い方は優先して担当で動きました。特に大変だったのは、動けない老夫婦マンションの高い所に住んでおり、家族は遠く、家族の来るまで避難所へ。車椅子ごと夫婦移動するもトイレ介助する人いない。支援物資とりにいけない。寒い。聞こえない。結局マンションへ戻した方が隣近所の応援もらえ、自室なら這って移動できるとなり、2往復した方もいらっしゃいました。
- 635.ガソリンの購入が出来なかったため、安否確認も困難でした。
- 639.独居の方で心配して確認にいったが、地域住民の手助けが入っていた。怪我などなし。
- 640.高齢者夫婦世帯で、安否確認に伺った所、地域の方の協力を得て、買出しや毛布の提供など受けていた。
- 642.地震の後、名簿に載っている方に電話で安否確認。次に電話が繋がらなかった方は訪問して、翌日から家族同居の方の安否確認をした。
- 650.電話が繋がらなかったため、一人暮らしの人を訪問した。要介護1位の方々は、自分で食料も買いためであり、思ったより元気。石油ストーブもあり、暖も取れていた。近所の助け合いもあり、近所の人に任せることが出来た。また、たまたま子供さんが来ていた方々もあり、息子さんたちが対応してくれていた。2人暮らしの方で、避難所に町内会の人に運んでもらった人がいた。やはり「近所の力」は強いと思った。一人暮らしの人をデイに1泊させてもらう事もできた。
- 658.一人暮らしの認知症の方は特に当日の夕方訪問し確認を行いました。
- 662.車もない、電話も通じない、なかなか進展せず大変だった。
- 667.自分の家族が被災し、精神的も不安定で子供も小さくそばを離れられないため、安否確認は他の同僚にほとんど依存していた。
- 672.3/14電話繋がらず、車のガソリン不足のため優先順位に沿って訪問。他ケアマネと分担しながら訪問。まず、本人と会い、生活状況を確認。午後になり電話つながり、電話にて状況確認を行う。同事業所内の別のサービススタッフ、当社サービススタッフより、お客様の状況聞き取り。3/15.16自宅待機となり、自宅電話にて安否確認を行う。3/17～包括より配給あった食品・水などをお客様宅に届け、ライフラインの復旧状況を確認。
- 674.潮音荘に短期入所していた方が心配で、七郷小学校に探しに行った。利用者一軒一軒回って、全員の安否確認をした。
- 679.安否確認は必要なことだと思うが、できなかったことで非難されるようなことはあってはならないと思う。行政や利用者様・家族、地域住民など、普段からケアマネジャーに頼ることが多いのに、ケアマネ不要論もあるとはとても悲しい。行政は、災害時にどのようにお年寄りの安全を確保するのかを公表すべきである。ケアマネは普段の業務で処理しなければならない書類が多すぎるので、利用者様や家族、地域住民の方との関わりが減っています。誰のための介護保険なのか、ケアマネの首を締めてばかりであると、本当に必要なサービス利用にはつながりません。ケアマネジャー協会でも震災のことだけでなく、無駄の多い事務処理を減らし、ケアマネの負担を減らしていけるような提言

などを行政に行うべき。赤本・青本の解釈は行政によって違う事もおかしな話で一本化するべき。その取組を先頭に立ってやってほしい。

- 681.ガソリンも無い状況で、なかなかスムーズに安否確認を行えなかった。また安否確認が出来た段階までは良かったが、それからどう対処して良いのか、分からない部分もある。ライフラインが復旧せず、なかなか連絡を取れなかった家族及び本人から「連絡くらいよこして欲しい」と怒鳴られた。状況が状況だけに、どういう判断が正しいのか分からなくなった。
- 682.隆起する道路、ひびの入った道路を見て涙が出そうだったし、夢か現実かわからなかった。日頃より、職場内の連携も良く、コミュニケーションが取れているので、不安な気持ちだったのが、「何をするのか」と前向きになれた。所長の誘導がすばらしかった。利用者が自宅またはサービス利用時で無事でホッとした。
- 686.町外の避難所に避難された方の安否確認が、なかなか連絡も取れなかったことから時間がかかった。
- 687.沿岸部の老夫婦のみの世帯で、町内に親戚のいない利用者の安否確認で避難所を探した。歩行が不安定だったが、隣家の人の車に乗せてもらって避難したとのことだった。着のみ着のままだったので、東京に住む娘達の連絡先も分からずにいた。まだ、電気もなく固定電話も通じなかったため、携帯電話から娘さんに無事の連絡を入れると泣いて喜んでいた。その後、息子さん・娘さんは沢山の支援物資を持って、亘理に向かえに来てくれた。避難所から事務所に来てくれた時、思わず娘さんと抱き合っただけで涙が出た。利用者夫婦は笑顔で娘さんの住む東京へ行った。ガソリンのない時期、混乱している時期だったが、車で何時間もかけて迎えに来た息子さん・娘さんから「探してくれてありがとう」と何度も何度も言われ、早く安否確認できて良かったと思った。
- 688.大震災後、ヘリコプターにて救助され病院へ搬送。本人が息子の名前を名乗ったため、本人の行方が一時不明になってしまった。救助してくれた救急隊員に問い合わせ、本人の所在が解かった。
- 689.沿岸部を担当していたので、被災した利用者さんが多く、自宅は全壊や流失が多かった。自宅の電話のみを聞いていた利用者さんには連絡が取れず、携帯を聞いていた方も何回かけても連絡が取れなかった。連絡がとれない方には毎日電話し続けた。避難所数ヶ所を回り、名簿を探し、各部屋を見て回り、無事を確認した。避難所の名簿にありながら、親戚の家へと移る方も居たので電話で確認するまで時間がかかった。一人暮らしをしていた方は、その地区の民生委員さんに電話したが、連絡もとれず、親戚に聞いても探していると言われ、後で利用者さんも民生委員さんも亡くなっていることが分かった。日中一人で居た方は耳が聞こえず、自宅で亡くなったと後でお嫁さんからの連絡でわかった。嫁さんの携帯番号は聞いてなかった。
691. 3月末から避難所を回り、利用者・家族の安否確認に回る。自宅の電話が繋がらないため、訪問したがほとんどの方が避難所にいた。家族（介護者）の体不調、本人の床ずれ発生、認知症の進行からデイサービス・ショートステイ繋げた方がいた。しかし、当事業所以外の利用者のケアマネが避難所に貼り付けになり対応できず、利用者が困っているとの情報あり。対応し、サービス調整するも、数回訪問介護に来ていただいた所で、道路状況が悪く、職員を守れないということでサービスを中止された件があった。また届け出を出し、調整したにもかかわらず（かなり道路状況が悪く、片道1時間以上要した）、貼り付けになっていた職員が動けるようになったとの事から、利用者を戻すケースが3件あった。被害が大きく、新聞の死亡欄で確認する方も多かった。電話が繋がるよ

- うになってからは、安否確認が出来たが、携帯電話の記載がない方にはかなり時間がかかった。間借りしている事業所から、被災地までの移動距離があったため、1日回れる時間に制限があった。また自分も被災してすぐに動けなかったが、支所が機能を失っていたため、もっと早く上からのしっかりした指示が必要と思った。
- 694.同法人のデイサービスの利用者である一人暮らしの女性が、明らかに通常でも出入り困難の自宅で、あの強い揺れでは帰宅できない状況と判断され、避難所から緊急ショートとなった。身寄りがなく、その後多方面と連携し、賃貸アパートに転居となった。
- 694.自宅の別の車を使ったり、自転車を使った。
- 696.ケアマネが安否確認を行うことは非常に重要な役割だと思うが、正直対応が難しいと感じた。今回のように、ライフラインの復旧が遅れると、自分達の身を守ることで正直精一杯だった。
- 698.震災当日は研修で仙台にいて、地元に戻るだけで精一杯。翌日早めに出勤し、独居や高齢者世帯を優先しながら、通りの道の利用者宅へ訪問開始。行くところの人も喜んでくれ「来てもらって安心した」との言葉が聞かれた。ガソリン不足のため、自転車で回るが、道路状況が悪く通れない道も多々あった。電話が繋がらず、訪問するも不在で、近所の人に聞きに行ったり、避難所を回った。玄関に名刺と手紙をおいたりした。役場の担当者が毎日、当施設に来てくれて、情報交換していた。そのお陰で互いに安否確認など、連携がとれて助かった。
- 699.エールの研修会から、泉中央まで歩き、自分の自宅の安否確認し、避難所で家族と再会する。見渡すと居宅の担当利用者が多く過ごしていた。20時に職場に行き、その際に認知症がひどかった利用者の入所の相談をしている。21時半に町の避難所をまわり、23時に終了。自分も避難所に戻り、家族は寝ていたが、認知症の利用者の介護や足の悪い高齢者などの介助をした。役場の保健師もいて利用者・高齢者になるべくまとめて過ごしてもらうようにした。8時に入所判定会を聞き、その後利用者を入所させた（独居の方ですでに入所申込は数ヶ月前にしていた。家族へは避難所の受付に伝言している）。9時より、他の所在のつかめない利用者宅へ訪問、ホームヘルプが来れず、医療頻度も高い夫婦利用者の入所へと調整した。独居・夫婦世帯の方々の水・食料は役場・包括・社協が配ってくれたり、入所などへの調整していた。それでも家にいる方には、ホームヘルプを調整したが、寝たきりの方や認知症状のひどい方を介護している家庭は、給水へ並ぶ事も大変だと後から分かった。
- 702.大崎市は被害も少ないからでしょうが、地域のネットワークが良く近隣や民生委員の方々により安否確認や支援がなされているケースが多かったように思います。担当している方々の医療依存度にもよるのでしょうか。
- 704.地震当日に安否確認をしたが、津波地区に偶然行かなかただけで、もし先に津波地区を回っていたらと思うと怖いです。情報もない中、車を見て色々市民の方に尋ねられるが答えられずで、ある程度情報が分かってからの訪問も大切だと思いました。
- 705.震災による独居の方の被害はなかったが、食糧の確保が困難な状況だった為一時避難を勧めても自宅から絶対に離れないという強い意志を訴えられた時対応に苦慮しました。介護サービスでの対応は困難だったので自治会に協力して頂き介護サービス再開まで支えて頂きました。
- 708.当日から安否確認を行ったが、入院の手配は割りとスムーズに行えた印象がある（訪問や病院側でも協力的であった為）。施設への入所が必要な方に対しては、まず施設の空き状況の聞き取りに回り、その後利用者宅へ説明に行き同意を得てから再度施設へ、と

- いった対応となったので一人への支援に大変時間と燃料を要した。確認に行ったが既に避難所へ行ってしまった方の確認が取れず何度も足を運んだ。自宅を被災している中、どの程度まで業務を優先するべきなのか？に大変悩んだ。
- 709.車があってもガソリンがなく自転車にて1軒1軒安否確認をした。雪が降ってきて自分自身も電気・ガス等ストップにて寒さの中、日が暮れる前まで自転車で走った。どこの避難所にいるのか探して歩き安否確認をした。
- 719.当事業所は町の管轄であり、大津波直後より3月末までスタッフは避難所の医務室で受付や血圧測定、薬作り、トイレの誘導などの手伝いをしました。大津波で道路も連絡網も寸断され利用者のデータも消失しました。利用者の安否確認は状況が落ち着いてからでした。自宅へ訪問したり、サービス事業所からの情報だったり、包括支援センターにご家族が相談に見えたり、施設から連絡がある事で安否確認を行いました。その後町の方針で当事業所の利用者を他の居宅介護支援事業所に担当して頂く事になり、利用者宅と一緒に訪問して紹介しました。現在はまた町の方針で新たな利用者を担当しているところ です。
- 722.電話が繋がらず、家が被災して電話が水を被っていれば使用不可。現地は立入り禁止なので、本人（家族）からの電話連絡で安否確認できた。
- 724.独居高齢者の安否確認をしたくても被災（流失）した地域に住んでいて、しかも子供さん達も他の地域で被災（流失）、電話も通じず行方不明のまま安否確認に時間がかかった。情報不足（何が・何処が・どうなっているのか）もあり、身動きが取れない状態が数日続いた。また一緒に避難した高齢者の世話もあり動けなかった。利用者名簿を持たずに避難してしまった事（流失）、安否確認しようにも電話が通じずガソリンもなく徒歩以外動けなかった。
- 726.独居の利用者の事が気になり、近くの民生委員からの情報、再三訪問はしていた。ガソリン不足の為ヘルパーの利用ができなくなり（身内の方が一時的にでも介護できないか確認するも困難）、またライフラインの停止により町営住宅での生活は困難と判断し管理者に相談し賃貸住宅に入居（居宅の事業所と同一）してもらいサービスに繋がった。夫婦で避難所で数日生活するも、夫（要介護状態、認知症あり）が一般の方との集団生活に馴染めずトラブルを起こして困ると町より連絡有、急遽管理者に相談し賃貸住宅に一時的に入居（居宅の事業所と同一）してもらいサービスに繋がった。
- 728.震災直後、帰宅途中に独居・高齢者世帯の訪問を行った。他方面の利用者の安否確認ができなかった。
- 730.安否確認に行き避難所に連れて行ったが、その後津波がきてしまい水の中事務所に戻って来た。
- 734.安否確認が出来ない方を捜し市役所へ行き調べたがわからず2ヶ月経ってその人が生きていたのかどうかの確認が市役所からきた。市役所へケアマネの名前を記載してきたからだが、もう落ち着いて施設入所が決まった後だった。
- 735.ライフラインが止まり電話が全く繋がらなかった為安否確認に時間がかかってしまった。移動手段も車・自転車がなくて徒歩で行くしかなかった。
- 736.特養老人ホーム内に勤務事務所があり、その特養にたくさんの方々が避難して来たので、その方々の対応で利用者の安否確認はすぐには対応できなかった。また道路は津波による瓦礫で寸断され移動が困難であった。特養等の施設を併設していないサービス提供事業所の方の来所や安否確認の為に来所される方々からの情報で利用者の安否確認ができた。特養老人ホームへ避難している方々への対応が幾分落ち着いてきた頃道路も復旧し

- てきたので（ガソリン不足だったので）徒歩で行ける独居の方や避難所を廻り安否確認をした。その道中、道が狭くたくさんの瓦礫で自分の身の危険を感じた。会社の手配でガソリンが入手できて車で廻る事ができたが、今度はパンク（タイヤ）したりして、夢中で安否確認をしていました。
- 737.震災後安否確認を早急に行いたかったが、ライフラインの停止・車などでの移動もできなくなり、また事業所がある施設にも多くの避難の方が来ていた為安否確認を行う事ができなかった状況でした。衛星電話を設置してもらえたが、地域によって電話が繋がらない状態が長く続いた為各サービス事業所等と連携をとって安否確認を行いました。
- 738.携帯電話も固定電話もしばらく復旧せず連絡が取れなかったので避難所の避難者名簿や新聞の避難者情報で名前を確認したり、法人内の各事業所より情報を頂き確認しました。交通規制やガソリン不足もあり、車で行ける近隣の範囲内の方は自宅を訪問し確認しました。
- 739.携帯電話が4日後程で通じましたので連絡先として携帯電話の確認をしていた方とは連絡が取れる方もいらっしゃいました。しかし、固定電話に関しては利用者宅の被災状況に関わらず通じませんでしたので直接出向くしか方法がありませんでしたが、車の燃料不足と入居者の対応の為思うようには進みません。市からの避難者情報も入ってきた為そちらでの確認も行いました。
- 740.避難所として受け入れた方々の介護等と道路環境、ガソリン不足等により外出の制限があった為、優先順位により対応せざるを得なかった。
- 742.当日に独居・高齢者世帯等、直接安否確認に訪問。家族と同居している方は電話にて安否確認を行った。その後は併設している施設の応援（被災者を受け入れた為）に借り出されていた為、電話でのみの方へは直接訪問に行けずにいたが、その後訪問した際に「自分がこんなに大変だったのにすぐに見に来なかった」と怒鳴られた事があった。
- 748.自転車があつて良かったです。
- 752.ライフライン寸断、ガソリン不足、マンパワー不足を痛感した。
- 754.一人暮らしの人の確認で訪問しても不在、近所の方が姿を確認したと聞いた。避難所を何回か訪問しても居ない。ライフラインが繋がりに事業所と連携して居場所を確認。人の大勢いる県庁・市役所で夜を明かしたと聞いた。その後仙台市の避難所に1ヶ月以上滞在、区役所の保健師・障害高齢課の担当者と地域包括支援センターと連携を取り自宅生活へ戻れた。
- 756.ガソリンがなくなりそうだったので自転車で自宅を訪問した。坂道があつたり路面状況が悪く大変であつた。
- 761.一人暮らし・老夫婦世帯には職員が手分けして電話連絡し、確認が取れない時は即訪問しました。日中独居も同様です。距離の遠い所は民生委員さん・区長さんにまず様子を見に行ってもらおう事もしております。夜でも震度5の地震の時も同じ対応をしました。
- 766.電線がぶら下がり、道が波打つて時に大きな穴、時に盛り上がり、時に浄化の為の大きな容器が飛び出している中を二人一組で廻り続けた。自宅に確認できなければ、地区毎の避難所になっている集会所を廻り情報を得た。社協という事でガソリンは少しずつではあるが継続して確保できたので良かった。今回は、地域や施設との連携で緊急入所を考えずに済んだ事は不幸中の幸い（第一避難所への入所で対応）。しかし生活状況見守りの継続は地域と連携して行う必要があつた。
- 773.まず事務所そのものの流失したので利用者の情報（電話・緊急の連絡先）がほとんどないに近かつたという事。次に電話や連絡の取れる方法がなく、無駄だとは思いつつも自

分の足で探すしか方法がなかったと思います。避難所等に貼られている探し人の紙を何度も繰り返し確認し、また避難所の名簿を見せてもらったりして利用者の名前を探しました。私の利用者は震災で亡くなった方は一人だけでしたが、その方の家族に会えた時には抱き合って大声で泣いてしまいました。

- 774.自分も避難先で孤立し3日間動けない状態だった。ヘリコプターで救助された。事業所も被災し流失し連絡先等の資料もなくなった。通勤車も事業所の車も流出し3台のみとなった。1台の車に乗り合わせて避難所を廻り安否確認を行った。被災のない事業所・施設を廻り情報交換を行った。避難所を移動する事もあり繰り返し避難所を廻った。電話が繋がらない為足で探すほかなかった。避難所→身内宅→アパート等、何度も居場所を変わる方も多くその都度訪問した。家族が避難所や身内宅に分散して避難した方も多く把握に時間がかかった。
- 776.自分は市役所に書類提出に外出しており事業所・法人本部等は津波で流失したりして、ライフラインは全てストップ、電話も繋がらず（事業所の皆は3日後にヘリコプターで救出）誰とも連絡が取れない状況で一晩過ごし、次の日歩いて避難所利用者を廻りながら（避難所で利用者家族に会い2人の死亡・1人の無事を確認）自宅に戻り家族の安否を確認、その後法人のデイサービスセンターが高台にある為自分の判断でそのデイサービスセンターに行き、利用中の被災で自宅に戻れない利用者2人の安否を確認、歩いて行ける範囲の利用者宅や事業所を訪問した。5日目位にやっと事業所の人々の無事を確認し、残った車で手分けして避難所・事業所・自宅を訪問し安否確認を行った。
- 778.津波発生し3日後自衛隊のヘリコプターで救助された翌々日から出勤可能な職員による安否確認を開始しました。活動車は流失し電話も不通であった事から、残った活動車と徒歩で200名以上の利用者や事業所の職員の安否を探しました。当初50ヶ所以上の避難所があり手分けして訪問しましたが、避難所を転々とする方がほとんどでありなかなか確認する事ができず大部分の方の確認を行えたのは1ヶ月後でしたが、未だ数名の方が未確認となっています。雪の中を避難した方が多く、体調を崩している方も多かった為早期の確認は大変重要と思いました。
- 779.車を借りるにもガソリンが貴重だった為頼みづらく確認作業はもどかしかった。
- 780.自宅は仙台市泉区、利用者の方々は富谷町・大和町の為、車で移動が必要だったが、なかなか給油ができず動きが取れなかった。
- 781.自転車を手分けして安否確認。複数のケアマネで担当ケースに関わらず確認して廻った。施設の公衆電話からも緊急連絡先に電話した。
- 782.震災直後に自分で訪問し安否を確認した。次の日から家庭の事情とガソリン不足により暫く出勤できない日々が続いた。特に独居の方や高齢者世帯の利用者の方が気になりながらも何も出来ずにもどかしい思いをした。幸いに事業所にはあと2人ケアマネがおり代わりに動いてくれ、電話が通じるようになってから随時連絡を取り安否を確認したり、サービス利用の調整を行った。
- 783.ガソリンもなく、同事業所の先輩ケアマネと相談し手分けして安否確認を徒歩や自転車で廻った。サービス事業所からの報告も大変助かった。当事業所は電話回線・FAX回線が暫く復旧せず、足で情報を得なければならず大変だった。訪問した時、家族に逆に心配される事もあり涙が出そうになった。逆に訪問して顔を見せただけで安心してくれた方もあり大変やりがいのある仕事だと思った。
- 784.仕事人の前に人として身体が動いていた。震災直後は訪問していた為電話も繋がらず事務所に帰ったらスタッフは居なかった。全員安否確認を手分けして行っていた。まずは

- 徒歩で行ける所から行い、できる限り当日行った。翌日からは遠い住所のスタッフも居た為出勤できるスタッフで役割分担の指示を出し手分けして行く。自宅から出勤できないスタッフは何度も電話して安否確認を行う。ガソリンも無い為順路を決め、担当でなく事業所全体の利用者として確認、震災4日目にはほぼ確認終了。
- 785.生活状況・家族状況で優先順位を決定。
- 786.自身も体調不良で休んでいた為安否確認の開始は遅くなってしまい、その後入院となった為同じ事業所のケアマネの協力が大きかった。2日後の電話で高齢世帯の利用者が震災後食事を摂っていないとの事で取り急ぎ食糧を運んだというケースがあった。また、水がない・給水車まで行けない人が多く運んだケースもあった。
- 787.ライフラインが被災、ガソリンが手に入らない状況があり、自転車や徒歩で廻った。自宅に居ない場合は避難所を廻り確認。薬を持たないで避難した利用者さんもいて、その場合は自宅の鍵を借り職員二人で自宅に入り薬を届ける等をした。また、食糧が確保できない利用者さんには地域包括の援助を受け避難所から炊き出しのお握りを頂いたり、仙台市から包括に届いた食糧を分けてもらい届けた。
- 788.事業所内で優先順位を決め、法人内の手伝いと安否確認とに分かれ実施（翌日）。その後毎日の安否確認の方と合わせ、5日間で担当利用者の安否確認を終える。
- 790.自転車での安否確認・訪問は思ったより大変だった。当事業所は所属ケアマネジャーが多く手分けして作業する事ができとても心強かった。一人や少人数の事務所ではどうしようもなかったかもしれない。
- 794.取引のある訪問介護事業所からの情報及び直接的な支援も頂き連携プレーで大いに助かった。
- 795.とりあえずケアマネ2人で独居・老老の宅にしか行けず、同居の家族に頼るしかできなかった。1週間位で電話が復旧しすぐ安否（全員）確認した。
- 796.その当日に優先順の高い一人暮らし、ベッド・エアマット等使用者宅を訪問。当時ケアマネは4人いたが、次の日は1人のケアマネがガソリンがないとの事で三人の対応になる。事務局と対応して自宅内の片付けもした（一人暮らし、高齢者宅）。
- 797.ガソリンがあるだけ安否確認。ほとんど全員できた。
- 800.2日前にも地震があり、前日独居や老人世帯の安否確認をしたばかりだった。11日事務局からの指示とマニュアルに従い訪問となった。電話も不通となっている。当日みぞれも降り車が混み自転車にて安否確認する事になった。余震も揺れが激しい中、完全武装し自転車で走行中、道路も凸凹で建物からガラス割れが落ちていたり、液状化現象がある等危険が多かった。夕方からは管理者のケアマネと二人体制で遠い所からの独居の方や高齢世帯を確認し夜8時頃終了し事務局に報告し帰宅となった。帰宅途中電気の灯かりも無く途中までで橋が不通となり引き返し遠回りして帰宅する。自分の家に帰り家族の情報を確認し安心した。
- 802.民生委員さん・区長さん・近所の方等要援護者へ様々な方が安否確認に来てくれていた。
- 812.認知症の方の所在が分からなく、施設からの連絡があり判明した。避難所に民生委員の方が連れて行って下さり施設利用に結びついた。今回の震災で地域の関わりがいかに重要か改めて考えさせられました。
- 813.地震の時間帯が昼間だったので施設での対応が多かった。
- 818.N T T回線は使えなかったが、町内の各家庭に設置されている有線電話を使い安否確認を行った。全て確認できた訳ではないので不明の所、有線電話の無いお宅へ二人一組で訪問した。

- 819.地震直後法人内で分担し、独居高齢者及び気になる利用者の安否確認にあたった。翌日から訪問により安否確認を行った。町内には有線放送というNTT以外の電話があり、その電話がある所はそれで確認や連絡対応を行った。
- 820.独居の方の食事の手配はケアマネジャーが買物した。利用者様の居住している地盤によって被災状況が全く違う。
- 821.ガソリンがない為ケアマネジャー乗り合わせで安否確認に廻った。各サービス事業所でも廻ってくれていた。
- 824.ケアマネがいると思うと家族は任せっぱなしになる事が多いのでとても苦労した。気が利く家族や近所の方は玄関に貼り紙をして何処に移動したとかを記入してくれて本人の安否を知らせてくれたので助かった。
- 825.電話も繋がらず連絡が取りにくい状況だった。事業所も被害が大きく利用出来る状況ではなかったので、同系列の事業所に集まり二人一組で利用者宅を訪問すると共に、サービス事業所からの情報も得ながら分担して安否確認を行った。
- 827.ガソリンが無い状況の中でいかに効率よく安否確認に訪問できるか、廻る順番をエリア毎にまとめて行った。同事業所や他事業所の担当者から早い段階で“無事です”という報告を受けていたので、利用者チェックリストを事務所（散乱している中で）でかろうじて探し出し安否のわかった人をチェックし、チェックのない人を訪問したり、ご家族に連絡したりしていた。避難所も回り本人・家族の安否も確認し、避難所の取りまとめをしている方々より状況を確認し必要があれば施設入所の手続きも同時に行う事ができ連携が図れた。
- 828.災害翌日事務所近くの独居利用者のみ訪問し安否確認をした。7件訪問し、6件は不在（既に避難していた）。残り1件のお宅では食器棚・冷蔵庫等が倒れており、まだ自宅で生活をする予定だとの事で倒れている物を除けて通路や居間を確保した。
- 833.避難所でおむつ交換ができない、身体の不調を訴えた方が緊急に入所・入院となった。自宅が損壊し住めない為施設入所になった。避難所閉鎖の為自宅でヘルパー対応できる事業所を確認し契約の手伝いを行った。
- 835.サービス事業所が稼動しておらず緊急利用は一切なかった。逆にショートステイ中の人は退所させられてしまった。
- 837.当日は休日、スーパーで買い物中に被災した。日中独居となる利用者宅を安否確認しながら職場へ。電話は不通だが本部に直通の回線がある為、そこから利用者宅（居宅事業所全員）に電話で安否確認。帰宅時他の利用者宅へ安否確認しながら帰る。翌日電話確認出来なかった利用者宅を車で訪問する。それ以後ガソリン不足となり自転車で町内の利用者宅を全員安否確認する。不在宅には訪問の貼り紙をし、後日避難先を知らせる電話がある。利用者宅にご家族により避難先の貼り紙（連絡先）を玄関に貼ってくれていた利用者もあり全員の状況を把握できた。
- 838.電話不通になった為、所在確認ができない利用者が数名残っていた。一人暮らし・高齢者世帯から優先し所在確認をした。他事業所から報告を頂けた所もあり助かった。担当ケースで医療行為の必要性があるインシュリン注射や薬の残薬等、残り少ない利用者は病院や薬局への相談をし対応した。
- 844.津波に襲われた地域に住んでいた利用者で安否確認ができずにいた方が、石巻赤十字病院から福祉避難所に搬送されて来てその場で会う事が出来た。しかし、残念ながら介護者であった奥様が亡くなられていた為いつも利用していた施設へ入所させてもらうよう対応した。

- 846.一人暮らしの方・デイサービス利用している方をデイサービス生活相談員と個別に訪問しました。デイサービスがガソリン不足・食材がないためしばらく休みますということでした。
- 848.ライフラインが閉ざされた中、避難所や自宅を訪ねた。避難所では歩行がおぼつかなくなっている利用者のADL低下を考慮し早いデイサービスに繋がった。
- 849.電話が通じないので足で確認しなくてはならず避難所廻りをしたが大変だった。情報が色々で確認に時間がかかった。
- 850.避難所でも担当利用者が見つからず、親戚の方から聞き取りして歩きました。
- 851.電話が繋がらない。ガソリンがなく走れない(距離が遠すぎた)(特地加算つけている)利用者宅はプロパン、自宅や隣の家に井戸がありライフラインで困っている家は少なかった。むしろ私の自宅が水・電気・ガス・ガソリンがなく困った。
- 852.ケアマネ(私自身)が被災またはその家族が被災し、「すぐにでも安否確認でなければ」という想いはあっても全く動ける状況になかった。とにかく目の前の助かった方々と一緒に協力し必死にその日を過ごす日々が続いた。2人のケアマネが何とか各避難所を廻る事ができたのは3月の終わり頃だった。どうか無事でいてくれますように…。祈る気持ちと現実を受け止める怖さと言葉では表せない想いが込み上げてきた。
- 854.当事業所は老健が併設の為、事前に老健との緊急時の対応について話し合いが必要と感じた。安否確認についても老健内の確認が優先となり、その後に担当利用者の確認開始となる為どうしても出だしが遅れてしまう。そして、確認に行くと既に他のサービス事業所が確認に来ていた利用者宅が何件もあった。一方では、在宅の利用者は民生委員・区長はじめ地域の人達の助け合いがあるが、施設は施設職員でしか守れない面(行政・地域の人達が来るまで時間がかかる)があるので居宅・施設どちらを優先に動くかは日頃の調整や話し合い・連携が重要であると感じた。
- 855.一人暮らし・老夫婦のみの世帯・医療依存度が高い方を優先的に訪問した。一人暮らしの方は余震やライフラインが停止になった事で不安になり避難所への希望が聞かれた。各地域の保健師と連携を取り避難所や短期入所に繋がった。また、どうしても自宅にいたいと言う方もいた為、訪問介護事業所・行政・民生委員等と連携し安否確認を続けた。
- 859.避難所の避難者に担当利用者・家族がいるか安否確認を行った。
- 861.電話も不通になり高齢で独居の方は訪問して安否確認を行った。夜なので暗く、電気も付いていないし安否確認はできたが、それ以上の事はできず、帰る時何とも言えない気持ちになった。
- 865.食糧の備蓄がない高齢独居者に、その後食糧を運んだ。
- 867.当日医療度の高い方(呼吸器)が停電と介護者の精神的不安により在宅介護が難しく救急車で入院先を探してもらった。その日は何処に搬送されたかまで確認取れず、翌日かかりつけの病院を訪問し入院できた事を確認する。当日一人暮らしと認知症のある二人暮らしの担当ケースについて何とか家族と電話連絡が付き安全の確認を行った。翌日電話は不通だったので近くのケースから訪問し安否確認をした。老夫婦世帯(認知症あり)ホームヘルパーの訪問も難しくなった為ショートステイに繋げる。
- 869.一人暮らしの方を優先に安否確認をした際、無事は確認できたがその後何処に避難したら良いか分からず近所の方をお願いしたりサービス事業所(利用しているデイサービス)へお願いした。その地域の避難所が何処になっているか確認しておく事が必要と思いました。電話が使用できなかった為玄関ドアにメモ書きが貼ってあったり連絡方法の工夫がみられた。

- 876.震災当日は東京へ出張の為帰宅できず同事業所内のケアマネジャーにより安否確認を行ってもらった。
- 880.3月の地震は勤務中だったので、自分の自宅や家族や職員の家族の安否確認ができていないのに利用者宅を優先に訪問する事となり管理者としてとても辛かったです。一日目の訪問が終わり夕方遅い時間によりやく職員は自宅・家族を確認し、また職場に戻るという状態でした。ケアマネとして早期の状況確認は必要だと思います。その「早期」がどの段階なのか考えてしまうところです。安否確認中、通行できない陥没してしまった道路があったり、途中何度も余震があり電話も通じず命がけの訪問だと感じました。今回のような震度7の地震が夜間に起きた場合、安否確認の為の訪問は更に安全面を確認して行くべきと感じました。
- 881.電気が止まった事でストーブやこたつが使えなくなった家があり、ペットボトルを配り湯たんぽ代わりにこたつや布団に入れて頂く様に対応した。停電により認知症状が悪化し夜間不穏になり緊急にショートに頼んだ。退院が決まっていたが停電・断水で自宅に戻れなくなり病院と在宅の調整が必要になった。
- 882.二人一組で安否確認に廻ったが、道路が悪く、電気（信号機）も使えない状況で走っている間にも余震があり自分達の安全確保もままならない状況でした。暗くなり自分達も安否確認される状況になった場合、どのように動いたら良かったのか今も疑問？
- 883.ケアマネ二人一組になり安否確認リストに従い安否確認に廻りました。道路の陥没等があり確認出来かねた所もありました。他の事業所の方とも連携を取り情報を頂く事もできました。自分の家族の安否も気になりながらの動きとなっていたので不安な面もありました。
- 887.電話が繋がらず、また連絡先も流失し安否確認に時間を要した。自宅を訪問しても道路が通行止めになっていたりし時間を要したり、何処に避難したか分からず行政等と連携を取りながら確認した。
- 889.居宅管理者で担当者なしでした。他のケアマネの戸別訪問を二人一組で活動させましたが職員が戻って来て顔を見るまで不安の時間でした。
- 894.元々私は自分の自家用車を居宅介護支援の業者として使用しておりました(ガソリン代一切自腹)。ところが震災当日あいにくガソリンが空になり、この事では被災宅への安否確認訪問もできず、施設公用車を再三拝み倒しようやく借りて被災宅を何とか訪問する事ができました。また、田舎で大崎は複数の家族が居り震災後も何とか支障なく生活しておられ、この点は思った程の苦労はしませんでした。とにかくガソリン窮乏により移動の足がないのは苦労しました。
- 896.自分の家が全壊状態で避難した為に出勤ができない状況であった為、他のケアマネに安否確認をして頂いた。10日後出勤後に改めて電話連絡等をさせて頂きました。自分が行えなかったから、他ケアマネによる安否確認に1週間から10日前後かかったようです。
- 897.とにかく電話が繋がらない。ガソリンが無くなり車も使えない。自転車で可能な所に行った。認知症独居の方へ翌日訪問した。停電しているのにパンをトースターで焼いていた。食材は食パン2枚とみかん数個のみ。水はポットに500cc位(断水)。「〇〇さん、大変だから娘さんに電話しますよ！」→「何大丈夫よ、店は側にあるし何も困ってないから！」→地震がきた事も忘れていたライフラインが止まっている事も把握していない。ケアマネがついていてもこれは解決できない。認知症独居の方は別居していても家族の協力が必要と感じた。

- 899.安否確認はケアマネとしてすぐにでも行いたかったが二次災害の危険があり(上からの指示)時間がかかった。緊急入所に関しても行政が窓口となり対応して頂いた。
- 900.公用車が全部使用できなくなり他の施設から借りたり、歩きで行った。電話等もだめだった。電話(携帯)が使えるようになったのは3月末~4月に入ってからだった。
- 903.居宅訪問時に当面の生活状況として残薬の確認や福祉用具(ベッド・エアーマット等)の確認等がやっとで、支援物資を届ける事が出来なかったが訪問した事自体を喜んでくれた利用者やご家族が多く、震災後ライフラインがストップしガソリンの供給がままならない中での居宅訪問は想像以上に有意義な事だと感じた。今回の震災を機に家族の協力が良好になった独居の方もいた。
- 904.震災直後は車で安否確認を実施できたが、ガソリンも不足してくると訪問できず電話が使えるまでの間連絡取れない状況があった。震災当日は病院入院中だった方が電気の復旧した3月16日に連絡した所、退院しておりサービス調整を行った。
- 905.独居の利用者については、利用していたサービス提供事業所に問い合わせをし、ある程度の状況は把握できた。また、安否確認が出来ない方については自宅付近を探索した。普段の訪問は公用車を使用し、徒歩で活動する事は今までなかった。しかし今回3時間かけて安否確認した事もあった(ガソリン給油制限があった事と瓦礫があって車輛での探索が困難だった為)。単独では行動せず、部署が違っても二人一組になって行動する事に心掛けた。
- 906.ガソリン給油できない状態だったので徒歩で利用者宅へ向かった。1日10km歩いた日もあった。頼みの携帯電話も使えず把握に相当の日数を要した。
- 907.ガソリンが無く放射能も汚染されているかもしれない雨の中を徒歩で安否確認している。
- 909.ガソリンが無く歩いて訪問しました。電話連絡も出来ずサービス事業所に徒歩で出向き確認した。当日同事業所のデイサービスを2名の担当の方が利用しており事業所で2~3泊宿泊で介護を受けている。内1名は血圧が高くなり事業所で病院に送り診療を受けていた。1名は3泊後避難所へ送り繋げて下さる。他事業所でデイケア利用の方は津波で被災したまま施設内で1泊し翌日家族の迎えで自宅へ戻れるも、独居の方は中学校避難所生活後、施設職員が特養へ繋げその後小学校の避難所で3月31日まで過ごした。これまで利用していた訪問介護事業所とヘルパーさんは自宅等が被災し、在宅復帰の為訪問再開の連絡をするも対応が難しく他事業所訪問介護に依頼し在宅に戻った。
- 910.自転車もなくガソリンも少なかったので歩いて安否確認を行ったが遠い家までは行けなかった。震災時ヘルパーと一緒にいた事は分かっていたが、事業所とも連絡が取れず何処へ避難したのか把握するのに時間がかかった。最終的には自己判断で安否確認を行ったが、会社の指示を待たずにもっと早い段階で安否確認をするべきだったと今でも心残りです。
- 911.デイサービスに来ていた方、全く被害のない場所に住んでいた方は助かりました。しかし、その日自宅に居て家が流され、本人も行方不明の方々は確認のしようがありませんでした。会社の書類も全て流され家族や親類の連絡先もわかりません。ただただ虚しい思いでした。
- 912.車・ガソリンの不足から動きがとれず、8日目に事業所の車1台で災害の大きい地域から廻った。道路もへドロと水で動きが取れない所もあった。行って見ても家も流され、また、瓦礫の中に埋もれて確認出来ないまま駄目だったのかと思ったが、4月末に無事を確認。息子さんと2階に避難したが家ごと流された方、津波と家事で不明の方、娘さ

- ん孫さんと家ごと流された方、娘さんの目の前で流されてしまった方（助ける事が出来なかったと娘さん、現在も精神的に不安定）等、今だ分からない方も多い。
- 913.離島で夫婦二人暮らしの方の娘さんより3/12電話が繋がりに「何処に避難しているかわからないので調べてほしい」と言われました。3/13（ガソリン不足の心配があり）徒歩で市役所に出向き問い合わせをしましたが、分からず翌日も市役所では把握しきれていませんでした。娘さんより「テレビで〇〇学校にヘリコプターで搬送されたのを見た」と電話があり市役所に確認しましたが〇〇学校に避難している方の名簿がなかなか出て来ず名簿の一本化を早くしてほしいと思いました。
- 915.避難所の方々や町内の方々からの情報、サービス事業所からの情報があった。
- 917.自分が震災時に休みだった事と当日出先で震災に遭った為身動きが取れなかった。自分が動けない事に苛立ちを感じていた。
- 918.ガソリン不足で、訪問での安否確認が（遠方の利用者）が容易でなかった。地域により電話回線の復旧に遅れが出て安否確認に時間がかかった。
- 919.津波による流出地域に住む利用者及び当日利用者自身は通所サービスを利用しており無事だったが、家族に連絡がつかない等安否確認に時間がかかった。また、同居中の親族の緊急連絡先が主だった為、同時進行で市役所に貼り出される死亡者一覧を確認しながらの安否確認であった。一家全員が行方不明となり、別居中の親族と共に遺体安置所に出向き泥だらけの衣類や本人を確認した時の思いは忘れる事はできない（震災当日の午前中に本人宅を訪問し身につけていた衣類も確認していた事、また、親族からの要望で同行した）。
- 922.一人暮らしの方の自宅を訪問すると食器棚が倒れてガラスが散乱していた。本人は息子が来てくれると信じて自宅で待っている事を希望するが、ライフラインの停止で事故に繋がる可能性が高かった為、本人を説得して福祉避難所に誘導した。自宅に残した貼り紙を見た家族（息子）が避難所に来て保護した。要介護1の夫と要介護4の妻との二人暮らし、妻は認知症で朝夕にヘルパーの援助で排泄の介助を受けていた。自宅からは遠いヘルパー事業所だった為ガソリンが調達出来ずサービスが中断される。近隣のヘルパー事業所に排泄介助を依頼して調整する。衣類・寝具の汚染が広がり洗濯等の援助も依頼した。
- 923.当日の17時過ぎに会社に戻り地震の凄まじさを実感しました。18時過ぎに一人目の安否確認をしましたが、対象者がレスピレーターと吸引器を常用している方でした。停電してたので心配しましたが友人から発電機を借りる事が出来た為問題はなかったとの事でした。家族がしっかりしている事と交友関係に恵まれている等実感した瞬間でした。自転車で訪問できるエリアは積極的に行いましたが、それ以外の地域についてはスタッフ数名で1台の車を乗り合わせて行いました。電話の不通とガソリン不足が安否確認を遅らせた原因になっています。
- 924.安否確認しながら水・飲料配達と行ったが、事業所職員だけでは間に合わない為ボランティアの方々にも住所・名前を渡して廻ってもらったが「知らない人が来た」と不信に思う人がいて、その後は施設名入りのボランティア用名札を作成して対応した。
- 925.日中独居の方でマンションの8階に住んでおり家具等が倒れ、自宅に居れる状況ではなかった為ヘルパーが当事業所併設の施設へ避難させ、そのままショートステイに入所させた。
- 933.余震が続く中、危険も多く何処まで動けるのか、動くべきなのか今になって考えてしまいます。

- 934.車で移動できず（ガソリン不足の為）自転車で安否確認を行いました。朝5時からスタンドに並び訪問できるよう準備しました。電話が繋がらず直接自宅に行ったり、避難所廻りをして安否確認しました。
- 941.独居・高齢世帯をケアマネ3人で廻りましたが、3人とも津波に対する意識が低く巻き込まれずに済んだものの今後の課題が残った。
- 944.訪問介護スタッフと連携し訪問場所の確認を実施した。閑上の利用者を探しに近くの避難場所を探しました。往診医師・調剤薬剤師と協同で安否確認実施。
- 945.電話が通じず二人一組となって車で安否確認に廻った。ガソリンも貴重だった為優先順位を決めて廻った。自法人のサービスを利用している利用者は安否確認の訪問が重なってしまったが、逆に喜ばれる事が多かった。
- 949.事業所のケアマネと共に担当の利用者の確認に当たりました（直後から）。その間定期的に町の情報を聞く為に福祉センターに立ち寄り、こちら側からも情報を提供し状況の確認をしていました。
- 953.電話も通じなくてガソリンも供給できない状態だったので、広範囲の利用者の自宅を訪れる事が困難だった。
- 955.とにかく徒歩・自転車で廻れる範囲は廻りました。ですが、当事業所仙台市内全域（及び近隣市町村）をサービス提供範囲としていた為に各区に利用者がおり距離的に訪問出来ない所もありました。あまり広範囲に持たない方がいいなと思いました。片道タクシーで5千円かけて利用者のいるショートステイ先に行った。認知症の方は状況理解が出来ずにいた為、落下の危険のある物を下ろしたり、動き回らないように何度も説明したり、安否確認と合わせできるだけの（最低限の）安全確保を行いました。
- 957.施設入居（住宅型有料老人ホーム）の利用者様に関しては、避難誘導の過程で安否の確認は行った。在宅の利用者様へは翌日から所長が訪問をし、3/16には利用者様全員の安否確認が終了した。
- 959.当日は所属する法人内のサービス事業所に支援しました（22時頃まで）。近隣の担当者・関連の事業所からは直接数名施設に避難する方がおり数日毎日会えた。他は翌日より開始。ガソリン不足により苦慮しました。
- 960.当日は所属する法人内のサービス事業所・近隣の担当者関連の訪問に留まりました。翌日から本格的に開始。ガソリン不足により自動車を使用できない事、事業所の保有する自転車が1台しかない事で苦慮しましたが、個人の自転車の持ち出しで対応できました（これもパンクしていましたが）。雪と寒さもあり自転車で移動できない遠方の担当者への対応は、関連するサービス事業所を訪問し情報を共有する事で何とか可能としましたが厳しく、地域における連携の重要性を強く感じました。
- 961.電話がなかなか通じず、車のガソリンも少なく使用出来なかったため、自転車で近場の利用者宅へ行き安否確認を行った。
- 964.電話が繋がらず徒歩若しくは自転車で安否確認を行った。自分の避難先が市外だったので、ガソリンも無く乗り合いで事務所へ行き安否確認した。自宅には利用者の避難先が記入してあったが、実際その場へ行っても見当たらず市役所で避難所リストの中から探してもらったが居なかった。結局本人は居たのですが、市役所のリスト作成も追いつかない程の人数だった様で市役所で確認できるのは数日以上経ってからでないと分からないのではないかと思います。昨年末に入院して3月下旬あたり退院の予定だった方が、院内で被災され病院自体も機能が難しかった。元々船員で海に慣れていて利用者だったが津波を目の前にして恐怖だったらしく、その日を境に精神的に不安定になり電話が通じ

- る頃に病院先より転院若しくは何処かへ避難する場所がないか打診された。利用者宅は被災して入る事ができず転院先もなく、市役所へ相談し施設を紹介してもらった（治療は終わっていたので施設にした）。
- 965.車が流出、事業所の車を使用するにしてもガソリンが無かった為、徒歩や自転車で安否確認を行ったが、何処に避難しているのかも分からず大変だった。
- 966.当日は体調不良の為休んでいた。地震発生から1時間30分後にメールで職場の安否が確認できたが、その後通信が途絶え自宅待機した。朝5～6時頃明るくなってきたので自己判断で利用者等の安否確認に出発した（自家用車）。幸い自家用車のガソリンは満タンだった。独居と高齢者のみ世帯を中心に数件訪問。→安否確認した利用者の関連事業所（ヘルパー・訪看・デイ）→法人内事業所（デイ・診療所・老健・居宅・包括）→自分の事業所と順に廻った。午前11時となり道も混雑し始めた。併設事業所管理者より自宅待機の指示有り帰宅した（体調不良だった事もあり）。翌日以降は自転車で出勤し、併設事業所の車とガソリンの残りを考えながら可能な所は自転車で安否確認に廻った。
- 967.避難所の電話を借りて連絡を取ったが通じないと折り返しが出来ない為、ちぐはぐになってしまい関係が悪くなってしまった為担当を外された。間もなく支援者が亡くなったと伺い、力不足と最後に担当できなかった事に対して割り切れないものがあった。
- 971.事業所のある建物内の利用者は避難誘導時または直後に確認（27名）。名取市にある高齢者向け住宅内の利用者は建物の職員にメールで確認し、翌日名取市に出向き、やはり1階食堂を避難所として全員避難していたので、そこで利用者一人ひとりを確認する。職員として助けとなる為ここでも泊まりを含め介護に当たる（30名）。外部（4名）は、宮城野区3/12に自宅訪問し確認（2名）。七ヶ浜町は3/13に自宅訪問するが留守（自宅は流されずにあったので連絡がほしいとメモを入れる）。電話が通じず透析の病院（多賀城市）へ向かうが病院が津波で機能していなかった。避難所を探したがわからず、1週間後に無事を確認（1名）。津波被害の為道路が寸断され行きも帰りも二次災害が怖かった。宮城野区で3/13に自宅訪問し確認（1名）。入院されている利用者（4名）は3/14仙台市内の4ヶ所を廻り無事を確認する。
- 972.ガソリン不足。確保出来たのが1週間後。いつもの半分量。安否確認は近くの利用者を残りのガソリンあるだけで実施。後、自転車使用で自宅周辺の利用者宅や携帯電話での確認実施。そのうち事業所へも行けない状況となる。自分の身内の介護がサービス事業所休みとなり、家族で行わなければならず仕事上の利用者との両立が難しかった。
- 974.ガソリン不足で、車で安否確認出来ず自転車・徒歩で行った。
- 976.一人暮らしや高齢者世帯を優先して安否の確認を行っていたが、同居家族のいる家庭から対応が遅いというコメントを頂いた。一つの事業所で何種かのサービスを行っていると横の連携も取りやすいが、単独の事業はそのような点も今後考えていかなければならないと思われた。
- 977.居老所で暮らす方の安否確認に行ったが、施設は誰も居なく連絡先も書かれていなく、探すのに苦労したが近くの避難所に皆で行っていたので一安心をしました。
- 980.近所の方が直後外に連れ出してくれたが、その後の対応がないのでケアマネがサービスに繋がった。直後の生命の安否は行政がマイクで区長に連絡していたが、安否確認だけで本人の不安な気持ちや水・食時・暖房については心配りが無い為ケアマネが段取りしないと乗り切れなかった。
- 981.非常勤職員である事と遠方でガソリン不足もあり、管理者より自宅待機命令があり安否確認は他のケアマネが行った。

- 984.今回は電話が思うように使用出来ず、また、利用者が近隣だけではないので遠方の方の確認が困難でどのように過ごされているかとても心配だった。
- 988.当日通所を利用していた利用者で自宅へ戻る事が困難な利用者は、相談員の働きかけで法人内の施設へ入所する等、他部署との連携で助かった。
- 990.独居で玄関に鍵が掛かり開かず、知人を探して開けてもらった。携帯酸素不足で入院を勧めたが拒否。救急車に依頼したがやはり拒否。酸素が着くまで待った。本人・知人が統合失調症で話が通じず大変だった。
- 991.飛行場近くの津波にあった地域に住んでいた方、本人はデイサービス利用中でショートステイへ避難したが同居の長男さんとは全く連絡がつかず長男さん以外の親族とも連絡が取れず、今後の事に大変不安になった。1週間以上経ってやっと携帯連絡が取れた時はほっとしました。
- 994.燃料不足の為徒歩若しくは自転車にて訪問。一人で訪問し動きが取れなくなる可能性を考慮し二人一組で実施していた。強風の中、また、雪の中の訪問で担当の方々に温かい言葉を掛けて頂き涙が出た時もありました。
- 995.ガソリンが手に入らなかった為徒歩や自転車を利用して行った。安否を確認する事は出来たが事業所もほとんど停止している状況だったので、実際に介護サービスの希望があっても調整は難しい為、相談を受けた時にはどのように応急対応すれば良いか不安もあった。
- 996.安否確認の際は何かあった時の対応の為、二人一組で行動していた。
- 997.自転車を購入し利用者の自宅を廻っていた。一人暮らし、老夫婦世帯を優先にした為、ご家族のいる利用者宅が遅くなった事に不満の声も数件あった。
- 998.ガソリン不足の為自転車で訪問している。同僚と同行する事で何かあった時すぐに対応できる仕組みにしていた。顔を合わせる事で自分自身安心する事が出来た。また、担当利用者が不在でも近所の方が教えて下さり感謝している。
- 1000.当日、事務所に到着した時には日が暮れ、職員や事務所の安否確認のみに。その夜のラジオでちょうどショートステイ利用者（一人目）だった方の施設名と避難先が流れ、施設の全員が無事であった事を偶然知る事ができた。2日目、在宅酸素使用中だった利用者のお宅を訪問したが、津波により床上浸水の被害に（水は引いていた）。車はなく津波前に病院に向かったものと思われた（近所の人からも情報あり）。後日通院先の病院に行き確認したが、病院も混乱中で確認取れず携帯が通じてから夫に電話で確認が取れた。3日目、ショートステイ利用者（二人目）について施設（被害なし）を訪問し安否確認。同時に利用者から家族が無事である事を伺った。ショートステイ利用者（一人目）の避難先を訪問し無事を確認。施設が津波に流され、薬も無くなってしまった事を伺い主治医に報告。翌日薬を届けた。位置的に被害が少ないと思われた利用者（一人暮らしだが子供二人がすぐ近くに住む）のお宅を訪問し無事を確認。家族全員の避難所になっていた。全ての安否確認については職場の車、または自家用車を利用した。
- 1002.ガソリンが無くなり、徒歩や自転車により行いました。恐らく放射能混じりの雪を被りながら気持ちは無力さを感じました。100km近く自転車で安否確認を行い、帰りに寄った訪問入浴の事業所の社長さんのお宅で夕ご飯をご馳走になった時は本当に嬉しかったです。誰も居ない真っ暗な道を一人で帰った時は、自分達の生活がいかに果かないものかと気付かされました。
- 1003.丁度日中だったので明るいうちに車で確認していった。事務所に着いたのは18時頃。電話連絡できず、ガソリンも無くなりそうで困った。次の日からは自転車で移動。雨雪

風は辛かった。

- 1010.一人暮らしの方々には近所の方や地域の方々の支えがあり食事の確保が出来ていました（1日1食～2食）。
- 1011.安否確認しようと危険な場合があるので判断が難しい。
- 1012.利用者1名を自宅玄関前へ待機させ事業所へ戻る。デイ（併設）1名利用中にて、家族が迎えに来ていた為引き渡す。自転車にてもう1名（家族と同居）宅へ訪問する。
- 1013.連絡が取れる手段が無く、当日は自家用車・その他自転車を使い各家を訪問し安否の確認を行った。併設事業所（訪問介護・通所介護）と連携して食料や水の配給をする事ができた。90歳高齢者夫婦宅へ当日訪問した時、パニックに陥っていた。当日夕食が配食サービスを受ける日であったが届かない。他、食べる物がない、冷蔵庫の中は冷凍食品のみ。町内を車で走り回ったが店は閉まっている。結局事務所での炊き出しからの食料を届けた。
- 1014.当時携帯電話も固定電話も切断され、自分の足で訪問するしかありませんでした。自宅がないケースがほとんどで確認に時間がかかりました。自宅が南三陸町であった為に仕事に向かう事が出来ず、3/20頃に車で20分位の場所で何とか携帯の使用が出来たのですが登録していた担当ケースの連絡先は固定電話の番号も多く、思うように確認が出来ませんでした。ガソリンも車も無かったので3月末に家族から連絡を頂けたり、サービス事業所からの情報で確認できた事がほとんどだったと思います。
- 1015.当事業所では、当日のうちに所長が電話で確認できる所は全て安否確認をしていました。この際、携帯電話番号（家人・本人）が分からない方は家電話が繋がらない為訪問確認しました。また、震災当時の職員同士もメール交換で連絡が取れました。普段からのメールのやり取りや利用者から緊急時に備え、家人の携帯電話番号を聞いておく事の大切さを痛感しました。
- 1024.車が流失（事業所の車・自家用車）し、ガソリンも無い為徒歩で訪問。
- 1028.ガソリンもなく車も流された為、遠い所のみは車、あとはとにかく歩きました。
- 1029.吸引を必要とする利用者は病院に運んでもらい対応してもらった。

3 ライフライン停止の対応に関するエピソード

- 1.電気は1週間程で復旧したが、水道や電話の復旧が遅かった。給水車に水をもらいに行ったり、スーパーに並んで買物しに行った。ガソリンの給油も出来ず何十時間も並んで給油した。
- 2.寝たきりの人は停電で痰の吸引も出来なくなり、石巻赤十字病院に運ばれ山形の病院でしばらく入院させてもらった。病院の連携で助かりました。5月に在宅に戻りました。
- 4.事業所に直接家族が来たり、電話で「エアマットをどうにかしてほしい」と言われてもどうする事もできない。また、入浴もお願いされたが自分たちでさえ出来ないのにも苛立ちを覚えた。
- 15.行政も地域福祉もあってない様なもの。原始的だが近所で乗り切った感じ。声をあげても多賀城のような小さな役場ではとても対応できない。
- 16.安否確認の為車を利用していましたが燃料確保に困った。
- 17.ライフライン停止への対応とはならないが、津波によって寝たきりの方の避難が遅れ、エアマットのまま浮いて助かったという人が3人います。次の日自衛隊員に助け出され病院に搬送されたり、施設へ家族が連れて行ったりしたようでした。その後亡くなった

方もいます（低体温症に陥る）。

- 18.私自身は対応できなかつた方ですが、周囲（地域）の方のおかげで助けて頂いた。在宅酸素をしていて震災後は携帯ボンベで対応。一晩しかもたなかつたので、近くの病院に行ったところ対応できないと断られる。電話が通じなかつた為町の緊急無線で連絡してもらい隣町の病院まで救急車で搬送。
- 19.在宅酸素の方が1名おりましたが、救護所で預かっていただいたので助かりました。しかし、救護所でも酸素ボンベの制限があり運動量を抑えた上で使用量を極端に減らす事にしました。利用者は不満だったようですが、あの場合ああするしかなかつたと思っております。
- 20.透析週3回の利用者（火・木・土）、震災が金曜日だったので、次の日に仙台の娘さんと孫達がいち早く透析場所を探した。ケアマネは透析のできる病院に問い合わせたが救急対応の為断られたので家族の対応で助かりました。
- 21.ライフライン停止した為独居の人は自宅に戻れず、避難所や入所等の受け入れ先を探すのに苦労した。
- 22.訪問介護部門で、自宅で調理可能な人がお握りやおかずを作って来てくれたので、一人暮らしの人へ配った（数日間）。
- 23.訪問した時には、福祉用具担当者が訪問し確認や応急処置をして下さっていた。
- 24.ペットボトルへ水を入れて必要な利用者へ届けた（自転車利用）。
- 25.透析通院、タイフライン不通により介護タクシーも連絡がとれなかつた。病院との連絡も出来なかつた為に次の日直接対応して頂く。当日、次の日は何とか菓子やパンで凌げたが、何処に行けば食糧の確保が出来るのか連携が取れなかつた。一人暮らしに対しての食糧、ご飯に漬物2切・水・オレンジ1/2の支援。区・町内でバラバラで支援物資も施設や避難所は確保されていたが、在宅で半壊になりながら自宅で生活して、毎日のようにヘルパー主任さんが様子を伺いに訪問していた。
- 29.電話が通じないので訪問しかない。ショートステイの空きの情報もないので行って確認介護タクシーの予約もできず行って対応。自宅に行っても何処に避難しているのか分からず1.5m位浸水したが、助かつたのかどうか分からず避難所廻りをして氏名等の確認に廻る。在宅酸素の人等は病院に来て部屋がない為、また自宅にも帰せず数日泊まる。吸引の必要な方も来てもらって対応。ガソリンもなく廻る事も制限される。水もないので一人暮らしの人には届ける。避難所に行けば食料はあるが、そこにも行けない人は大変。一人暮らしの人は周りの人が助けてくれるが車も流され家族が病気がちの人は、食料の確保が本当に大変だった（2～3日は取り合えずお菓子等で過ごした）。
- 31.医療依存（医療器具使用者）の高い人については訪問看護での対応をお願いした為自分で直接対応はせず情報をもらっていた。
- 37.電話が繋がらず事業所の職員とも連絡をとるのに大変だった。また、ガソリンもない為に会社に行けず、自分の利用者で遠い人（自分の家から）は様子が気になるが何も出来なかつた。2日後に会社で用意した水・食料を手利用者宅へ訪問しながら安否確認を同様に行っていた。
- 38.電動ベッドがフラットにならない。エアーマットが機能しない等不都合があつたようだが、直接福祉用具業者に連絡を取ろうとしたり、他の方法で工夫した利用者が多かつた。在宅酸素のボンベに関しても、家族が酸素の配送店に電話をし続け対応出来ていた。
- 40.若林区役所で支援物資の配給があつた為、それを受け取って利用者へ配った（パン・水）。また、事業所内に排泄用品（紙おむつ・パット）のストックがあつた為必要としている

- 利用者へ配った。
- 57.停電により福祉用具が使えない状況が多くあり、訪問しての確認、代用品や対応変更のアドバイス手伝いが必要な事を実感する。
- 58.エアーマット→布団へ交換（訪問看護師がすぐにやってくれました）。
- 59.高齢者への支援物資としてカップラーメンが届いたが好まず、いらぬという方もいた。グレープフルーツも菓の確認をしないと渡せず困った。在宅酸素の方は、かかりつけ医で入院の受け入れ対応をしてくれたので良かった。
- 61.仙台市からの食糧提供については、非常に助かったとの話が利用者や家族から後日あった（介護をしているなかで何時間も買物に行けない等）。ライフライン停止での対応については、出来るだけ家族に対応してもらっていた。日頃より災害に対しての情報の備えが必要だと思う。
- 62.震災直後から電気・ガス・水道が止まってしまったので何ともならなかった。車のガソリン等は節約するように事業所で対応した。
- 70.寝たきりでエアーマット使用している利用者宅で停電によりベッドの背上げをしたままストップしてしまった方や、その空気圧が抜けていく為床に臥床せざるを得ず、また、物資不足で汚れたまま使い続けるしかなかったり、支障は数え切れない。
- 73.不具合について相談を受けたのは、エアーマットの「底つき」についての1件のみ。何とか工夫し、除圧を試みるよう助言した。
- 74.ベッドをギャジアップ中のライフライン停止でベッドをフラットに出来なくなった。
- 77.在宅酸素の人はボンベに切り替えたが、ボンベが足りなくなり入院した。
- 88.どうしようもありませんでした。
- 92.3月末まで水が止まっていた場所があり2回/週ポリタンク18ℓ水を届けた。お湯や食糧も届けた。電気が天井から落ちてしまった所に電気スタンドを貸し出した。スタッフに昼食の提供を行った。
- 94.居室の暖房がとれず、暖をとる手段がなかった。湯たんぽは入れられず布団をかけるだけ。低体温症状の為緊急入院となった。
- 95.2～3日なら食材・水の心配は少なかった（保存食材が十分にあった）。ただ料理等を行う事が難しく、ストーブ等で料理を行う事が多かった。食材が不足してからは、買物の為店に並び、寒さの為体調を崩された方もいた。避難所にいる人は食材の心配等がなくて過ごせていたが、避難所では寒くて過ごせない人、認知症が重度の人等、自宅で過ごしていた人が特に食材・水等に困る状態だった。おむつ等については、もう利用しないという利用者家族より提供があり、不足している人に持参する事もあった。ガソリンが不足していた為、自宅訪問を全件行うのには時間がかかり、利用者と顔を合わせ生存を喜んだ事もあった。
- 101.栄養補助食品・おむつ・靴等、福祉用具の業者に頂き避難所や在宅の方に配布して廻りました。
- 108.ライフラインが利用出来なくなり、たまたま黒電話だったので電話をかけ救急車を呼ぶ事が出来た。エアーマットはすぐ空気が抜けなかったが、常に痰の吸引が必要な為かなり危険な状態だった。かかりつけの病院もいっぱい、みやぎ県南中核病院で受け入れてもらい、その後2週間で他病院に転院となり命の危険性はなくなり経過が落ち着いた。1ヵ月後退院となった。
- 111.電気がない事で電話が使えず連絡がとれない事が最大の大変さで、ガソリンもない事から移動できずに機能が失われた。利用者の状況が変化しても分からない状況であった。

- 112.近所の人や民生委員が食事を届けてくださっていたので助かりました。
- 114.やはり4月の2度目の地震は夜間の事で、日中ならすぐ周りに対応しやすいが夜はとても難しい。その為にも個々の対応策は必要である。
- 116.震災当日は短期入所利用中だった為ベッドを高くしていた。電気はストップしており動かす事ができない状態。電気が復旧する前に本人が短期入所より帰って来た為、近所の人から自家発電機借りて対応している。
震災時、排泄介助中でベッドを高くしていた。停電になってしまい設定を変える事ができなくなり復旧するまで食事介助したり座っている時介護者が目を離せない状態となった。ベッドの昇降は電気がないとできない為、そのまま様子を見てもらった。
エアマットの空気が抜けて利用者本人が腰痛を訴えていた。エアマットに関しては、下にマットレスを敷いて対応。また、空気が抜け難くなるように送風チューブを折り曲げてもらうように話をした。
- 130.タクシー会社が被災し、ガソリンもなく、通院手段の確保ができなかった。
- 131.ガソリン不足で自動車で訪問できなかった為自転車を利用者宅へ水や食料等の支援物資を届けました。
- 132.私の担当している利用者で在宅酸素を施行している利用者で酸素がない状態。病院より「病院まで来てくれれば対応します。」との話があり（私に対応していないのですが）、訪問入浴の看護師・マネジャーが会社の車を使って対応しました。会社の車は普通車です。車椅子で介護タクシー利用で受診していたので乗り込みも困難だったようです。
- 136.地震発生時、訪問中の利用者が電動ベッド・エアマット利用中で一番上までベッドを上げた状態で停電し、エアマットも使用不可となる。駆けつけた職員と娘さんとの3人で本人をベッドから下ろした。
- 139.暖房が無い為湯たんぽを使ってもらった。カイロもあるだけ集めて使ってもらった。
- 141.介護者も癌で治療中。地域で2～3日避難していた。その後自宅生活に戻ったが、食料・水・燃料の継続的な支援が必要となる。仙台の息子にも連絡が取れない為、近くの親戚に1週間預かって頂く。介護者は2ヵ月後死亡。要介護者は施設入所をしている。
- 144.在宅でIVH管理中の方が停電でバッテリー切れる為、充電できないので主治医と連絡しアルカリ乾電池（ポンプのバッテリー用）を2回届けた。
吸引器が必要な方に口腔ケア・注射器等の使用について話す（訪問にて）。
エアマット・ギャジベッド使用の方に床ずれ防止の為の方法（布団に代える、体交やクッションの使用等）を話す（訪問にて）。
- 151.当日の夜ヘルパーより報告あり、停電の為ギャジアップした状態から下がらないとの事。地元電気業者もお願いし発電機を借り、発電機を持って訪問しギャジダウンを行った。
行政と連携を図りながら被害状況等の把握ができた。
- 153.酸素を使用している利用者、家族が直接病院へ連絡し1泊した。
- 156.人工呼吸器を使用している方のケアマネで、水を持って行くしかできず力不足を感じました。せめて“水”だけでも何とかする方法はないのかと感じました。
- 159.処方薬の残がなくなるも、ガソリンがなく家族対応困難な同法人ショートステイ利用者に対し、近医での緊急処方（2週分）を依頼した。
情報があまり入って来ないのでケアマネが中心となり情報収集と物品確保を行った。
- 163.認知症のある方（何とか自立して暮らしている方）に、ライフラインがストップし寒かったがどうか布団と服にて寒さ対策するように伝える（15:30頃）。役場の方が来た時、夕方また来ると言っていたのでお願いする。しかし、バタバタしており細かく本人の状態

- 等を伝えられなかったのが悔やまれる。その後近所の親戚等が安否確認をしていたが本人が言う事をきかない方だった為、低体温症？で亡くなった。
- 165.新規の退院者への電動ベッド対応依頼があり貸与事業所へ相談した。困っているとの事で自宅へ徒歩にて訪問。結局は嫁いだ娘さんに介護を頼めるとの事でサービスには繋がらなかった。
- 167.法人職員による野菜等の食料の提供を行った（スーパーが開くまで）。ペットボトルに入れた水を訪問介護員に持って行ってもらった。独居・老々世帯にはブレーカーを下げるよう助言・介助を行った。体位交換するよう助言を行った。
- 172.エアマットが停止し床ずれが大きくなった。
- 177.エアマット使用者は取り外し、体交を家族へ依頼するしかなかった。
- 178.一人暮らしの方への食べ物の提供。
- 181.ベッド・エアマット使用不可により、代わりとして布団や柔らかめのマットを助言。エアマットは口を縛ってもすぐエアが漏れる。
- 185.水は食品会社が使用している井戸水を提供して頂きました。また、ガス釜を馴染みのガス屋さんが貸して下さいました。食料も色々な方から「お年寄りがいるから（グループホーム）食べさせてあげて」と野菜や非常食を持って来て頂きました。ガソリンだけは、いつスタンドが開くか分からなかったもので、皆が並んでいる所に一晚車を置いて並びました。安否確認の為の車を動かさなかったもので、緊急車輛に指定して頂けたらと思いました。
- 191.ガソリン不足により酸素ボンベの配達もされず病院と連携し事業所でボンベを届けた。ベッドのギャッジが背上げた状態から下げられず、地元業者から発電機を借り、持って訪問しギャッチダウンした。
- 193.福祉レンタルの事業所に連絡し、エアマットから低反発マットに変更してもらった。
- 197.独居の方にペットボトルの水を持参。
- 198.経管栄養でベッドの背上げができなかったのでヘルパーと家族で布団を入れて背上げ姿勢介助を行った。エアマットを外してマットレスに代えたところ床ずれができてしまった。
- 203.高齢者世帯等、給水所までいけない方へ水を運んだ。ガソリンが無ければ訪問ができないので、ガソリンスタンドへ夜明け前から並び、給油し対応していた。電話が通じなかったもので、直接訪問して状態を確認する他なかった。利用者が発熱し、病院に連絡し受診することになったが、家族の車がガソリン不足で受診する事ができず役所に相談したが、ガソリンを買うことができずタクシーを利用するよう助言あり、タクシーを利用した。市が認めた緊急車両でなければ、燃料は調達できない期間があった。訪問介護事業は、その車両には含まれず、訪問中止になった利用者は多い。
- 205.高齢世帯へ給水所から頂いた水を届けた。介護サービス事業所（訪問看護、介護）の利用回数を増やし、体操や家族介護のアドバイスをしていただいた。在宅酸素の方は、主治医に連絡し対応の仕方を確認した。（公衆電話が役に立ったが次の日には不通になってしまった。
- 210.電動ベッドのギャッチアップが戻せず、布団での生活を強いられ褥瘡が悪化した。
- 217.エアマット使用者のエアマットの空気を抜けないようにした。在宅酸素の方のボンベが無くなる前に中核病院に行くように指示した。
- 218.透析をしている利用者の介護タクシー会社に連絡がつかず、その他のタクシーも手配できず、直接車で病院まで送り届けた。

- 220.震災後、しばらくは、朝に自分（家族）の分の水や食料の配給に並び、その後出勤する日が続いた。独居の方の中には、家族がしばらく来れない方も居た為、自分の自宅の食料を2週間位毎日届けながら安否確認をしていた方もいた。シルバーセンターを通していただいた食料、水は非常に助かり、利用者の皆さんにも喜ばれた。何より困ったのは、ガソリンだった。安否確認の訪問をするにもガソリンが足りず、毎日早朝からガソリンスタンドに並び、昼近くにやっと2千円分位のガソリンを入れて訪問するという日が毎日続いた。他の事業所さんも同じ状況でサービス提供はしたいが、ガソリンが無いので訪問できない、迎えにいけないと言う声を良く聞いた。
- 224.在宅酸素の方は主治医の指示待ちで入院、エアマッドの方はそのまま大丈夫であることを確認、透析の方はタクシーによる送迎の確保の確認を取る事を優先しました。
- 225.1人暮らし、障害者、高齢世帯に対しては、近隣での水、食料等の支援があった。薬の残が少ない人に対しては、涌谷町国保担当者に相談し、出せる範囲での対応をお願いした。エアマッド利用者は布団に毛布を敷き対応した。透析患者の交通手段（ガソリン不足）は町で定期バスを運行した。透析病院間で患者依頼があり、時間は掛かったが無事透析できた。ギャッチベッドが挙上のまま止まったケースに対しては、布団対応をお願いした。
- 230.安否確認優先で、電力が停止したことに対しての不具合が頭に浮かびませんでした。（ベッド、エアマッド、酸素、吸引器）2日目に各自宅を訪問、エアマッド、在宅酸素、吸引器利用の方は、発電機を即準備できたことを確認しました。エアマッド利用者の方で発電機のない方が1人居ましたが幸い床ずれの無い方でしたので、取り外し布団対応しました。
- 231.各利用者宅へ状態確認。エアマッドの代替として、布団を敷いていただくことなど連絡した。
- 232.エアマッドの空気が入らなかった為、体位交換をまめにしていただけるようにご家族にお話してきました。
- 236.停電によりエアマッドが使用できず、床ずれ悪化し心配された。訪問看護利用者には訪問看護事業所にて安否確認した際、布団へ移動していただいたり、訪問介護事業所にて体位交換のため、訪問追加していただいたりしてとても助かった。
- 246.断水が続いていた方（一人暮らし、高齢者だけの世帯を中心に）に水を持って行く。地域包括の支援物資を持って行く等の対応をしました。2～3週間はスーパーで買い物をするにも2～3時間待ちの状況が続き、高齢者にはとても無理と感じました。普段から食料品、生活用品のたくわえは必要と思います。おむつの確保も本当に大変でした。
- 251.食事を調理する為の火がなかった為、庭先で一斗缶に木を入れて飯ごうでご飯を炊いたり、自家発電機を用意してあったので、IHクッキングヒーターでお湯を沸かしたり工夫しました。オムツは在庫がない状態だったので、手分けして薬局で購入しました。
- 254.停電でエアマッドの空気が直ぐ抜けて、家族が褥瘡を作らないように体の向きを変えて対応、電気は2日後に復活した為、エアマッドも回復し褥瘡等徴候もなく過ごせてよかった。在宅酸素使用していたが、酸素会社への連絡も取れなかった。停電中酸素は使用しなかった。停電時チューブの部分折り曲げ、紐などで結んでおくと8時間は空気が抜けずにすむ事を家族へ説明した。また在宅酸素の予備ボンベを持っていた人はそれを使った。
- 258.給水車までいけないなど、飲料水確保ができない家庭において、市に連絡をして水を持ってきてもらった。

259. エアマットを外し、体位交換を行うように指示。ガソリンがない為、またサービス事業所も休業した所がほとんどであった。利用者宅に何度も行く必要があったと思うが、ほとんど最初の安否確認一回。ヘルパー、訪問看護、ケアマネには、優先的に給油してほしかった。当事業所の車には、無線がついているので役に立った。
262. 水、食料確保の為長時間並んだり、トイレ排水用の水を汲むために、川でバケツで水を汲んだりした。
270. 停電により、エアマット使用不可となり褥瘡悪化が見込まれた為(寝たきり、栄養不良、暖房使用不可)、家族と相談、入院し状態維持できた。
272. ガソリン不足により、遠方に住んでいる独居の方の所に車でいけなくなり、近くに住んでいるヘルパーさんが5 km位を自転車を通い訪問してくれました。オムツは品薄で困りました。事業所に配布されたオムツを届けた処もありました。
274. 断水はあまりなく、特に山間部は、炭コタツやまき使用し、思ったより不自由なく生活しているようでした。自家発電を使っているご家庭もありました。
276. 酸素の人は病院に行っていた。吸引必要な人は、近所の人に発電機を借りて対応していた。こちらが対応しなくても、皆何とかなっていた。
277. 一人暮らしの人の支援ができず、親類からショート利用の要請があったが、受け入れはしてもらえなかった。施設へ、毎日の食事の不安等を相談した所、食材を提供してくれた。今まであまり交流が無かった親類等が手伝ってくれるようになった。サービス事業所職員が給水場所に並び、必要分の水の確保を行ってくれ、高齢世帯等は大分助かった。ガソリン確保がままならず、事業所等を含め利用者への安否確認及び介護不足から悪化した方もいた。
282. 電動ベッドが停止したことにより、数時間そのままでしたし、何日もエアマッドが使えなかった為、褥瘡が悪化した。
285. 高齢者専用賃貸住宅で、入居者全員を一階ホールに集め、暖はとれないが毛布や布団を下に下ろして皆で不安な夜過ごした。
287. ライフラインが全てストップする経験が無く、町全てが暗闇の生活を体験しました。充電器(携帯電話)、手動で発電するライト、電池、発電機、ガソリン等々普段は必要ないものでも備えておかないといけないと、つくづく思いました。ガソリンが無く、自転車で居宅訪問しましたが、体力的に大変なことでした。
292. 福祉施設での食料不足が大変であった。行政に相談しても回答が得られなかった。
307. ライフライン停止に伴い、会社で支援物資を集め、食料等を持ちながら安否確認をしたが、自分自身もどうしたらよいか分らず、2～3日は生活に困らないよう個別に対応をした。
311. エアマットが機能しない、ベッドがギャッジアップしたままになってしまったなど、福祉用具に関する事は、福祉用具(併設の)に対応してもらいました。オムツに関しては福祉用具で試供品在庫としてもっていたものを、必要だろうと判断される利用者宅に、安否確認の際持っていったほか、大河原の町役場に寄付しました。
313. 停電に対しては自家発電機で対応しましたが、ガソリン使用なのでやがては尽きるのではないかという不安がありました。特に人工呼吸器や在宅酸素使用者については、命に直結するので、緊急で受入れてくれた病院には感謝しております。
315. 体調不良時の病院受入対応、電話が使用できず、実際に行って受入病院を探した。デイサービスから自宅に戻ってきても、ライフラインが停止しているために生活できない状況であった。一週間程度、ナイトケア対応した。食料不足であったが、老人介護施設の

- 社名の車両だったので、野菜や牛乳などの支援の声掛けをしてくださる会社や近隣住民がいて助かった。ありがたかった。
- 316.ガソリン不足にて、軽油の車を利用し対応した。又電気が必要となり、自家発電を利用した。施設利用で、在宅酸素を使用していた方がいたので、自分の利用者ではないが、相談し対応した。
- 318.地域のガソリンスタンドで、優先的にガソリンを給油（配達）したり、店が開くまでの間、施設の車と職員の車にガソリンを入れてくれたため、並んでまで給油することがなかった。
- 319.炊き出しや水分・オムツなどの支給を行った。
- 321.福祉用具については、各事業所が独自に利用者宅を訪問し、対応してくれていたため、苦情など聞かれていない。独居高齢者など、自分で食料など確保できない方に対して、緊急の対応としてサービス内容を変更して対応したケースもあった。
- 322.比較的早く、事業所の水が復旧したため、訪問介護など利用して、利用者宅へ水を届けた。
- 324.農村部では、各自、春の農業に備えて軽油など確保しており、停電でも自己保有の発電機で対応したり、手押ポンプがあったから、断水でも何とかなれた。外で煮炊きしてキャンプのようにして暮らしたなど、当方が教えてもらうことの方が多かった。
- 328.電気がだめだった時期、床ずれが出現してしまった利用者に対して、エアマットではなく、静止型の床ずれマットを導入。訪問入浴・訪問看護を増やしたりして対応。電気が通ってから即、エアマット・電動ベッドを導入した。
- 330.電動ベッド・エアマットの方は布団へ寝ていただきました。床ずれのある方やフォーレ交換が必要な方で、ガソリン不足により訪看が対応出来なかった方は、町の病院の看護師長が対応してくれました。透析の方は、別の病院で（バスにて山形の病院へ、1回13時間位かけて）対応していました。在宅酸素の方は発電できる避難所を2～3日ごとに移動しながら過ごされていました（川崎は停電）。水や食料については、町の方と協力し、町にあった携帯用の水入れを借りて、訪問時にもって行きました（食料も配給があった時）。仙南保健福祉事務所の方が夜に急にきて、「石巻市から被災者を施設入所5名受け入れできないか？」ときた時は、町の災害対策本部に行き、衛星電話を使用し調整しましたが、結局出来ませんでした。燃料はいつも利用しているガソリンスタンドより少しずつ（1日10L位）分けてもらっていました。町からも10日後位から2～3日に20L位わけてもらいました。それにより車を使用しての訪問を継続できました。
- 331.1階・2階に居室のある利用者の居室のライフラインが停止となってしまったため、ライフラインが復旧するまでは入所者全員1階の食堂にて寝食を共にしながら復旧を待ち、夜間は車のライトを灯りに対応行った。
- 337.停電によりエアマットが使用できなくなり、低反発マットを入れてもらったが、あつと言う間に両足に褥そうができてしまった。電気復旧してからすぐにエアマットに交換してもらったが、褥そうが治るまでに半年かかってしまった。自家発電など必要なのかと思われるが、電気がないとエアマットまで使えなくなるのかと、電気の大切さを改めて感じました。
- 340.透析の人から、区役所からガソリンを優先してもらえるとテレビで情報が流れる前に教えてもらった。家族が優先してもらっている人に聞いたようだ。他の透析の人に上記の件をお知らせした。
- 343.エアマット利用している方に関しては、業者に除圧マットレスに変更を依頼した。ギャ

- ッジアップされたままで、停電になった方がいたため、業者に連絡し対応を依頼（その後、停電時の対応について研修受ける）。透析している方に関して、状況に応じて入院する対応を取った。
- 344.電動ベッド使用者3名中2名は施設に移動。1名は頻繁に（家族の協力を得て）ボランティアで体交に訪問した。
- 345.毎日職員（2～3名）が給水車、お店に並び食料を購入、食料調達できない人に持参。会社にあったオムツを利用者に分配した（販売分）。
- 347.ライフラインは長く止まっていた。自分達も利用者宅へは1週間以上行けない地区も多く、確認が遅れた。1件エアマットが使えず、体調も崩し、床ずれを作って亡くなった方がいた。
- 349.高齢者世帯・独居の水や食料の確保。
- 352.地域によって部分的に使用できるものがあり、職員の中で共有した。当日・翌日の状況から他のスタッフは自宅待機の指示をし、移動のタイミングまで体力・ガソリンを温存させた。正確な情報入手がもっとも大切だと感じた。
- 353.事業所で確保していた介護用品があったので、訪問できるようになってから渡して回った。食料も近くの避難場所や行政から頂いたものを分けてまわったが、こちらから足を運び提供して頂くという形だった。
- 354.在宅酸素の方の対応として、自家発電・酸素に関しては、主治医が近医だったため吸引器使用。病院の予備用ボンベも貸してもらった。長期ライフライン停止時には、入院も検討したが、入院せず済んだ。
- 363.電気が使えず、エアマットが使用できなくなったので、非常電源がある病院に連絡をとり、数日引き取ってもらった。車のバッテリーから電源を取り、ベッドや吸引器を動かした所もあった。
- 365.食事時間ではなかったため、ベッドを寝せている方が多かったが、起こしたまま停電になった方が大変そうだった。福祉用具の事業所とも連絡が取れず、マットレスを床に下ろしたり、他の福祉用具事業所から助言を受け、支柱を外したりして対応した。電気に頼った生活になっており、石油ストーブがない家庭も多く、厚着をさせたり、多量の布団を掛けたりと床ずれのリスクも高まった。
- 366.電動ベッドがギョジャアップしたままで停止したり、エアマットの空気が抜けた方がおり、福祉用具貸与の事業者に連絡し、早急に対応してもらった。
- 369.肝臓が悪く透析のリスクのある利用者が、その予防のための薬が切れたときの相談受け、その薬を病院に取りにいかねばならない状況であったが、タクシーへの連絡が取れず家族とも連絡取れず（近所には居ない）。自分の車にもガソリンもわずかな状況で、夫に娘の自転車で病院から利用者宅に行ってもらった。後で利用者の方には感謝された。非常勤のケアマネと2人体制の事業所であったが、ガソリンが確保できず、出社できない状況であった。新規事業で開設したばかりで、先行きが真っ暗になった。
- 370.ライフライン・物流の停止により、物資の不足が起こった。ガソリンは緊急性の低い事業所として一般の市民と共に並んで買った（4～6時間で2000円、14～17L）。効率の悪い状況だった。同じ地域で事業所関係なく連絡をとりあえる方法も必要かと思いい連絡するが、事業所とも連絡がとれなかった。
- 371.体位交換・リクライニング体勢の保持は家族が対応していた。エアマットは空気が抜けた状態で使用していた。ご本人は寒さを訴えていた。
- 373.自宅津波により、電動ベッドが泥まみれとなる。家族は自宅を掃除し、早く避難所から

- 戻りたいと希望され、ライフライン停止していたが、ベッド交換をJCIへ依頼しすぐに対応していただいた。
- 377.独居の方の家族へ連絡し、食品などの支援可能か確認し、依頼した。シルバーセンターでの支給を受け、独居・高齢者夫婦世帯へケアマネ・ヘルパーで手分けして配った。
- 386.在宅酸素利用者の方で、家族対応で病院へ通院・入院となる。エアマット、ギャッジアップしたまま停電し家族対応で布団へ移した。
- 389.ガソリン不足でヘルパーが訪問できない事で、家族の精神的不安が大きくなった。家族内で色々工夫されて、過ごされていたことが後日の訪問で分かった。
- 391.ベッドアップの状態ですべてのライフラインが停止となり、復旧までの数日間そのままの状態でも過ごされた。布団に移し、休んでいただいた。床ずれの悪化、近所の農業用発電機を借用し、エアマットの使用が可能になる。
- 393.隣の市では行政が中心となり、ガソリンなどの燃料を優先的に調達されたようであるが、当市では要望しても全く対応してもらえなかった。
- 395.電動ベッドが挙上したまま停電となり、エアマットも空気が抜けてしまった。布団に移動して、発電機を近所から借りて挙上を直した。エアマットは使用できないので、ベッド上で布団を敷いて対応し、体位交換の旨を家族に説明する。
- 397.あるレンタル業者が、停電時にも対応できるエアマットに自主的に交換してくれた。大変助かったが、他の業者は特に何も対応してくれなかった所もあり、大きな差があった。
- 401.在宅酸素の人の自宅保管のボンベの終了タイムリミットが近づくと、本人は入院を拒否していたため、親戚などの説得でなんとか自家発電のある病院へ入院させた。訪問にはガソリンが不足していたため、自転車でモニタリングを行った。
- 402.地域により使用できるライフラインがあったので、職員同士で情報を共有した。
- 404.オムツ交換時の清拭を行うことが出来なかったため、床ずれが出来易くなってしまった。
- 405.給油が出来ず、透析に行くまで時間を要した。
- 406.事務所隣が給水所だったため、水の確保がスムーズに出来た。ストックしていた米や食材・野菜があったため困る事は少なかった。
- 412.連絡がとれた時、胃ろうによる食事終了後で、30度位ギャッチアップしたまま停電になったが、家族で対処していたことがわかった。
- 423.訪問介護による食事支援している所（独居）で、しばらく買い物できるような環境でなかったため、食材調達に行政からの支援物資をわけてもらった。
- 427.停電によりエアマットが機能しなくなった。レンタル業者も休業していたので、ケアマネが訪問して、応急処置としてベッドに布団を敷き対応した。
- 429.ガソリンがないので、会社に泊まって対応しました。今回のような時には福祉に関しても緊急車両として早めに認可して欲しかった。単身や高齢者世帯に水・食糧・オムツなど届けた。遠くに住んでいる家族もなかなか来れない状態であった。
- 435.電動ベッドの対応までは手がまわらなかった。とりあえず、フラットになっていたため、そのままとした。床ずれなどが悪化することはなかった。食料の確保が困難。ヘルパーと協力して、手に入るものは自分の家から持っていった。水も同様、ペットボトルに入れて持参した。オムツの不安も多く、在庫あったものを提供した。
- 436.長町地域の水道・電気の回復が早かったので、なんとか過ごすことが出来たが、吸引の必要な人は一時的に入院していただいた。都市ガスが使えなかったため、入浴が難しく、入浴できるデイサービスに繋げた方が多かった。
- 438.電動ベッド、背上げ中に被災。エアマットもしぼみ、同じ姿勢が続いたため、あつとい

う間に床ずれ悪化。未だに良くなりません。

439. ライフラインの停止に関しては個人的に認識が甘かったと反省している。特に電気が止まるということは、ベッドやエアマットの機能も停止していることだと今になって思考が繋がるが、震災前は本当に認識が甘く、ライフラインが停止した場合の対応を各利用者さんに啓蒙して来なかったことが問題かと思われる。あとは吸引器が利用できなくなるので、その場合の対応も予め説明しておく必要があると思いました。今回の震災前に予め、足踏み式の吸引器を購入していた方、又震災後に購入した方がいらっしゃいます。ケアマネとして、重度の利用者を多く担当する者として出来るのはそういった事かと…。物資が必要でも、介護者がいてもなかなか買い物にいけない、並べないといった方もあり、大変だったご家庭もありました。その家の事情を知られているご近所の方がいらっしゃったので、そういった方からご支援をいただき、何とかなったようですが、通常近隣の方との関わりがない方だったらどうだったのだろう…?と考えてしまいます。
440. 自分自身では対応できませんでした。経管栄養の利用者さん、ギャジアップ中に停電。家族はとりあえず、頭を平らに工夫し対応した。次の日訪看看護師が訪問して、車より電気をつないでとりあえずベッドは下げてもらった。ベッドを高くしたままで停電（ベッドから車椅子へ移乗する時は、車椅子より少し高めにベッドを高くしていた）。車椅子からベッドへ移乗させるのが、とても大変な思いをした。しばらくの間、電動ベッドは使えなかった。
442. 福祉用具貸与事業所がバッテリーを持ち合わせ、電動ベッドの対応を実施してくれたため助かった。
453. 停電により電動ベッド・エアマットが使用不可。家族が布団に移動やケアマネ持参の体位交換マットにて体位保持し復旧まで家族が対応した。また吸引器使用不可にて、家族（妻）が自分の口でカテーテルを吸い痰を吸い取っていた。その後非常時のために足踏みポンプ式の吸引器を購入したが、吸引力が弱く使い勝手が悪かったと聞いた。
456. 当日あるいは翌日に受診し、薬を処方していただく予定だった方の内服薬がなくなってしまうため（高齢世帯）、主治医と連絡を取り、数日分の薬を処方していただきました。薬局も停電のため、自宅からお薬手帳を預かり処方内容を確認していただき、自宅に届けました。
457. 電話が使えないので、本人や家族・サービス提供事業所・ケアマネ同士・職場の本部とも連絡がつかないため、余震も続いている状況でどの時点でどう対応したら良いのか戸惑った。まずは一人暮らしや日中独居、高齢者二人暮らしから、安否確認を行いました。3/12、13日も自宅の近所を担当している一人暮らしの方を訪問して安否確認を行いました。14日からは、ケアマネ3人が同じ車に乗って、利用者宅を訪問し、安否確認を行いました。地域的に事務所から遠くはなれた場所に住む利用者の方がほとんどで、連絡手段が訪問して状態を確認するしかないため、ガソリンも深刻でした。自分が毎日通勤するのも大変な状況でした。
459. 安否確認後、すぐにライフライン停止による影響がありました。電気・ガス・水道・食料に関しては、家族・地域の診療所の情報が入りました。包括からの早急な情報提供により、利用者に伝達できました。
471. ギャジアップで胃ろうを入れている所で震災となってしまう、介護者一人ではご本人を動かせなかった。夜、他の家族帰宅後に布団に移すが、その半日で床ずれが出来てしまい、その後主治医などの協力を頂くこととなったが、医師もとても大変な状況であった。薬が震災直後切れる方が多く、病院側も数日分しか出せないと言われ苦労した。少

- ししてからは、医師会で決められた処方量が決まり落ち着いた。開いていない病院・薬局があり、開いている病院へ事情を伝え処方への協力も仰いだ。
- 472.食物を配った。電動ベッドがギャジアップ状態で停止しどうにかして戻したものの、その後どうにもならなくなったと連絡が入り福祉用具の事業所へ報告した。ガソリンも足りないため、自宅近くに行った時にスタンドに理由を説明し対応してもらった。エアマットを利用している方に対して、やわらかめのマットを配ってくださった事業所があった（事後報告あり）。
- 474.エアマットが停電により空気が抜け、福祉用具へ緊急対応の方法を確認した。
- 478.食料はある程度備蓄している方が多かった。経管栄養の方の栄養剤の不足があり困った。
- 482.震災当日、避難所へ避難し、次の日から出勤できなくなりました。3/1 1～20日まで避難所にいました。テレビもラジオも暖房もなく、みんな夢中で逃げてきた様子でした。沿岸の人は津波の様子を知ることが出来なかったのも、余震の不安もあって、12.13日頃は動かず座って過ごしていました。寒くて眠れませんでした。持病、特に心臓・血圧の内服をしている方は、3～4日目頃に自宅に戻る方が多かったです。避難せず自宅にいた高齢者が多かった（大津波警報が鳴り、一時避難したものの、夜に帰宅若しくは次の日帰宅）。給水・配給の場所が遠く、水が重く、高齢の方々は大変でした。体育館での生活中、市内の動きや情報が届かず、何をしていたか分からない状況でした。「長靴がないと歩けない」という噂や「放射線が降ってくるから、外に出ない方がいい」など口コミが広がり、不安と焦りがありました。事業所ごとではなく、地域ごとの救援がスムーズにできれば良かったと考えます。トランシーバーがあると嬉しかった。自転車・軍手・マスク・長靴・消毒用アルコールが欲しかったです。
- 486.安否確認時、水不足の訴えがあったが、地区の区長さんや民生委員さんに相談したところ、利用者さん宅に水を持って行って頂けた。内服薬及び目薬が不足との事で、病院に行き頂いてきた。病院も大変込み合っていて、薬を頂くまで2～3時間かかった。
- 487.安否確認をしながら、水のない利用者に給水所から水を運んだ。食べる物がないと不安な2人暮らしの家族へ、民生委員や近所の方へ協力をお願いしたらきちんと対応していただいた。
- 489.経管栄養の方の材料がなくなってしまった。なにをどうしたらいいか、家族は困っていた。ジュース・お茶など、家にある物で流動食の様な物を取りあえず入れておくよう指導。薬があと2日でなくなる、取りにも行けない、処方してもらえない、どうしたらいいかと訪問時言われる。親戚の人に頼んで車を出してもらい、何とか開業医に行ってもらった。
- 490.①電動ベッドがギャジアップのまま停止されており、床に布団を敷き、二人がかりで降ろした。②エアマットのエアが少しずつ抜けてきており、布団を入れた。③在宅酸素のボンベに切りかえ、残なくなる前に受診を勧めた。④吸引器の使用について、体位の工夫・口腔内ケアなどの説明した。
- 491.同法人内の福祉用具担当者と相談し、エアマットの調整やベッドの対応をした（空気が漏れない工夫・発電機での対応）。
- 504.湧き水をもらいに行った。とても助かった。ペットボトルは大小問わずとても役に立ち工夫しながら使用した。ご飯を炊く事はできても保温が効かないのがとても不便だった。在宅酸素の知識がなかった。担当利用者に酸素利用者が居ない事も一つだが、震災後、社内で勉強会はとても参考になった。今後もマニュアルを後読しながら、イメージをして自分の物にしていきたい。

- 505.まずはガソリンがない、電話が通じないという状況であったため、家族の手があるところは対応を除いた。電動ベッド・エアマットを使用している利用者で、家族の対応が望めない所へ出向き、エアマットから布団への移行など行っている。
- 506.停電になり、在宅酸素利用者の対応が困難だった。訪問看護が病院から来ている利用者はすぐに避難入院できたが、主治医が個人病院の方は酸素ボンベの確保や主治医との連携を図りながら、地震から4日目でようやく避難入院をすることができた。
- 508.ベッドをちょうど90度にかけていて電気が止まり、その姿勢で数日間過ごした方がいた。在宅酸素で酸素ボンベが限られていたため、量を少なくしていた方もいた。
- 509.避難先のデイサービスでたくさんの自宅に戻れない利用者様があり、職員が交代で近くの湧き水のある所へ何回もくみに行った。
- 514.飲料水や生活用水に困り、近隣の井戸からくみ上げられる所に職員が並び、独居や高齢者・障害者宅に届けた。容器がない時はダンボールにビニール袋をかぶせて、水を入れて届けたりした。
- 517.ガソリンがなく、遠くの利用者宅にはすぐには訪問できなかった。電話も通じず、特に身障者の安全確認は近くのヘルパーが自主的に訪問してくれたり、民生委員が訪問してくれたりであった。目の見えない方から、当日夕方、テレビが倒れたので直して欲しいと連絡が入ったが訪問できず、夜になって民生委員が訪問してくれてテレビを元に戻してもらったそうである。民生委員への電話も通じなかった。身障者夫婦、買出しにお二人とも並べない、食べ物がないという電話があつての訪問であったが、パン・ご飯（パック入り）・水を持参するのがやっとであった。町内会長さんからおにぎりの差し入れがあつたとのこと。又、別の身障者夫婦の訪問もすぐにはできなかったが、町内の人が水汲みの支援をしてくれていた。ガソリン不足で行けない時、近くでかけつけられる町内の民生委員・ヘルパー事業所に予め依頼しておくことも必要と思われるが、道路事情もあり必ずしもかけつけられるとは限らないので、個々に身を守る方法を確認しておく必要がある。福祉車両もガソリン優先証がほしいです。
- 518.一人暮らしの方や自分では動けない方を中心に配布のあつた水とご飯を持参しました。水がなくて困った（不安だ）と言う電話があつた。利用者様の所に事務所より（事務所は先に水がでたため）ポリ容器に入れて水を持参しました。
- 519.各事業所と連携を図り、対応できる物資を自転車や車を使い利用者宅へ届けた。
- 524.連絡がとれないことが一番困った。兼務であるため、訪問看護師として在宅酸素や人工呼吸器の利用者に対応した。
- 526.一人暮らし・高齢者世帯を中心に支援物資を届けて回った。連絡手段もなく、ガソリンもない中、自転車で安否確認をした。
- 527.施設に全国から届いた物資を一人ずつお届けした（レトルト食品・水・おむつや衣類など）。施設では2日間で食材が亡くなってしまうのではないかと不安でした。特に燃料不足では、庭の木や古紙を炊いて火を確保しました。自家発電装置が必要と感じました（レンタル・近くの会社から借用した）。弁当を作り、近隣の方に配達を頼みました。
- 528.普段は介護タクシーを利用して日中の透析だったが、娘さんが病院の指定の時間に（夜でも）送迎した。
- 529.電動ベッド・昇降座椅子の電気が使えず、上がりっぱなしだった利用者を家族と2人がかりで降ろした。電話が使えず、自転車で移動して確認したので時間がかかった。家族が遠くに避難し、薬局に行けない家族のかわりにショートステイで利用中の方に薬を運んだ。

- 533.独居や高齢世帯の水汲みが地域のヘルパーさんにかなりお世話になりました。ボランティアの水汲みはかなり日数が経ってからの提案だったので、あまり役に立たなかった。
- 535.水・食料の支給を受けることが困難な利用者には、ヘルパー（保険外・ボランティアで）さんと協力して、給水所に並んで配った。
- 537.同施設内では、水道・電気・電話など、2～3日後には復旧したのでよかったが、担当地域では1ヶ月位かかった所もあり、支援を行ったりもした。
- 538.在宅酸素の利用者の酸素確保に苦労しました。同調器付きのボンベがなく、使用するにも怖い部分がありました。電話連絡出来なかったので、会社まで取りに行っています。その他、ガソリンなど全てのライフラインの大切さがわかりました。通勤も車で20分の距離でしたが、何度も2時間近くかけて歩いて仕事に行っていました。
- 539.物資があり本当に助かりました。在宅酸素の方2名は家族対応で入院できた。津波で事務所・施設が流された。同法人の地域包括支援センターが22年4月に引越し、移動していたお陰で事務所に身をよせさせてもらった。22年4月以前のデータが居宅の分残っていたこと、保険者からも協力をいただき、要介護認定状況・住所など教えていただいた。回っている道中、他の事業所の方と会い情報交換できた。
- 541.震災当初は、福祉避難所の対応で安否確認が遅くなってしまった。訪問した時はエアマットの電気がとまったため、数名の利用者は床ずれが出来ていた。利用者の中には、連絡も取れなかったのでは仕方ない、我慢していたと言う方たちもいました。津波で数名の利用者が亡くなり、自宅が被災し何人かは施設入所をお願いした。利用者の中に気管切開をしている方がいて訪問看護を利用していたため、看護師が安否確認をしてくれて痰吸引器のバッテリーもないため緊急入院につなげてもらった。震災当日は雪が積もっていたため、雪を集めそれを暖めて体を拭くお湯にしたりトイレに流す水に使用した。
- 542.水道が止まったので、雪を代用して掃除を行った。福祉避難所に水に浸った方が運ばれてきた。雪を溶かして水を作り、反射式ストーブで鍋に湯を沸かし、ペットボトルに雪を入れ湯たんぽを作り全身の保温に役立てました。
- 543.寒い時期だったので、燃料確保が大変だった（灯油も）。
- 544.経管栄養の方に水を届けた。普通食を食べられる方は何とかなくても、ミキサー食やトロミ食で対応していた方には、支援物資の介護食や離乳食で対応したが、すぐに物資が手に入らなくなった。主治医の病院が被災したり、ガソリン不足で通院できない方には、近くの病院の協力をもらって薬を調達した。ろうそくが欲しいとの要望があり、併設施設から頂いて届けた。エアマットの人はマットレスに交換した。
- 552.事務所の水道が止まらなかったのに、ペットボトルに水を汲んで避難所にも行けない利用者宅に届けました（遠方に住む親族は来ることができず、私達の車は緊急車両とは認められずガソリンがなく、徒歩・自転車の為水が重く苦労しました）。停電のため、特殊寝台の背上げをしたまま下ろすことができず困りました（福祉用具担当の方との連絡がしばらく取れませんでした）。避難所に行けない方への支援物資がなく、区役所に相談すると避難所へ行ってもらってくださいと言われ、避難所では怒られ、とても悲しくつらい日々を送りました。支援するケアマネ自身の食事もままならない状態での支援の為、事務所で職員それぞれがある物を持ち寄ってご飯を炊いておにぎりにして食べ避難所に行くことができない方にも配りました（何時間も商店に並んで買い物をするなど2週間程度余裕がありませんでした）。脊髄損傷の方で、褥そうある方がエアマットも使えず、介護サービスも受けることができず、家族が遠方で来れず日々悪化し熱発してどうにもならない極限のところまで病院につなぐことが出来ました。

- 560.エアマット使えず、褥そう発生者が複数。
- 565.ベッド・エアマットなどについては近くの福祉用具事業所が訪問し、ギャッジの調整や低反発マットへの交換などを行ってくれた。在宅酸素については、既にボンベへの切り替えの指導を受けており、速やかに家族が対応出来ていた。吸引が必要な利用者については、バッテリーのものや手動式のを事前に準備し、災害時に利用できるよう指導してあったので役に立った。
579. 救急車・自衛隊以外、公的援助には期待してもムダ。何もできない。ガソリンもなく灯油もない。
580. ライフラインが停止したため、食事や暖房設備が整備されず、二次的に体調を崩された人が目立ちました。
581. 断水になるという情報があり、各地区で区長などが連絡してくれたところもあったが、独居の利用者宅で伝わっていないところがあり、そういうところを回って水を汲んだ。吸引が必要な利用者がいて、手動の方法も訪問看護師から教えてもらってはいたが、どうしても痰がとり切れず、最後は家族が管を直接吸って痰を取った。しかし、それでも状態は悪化し亡くなった。
583. ガソリンがなくなり、車が動けなくなったこともこれに該当すると考える。ヘルパー・ケアマネ・訪看が利用者宅に訪問できなくなる事態が発生した。自転車で動いていたヘルパーもいたが、よくやったと思う。他事業所のケアマネが訪問できなくなり、困り事を当事業所に持ち込まれたケースがあった。よく知っている利用者であり、担当ケアマネも割りと親しい人だったので支援し、とりあえずのニーズは解決できた。事業所までの通勤距離や事業所から利用者宅までの距離が長い場合、全く訪問出来ないことになる。近くのケアマネ事業で「業務を休止します」との文書を近隣の各事業にFAXで送った所があり、これは法律上の「休止」なのか、届けは出したのかと聞くと、「いえ、ガソリンが入るまで何日か休むということです」とのこと、このような混乱も起こりました。このような時、近くにいるケアマネが遠方からこななければならないようなケアマネの代わりを出来るようなシステムがあれば良いなと思います。個人情報の取扱など色々難しい面はあるでしょうが…。
584. 一人暮らし・老夫婦世帯の利用者様に、水・食料品・灯油を調達し届けた。
585. 弁当もデイサービスも休みとなり、隣人や子供さん達の友人の手伝いがあり、感謝していました。
586. 独居・高齢者世帯での水・食料不足があり、仙台市介護保険係の食料支援と自社ボランティアによる食料支援を調達・配布まで行った。
- 588 対応できなかった。町内会・民生委員に連絡し対応をお願いした。
591. ①電動ベッドがギャッジアップ状態で止まり、訪問介護を2人体制で行った。②エアマットチューブを結束した。
593. 電動ベッドがギャッジアップしたまま停止したため、男性職員とまわり布団に寝かせた。食料がなくなり、一人暮らしの家には市役所からもらった食料、施設に届いたものを配って回った。
594. 電動ベッドがギャッジアップのまま動かない時、連絡を頂くようお願いしておく良かった。家族さんが床に布団を敷き、横にしてくださっていたことを聞いた。食材がない方に事務所にある冷凍の食料などをお届けした。
599. 上体を起こしたまま停電になったため、家族総出でベッドの下に布団を敷き移し、2日間生活していた。訪問時その話を聞き、福祉用具貸与している事業所に電話連絡。運良

- くつながり上体を下げる方法を聞き、同じ事業所にいるヘルパーと同行訪問しベッドのピンを外しフラットにした。
- 603.避難所・病院・施設にいた方以外で、独居または老人世帯だったのは4件でした。水・食料の配給場所が住居を下った坂の下の集会所だったため、取りに行くのが困難だった方には、区長さんが食料を届けてくれましたが、水は頻繁に汲みに行かねば足りなくなるので、汲みに行くのを手伝いました。又、支援物資の中からおむつをもらいに行き届けました。町内におむつを買える店はなくなり、車も流され、あってもガソリンもなく、オムツを手に入れることの出来ない方々が相当数いらっしゃいました。薬は普段離れて暮らす家族に来てもらったり、通院付き添いをする方々は行き来が出来なくなり、代わりに薬を病院（津波で病院内の薬の情報が流されており、個人の情報として管理していた中から薬を提示して渡してもらいました。）にもらいに行きましたが、一人糖尿病の方がいて本人が受診しないと薬は出せない、あるいは血糖値を測ってきてほしいとのことで、ボランティアで来ていた看護師さんを利用者さん宅に連れて行き、体調確認と血糖測定をしてもらいました。デイ・ショート利用で薬のない方々の分の薬を取りに病院に行った頃は、震災直後だったので2～3日分しか薬が出ず不便でした。
- 607.電話・電気復旧後にすぐに、エアマットのトラブルの連絡があり。すぐに業者へ連絡して対応してもらった。
- 614.①介護者がいなくなり独居となった方について、ヘルパーの訪問状況も確認できず、ケアマネがヘルプサービスを提供した（買物・調理・身体介護）。確認出来たからもガソリンの問題でサービス制限され、ケアマネが2週間程度対応した。食材の確保のため店頭で並んだり、水の配達をしました。また近隣住民からの支援をお願いし、炊き出しのおすそ分けなど頂きました。糖尿病の内服に関し、食事量を伝え内服薬変更の指示いただきました。②老々介護の利用者宅の水・食料の確認をして対応しました。食料は家族で入手できた方が多かった。③オムツの残確認、配達サービスの手配をしました。④入浴サービス停止により、保清状況確認し入浴車サービス事業者が歩いて清拭に行ってくれた。⑤電動ベッド・エアマット使用者へ即座に対応できずに、家族マンパワーに頼った。後日、福祉用具事業者より調整お願いした。また手動吸引器を購入してもらった。⑥体位など工夫してもらった。訪問看護はサービス停止がなく安心できた。⑦在宅酸素の方の酸素ボンベが入手困難となり、ショート中に緊急入院。電気復帰後もショート利用できず在宅にて過ごした。
- 620.固定電話が通じなかったことから、自分の携帯で安否確認やサービス事業所との連絡調整を行った。
- 622.要介護5で全介助の利用者が、電動ベッドでアップしていたため、緊急に施設へ移動させた。その後社協から手動式のベッドを貸してもらった。
- 624.酸素・ベッドの停止は寝たきりの方にとって生命の危機だった。
- 626.その時は対応出来なかったが、エアマットが停電で使用できない時の応急処置の方法を書面にて伝えた。
- 628.近くの方は歩いていきましたが、車がないため困りました。ガソリンがないのが一番大変でした。ベッド・エアマットは二人介助でずらして寝せたりしました。各事業所（特にレンタル部門）の動きが良く分からなかった。
- 635.エアマット使用者宅には、奇跡的に自家発電電気があり、エアマットが使用できていました。食事の際のリクライニングは布団を丸めるなど、工夫されておりました。
- 647.吸引器が使用できず困り、訪看のお世話になりました。

- 658.透析の方に関しては、普段は介護タクシーを利用していましたが、ガソリンなどの不足、高齢者世帯といった事情から、代替手段が乏しかったのですが、親戚の方に何とか対応していただき急場をしのぎました。
- 661.訪問看護師に1日2～3回訪問して頂き、痰の吸引やエアマットに空気を入れて頂き、とても助かった。仙骨部発赤軽度出現しましたがその後すぐ治りました。
- 662.電気使えず、エアマットが使えないのでそれ以外で使える物を手配した。
- 665.ある福祉用具の担当者が、当日から巡回して報告に事業所まで来てくれた。訪問看護は優先順位を決めて訪問を継続、翌日報告があった。ヘルパーは一人暮らしや重度の方を優先的に訪問。デイで保護している方は直接自宅送迎できた方達の報告をいただいた。電話・携帯ともに不通で、メールやり取りで安否確認できた方もいました。ほぼ近在の方で、自転車移動できる範囲、当日から翌日も自己判断で動きました。
- 672.エアマット：接続部をしばって空気が漏れないようにする。背部にタオル・クッションなどをあて、発赤を予防した。電動ベッド：ギャジアップのまま過ごす。本人から2、3日ならこのままでも大丈夫と言われた。2、3日後に再確認すると、電気が戻りベッドも戻せていた。透析：病院の自家発電で通常の半分の時間のみ透析を実施し、薬を処方された。
- 679.老健であるのに、ガソリンの緊急車両登録ができなかった。行政で対応が違うのはおかしい。普段から福祉施設は緊急車両登録を許すべき。立場の弱い人を守る施設が許可されないのは、人としてどうかと思う。
- 681.職場に1週間泊まり、食事の準備・買出し・生活全般の支援を行った。
- 682.田舎のため、食材や暖を取ることにに関しては、困ったことはなかった。エアマット利用の利用者様は床ずれ対応を開始した。直後で病院との連携・訪問介護との連携をした。メリットは病院も事業所から近かった事、訪問介護は同法人の事業所を利用していることから、サービス増減・傷の経過について、密に連携を取ることが出来た。電話の利用が出来ようになってからの必要なものの確認連絡でオムツがないと言う話が聞かれていた。事業所から往復22～23キロ（同居の家族は公共機関を利用しての移動だったので、何の手段も無かった）の自宅での困り事だった。ガソリン供給のない中で先に気づくべきだったと思った。オムツ利用者の把握も必要。
- 686.独居で認知症もあった方の「水」の確保が大変だった。給水湯に並んで水を持ってこることが出来なかった。訪問事業所で水を持っていってもらったり、近所の方が給水に並んでくれたりして急場をしのいだ。
- 687.ベッドがジャッジアップしてまま停電になってしまい、翌日安否確認で訪問した時、「一晩このままだったので疲れました」とそのままになっていた。ケアマネ二人で訪問していたので、マットを下に敷き、その上に寝るよう促し、電気が復旧するまでそのようにしていた。ガソリンがなく透析の送迎に困っている家族へ、透析患者のガソリン券があり、役場へ相談に行くよう繋げた。
- 689.在宅酸素を利用している方でその日はデイサービスの利用日だった。自宅を訪問すると酸素会社の担当の方が携帯用のボンベを3本置いていったとのこと。対応が早く安心した。役場に電話をしているのに繋がらない。高齢者二人暮らしで車でないと買い物が出来ない、ガソリンがないので買い物が出来ない。こういう高齢者優先でガソリンが買えるように役場に言ってくれ等、相談が寄せられた。
- 690.地域包括支援センター、役場に電話をしても繋がらないと事業所に相談の電話が入るようになった（事業所は3/15あたりから電話が復旧していた）。一人暮らしの方からの食

- 料がないとの相談や透析に通っているガソリンがないなど、様々な相談が寄せられた。局長・次長と相談し、内容により行政やサービス事業所（ヘルパー事業所など）に連絡し対応した。
- 694.車が使えなかったため自転車で訪問した。固定電話が復旧するまで携帯電話を使用した。
- 695.電気関係が必要な方は、入院を受け入れてもらったが、1名が自宅で過ごし、吸引器の充電を近所の避難所で何度かしてもらった。
- 696.食料については、家族に聞き取りを行い困っている方や独居・高齢者世帯の方達に地域包括と連携し配布した。透析を行っている利用者に対し、介護タクシー事業所が被災を受けたため、代わりに対応していただける所を探すのにとっても大変だった。
- 698.エアマット使用者に対し、空気が漏れにくくなる方法を訪問して伝えた。また、電気復旧するまでは布団などを代替するようアドバイス。直後に福祉用具事業所が事業所判断でベッド用マットレスを持って来てくれた。水や食料については、給水車などが来ていて確保されていた。自分で給水へ行くのが大変な方も、近所の方が協力してくれていた。電話が通じないため直接訪問するしかなかった。サービス事業所とも連絡とれないため、変更・追加が困難だった。
- 699.給油をしておらず、11日の夜にスタンドで手回しで20Lを売ってくれたが、ポリタンクで給油してもらう時は半分こぼれた。当日は自分の車を使い安否確認した。次の日より公用車を使用した。ライフラインの復旧のメドもつかず緊急車両扱いならば少し違ったのでは？と考えた。3日目より、通勤は徒歩か自転車だった（3/25まで）。3日目より施設の中で動いていた。その中で、電話も止まっている中、施設利用者が骨折し、連絡するのに唯一居宅の電話が使用でき、病院への搬送などもできた。また、デイなどに連絡し安否確認も出来た。居宅が特定事業所で算定しており、ケアマネの情報共有も安否確認の時は有効だった。施設のスタッフとしての仕事をしながら、他にケアマネとして何が出来るのか不安や悩みもあった。電気・水道・電話の大半がストップし、それでも出来る限りのパワーは使った。車用充電器を吸引の必要な方へ貸し出しし、バッテリー充電をしてもらった。
- 708.ライフラインの停止により各事業所のサービス提供がストップした事で身体状況の低下（筋力低下・床ずれ・病状の悪化）を招いた利用者が数名いた。福祉用具に関しては家族での体位交換支援等の指導をしたり、低反発マットへの入れ替え等にて対応した。
- 709.ライフライン停止にて、現在の生活がいかに楽に暮らしていたかと思う。最初灯油購入に何日もガソリンスタンドに寄り灯油を購入。雪が降って寒いので昔のストーブにて暖かさを確保。次に水が出てきたが風呂には電気がなく入れず、それでも事業所には出勤し、一人暮らし高齢者の世帯を訪問し安否確認をした。ガソリンもなく自転車に乗って各自訪問。灯油ストーブを確保し、水にて米を研ぎ食の確保ができた。ラジオにて地震の状況を聞いた。
- 711.ライフライン停止の為対応は不可能だった。事務所が被災し利用者様に対応する事はしばらく時間がかかった。
- 722.水の配給はほとんどなく、自分で給水所まで取りに行くのが当たり前で、高齢者の独居世帯は困っていたと思います。町内会に相談していた人もいたかと思えます。食糧もここで配給されるかもわかっていなかったと思えます。
- 724.所属事業所の高齢者と一緒に避難したものの家族と連絡が取れなかった。避難したものの避難先に非常時に備えての物が何もなく、支援物資が届くまでどうする事もできなかった。

- 735.避難所で生活する人へ朝早くから店に並び食料品を調達したり、歩くのが困難な人に給水車に並び水を確保した。
- 736.電話の開通に伴い業者と連絡を取り、エアマットの代替を相談するも道路が寸断され数日間に対応が難しかった。津波で流失した電動ベッド等すぐに対応しなければならなかったが、やはり道路の寸断で業者が移動できずに対応が遅れてしまいました。
- 737.電気が止まった為介護用ベッド、エアマットが使用できずじょく創が悪化。ベッドを交換、エアマットをマットレスタイプに交換。デイサービスも利用できなかった為訪問入浴で対応可能な事業所に緊急的に入浴を手伝ってもらった。
- 739.ライフライン停止は非常に深刻でした。食料は数日分の備蓄がありましたが、水はすぐに不足してしまいました。給水車も当初は来れる状況にはありませんでしたので直接貯水タンクからホースで水を汲み確保していました。ガスはプロパンでしたので使用はできました。電気も止まりましたので灯りや暖房が一切使えず石油ストーブにて代用、1週間程でペレットストーブ2台と発電機が支援物資としてお借り出来た為大変助かりました。しかし燃料不足は解消せずストーブ、発電機とも夜間の使用に限りました。葉は被災していない病院より頂き、違う医療機関・担当科の分も分けて頂き何とか調達できました。各居室の機能が果たされていない中で入居者が一人で過ごすには大きな危険を伴う為、夜間はホールに寝具を準備し職員配置によりトイレ誘導等も対応していきました。デイサービスも併設している為、1階はデイ利用者も避難し日中、夜間共介護に当たりました。
- 740.近隣者や家族で利用者の中学校の避難所に避難させる事ができたものの、痰吸引、電動ベッド・エアマットが使用できなくなり医療機関に入院をお願いした。その後医療機関より転院の話を紹介頂いても、他県である為家族が面会に移動する事ができなかった。市、県を通して依頼するも、カニューレに痰が詰まりやすい為2週/1回の交換となると受け入れが難しいと話される現状でした。
- 751.在宅酸素に関して酸素ボンベを病院より貸し出してもらい対応した。エアマットは当日対応できず2日後除圧機能のあるマットレスを一時的に停電が解消する3/14まで利用した。
- 752.在宅酸素や人工呼吸器の利用者様は、こちらの対応を待たずにそれぞれの家族が主治医の病院へ掛け合い入院していた。エアマットはすぐエアが抜けない事もあり皮膚トラブル等のトラブルにならなかった。
- 754.人工呼吸器使用の利用者の家族は、外部電力を車のシガーライターより取る方法が出来たがガソリン不足の為、夜間に備えアンビュバックを日中家族・友人で交代で押したと聞いた。
- 758.事業所にある物をフルに使用し工夫して繋ぎました。
- 761.住民からの食材・寝具等を頂き調理を行った。井戸水のある家より水を調達した。夜の明かりは庭等に使用しているソーラーランプを利用した。ガスは使えたので調理に不便はなかった。
- 765.電動ベッドがギャジアップのままの独居の方を布団に横にして対応。在宅酸素切れの独居の方を避難所に誘導、保健師が常駐する避難所で、酸素なしで安静で過ごしてもらった。3/17酸素事業者と連絡が取れボンベが届けられた。
- 766.幸いにも電動ベッド、エアマット、在宅酸素のトラブルはなかった。家族と業者の仲介をし、透析は病院側が継続しているのを確認した。問題は避難所へも行かず家で居続けた人達だった。地域・訪問介護と連携して水の補給、残の確認、保湿を要する人達のペ

ットボトル、お湯の確保を継続した。単純な事ではあったが、電気8日・水17日も絶たれると継続には関係者との協力が欠かせなかった。総合支所の給水車のボラセン担当スタッフが時間を見ては並び、容器という容器に確保し、訪問介護との連携で届けた。お湯は社協スタッフ、市の福祉課の集合場所となった保健福祉センターのポット全てにスタッフがお湯を沸かして入れておき、それを手分けして届けた。日が短くすぐに薄暗くなる季節ただけに、照明の無い暗がりの8日間は活動可能な時間も限られ、お日様との追いかけてこだった。主治医や薬局が営業していない関係で薬が足りなくなっている担当ケース全員を確認し、市民病院の分院に向いて処方して頂き自宅に届けた。文字にすると数行だが、なかなか時間を要するものだった。「ケアマネってここまでのの？」と医師から言われた。するのかわからないが「はい」と答えた。あの時できたのは私だけだった。

- 770.在宅酸素の人は家族がしっかり対応し、停電中は病院で過ごしてもらった。
- 773.震災では被害はなかったものの、停電で室温が保てなくなりエアーマットも徐々にしぼんでしまい体力がなくなり死亡した利用者が一名おりました。また、知人宅へ避難したものの布団で何日か過ごすうちに床ずれが発生した利用者もいます。電気が復旧してからも余震等で何度か停電になった時は床ずれが悪化するのではないかと電話連絡をしたり、できない時は直接足を運びました。
- 774.ベッドを利用していた方達の多くが被災した。避難先で床ずれができエアーマットが使えず低反発マットで対応した方が悪化し入院となった。水が出ない時期が続き保清が保てない為ヘルパーさんがペットボトルに清拭用の水を入れ持って行き対応した。汚れ物が多く、手洗いで手絞りの為乾かなかった。肌着の交換ができない。洗浄用のお湯を使わずおむつ拭きだけ使い肌のトラブルとなった。おむつ交換が照明がないためうまく出来ず、ずれてしまい汚れ物が増えてしまった。おむつの配布が遅れた。
- 776.電動ベッドやエアーマットを使用していた要介護度の高い方は、被害の激しい地域に居住されていた方が多かった為、家ごと流失した方が多く対応そのものはできなかった。
- 778.電気の停止によりエアーマットを利用している方の床ずれが悪化するケースが出てきました。自宅訪問時体位変換を勧めましたが、重度の利用者に対しては低反発への変更や療養支援隊へ訪問要請を行い必要な処置を行って頂きました。
- 780.60代男性・要介護1、80代女性(母)要支援1のご家族の方々がおり、食事の買出しや料理は県内に住む妹(50代)がしていたが、震災後ガソリン不足のためあまり行く事ができなくなり、富谷町へ相談し配食サービスを申請し、週4回昼食の配食サービスを開始した。町もすぐ対応してくれて助かった。
- 781.電気不通によるエアーマットの機能停止については低反発マットレスに交換した。透析については駅裏にある病院までの交通手段が定まらず、市営バスへ車椅子使用の交渉や民間タクシー会社・路上のタクシーに相談し、継続的にガス供給・送迎支援を請け負って頂ける所を探した。電話が繋がらないため直接自転車で廻り、地道に調査し情報を得る事ができた。
- 783.福祉用具担当事業所が優先的に訪問して頂きスムーズに対応して頂いた。また、往診医や訪問看護ステーション等からも適切なアドバイスを頂きスムーズに対応する事ができた。
- 784.病院・施設・在宅と協力し食料の買出しを行ったが、それは全て病院・施設の入院・入所の患者のみに供給され不満が残った。自分達が抱えている患者のみを優先している状況であり協力するも在宅への患者の事は全く考えていない。以上の点は改善要望として

報告しております。

- 785.エアマット使用宅へ二人で訪問し布団を敷く等して床ずれを予防した。吸引器の停止、発熱と痰絡みがあり往診医と訪問看護事業所に訪問し、状況を説明し吸引対応してもらい入院に繋がった。
- 789.ガソリンがなく困って行政に掛け合いガソリン券をもらった。行政の窓口が分からず、決定権が何処にあるのかわからなかったし時間がかかった。
- 790.利用者さんの物資確保が勿論最優先でしたが、自分の物資確保ができず緊急時の備えが必要である事を痛感した。
- 794.独居で重度の麻痺がある方へのトイレ用の水を何度もポリタンク等で毎日運んだ。携帯ガステーブルを提供した。
- 795.ガソリンが心配でも訪問できない。仕事に来るのもままならなかった。停電のためデータもなく防寒（利用者含）もできなかった。食糧不足のため、店まで行けない年寄りも心配だった。電話不通のため、利用者安否、これからの動き等全く把握できなかった。
- 797.エアマット停止で布団を敷く。燃料調達の為スタンドに一日並んだ。
- 800.透析の方は受診できた。一人は何日間か他の病院にて透析し時間も変更となった。病院側で対応を早急にしてくれた。
- 802.ベッドギャジアップ中の停電で布団対応へ。
- 816.在宅酸素・人工透析の担当利用者への対応については町包括支援センターと連携し在宅酸素利用者については公立加美病院への入院の手続きをした。人工透析者については、それぞれのかかりつけ病院の指示を仰ぎ送迎バスが出る所は利用し、そうでない所は患者を抱える家族に優先的にガソリンの供給を行い、週3回透析をしばらくの間週2回にする等した。
- 818.自家発電機のあるお宅が多く、特に問題はなかった。透析も病院での実施日の変更の連絡と通院の為のガソリン優先券の発行の情報を家族に伝えた。胃ろうのミルクの確保の為に主治医へ連絡するように伝えた。
- 819.透析者に対しての通院方法の確認を行った。寝たきりの為病院が用意する送迎バスは利用できず家族が直接タクシー業者と交渉し通院手段を確保した。他一名は以前より体調不良にあったが透析が震災翌日でできず、その後死亡した。エアマット利用者に対しては、布団への対応としたが介護者自らが早目に布団に移動していた事が多かった。
- 820.福祉用具業者の配慮でエアマット使用者の方の自宅を訪問し、低反発マットに交換してもらった。独居の方の食事の為にスーパーに並んだ。
- 821.ライフライン復旧は早い方だったが、食材を買えず困っていた。店が開いていると代わりに買物をしたりした。配食サービスは再開が早くて助かった。施設も併設しているので、水汲み・食材調達も行ってた。
824. 在宅にいる要介護者は、自分で水をもらいにいけないし、食糧も調達できない状態で、震災時はヘルパーも訪問してもらえずとても大変だった。
- 826.透析先が決まらず複数のクリニックへ依頼した。たらい回しになり透析が出来ずに戻って来る事もあった。
- 827.エアマットの電源が落ちた為、福祉用具貸与担当者へ連絡し順次迅速に対応して下さいました。介護用品の不足があり調達に苦労しましたし、それを届ける手段もなく結局自分で届けて歩きました。公民館は車椅子使用の利用者にとってはトイレも困難でした。往診の医師が迅速に対応して下さい本当に頭が下がりました。
- 828.エアマットの空気出入の線を結んで空気になるべく漏れないようにした。

- 832.酸素療法・吸引器使用の利用者さんに対しては病院での受け入れをした。病院の職員として入院受け入れ体制を整えた。ガソリン不足によりヘルパーさんを利用出来ない事があったので、家族の介護力不足の所は直接おむつ交換や床ずれ処置に行った。
- 833.ベッドアップしたまま止まってしまった。ベッドから畳に下ろし布団で対応した。体位変換中に止まってエアが抜けた。ネクサスのエアが抜けた状態で発赤した。在宅酸素で対応できるか確認の為訪問した。気管切開し痰吸引が必要な方を病院に搬送した。
- 834.停電の為電動ベッドが作動せず、ベッドアップしたままで動かないので茶の間に布団を敷いて休んでいる方がいた。すぐに福祉用具事業所へ連絡し対応してもらった。体位交換式のエアマットのエアが抜けた方はネクサスに代えてもらったり、敷き布団を敷いて体位変換をしてもらったりして対応した。
- 835.電動ベッドが90℃位ギャッジしたまま停電し本人の姿勢をそのままにしなければならぬ状態が続いた。
- 837.地域包括支援センターが中心となり、民生委員・担当ケアマネ・訪問介護事業所を通しての炊き出しや缶詰・お握りの配布があり高齢者世帯等に配布した。訪問介護事業所が独自に炊き出しを行い利用者宅に配布してくれた。
- 838.高齢者世帯は石油ストーブを持っている家が多く暖は皆取れていた。ガソリンが無く通院ができない事が一番の支障だった。薬は数日分の処方となったり一時的な処方だったが、一日おきに薬を飲む（毎日飲む薬を）等利用者の相談にのった。一人暮らしの利用者の方を近所の方が自分の家に招いてくれたり、マンションでは組合が皆を集め食材等を分けてくれていた。地域の方が一人暮らしの方の保護をしてくれていた。断水になった家もあったが、備蓄して水を保管している家もあり皆大事に使っていた。水が出ている家も多くあったので良かったと思う。寒い時期だったので食材も保管できていた面も大きい。
- 839.地域の人達が近所の独居・高齢者世帯へ手助けする姿も随分見かけました。
- 844.直接的な対応ではないのですが、エアマットが使用できなくなり、じょく創が出来てしまった利用者の方がいて、訪問看護の回数を増やし症状の悪化を防いだケースがありました。また、この事例も直接対応したケースではありませんが、痰の吸引が必要な方がいて、停電により吸引器が使用出来ない為救急車で日赤へ搬送され電気が復旧するまで入院していたという方がいました。
- 848.エアマットについて、電源が取れず低反発の物に交換してもらった。福祉用具業者もすぐに動いてくれた。透析について、病院が受け入れできるか役所等に掛け合った。
- 850.介護事業所に発電機を設け入浴させたり、焚き火をしてお湯を沸湯させたりと清拭できる状況を作りました。
- 851.寝たきり利用者1名は家族発電機、隣の家から井戸水、介護用品は多く在庫していた為困らなかった。透析の利用者はいつも利用しているタクシー会社が動いてくれ計画通りに透析できた。
- 854.とにかくガソリンが無くなり困った。自分達ケアマネよりもヘルパー・デイ等のサービス事業所が訪問等ストップすると、我々ケアマネは何もできない。家族に我慢して介護をしてもらうしかなかった。無力さを感じました。
- 855.一人暮らしの方で自力で買物や水を汲みに行く事が出来ない方がおり、訪問介護・民生委員と手分けして毎日自宅に届けた。
- 858.プロパンガスを直にコンロに繋いで湯沸し等を行った。飲水はしないが、水は近所の住民所有の井戸から、飲水用は行政等に来る給水車等、当初は雪を一箇所にまとめて溶か

- して使用した。電気は発電機使用（会社が所有、燃料は行政の支給）燃料の支給はギリギリだった。
- 859.電話が使えるようになってから電話での安否確認を行った。老老世帯や独居者等には行政で行っている支援（水汲みボラ等）や民生委員に繋いだ。自ら物資を届けに行った。
- 861.透析に行く際利用している介護タクシーが被災し、最初は何とか家族で対応していたがガソリン不足もあり困難になった。透析の曜日と時間帯も決まっている為なかなかそれに合う対応をしてくれる事業所を見つけるのが大変だった。
- 867.電動ベッドが動かず、胃ろう時ベッドアップできなくなった方に対し座椅子で対応。電動ベッドを上げたまま下がらなくなった方々に対しては布団に下ろして休んでもらった。エアマットが動かなくなった方には体位変換をお願いした。水・食糧の調達が難しい一人暮らしの方は地域包括に相談し、近くの炊き出し等教えてもらい、取りに行けない為届けてもらうように依頼した
- 868.在宅酸素の方、停電により酸素濃循器の電源が切れ携帯の酸素ボンベも使い切り、業者にも電話が繋がらず主治医も持ち合わせのボンベがなく、消防署へ行き指定の病院を紹介され入院し対応して頂いた。
- 869.ガソリン不足で身動きが取れず、福祉用具等の不具合等が分かったのは後日大分時間が経過した後でした。その後福祉用具貸与事業所や、他事業所のケアマネよりエアマット・吸引器等の緊急時の取り扱い、対応の仕方について情報があり利用者・家族へお話ししました。
- 881.特殊寝台はギャジアップしたまま停電になり、福祉用具事業者に廻って頂いた。エアマットも必要な方はマットレスの床ずれ防止用具に変更して頂いた。
- 882.独居で片麻痺あり食事はホームヘルパー利用、暖房が電気こたつ・ストーブのみの利用者だったが、避難所では要介護の受け入れはできないと言われた。宅老所において無理に入れて頂いたが、宅老所で預かっている人数を見て「ここに居られない、電気がなくても飯がなくても一人で家に居る！」と騒ぎすぐ帰り、民生委員さん区長さんに協力を頂き毎日お握りを届けて頂きペットボトルにお湯を入れて毎晩持って来て頂いた。
- 883.避難所等の場所が分からなかったり、いろいろな援助物資がどのような経路で何処で頂けるのか等を把握できていなかった。
- 885.飲料水を配って歩いた。
- 886.最低限活用できる情報を共有していきたい。例えばエアマットの空気ホースを折り曲げするなど。
- 887.ベッド・エアマット等レンタル業者と連絡を取ったが、ガソリン不足と道路が通行止めとなり時間を要した。また、電気が使用できなくエアマットから代替えを利用する期間が長くなった。
- 890.エアマットのエアが抜けた為、緊急で低反発マットレスへ変更等手配した。電動ベッドについては、利用者宅の近所で発電機があり近所の人達で対応したと話を受けた。
- 894.私は自宅から職場までが遠く、ガソリンもなく家に帰れず、震災後10日以上毎日施設に泊り込み毎日10回以上給水車からタンクで水を運ぶ（母体施設）の繰り返しでした。
- 899.自分の施設には乾電池・ラジオ・懐中電灯も無く大変苦勞した。避難して3日目位になると脱水の為か利用者さんが、せん妄状態となり興奮し怒りだしたりして介護が大変な状態だった。
- 900.地域が津波被害が大きい所なので、ベッド等は流され対応どころではなかった。透析の方は地域の消防署へ駆け込み救急車で対応してもらったと後で知った。道路も水がひか

- ない町も多くあり確認できるには時間もかかった。ケアマネとしての役割はほとんどできない状態だった。
- 903.人工透析を受けている利用者を担当しており、震災の影響でかかりつけの医療機関が透析を出来るのかわからず、また普段利用していた介護タクシーの会社が被災した為介護タクシーの手配が数日間大変だった。吸引器の代替として訪問看護ステーションと連携し手動式の吸引器を準備した。また、震災前に充電タイプの吸引器へ切り替え購入していた利用者もおり助かった。後日ご家族からも感謝された。
- 904.3月12日より担当の居宅訪問時にライフライン確認をした。電気は全部止まっているが、ガス・水道に関しては半数ぐらいが使用できた。水の出ない方も家族の協力を得て給水されていた。暖については幸いほとんどの家に反射式石油ストーブがあった。灯油も家族間で何とか工面されていた。電動ベッドについては震災後手動でギャジアップが可能な物を探すようになった。
- 905.独居（高齢者）の方に食糧を届けた。おむつ使用者には支援物資で頂いたおむつを配った。医療機関が麻痺したので避難所にいる医者を訪問し、ケアマネが代理診察し薬を処方してもらった。それを利用者宅に届けた。
- 906.担当利用者でおむつ使用者宅へ支援物資でセンターに届いたおむつを配布した（震災発生後2週間程経過していた）。当時要介護4の利用者が停電の為エアマットが利用できず、事業所へ依頼しマットレス納品調整を図った。しかし床ずれが出現してしまった。
- 913.水：自宅の分と合わせてタンクに入れてもらい運んだ。飲料：自分の買物と同時に買い持って行った。薬：処方してくれる病院に行き対応しました。衣服：尿漏れ等があっても洗濯が出来ず、干してまた使用しました。
- 914.「酸素が無くなる。どうしたら良いか？」と直接事業所に訪問あり。酸素屋さんとは連絡が取れないとの事で地元市民病院の通院を勧めた。ケアマネも同行するが、病院内はとても混雑していた。しかし、酸素患者が優先で診て頂き結果入院して対応してもらう事になった。家族も安心感を見せた。
- 915.やはり連絡の手段、携帯電話が繋がらなかった。とても寒かった。2～3日後に暖がとれた。
- 917.停電で酸素療法が行えない為、往診して頂いている医院に連絡したが、この状況ではすぐに対応できないと救急車を呼ぶよう助言を頂いた。家族が社協から発電機を借りて来た為大事には至らないで済んだ。主治医や訪問看護と震災時の対応について話し合いを持つべきだったと思った。
- 919.自分が職場へ出勤するにしても燃料不足の為休みを頂く日もあった。利用者宅や避難所に出向く際も同事業所内のケアマネと同方向の者同士で乗り合いで出向いたりした。
- 922.体幹・四肢麻痺でエアマットを使用していたが、ライフラインの停止によりエアマットのエアが抜けてしまった。ヘルパー事業所に、ベッドに布団を敷いてもらうように依頼した。
- 923.停電によりエアマットが機能していなかった為、レンタル業者の倉庫にあった予防マットをお借りし代替品とした。レスピレーターと吸引器の使用にあたっては担当者の友人が発電機を用意してくれた。
- 924.一人暮らし・高齢者世帯であっても、避難所に行かないと物資がもらえない。重度者を抱える妻は食糧調達に回りたくても介護があるので買物できない。そのような方に水・食糧を配った。地域の中で取り残されてしまう方達へ我々が訪問していたが、もっと避難所への連携を取れば良かったのではないかと今になって反省している。電気がストッ

- プし在宅酸素している方達は家族から病院に連絡してもらい入院させてもらっていた。
- 925.在宅酸素使用の方は家族が対応し、酸素が無くなってしまう前に病院へ入院させてもらう事ができていた。地域でも電気・水・ガス全て止まってしまう。家族が多く買物もままならない状況の為生活が大変だったが何とかその場をしのいだという感じだった。施設は電気・ガス・水道が止まる事はないという認識をしている利用者・家族が居た。また、この大変な事態を理解できない利用者も多かったように思う（普通にデイサービスに行ってお風呂に入るのでしょうか？と言われた）。
- 934.停電の為エアマットを使用せず床ずれ（発赤程度）が出来た為福祉用具事業所に早急に低反発マット入れ替えの対応頂いた事で悪化せず済みました。停電解消してすぐ、エアマットに替える対応も早く助かりました。2～3日でまた停電、どうなる事かと心配しましたが、すぐ復旧したので低反発マット入れ替えまでには至らずに済みました。業者さんの対応の速さに感謝致します。断水していない地区の方の訪問入浴については、発電機持ち込んで対応頂ける事業所に変更しサービスを受ける事ができました。
- 935.黒電話（ダイヤル電話）は支障なく利用できた。
- 936.津波で病院の機能が停止して透析場所を確保した。病院の確保は主治医から指示がでるが、そこまで移動手段が限られているため介護サービスを使っただけの通院介助等いろいろな問題が出てきた。
- 941.福祉用具貸与事業所も津波被害を受け対応できなかった。
- 945.ケアマネより早く、訪看・レンタルの業者が利用者宅を廻りベッド・マット・酸素の確認をしていた。
- 949.利用者の訪問にあたりガソリンが不足していた為、近くは自転車を利用し動く事を心掛けました。
- 950.震災翌日自転車にて一人暮らしの所へ数件訪問した。自宅のパンと水を持参した。一人の利用者からパンは喉に入らないのでお握りかご飯がほしいので買って来てと依頼あり、近くの店・コンビニ等を廻るが何処の店も何もない状態。数時間廻りやっとカップラーメンと飲み物を数個手に入れた。
- 951.薬を十分に持たずに緊急入所した高齢者が入所中に薬が切れそうになった。独居で住まいも倒壊し危険状態だったので安易に自宅へ入室出来る状態ではなかった（担当のケアマネは被災し勤務を休んでいた）。かかりつけの病院と事業所近くの薬局とに掛け合い、処方箋をやり取りしてもらい薬を受け取った。薬は事業所へ郵送した（ガソリンが無い状況では事業所へ持参する事が出来なかった）。
- 952.普段利用している介護タクシーが被災した為別の事業所へ繋げた。
- 955.食糧やペットボトルの水を持って行ける範囲で配布した。ショートステイ先への薬のお届け。直接の安否確認をした。
- 956.三ツ矢交通事業所が流され、他に相談したがタクシー会社の燃料不足で対応が難しかった。
- 957.透析通院中の4名の利用者様の対応に追われた。必要な物資を確保したり、集めて来るにもガソリン不足が深刻だった。利用者様と家族との連絡も電話が通じるようになるまでは出来なかった。電気復旧までは夜間トイレ誘導・徘徊対応等が大変だった。水や介護用品が不足する中で衛生状態を保つ努力を他の事業所と連携して対応している。連絡手段が無い中で利用者の急変等もありラジオで放送してもらったりもした。
- 959.空気が抜けたエアマットに対応しました。
- 960.座位のまま停止した電動ベッド・空気が抜けたエアマットに対応しました。訪問介護と

- 同行したり、家族と一緒に布団に寝かせ改めて飲水・食事摂取の体位の指導・体位変換の指導を行いました。電動ベッドや体位交換付きエアマットで近代化した介護に慣れ過ぎた事で基本の使用法指導をしておかなかった事を反省しました。
- 961.エアマットを利用している方で、たまたまショートステイでエアマットを持って行っていて空気を入れている最中に震災に遭われた方は、エアマットの空気が十分ではなかったため直ぐに通常の布団を敷く事にした。
- 965.歩行できていた人ができなくなりポータブルトイレが必要になった。在庫が無く東京からの取り寄せになった。
- 966.飲用水は勿論だが生活用水が不足した。公園・議員事務所・歯科医で水道を開放して下さり、併設事業所で、少々遠方でも自家用車のガソリンが残っている人を優先に何度も水汲みを行った。食材の調達でスーパーに並んだ。担当利用者はほとんどが同居家族がいたが、高齢者のみ世帯・寝たきり・ヘルパー朝晩を毎日・訪看週3回の家では、自転車水汲みをしたり、どうしてもヘルパーが調整つかない時間帯に調理と身体介護を行った。認知症独居の人では、法人内に届いた物資からカセットコンロ・ガスボンベ・食糧を工面してやっと届けたのに近所に住む妹夫婦に全て持って行かれた事は大変なショックでした。
- 967.吸引器が使用できなくなり2日後に亡くなられた方がいました。
- 971.エレベーター停止の為全て階段で利用者・ベッド・車椅子・マット・布団類・各利用者の私物（服・洗面道具等）を職員が運び介護に当たった。水道が止まらなかったため助かった。暖をとる事が大変だった（石油ストーブ2台のみ）。寒い為に布団で横になる利用者も多く、ADLが低下し夜間のトイレで転倒。骨折までには至らないが怪我が多く見られた。2週間の避難生活で利用者がイライラし“我先に”という行動や口喧嘩等、不穏になる方々も多く昼夜逆転・夜間の徘徊も見られた。
- 972.水の給付は、水道停止の無い所から停止地区へ補給した。
- 976.電話での安否確認も大切だが、一番は利用者・家族の方との面会での確認がお互いに安心できると思うので、燃料の確保については市町村にお願いしたいです。
- 977.在宅酸素利用の方は家族が直接支所に行き市内の病院への入院を決めてくれたので、私が訪問した時には入院となっております。
- 980.自家発電があると思って安心していましたが、ガソリンまで不足するとは思わなかった。在宅酸素の人がガソリン不足で一時的に避難所へ行ってもらったが病院に預かってもらっても良かったと後で思った。
- 981.エアマットを使っている利用者に対しては事業所の担当者が代替の低反発のマットを直接持って行き交換してくれた。3月の停電はいつまで続くかわからなかったため対応の早さに助かりました。
- 990.水・灯油不足の利用者には配達した。食事確保の出来ない利用者には定期的に配達した。
- 995.ベッドがギャジアップしたまま停止してしまった。体の大きい人だった為昇降リフトも利用していたが、どちらも使えなくなり近所の人から力を借りて車椅子へ移した。エアマットも空気が抜けてしまいソファに寝てもらった。福祉用具事業所も多賀城だった為音信不通となっていた。薬が切れてしまい車椅子の方で介護タクシーを利用していたが事業所が音信不通（津波で流されてしまっていた）で、病院も何とか外来で受けて頂ける事が分かった為急遽別の介護タクシーを手配した。
- 997.自分で食糧を確保出来ない方へ2日に1回は食糧を届けていた。
- 1002.車のガソリンは残り20ℓの時に地震に遭いました。携帯用の充電器を常備していたの

で、その点では連絡は維持できました。ガソリンの調達は、とても苦労し何とか頼みこんで市から給油券を頂けるようになったのは震災から2週間後でした。水道は、意外と早く復旧したので困る事はなかったです。

- 1003.エアマット→ラインを曲げるなど助言。透析→4日目で他病院で治療になる。
- 1006.電動ベッド・エアマット使用できず、家族に協力してもらい体位変換するようアドバイスし大事には至らず。食事の時は座布団や掛け物で頭側を高くして経管栄養を注入した。家族（近くに住む息子）が発電機やバッテリーを使い吸入器に接続した。
- 1007.看護師と医療依存度の高い方を訪問しエアマットからマットレスへ移乗介助をした。
- 1012.事業所や周辺地域のライフラインが復旧した為安心していただけ、荒井地域でのライフラインの復旧が遅かった。水が出ない、電気がこないとの事で、水を運び、電池を届けた。
- 1013.水汲み等は高齢者世帯には困難で、訪問のヘルパーの支援が役に立った。地域の人達が事務所への水汲みボランティアや物資の援助や情報の提供がありとても助かった。
- 1014.電気・水が復旧するまではやはり大変でした。同居家族や近隣の協力があれば大きな問題ではないのですが、水（物資）を運ぶ事が高齢者にはかなりの負担で断るケースもありました。ヘルパーが出来る部分はヘルパーが対応し、他は地域の方が沢山手伝ってくれ本当に有難く感じていました。
- 1015.担当ではないですが、在宅酸素・吸引・透析が必要な方は緊急入院となりました。エアマット使用者には、福祉用具事業所より手立てを聞きホースを縛りました。ギャジが上がったまま止まってしまった人は幸いにも居ませんでした。手動で水平に出来る事を業者さんよりお聞きしました。また、エアマットも空気が抜けにくいタイプの物がある事を聞いています。水が無い為出る所よりタンクやペットボトルに入れて出ないお宅へ運びました。訪問入浴が使えない為多くの人の清拭・床上洗髪を行いました（訪問看護で）。電気ストップによりガソリンが入れられず、また店も開かないので何も買えないようになる事が分かりました。車にガソリンが少なかった為近くの方は30分前後かけて自転車で訪問しました。遠方の方々は訪問看護の曜日や時間を可能な中で調整してもらい同じ方面の方を一度に訪問できるようにしました。
- 1016.デイサービス中に被災した方、自宅が津波区域で道路の通行が不能となった。そのままデイサービスで2～3日過ごして頂いた。市営住宅3階に住む日中独居の101歳の方、地震で家具等が倒れ同居の家族も仕事で帰れない状況が続き家人が近くの施設へ連れて行き約3週間近く音信不通となってしまった。緊急通報に対する市窓口と施設側の違いが生じ、利用料等の発生の有無について苦情として届き、ケアマネが約2ヶ月近くかかり家族に説明し理解して頂いた。
- 1027.ベッドUPのまま電動ベッドが使用出来なくなった。
- 1029.病院は自家発電と地下水も利用出来たので何とかなっていたようです。訪問車は病院として避難所へ医療スタッフ派遣の為に使用した為利用者訪問になかなか使用する事が出来なかった。

4 活動に関するエピソード

- 1.系列の高専賃の入居者の身体・生活介護を行った。
- 5.区からの救援物品を一人暮らしの高齢者へ自転車で配達した。
- 11.自分の利用者・法人の利用者の安否確認を終了した時点で町の避難所において高齢者の

- 介護を一日平均11時間程度10日間ぐらい行った（おむつ交換・食事の配食・トイレ誘導・洗髪支援等）。
- 14.所属事業所が災害ボランティアセンターを立ち上げ、事務処理等の手伝いをした。
 - 18.避難所での班長をしていた。班内の意見を取りまとめ、毎日朝7時～の班長会議、避難所内の仕事（掃除や調理）の分配。連絡事項の伝達や支援物資の受け取り等、時間を拘束される事が多かった。
 - 19.私自身避難所生活でしたし、ケアマネ業務もかなり制限されている状況でした。救護所は包括支援センターの職員がかなりハードな状況で対応していましたので私も出来る範囲でお手伝いさせて頂きました。
 - 20.避難所廻りをした。寒かったので足や手に霜焼けの人がいた。トイレに行くと迷惑をかけるので水を飲まないようにしている人もいた。
 - 23.市から受けた食糧を高齢者宅へ届けた。白米と漬物・水だけだったが、少しだけでも足しになれば・・・と届けた際「わざわざ届けてくれた、その気持ちが嬉しい」と言葉を頂いた。
 - 24.在宅で不要になっていたオムツ・ポータブル・タオル等、物資調達した。
 - 29.看護スタッフも不足して吸引等できる看護師がいなかった為、元職業の看護師の手伝いをした。3交替のお泊りもした。胃ろうからのミルク注入、吸痰等。
 - 37.避難所では話を聞いた上で足りない物の調達を行っていた。地域では高齢者世帯への水等の調達や運ぶ仕事を主として活動。
 - 40.避難所で生活している利用者の状況確認、排泄介助等。
 - 44.支援物資が全く届いていない。1週間後に届けたおむつが大変喜ばれた。
 - 45.震災時は水や食料・医療品他、困っている事はないか確認していた。その後利用者から、あの時来てくれると思わなかった、来てくれただけで嬉しかった、救われたと言葉を頂いた。どんな事があっても行って良かった。
 - 54.避難所に4月末まで交替で寝泊りする。
 - 57.避難所で一緒に生活する状況。手探りで行動していた。
 - 58.東松島市や岩沼市等で健康調査のボランティアをさせて頂きました。
 - 59.ケアマネ協会のボランティアは何度も参加申し込みをしていたが、中止？になり行けなかったのも多かったように思います。
 - 62.仙台市からの支援物資が不定期で届いたので、その都度必要と思われる方々へ物資の提供を行った。
 - 63.避難所に車椅子でのトイレ介助の必要な高齢の方がいらっしゃり、家族もいらっしゃらないので避難者同士で介助しました。夜中の介助も2時間毎の交代制にし、暖房もなく寒い中毛布を被って連日見守りしていました。介助経験のない方にやり方を見てもらったり、説明しながら実際にやってもらったりして皆で協力し合えるよう働きかけました。
 - 68.認知症高齢者の見守り介護を交替で行った。
 - 70.わずかなスペースしかない避難所は、土足のままで不衛生な状態だったり、物資や食糧を求められても分けてあげる物もなかった。
 - 73.震災から1～2週間後、各避難所を廻り要支援者のピックアップ、優先度の選別を行った。
 - 88.避難所でグループホーム入所者の介護をしていた。
 - 90.今回宮城野区・若林区が海に近い事もあり、津波・元々地盤が弱い事もあり被害が大きかったとは思いますが。青葉区の施設より「若林区の方ですよ。」と若林の方の受け入れ

をしてやっているんだ的な言葉等、地域により被害の大きさが大きく、確かに〇〇区等では、あまり津波を実際に見た訳ではないのではないかとは思いますが、何か場所によって温度差があると感じる事もありました。ただし、だいたいの方はとても親切に対応してくれました。

91. 支援物資の調達に区役所まで取りに行くのに燃料がなく車を出せないのが残念という事業所が多かったよう。包括の方が届けてくれた物は自転車で利用者に配り大変喜んでいただいた。
92. 震災翌日から避難所へ朝夕行きバイタルチェック。外部支援が入るようになり中止。ペットボトルや缶にお湯を入れ、湯たんぼ代わりに配る（お湯を持参）。
101. 離島で保健師等の専門職が支所（行政）に不在な為、依頼もあり主に心のケアチームを中心として週2回は避難所や問題が発生した自宅等を島内全般、8月上旬まで同行させていただきました。
108. ケアマネ協会ボランティアに登録はしていたが、早く終了してしまった為実際の活動はしていない。
145. 衣類等を集め、避難所で物資の届いていない所へ配布。
146. 地域包括支援センターより物資を頂いたので、市営住宅等へ配達のお手伝いをしました。
155. 水汲み支援、緊急入所の手続き、仮設住宅健康調査
161. 岩沼市の一部地域に健康調査を依頼され訪問した。新興住宅地で若い夫婦の世帯が多く、住宅が津波の被害に遭い、家族がバラバラに住むようになって気持ちが離れてしまった。若い妻は小さい子供を抱えて夫が帰って来ないので気持ちが沈んでいた。津波の被害で物ばかりの被害ではなく、人の気持ちまで壊してしまった事に寂しく感じた。
163. 心身・家庭環境等について1件ずつ訪問した。健康状態等も確認した。震災直後よりその影響による出来事が徐々に心身の変化に涙する方がいた。
167. 泊まりの施設があったので、そちらの介助等を行ったり、安否確認をしたりしていた。また、泊まりの施設に避難して頂いた方の迎えを行った。
170. 自立から要介護3の要援護者の生活支援を行った。
173. ライフラインストップ、車の燃料もないので地域の避難所でのお手伝いをしました。炊き出しの手伝い、津波で流された方がヘリコプターで運ばれて来た時看護師の資格もあるので保健師さんや病院の先生・看護師さん達と一緒に応急処置やメンタル面のケアを行いました。夜はトイレ介助、おむつ交換の手伝いをしました。着替えの無い方へ父の衣類を差し上げました。
176. 居宅と同一建物の老健施設が被災した為、担当の安否確認後施設介護スタッフの手助けを行っていた。
181. 避難所に長時間いたり、頻繁に行く事により自分の家族、自宅環境の確認、復旧作業、家族のライフラインの確保（水・食料）が大変だった。
185. 当法人のグループホームはスタッフも自宅に帰れない人もいたので、避難所代わりになっていました。スタッフは買物や水の確保等を行っていました。
190. 被災地の物資仕分けボランティア。被災地の子供と遊ぶボランティア。被災地の健康チェックボランティア。
193. お握りを作り高齢者の自宅へ届けた。
お風呂を開放して近所の方に来て頂いた。（仕事の休みの日限定）
205. 避難所の開設が自治体に任せられていることを初めて知り驚いた。市で要援護者の登録を行っているが、どのように活用されたのか、できたのか分からない。独居の方を避難所

- に連れて行ったが、二日後には避難所が閉鎖され（燃料が無い為）別避難所に行ったが、どこの避難所に移ったのか分らず大変困った。
- 206.グループホームの勤務でしたので、グループホーム入所者の介護をしていました。
- 208.職場での対応で精一杯で、その他の活動はできませんでした（そのことでかなりのジレンマはありました）。
- 218.津波で被災した方への防寒衣類の提供。
- 222.レトルトのお粥など、食品をお届けしたら喜ばれた。
- 230.自分の家も一部損壊で、食器が壊れ後片付けが大変でした。活動できませんでした。
- 236.事業所が福祉避難所となり、運営や介護に当たった。特養やグループホーム利用者、一般の避難者、福祉避難所利用者の対応が優先され、ケアマネとしての業務が中々できなかった。居宅のみの単独の事業所であれば、自分たちの判断で動けた部分もあると思うが、複合施設で、一般住民や介護が必要な方が避難している中で、ケアマネとしてどのように動いていいか判断に迷った。（担当利用者のみでなく、施設利用者、避難者も守らなくてはいけなかった為。）
- 251.自分の施設の人たちの世話で手一杯でした。自宅でお風呂が沸かせたので（プロパン）避難所に居る子供を入浴させました。
- 282.ガソリンが無い為、近くの避難所でのボランティアに勤しんだ。市の職員数が足りず、私たちが出来る事を市職員から聞き、食事の配給、物資衣類の仕分け、病院送迎、特養へ繋げる対応、高齢者のトイレ介助、子供達とのふれあい、トイレ掃除など行いました。
- 292.避難所に来た方から「南三陸には何も無い。ここの物資を半分でもいいから運んでほしい。」と話され、何度も行政に話したが受理してもらえず、ここの物資はここの物という考え。指示や各長からの要請がないと物を動かせないという現状にショックを受けた。
- 307.活動参加をしたかったと思いますが、管理者として現状、支援している利用者のサポートで精一杯でした。地域包括の方を通して、避難所の方の相談、サービス利用調整は行っていた。
- 311.水を届けていました。
- 313.避難所への物資配達、炊き出しなどはケアマネジャーの仕事とは関係ないのですが、誰かのために何をすべきか、瞬時に考えた場合、体が勝手に動いておりました。
- 316.自分は事業所で連絡調整や物資調達・在宅生活で被災した方の入院調整の活動を行っていたが、事業所では物資調達や搬送や地域のボランティア活動・被災地でのボランティア活動に参加していた。
- 318.併設している通所の宅老所に避難者を受け入れていたので、そちらの対応が大変であった。
- 319.事業所で炊き出しをし、電気・水道の普及まで毎日訪問（必要とする所）をした。また、おむつの必要なところは名簿を作成し、区役所から支給されたものを配ってまわった。
- 330.町の社協や事業所と協力し、担当外でも訪問できるように情報交換の介護を定期的に行いました。ガソリンを無駄にしないように各居宅が連携し、区域別に訪問しました。この時に町から「訪問支援者証」と言うものを発行してもらい対応しました（各居宅1名ずつ）。
335. 当日より所属ケアハウスの夜勤を行い、余震への対応や居宅以外のホールで寝た方などのトイレ誘導や起き上がり介助を交代で行いました。
- 345.ヘルパーも被災し、ガソリンもなくヘルパーとして現場に入っていた。
- 352.市を通してお預かりした物資を少しずつだったが届け、安否確認をした。利用人数がもとも少ないためもあり、利用者の緊迫した状況はおさまりつつあったので、市の健康

- 調査にボランティアとして参加した。
- 353.数人1組に分かれ、指定された地域を1軒1軒回り、健康状態の確認を行った。不安な状況を話してくれる方が多く、お礼を仰って下さる方もおり、安心感を少しでも与えられたのではないかと思います。
- 359.避難所での高齢者の排泄介助などをおこなった。
- 363.避難所に訪問し、要介護者の把握を行ってきたが、若い人たちが、ただ立って携帯電話をいじっている姿が多くあった。
- 364.福祉避難所にて会話か配膳。避難所では会話と荷物の運び出し。
- 365.情報交換も兼ね、市の協力を申し出たが、市でもボランティアをどう利用していいかわからず、避難所に来ている健康な人が出来るような雑用を手伝ったこともあった。福祉避難所を法人で請け負った際に、利用される方のアセスメントを行った。
- 366.事業所として避難所へケアマネジャーを派遣し、物資の仕分けや避難されている方々の聞き取り調査などを行った。
- 371.デイサービスに避難していた方の食事作り、話相手などを行っていたが、ガソリンが少なくなり、通勤が出来なくなり、自宅待機となり思うような活動は出来なかった。
- 373.とにかく話を聞く。事業所のジャージや名札をつけていると色んな人から声をかけられる。
- 386.避難場所での介護を要する方のトイレ介助。
- 388.自宅が全壊し、家族が避難所に避難していた。仕事以外の日はその避難所に泊まり、炊き出しや物資の配布をした。避難所で食事中、隣の高齢者の異変に気づき、救急搬送し、一緒に救急車に乗って、息子が来るまで病院で待機していた。2週間で退院し、避難所に戻った。
- 389.ガソリン不足で訪問が出来ない事は、想定していなかった。
- 391.市内避難所への応援・支所での物資仕分け・町内巡回の手伝い・福祉非難所の手伝い。
- 392.地域の避難所でトイレ掃除やごみ集めなどを行った。
- 401.食材を近所で分け合った。
- 402.市から預かった物資を持ちながら、近くは自転車で自宅訪問をした。
- 416.担当利用者に限らず、多方面からの相談も多く、対応に困った。
- 427.在宅での高齢被災者の孤立による食料不足が深刻だった。仙台市に問い合わせると救援物資について、事業所にFAXを送ったとの返答だったが、当事業所は固定電話が不通となっていたため、FAXは届いていなかった。
- 436.避難所訪問して安否確認。大事な薬を届けた。今後のことを相談した。
- 440.薬を持たないで避難所へきている人、薬がのこり少ない人を診療所の医師や看護師と連携しながら、服用が続けられるように支援した。お薬手帳があれば、その情報で薬を医師から処方してもらった。
- 459.地震時は公休で自宅にいました。直後から近隣の方経ちと外に避難しました。広い庭のお宅にテントを張り、持ち寄った食料・ラジオ・ストーブで余震の中、過ごしました。都市ガス停止のため、プロパンガスの集会所で炊き出しを行ったので、町内をまわり、おにぎり配りをしました。
- 460.3月末に市外の被災地へ行き、活動（瓦礫・ドロの撤去など）を行ったが、体力的にとってもきつかった（精神的にもだが）。その後どういう形で支援するのが良いか分からず、今は募金箱を見つけたら募金する、被災地の特産品を買うなどの形しか出来ていない。これでいいのか・いつも考えてしまう。

- 472.市からの救援物資が届いた際、独居・老人世帯に配った。
- 478.地域からの避難（高齢者）の方が20名位いらっしやっただため、介護現場も人員不足となり介護などを行った。
- 482.自分が働いている地域ではないため、ケアマネとしては動けませんでした。水害を受けた方々の精神的ケアしかできませんでした。
- 504.施設内被災者の介護を行った。指示が良く下まで浸透しない。誰の言うことを聞いたら良いのか・・・？同じことを何度も聞いていた。ボランティアは一回のみ参加でした。あまり良く活動内容が分からないのでその後はやりませんでした。
- 505.併設となっている施設に、津波の被害があった施設から利用者の受入があった。居宅としての安否確認後、ライフラインの寸断とガソリンがなかったため、訪問できず、施設で避難された方の介護にあたっていた。
- 506.地域での活動は、継続的には行えず、ガソリンの問題より、必要最低限のところに訪問を行った。また、併設している施設が避難者の受入を行っていたため、ライフラインが回復するまでの間、そちらの手伝いをした。
- No.507 行政からの要請で、アンケート用紙の記入方法の指導・回収にあたったが、数ヶ月経ってからの活動であり、地域の人たちへの周知もなされていなかったため、回収率も低く、連携・調整が不十分ではなかったのではないかと感じた。
- 509.避難していた利用者様の24時間の介護を職員で交代で行っていた。近くのスーパーが開くと聞き、何時間も前からみんなで並び食料を買った。利用者様の安否を確認したり、行方不明の方を歩いて探しに行った。デイに避難していた利用者様の家族を探し連絡をした。
- 514.職員のついでで野菜を入手することが出来て、訪問先の高齢者宅に要望のあった野菜をいくらかでも届けることが出来た。飲料水とは別に、生活用水を職員で確保し、出来る範囲で独居や障害者のいる利用者宅に届けた。職場に災害ボランティアセンターが設置されたため、震災後はボランティアの仕事を中心に活動し、その間に緊急入所の相談や対応を行っていた。
- 522.ケアマネの活動より、看護師としての活動がメインだった。
- 526.施設内に福祉避難所を開設したため、側面からサポートした。
- 527.近くの学校の避難所に食事をお届けしました。
- 528.当夜から、夜間のケアハウスの方々の見守り、トイレ誘導・介助。日中はおにぎりを握ったり、物資を届けたりで動いた。
- 529.一人暮らしへの食品運び・施設が福祉避難所になったため、避難してきた方の介護・世話をした。
- 535.被災施設の利用者の避難先が決まった後、避難所で20名以上の褥そう発生あり。臨時往診の相談を受け、調整と同行訪問を行った。誰（どの職種）の業務かよりも、出来ることを積極的にやる必要があると感じる。
- 537.小学校等に避難していた利用者家族が、2～3日後に訪ねた時には、何処にもいなくなっていて、結局の所、横浜や中国の親戚宅へ避難していたことが後でわかったことがあった。
- 551.包括から連絡をもらおうとその都度、自転車で物資を運び、所員で分担して配ってまわりました。多い方は3～4回届けました。
- 552.区役所担当者より依頼があり、各居宅支援事業所への連絡を行いました。若林区は在宅ケア会があり、交流がある方なので大変な時期に道路で地域のケアマネと会い、励まし

- あいながら、自転車・徒歩でしたが頑張ることが出来ました（震災から2週間程度の記憶が欠落）。
- 561.電話が繋がらない状況が数日間続き、職場と行政のパイプ役(情報伝達)は重要でした。遠いので車で移動してましたが、ガソリン不足で大変でした。夜中からガソリンスタンドに並んで、そのまま朝遅れて出勤していました。高齢者で避難所に移動できない人、「移動しないで、自宅で何とかする」と言う独居の方も多く、支援物資を届けて回ったりして（おにぎりやカイロなども喜ばれました）いました。
- 575.センター自身が福祉避難所となり対応した（昼夜、夜勤もした）。
- 583.避難所にいると地域の高齢者情報がたくさん集まり、どう対処すれば良いかとの相談を結構受けた。適切な助言が出来たと思うし、地域住民からも感謝された。
- 588.卓上ガスコンロを近所の方が貸してくださっていたが、使用した形跡がなかった。使いたれていなかったため、利用しなかったと思う。温かい食事を作ってお届けした。灯油もなくなり、買ってきて届けた（妻：認知症あり、夫：右軽い麻痺あり）。
- 592.民生委員が独居・老人の安否確認と物資の調達に協力が早かった。
- 620.罹災した高齢者の避難先（避難所以外、親類宅やアパートなど）に出向き、身体状況の把握、家族・本人の精神状態の把握を実施（主に被災後、知らない土地に行ったため、話し相手がいなくて不安などあるが、打ち明けられる人がいないことから、話を傾聴することをやる）。サービス導入の必要性があれば申請するつもりであったが、訪問しサービス導入まで至るケースはいなかった。訪問し、高齢者および家族から震災前の本人の様子を知っている人が来てくれてありがたかったとの声を頂いた。
- 622.事業所として避難所へ行き、要支援者の有無など確認するよう言われていたが、自分の担当ケースに対する支援で手いっぱいの状態だった。
- 626.高齢夫婦の方で、市営アパートにてライフラインが停止していたため、階段を車椅子にのせたまま3人がかりで降りていただき、2人とも避難していただいた方が、市の職員の方が対応困難と言うことで、再びアパートに戻っていただいた。
- 628.ほとんどが法人内、多様なサービス事業所があるので応援に入りました。自分の休日で亘理町・山元町に家族がいるためボランティア活動しました。
- 642.名簿があり、出勤できないケアマネの利用担当者の連絡先も、一目で分かるので良かった。
- 658.自施設デイ・ショート・居宅、ご利用の方に食材・水を配りました。
- 665.区からの連絡で支援物資を運んだが、ケアマネは利用者のみ。一時的な援助で不満も多かった。地域での支援体制を明確にしておくことが必要と思った。
- 679.あの災害の状況で、ケアプランがどうのこうのとか、緊急入所がどうのこうのとか関係なく、人の命を守ることが優先であるので、ケアマネの技術を生かすボランティアよりも、人としてどうするかを優先しました。
- 686.事業所の枠を超えて、避難所にいる要援護高齢者のアセスメントを行い、緊急ショートステイにつなげる支援を行った。又、避難所にもいられない高齢者についてもアセスメントなど行い、緊急ショートステイに繋げる支援を行った。
- 687.避難所にいられない高齢者が親戚を頼って名取に行っていた。そこにも長くは居られず、地域包括支援センターとのアセスメントを経て、福祉避難所へ搬送することになったが、ガソリンのない時で家族の移送が困難だったため、局長の許可をいただきケアマネ二人で名取まで迎えに行き、無事搬送することができた。
- 688.独居の方で避難所の行政の職員の方を通して連絡が入り、避難所を訪問し、薬取りや買

- い物などの支援に訪問介護を利用した。
- 689.地域包括支援センターの職員と一緒に避難所にいる介護が必要な高齢者のアセスメントを行い、優先順位や介護量を見て緊急ショートステイにつなげる支援を行った。
- 690.地域包括支援センターの職員と一緒に、避難所にいる要援護高齢者のアセスメントを行い、優先順位や介護量を見て緊急ショートステイに繋げる支援を行った。また避難所から施設への送迎も行った。
- 694.地域包括からの支援物資を届けた。
- 695.活動といったことはしていなく、社内でのサービス開始の準備を行い、物資は調達できない方へ（当社の利用者の中で）、食事を届けていたのみ。
- 696.自分の利用者だけでもいっぱいだった。
- 697.ひとりであったので対応が大変であった。又、自分の家族も死亡したので立場も大変だった。
- 699.ボランティア登録はしたものの、全然呼ばれなかった。行っている方は何度も行っていると聞いて落ち込みました。自分で何ができるのか？と落ち込んだ。
- 702.マニュアルはあったが確認せず安否確認を行った。利用者の一覧などは毎月作成していたため、それを基に確認できた。地域の民生委員・区長さんとの関係作りは必要と思いつつもながらも全ての方にはできていなかった。
- 709.各避難所や地域の区長さん、民生委員さん等が中心になってその地域の為に食糧や燃料等を確保してくれて生活できていた。集団生活にて皆の和ができていた。
- 724.所属事業所の当日利用者（40数名）・スタッフと共に中学校に避難。一般の人も含め400～500人はいたと思う（中学校の武道場）。避難者名簿の作成と班編成の手伝い、所属事業所の利用者の世話（家族も被災の為に引き取りに来ず3月末まで世話をした）のみならず、一般の方達の世話（おむつ交換も）、集団生活上の各種トラブルの調整、避難所事務局とのパイプ役、避難所での生活ルールを実行するため自ら率先し動き声かけ（掃除等）をした。
- 730.自宅や家族、職場利用者が被災しており活動には参加できなかった。
- 739.当施設も避難所として開放した為に高齢者の避難者へ支援しました。また近くに幼稚園もあり園児や保母さんも避難しました。避難者へ食料や水の準備を行いました。
- 740.施設が避難所となっていた為、被災者の介護と医療ボランティアと連携を図り医療処置の対応を行った。
- 761.ケアマネ協会のボランティアでは東松島町へケアマネ2人でお邪魔して保健師さんの指導で健康調査をさせて頂いた。亘理町の災害ボランティア本部に毎日1～2人で通い、センター内で電話の対応をさせて頂いた（ボランティア活動に参加したい人、ボランティアに来てもらいたい人の受付）。
- 766.小さな地域なので、自宅に戻れない要介護者は第一避難所に滞在して保健師・社協職員が泊まりながら一般の避難者の対応にも当たった。日中はそれぞれの家で生活を続けている世帯の対応で精魂使い果たし、電気の付かない暗がりの事業所に戻ると避難所から“発熱、薬が足りない、家族と連絡が取れない”等、保健師からの対応依頼のメモが机に貼ってある毎日。「避難所の方々の対応くらいしてよ」と言うのが本音。地域はこちらに丸投げで「避難所までこっちなの？」と思いつつながら対応してくれる先生の診療時間を気にしつつ重い足を確認の為に避難所に向けた日々だった。
- 774.地域の集会所に避難した人達が避難所として暮らし始めた。私自身も被災したが、自宅に住みながら避難所に通い食事の準備や清拭用のタオルを配ったり清拭を行った。ドラ

- ム缶で沸かしたお湯を使い洗髪を行った。情報交換しながら今後の方向性を一緒に考えた。
- 776.各避難所を廻り、何が足りないか（人的なもの・物資等）聞き取りを行い社協や行政に伝えたり直接届けたりした。
- 780.ケアマネ協会ボランティアへ登録させて頂きました。
- 781.区役所や市からの支援物資を独居・高齢世帯中心に配布。物資の拠点となっていた為近隣のグループホーム・各施設にもうどんや物資等を配らなければならなかった。
- 783.色々と活動参加も考えたが、併設している入所施設の対応もあり断念した。
- 784.支援物資を独居・高齢世帯・地域の住民に配布して廻った。
- 785.地域包括支援センターと共同し民生委員や防災ネット・町内会と打ち合わせを行い継続的な安否確認・支援物資提供にダブル事がないよう役割分担を行った。
- 788.避難所で炊き出しした物を分けて頂き、避難所が閉鎖するまで1週間位毎日配布して廻った。行政や自衛隊からの物資を包括から分けて頂き配った。
- 789.炊き出しを地域で手伝った。翌日から、食糧は畑・各自自宅より持ち寄り行った。寒いのに誰も「寒い」とは言わず「星がきれいだ」と着の身着のままコンクリート床にすのこ・ダンボール（自宅より持ち寄った）で厳しかったです。
- 794.避難所へ何度も足を運び介護保険利用者のみならず、家族への対応も行った（食糧調達と精神的支援等）。
- 800.担当の利用者にかかりきりでボランティアに行くまでできなかった。
- 805.避難先では救出者の担架を運ぶ・物資を集める活動に参加。孤立した避難先から脱出できるよう泥をかいたり、大きな流入物を撤去する作業に参加した。
- 819.震災直後には、避難所での食事の準備等を行った。東松島市ボラセン運営スタッフとしての活動。東松島市へケアマネ協会ボランティアとして健康調査を行った。
- 820.独居の方へ水や食糧を届けた。
- 828.津波跡地の泥出し。現在も月に1回は活動中。
- 833.認知症の方は避難所で混乱してしまい家に帰ると大騒ぎになってしまいケアマネジャーが呼ばれて施設の対応を依頼された。おむつ交換する場所がなく、襦を外して困んだり、シーツを持って協力ももらった。
- 844.石巻市で居宅の近くに福祉避難所ができるという情報を聞いたのは震災から4日目位だったと思う。何かお手伝いができるのではないかとの思いでとりあえず手の空いているケアマネと在宅介護支援センターの職員3名で駆けつけた。避難所には市の職員（保健師・介護保険課職員等）の方がいて体育館にシートを敷く事からのスタートだった。その後石巻日赤病院から入院が必要とされない被災者が次々と搬送されてきた。その後何日間か避難所で手伝いをしたが、水と冷たいお握りが1日2回だけの食事、あの時ほど温かい飲み物か食べ物提供出来ないものかと思った事はなかった。
- 845.同地区の市の建物があり、そのアリーナが避難所（要介護者の多い避難所）になっていた。ライフラインの停止等で介護サービスが利用できず利用者は家族が面倒をみる形となったケアプラン業務ができなかった為、その避難所に出向いたところ、市の職員が対応でおおわらわだったのでお世話を手伝う事となった。日赤受診してその避難所に回されて来る人が多く、何処から来た誰なのか、市の職員の方々は対応が大変なようでした。避難された方も食べ物も十分になく辛い思いをされたと思います。
- 848.併設事業所が福祉緊急避難所となり活動した。
- 857.限られたスタッフの中でのスタッフの交代が大変だった（24時間対応の為）。ナース・

- ヘルパー不足のため交代要員がいなかった。
- 858.福祉避難所内で、身体介護や各避難所にいる介護を受けていない高齢者の搬送等を行った。
- 868.石巻へ行き子供たちは外で遊ぶ事がなくなったので遊び隊と称したくさんの文房具のプレゼントを持ってゲームを外で思いっきりし、昼にはたくさんの家族が集いカレーライスとお汁粉の炊き出しを行った。
- 880.社協の職員として担当高齢者だけでなく自宅周辺の独居・高齢者の声かけ・安否確認に廻りました。
- 881.地域を廻り水道が止まった事で水汲みに給水所まで行けない方やもらったペットボトルの蓋を握力がなくて開けられない方などがあり対応した。若い方もガソリンがなく給油するのもスタンドの開き情報がなくスタンドの開き情報を知らせる等が必要だった。
- 883.一人暮らしや高齢者世帯の所へ伺い水の補給の手伝い等を行いました(自宅周辺の方)。
- 890.気仙沼の福祉避難所の設営の手伝いをした。
- 894.私の居宅介護支援とは関係ありませんが、母体の施設に入所中の薬、入所者の容態が危うくなり、一方石巻市に在住のこの方の家族と連絡が取れず、やむなく同僚1名と家族宅へ探索に出かけ津波浸水地域の直前でようやく家族を見つけ、当該入所者を緊急入院した地域の大病院に搬送しました。
- 897.避難所のトイレが和式で要介護者が使えず法人にあったポータブルトイレを持って行って対応した。
- 900.学校の中で避難した高齢者の介護・おむつ交換・排泄介助等を行った。
- 907.市内で道路が寸断されている地域の方に県外の知人と協力して支援物資を調達し届けた。自衛隊が取り付けた仮設の浮き橋を渡りながらの手渡しになった。
- 912.行政の対応も遅く、学校の一部に避難した400～500人が寒さと食糧も無く体調を崩す者もあった。4日目頃から当会社主治医が交代で毎日廻ってくれた。夜昼なく動き回る利用者、周りの避難の方達も初めはいろんな声もあったが利用者以外の方々の介護をしていく中で周りからの協力も出始めた。目立って体調不良の方は、更衣室を使用し交互に状態観察をしながら医師とも連携し最後まで医師も見守ってくれた。
- 914.当日の夜から地元消防団がセンターに集い対策本部設置、緊急時に備える。普段姿を見せない若者も炊き出し等に顔を出していた。
- 915.小学校の体育館が医務室になった。町内の医師・保健師・ケアマネで看護師の有資格者が、血圧の薬を持参して来た方々から譲り受けした。医療の補助を行った。
- 922.包括支援センターや地域ボランティアと協力して一人暮らしや高齢者世帯を中心に支援物資と給水活動を行った。
- 923.私自身2週間程避難所へ避難していました。当事業所はクリニックも併設しており、クリニックの患者さんが避難所に数名おりました。その方達は自宅・車等全て流され通院の手段を失っていた為内服薬の処方のみクリニックと連絡を取り援助していました。内服薬は仕事が終わって避難所へ戻った際患者さんに渡していました。
- 924.地域に仙台市から委託を受けているシルバーハウジングの方への支援があるが、水・食糧等の物資配布を行った。安否確認で電話での対応がそれまでは主だったが、震災の時に顔馴染みとなった。地域との繋がり的重要性うい再確認した。また、地域の中学生・高校生にも声をかけ手伝ってもらったが避難所との連携は取れていなかった。
- 934.事業所宛に物資が届き(おむつ等)、購入出来ず困っている利用者宅を訪問しながら、おむつ・パットを配布しました。市独自の上乘せサービス(おむつ券支給)が4月～利

- 用出来なかった為物資でおむつが届き助けられました。
- 940.避難所での介護，支援（震災当初）。
- 943.安否確認の途中に食糧を調達しながら独居や高齢者世帯へ届けた。市からの食糧等必要のある方に調達した。
- 949.行政と密に連絡を取り合い，定期的に会議を持ち情報の共有に努めました。特に一人暮らし・認知症の方・透析の方等リスクの高い人への対応をしました。地域性もあり，一人でどうしようもなかったという人は居なかったと思われま。
- 955.地域においては炊き出しに参加。シルバーセンターから配布物を取りに行き，パンや食材等各世帯に徒歩でお届けした。避難所にいた認知症の方へ付き添った。
- 956.マンション住民の炊き出し，水の調達をした。
- 957.当時は3名で事業所運営していたが，安否確認・家族との連絡調整・通院や薬の手配・介護者事業者との連絡等分担を決めて行った。震災2日目に別の施設への一時避難を行う事になった為，何日間は泊まり込みでの活動でした。ケアマネとしてではなく，スタッフと一緒に介護に携わる部分が大きかった。
- 959.物資調達，所属法人の老健入居者・避難者への対応を数日間21時頃まで活動しました。
- 960.枠を超えて活動しました。
- 961.自宅マンションに住んでいる高齢者宅に水の配達をした。
- 967.車での移動が難しかった為電話で連絡を取ってから確認して動くという事をしていて。呼吸がおかしいが受診しても帰されて来るし，どうしていいかわからないという訴えに巡回支援隊に連絡を取って診察してもらい入院させてもらったが1週間後に亡くなった。衣服が足りないという方へ届け，おむつが無いという方に渡す等を行った。
- 971.宮城野区と名取市にある高齢者向け賃貸住宅内1階食堂を避難所として約2週間両建物内に1日おきに泊まり介護・生活に関する支援を行った。各居室の寝具・おむつ・飲み物・おやつを本人の許可を得て避難所に集め提供した。電気を使用しない石油ストーブを利用し，石油は入浴用に貯蔵していた物を使った。食事は食事会社が山形だったので滞らずに3/12～提供できたが，職員はお握り1～2ヶ（各自宅より持ち寄り）で働いていた。七ヶ浜の利用者は，透析の病院が停止していたので他の病院の確保が出来ず救急対応もした。その後は家族も送迎も行い何とかだったが，病院は3ヶ所となり私達も送迎するつもりでいたがガソリンが入手出来なかった。
- 974.認知障害で独居の方へ定期的に食糧を届けた。
- 977.近くの避難所に炊き出しをして何度も運んだ。米や野菜を持って差し入れした。自分の家には自家水道があり，それらを利用し知り合いのデイサービスに何度も水を届けた。
- 990.50名程避難し食事・排泄等の介助をした。その後地域小学校の避難者に自宅風呂を開放していた。
- 998.友人と避難所で炊き出しを行った。
- 1003.自分で出来る範囲での行動でした。
- 1006.勤務先の体制が優先され，施設内での役割がありそちらに従事していた。
- 1007.近隣地域と関係を築いていない家族（介護者が精神障害有）が震災時にも孤立しており，周囲に助けも求めず情報も伝達されていなかった。普段から地域と上手くやっている方は輪があり何とかしていた。市の高齢者への食糧配給は一人につき水1本とか，カップメン1個で役に立たなかった。ガソリン不足で取りに行ったり，支給（配達）するのが困難で事業所内で食品を持ち寄り，それを利用者宅へ届けた。
- 1012.デイの食材を地域の稼働していたデイサービスや地域住民の方へ配布した。区役所か

らの連絡網で区役所へ食べ物（パンや果物）を取りに行った。

- 1013.有休休暇を取りボランティア参加（事業所に支障のないように）。ボランティアに参加したいが何処へ連絡を取ったら良いのか分からず、ただ要請等連絡を待つのみに至ってしまった。
- 1014.炊き出し、物資の仕分け、配達等を4月初めまで。
- 1016.訪問看護の利用者を対象にライフラインの復旧に合わせて、水・食料・介護用品（おむつ等）を病院・施設に届いた物を提供した。津波地域の利用者宅の泥かきボランティア。
- 1028.社協・ボランティアセンターにて調整。
- 1029.出勤出来たのが家族の安否を確認出来た1週間後だったのでスタッフに申し訳なかったので、避難所支援に行き全国から来て頂いたDr達のお手伝いをさせてもらった（事業所から1名避難所支援に出なければならなかった）。

5 マニュアルが役に立ったか

- 8.地震後津波が優先して、事業所・各人がそれぞれ（指示を待たず）動いた。それが結果的には時間（スピード）が早く対応でき、人（第一避難）・物（コンピューター）。その後それぞれ安否確認に時間を要した事が良かった。
- 9.状況により変化していったが、マニュアルを基にしていきました。
- 15.ライフラインが停止する程の災害を想定してのマニュアルではなく、あくまでもケアマネが安全であるうえでのマニュアルだった為。
- 17.海の近くにある事業所は地震による津波が一番の心配事であった。あの時津波が襲来すると直感。マニュアルに従い避難する事に決める。通所介護事業所も併設しており、目の前の利用者の安否確保の対応に集中し、居宅の利用者は後回しになってしまった。結局当事業所の建物や職員達の車も流失の被害を受け対応できる状況ではなかった。
- 18.緊急時の連絡先は持ち歩いていたので連絡をつける際に役立った。
- 19.マニュアルは流失してしまいましたが、マニュアルを作成する時点でケアマネ全員が関わっていたので全員内容は理解していました。勿論マニュアル通りにはいきませんが、災害発生時の基本的な動きはとれたと思います。
- 20.準備中だった。
- 22.今回のような災害は想定していない。
- 23.「ライフラインが全て停止」の想定ではなかった。
- 24.マニュアルはなかった。大震災ではマニュアルがあっても役に立たなかったかもしれないが、今後は災害に備えての対応の仕方を十分に話し合い、どのように行動すれば良いのか決めておく必要があると思った。
- 27.今までのマニュアルの想定を越えたもので、その場の現場の判断に頼らざる得ない状況であった。
- 32.津波対策を講じていなかった。
- 37.連絡がとれない為自己判断で動く場面が多く、マニュアルをはるかに超えた事態に当てはまらない内容であり、役に立てる事は出来なかった。
- 38.しっかり読んでいなかった。
- 40.緊急時の連絡表を確認しながら、利用者の安否確認を行った。
- 43.全てが動かない状態で何も出来なかった！ガソリンが緊急者のみ！となる事で訪問活動

- に制限が出た。自転車で限界を感じた。
- 45.訪問介護の人とも連携を取って、訪問介護利用の人の近くの安否確認に行ってもらったりした。訪問介護の人とも、今何が必要で一番何が求められているのか相談しながら動けた。
- 49.ケアマネ同士での連絡を取り合う事が出来ず、どのようにマニュアル通り動くのかが良く分からなかった。自己判断になるところが大きくマニュアルとして役に立った所はあるものの、ほとんど意味を成さなかった。マニュアルの前提としていたライフラインが断たれていたため、マニュアルそのもののあり方を検討する必要があるのではと思う。連絡を取るのには電話とあったが通じない。電気がない時の対応がマニュアルとしてなかったのでは・・・。
- 58.阪神淡路大震災後の見本を参考にしていたので良かった。災害の規模にもよりますが、安否確認の件はこれからも悩むと思います。電話が通じなかったため、震災後の反省として携帯メールや災害伝言ダイヤルの活用も検討しました。
- 59.結果マニュアル通りの動きにはなったが、マニュアルがあったから・・・というのではなく、マニュアルが基本的な物だった故にマニュアル通りの結果だったと思います。その為役に立ったかどうかとなると疑問が残ります。
- 61.事業所としての対応マニュアルはあるが、細かい事に関してのマニュアルがない為、個々の状況に合わせて動くしかなかった。水・食糧調達・おむつ等の物資がない時にどうする等、家族に任せるしかなかったのか思い悩む事もあった。
- 62.ライフライン全て損失し、自身もある意味被災者側に入る状況を想定していなかったから、結果としてはマニュアルと同じ事をする程度にしていたとも思える。
- 63.自分自身も被災し、通信・交通手段を断たれており、情報もなかなか入手出来ない状況の中マニュアル通りにはなかなか行動出来なかった。
- 68.パニック。
- 69.安否確認の優先順位を考える事が出来た。
- 77.震災時にどのような行動をとったらいいか、シュミレーションしていた。避難訓練やシュミレーションはとても大事だと思った。
- 81.災害対応マニュアルは作成してあるも、普段目にしておらず実際の震災の際も自己判断にて動く事がほとんどであった。
- 82.事業所内の被害の為、マニュアルがあっても事業所へ入る事が暫く出来なかった為役に立たなかった。
- 83.ライフライン停止により連絡等が出来なかった。
- 88.想定外の津波だったのでマニュアルは役に立ちませんでした。
- 94.いつも即使えるように頭に入っていないかった。
- 95.安否の確認等についてあったが、ほとんど電話での確認が主だった為すぐに利用する事が出来なかった。電話が不通時の対応について話を行っていたが、まだはっきりとこういう手順という物にはなっていなかった。
- 96.その日その日は過ごす状況で無事であっただけで安堵し、次どうしていいか最初は考えられなかった。
- 98.今後必要と思う。
- 107.ライフライン停止期間が長い事とガソリン不足の為、自分（現場）の判断と自分の足で動き対応していた。
- 108.事業所にはあったが役に立たなかった。その場での判断が必要。

- 111.被害があまりに大きく予想を超えていた為役に立たなかった。
- 112.災害対応マニュアルを考える研修を社内で行っているので災害時にどう行動するか常に考えていた。頭の中に利用者の優先順位があった。
- 113.具体的でなかった。避難所が分からなかった。
- 114.2日程の預かり。避難所で不穏になった認知症の方を通所でお泊りして過ごしてもらう。
- 115.実情に即してなかった。更新されていなかった。
- 118.指示系統により役割分担ができた。
- 123.マニュアルが想定していた事より遥かに大きな災害だったので、その場、その状況に応じて判断し動いていた。
- 124.震災後電話が使えず連絡が取れなかったり、ガソリンの確保も十分できず思うように訪問や支援ができなかった。
- 129.速やかに対応できた。
- 134.施設と在宅両方の内容では在宅のみの対応では確認が取れない事や人が足りない事等があった。
- 135.連絡手段の優先が電話によるものであった為、今回のように全く手段が無くなった場合の想定は無かった。ショートメールを最大限に活用し、スタッフや医療現場と連携を図る事ができた。今回の震災をきっかけにマニュアルは大きく見直す事となりました。
- 136.ケアマネとしての想いはあったが、法人全体のやり方によりケアマネとしての業務をさせてもらえなかった。
- 137.マニュアルの存在は把握していたが、中身までは分からなかった。また、マニュアルの中身を確認したが、今回の地震への対応はできなかったと思う。マニュアルの再検討が必要と思います。
- 141.少ない人数の事務局なので独居を中心に安否確認をしている。しかし、既に避難している人が多く、最終的に何処に避難したか分からない人もおりマニュアル通りにはいかなかった。
- 142.震度5以上は出勤する事になっていたので一度事務所へ戻り指示を受ける事が必要とすぐ判断できました。
- 144.マニュアルはあったがよく目を通していなかった。
- 146.電話も繋がらず、ガソリンも無くなり、遠方の利用者への手段がガソリン購入の為並んでから訪問等とは考えていなかった。ガソリンはスタンドへ行けば購入できるものと考えて、無くなる事は思ってもいなかった。
- 148.一定の目安になると思うから一部は役にたった。
- 150.震度5弱の対応マニュアルだった。
- 155.安否確認の優先順位を整理しておいた為必要な方の避難誘導が行えた。
- 156.ライフラインが無い事でのマニュアルではなかった。
- 157.災害時の事故発生に対するマニュアルに沿って円滑に対応できるシステムであった為安心できた。
- 158.2日前の地震に対しての行動についてマニュアルで確認済み。災害時すぐに対応できた。
- 159.3/9の地震でも安否確認を行い、その際にマニュアルの再確認と優先順位の確認を行っていたので、初動の混乱は少なかった。
- 160.避難場所の記載での確認ができた事。実際に避難場所に避難していた利用者がいた。連絡が取れず、避難場所へ向かうと利用者に会う事ができた。
- 162.マニュアルに沿って行動に活かされた。

- 164.想定外の為役にはたたなかった。
- 168.あまりにも大まかな内容で具体的でなかった為役にたたなかった。
- 169.想定外だった為役にはたたなかった。
- 172.ライフラインが停止してしまい、上からの指示が取れなかった。
- 173.地震・震度を確認する為ラジオを点け速報を聞く。勤務中の職員の安否の確認。非常持ち出し袋を玄関に置いてすぐに持ち出せるようにする。本社上司に連絡をつけたくてもライフラインストップしている為何ともならず、ある程度利用者の安否確認ができたところで解散。翌日は来れる人のみ（強制なし）事務所へ集まり事務所内の片づけを行い、本社から上司が来るのを待った。連絡経路が寸断されると、個々や事務所内での判断で行動をとらねばならず、マニュアルがあってもその通りには動けなかった。
- 174.マニュアルはあっても、その時には頭になかった為独断で判断してしまった。
- 178.優先順位等、マニュアルはあったがガソリン不足により訪問ができなかった。ケアマネにもガソリンの補助をしてほしい。また、交通渋滞等により速やかに対応できなかった。
- 179.緊急連絡の対応が役にたった。
- 181.紙ベースの緊急連絡先が約にたった。
- 184.まさか・・・まさか・・・の連続で動きがとれなかった。
- 185.まさか！の連続で、まさか電気が1週間停電になるとは！まさか水道が10日以上出ないとは！まさかガソリンが手に入らないとは！まさか電話（携帯）も繋がらないとは！マニュアルの想定をはるかに越えた震災だった為役にたちませんでした。
- 189.何からどうするか、いざという時は頭が真っ白。電話も使えず、ガソリンもないとなると身動き取れないような感じになった。
- 190.具体的ではなかった。災害時対応ができるような情報を取って、事業所で共有する必要があった。
- 195.事業所全体のマニュアルに添って対応。
- 203.マニュアル通りに行かないことが分った。
- 204.行動の目安となり大変参考になった。
- 205.被害が大きく、余震も強かったのでマニュアルが役に立たなかった。
- 206.グループホーム災害対応マニュアルで活動していました。
- 210.ライフラインの停止を想定したマニュアルではなかった（安否確認、救急要請が電話で出来る事を前提としたマニュアルだった）。
- 212.三年前宮城内陸震災の時のマニュアルが役に立ちました。
- 214.マニュアル作成中であった。
- 216.限られた燃料だった為、安否確認の方法など無駄なく行えた。
- 218.マニュアルを基に応用しながら対応することで役に立っていた。
- 219.ガソリン不足、長時間電話ができない状況は、予測外。
- 220.マニュアルはあったが、直後は電話が通じず指揮継続が機能しない状況になった。それでも震災時の行動手順として自身の安全確認を行った後、他のサービスのスタッフにも協力して利用者の安否確認を迅速に行う事ができたと思う。
- 221.マニュアルを取り出すことが大変だった。予想していたマニュアルが不適切だった。
- 222.マニュアルが、保管場所から取り出せなかった。
- 225.対応の順番や方法が身に付いていた。
- 226.行政として動くので一部制約があった。
- 227.想定を超える震災だった為、ライフラインの停止が一番ダメージで、利用者、サービス

- 事業者との調整がスムーズにできなかった。
- 230.マニュアルどおりに行けなかった。先ず事務所に戻りヘルパーさんと役割分担し効率よく巡回すべきでした。単独で訪問した為、一日の確認する件数が少なくなってしまった。連携面が上手く行けなかった。
- 236.マニュアルはあったが、想定外の震災で臨機応変での対応が必要だった。利用者名簿等データ保存していた為、停電時は利用できなかった。
- 237.パソコン上での入力のみで印刷していなかった。
- 238.整備をしようとした話し合いは行っていたが、きちんとマニュアルができる前に震災が起きてしまった。
- 243.元々事業所全体のマニュアルはあったが、全員それに添った動きはしなかった。その他見直しが必要な所もあり、作成直しを行った。
- 247.取り決めていた連絡自体が、回線の混乱等で使用できなかった。担当者リストで日頃から優先度の高い方の連絡先は、直ぐにチェックできたので素早く対応できた。指示系統についても取り決めがあったので、取りあえず大きな混乱もなく初動できた。
- 251.そういった物を準備している必要性すらなく、何かあれば施設に駆けつければどうにかなる程度の認識しかありませんでした。
- 254.要介護の人から地震3日後電話が来て、配食サービスの依頼があった。ガソリンもなく配食サービスも中止になっていたことから、食料確保の為避難所へ誘導した。しかし本人はマンションの11階から歩くのが無理で、自宅に住む事をあきらめ、他県の息子家族の所に高速バスで避難した。
- 257.日頃、宮城県沖地震を想定して作成していたので、動きについては頭に入っていた。しかし安否確認をする際に、目安となるシートがあればポイントを絞って訪問できるのではないかとの意見もあり、作成し直している。
- 258.避難所等の変更、情報不足により、把握できない時があった。
- 259.大地震は想定していなかった。(宮城県北部地震時の体験に基づいて作成していた。)
- 272.あまりにも大きな震災だった為、全てには対応できなかった。
- 274.電話や訪問で安否確認をすることになっていましたが、電話も車も使用できない状況でした。
- 276.パソコン、電話、車が使えなかった為、見ても何もできなかった。
- 282.今回の大震災は、短期間のもではなかったため、管理者も戸惑うところがあったと思われる。
- 283.事務所内がメチャメチャになり、数日間事務所に入れなかった為、マニュアルの確認ができなかった。
- 284.事務所が震災で倒壊し、何日も使用できなかった。
- 286.想定外の災害だった為混乱した。ライフラインが全て機能しなくなったことでマニュアルの見直しをしています。
- 289.確認して行動することができた。
- 292.3/11本震の際はあまりにも大きくマニュアルの事を忘れていた。4/7余震の際は、夜間であり、震度5以上の場合は出勤するという事が思い浮かび、役に立ったと思う。
- 295.会社としての災害対応マニュアルを周知していた。
- 301.今回のような大規模震災を想定したマニュアルでなかった為、役に立たなかった部分が多かった。今後は震災規模を考慮したマニュアルを作成していく。
- 306.各ケアマネが自分の担当利用者名簿を所持していて、それを活用した。

- 307.利用者名簿、緊急電話連絡網を作成していたことで、現状把握がし易かった。また気が動転していたが、マニュアルを見て確認することができた。
- 311.基本的な事項に則り、あとは臨機応変な判断が必要なんだと思いました。
- 313.マニュアルはあったようですが、頭からすっかり飛んでおりまして、その場その時にアドリブ的に行動する事も必要だったと思います。基本はマニュアルでしょうが…。
- 315.大規模な震災を想定したものではなかった。利用者の緊急連絡先は2ヶ所以上確認するようにし、その他利用者ごとのかかりつけの病院も記載している為、その点は役立った。今後の課題として、ライフラインが停止した場合の必要な情報収集をどうすべきか検討が必要。
- 316.負傷者が出なかったことで、急変に対しても病院と連携がとれた。その反面予想以上の震災だったので、ライフライン停止がひびき訪問できず、利用者が不安があり、今後の課題となった。
- 318.もう一度見直しをして、震度5以上の時は施設に集まり、訪問することにした。
- 319.行政の対応とは付随するところがあるため、行政の対応がはっきりせず遅れての対応となった。マニュアルがあっても事業での準備が出来ていなかった。
- 321.自分でやらなければならないこと（安否確認の方法など）、優先して行うことなど、迷うことなく行えた。
- 322.電話や自宅訪問による安否確認の方法がスムーズに対応できた。
- 327.津波対応がなかった。
- 328.震災時、事務所に職員が1名のみだったこと。地震直後、電話・携帯が使えなくなったのでスタッフ同士、お互い連絡をとるのが困難だったため。
- 330.居宅事業所の対応マニュアルはありましたが、ライフライン停止については前提としていませんでしたので、役に立ちませんでした。
- 331.利用者への説明・避難誘導の方法について、マニュアルが参考になった。
- 337.これからは、災害対策マニュアルを活かして、自己判断で行動しないよう気をつけたいと思います。
- 340.マニュアルは1人暮らしや高齢者世帯のみを優先に確認するようにしていたが、余震も多かったし、ライフラインが通っていなかったこと、燃料がなかったためにマニュアル通りには出来なかった。
- 341.規模の大きな災害すぎて、自分の身の安全や訪問中だったため動きが取れなかった。子供を向かえにしなければならず、家族の安否優先の対応をとった。自分や家族のことなどマニュアルには載せていなかった。その場・その状況で判断する、自分の頭の中の混乱を冷静にするのに時間がかかった。その場が施設や病院内という状況ならまた、判断した結果は違っていたのだろうと思う。
- 344.ここまで大きな災害（ライフラインの中断・ガソリン不足・物資不足など）を想定していなかった。電話が通じなくて連絡不能。老々家族が孤立した。
- 345.電話連絡するなど、繋がらない場合のことまで想定されていなかった。
- 351.利用者は全員他県在住だったので特別な影響はなく済んだ。
- 352.災害時マニュアルはあっても、ライフラインストップを想定しておらず、交通手段までマヒする状況のマニュアルではなかった（ガソリンストップ）。ケアマネジャーである前に一人の家族・一人の親でもあるため、やれること・やるべきことの限界はあると思。逆にどこまで求められるか疑問である。
- 356.連絡網を活用した。

- 357.マニュアルは役に立ったが、マニュアルだけでは対応できない部分もあった。
- 359.比較的・効率よく安否確認の訪問ができた。一人暮らし・医療依存度の高い方のみ優先され、全員の安否の確認までは時間がかかったように感じる。
- 363.各利用者さんの利用サービス・住所などはすぐに把握することが出来たので、すぐに行動できた。
- 366.マニュアルに添付していた緊急時訪問リストは役立ったが、マニュアル自体はほとんど役には立たなかった。
- 367.電話での安否確認ができなかったため、マニュアル通りには実施できなかったが、一人暮らしの方が優先などのマニュアルは役立った。
- 369.自分自身が被災した場合、電気や携帯電話が通じない場合、ガソリンがなく訪問できない場合等、詳細なマニュアルがなく困った。形だけのマニュアルと感じた。
- 371.あまりに被害が大きく移動することが出来なかったが、安否確認の大部分は訪問介護・デイサービスの報告で知ることが出来た。
- 373.正直、大震災を想定しているものがなく、マニュアルを見て行動することはなかった。現在、見直しを行っている段階である。
- 376.臨機応変な対応が必要。マニュアル通りには行かないと実感した（利用ケース様々である）。
- 377.連絡が互いにつかない状況と、また土日を含んだ間、自宅での対応もあった。
- 382.どの地域に支援が必要な利用者があるか、目安になった。
- 383.震災時の対応は必要のため。優先順位をつけられた。
- 386.自分の担当外でも、要援護者リストで町別に分かれ、安否確認が出来た。
- 391.平成20年の内陸地震の時、何度かの余震があり、その時その都度マニュアルの見直しを行い、現実に即したものに整備していた。
- 401.中越地震の教訓で在宅ケアマネの役割について、自覚していたつもりであったが、動きが思うように取れず（ガソリン不足のため）、色々な場面での想定が必要と思う。見返しが必要。
- 402.とにかくガソリン不足で全然思うように動くことができなかった。利用者も心配ではあるが、自分の家族（子供）を守る必要がある、どこまでがケアマネのやるべき事かがはっきりわからなかった。
- 405.ライフラインが止まる事までマニュアルがなかった。
- 406.あまりにも大きな被災のため、マニュアルより自分の判断で行動した。
- 409.それ以上の被害です（発生時は自分の生死すらどうなるか、分からない程）。
- 410.今回の場合は、全てのライフラインが止まってしまった。連絡はもちろん、移動手段もなく（歩きでも難しかった）、マニュアルはあくまで、自分達が動ける事を想定しての内容だった。
- 413.日頃から意識していなかった。
- 421.今回の地震については、想定外の震災だったので、マニュアル通りに連絡手段はとれないなど、対応出来ない事があった。
- 423.電話不通、燃料不足により、動けなかった。移動にも限界があった。
- 430.ライフラインがダメで連絡が困難。ガソリンなく、移動も難しくなった。
- 433.マニュアルを基に活動した。
- 434.病院全体のものがあり、そちらで動いたし、動いているし、訓練していたので…。他サービス事業所その連絡も大きな変更はなし。朝打ち合わせをし、実施した。

- 437.通所等の利用者を怪我なく、安全に避難できた。
- 439.震災対応マニュアルはあったようですが、そもそもそういった物があつた事を知りませんでした（このアンケート記載にあたり、確認しました）。
- 441.施設が全壊したので、あつても見ることは出来なかつた。
- 443.ライフラインやガソリンの供給が停止したこともあり、法人で特養やグループホームもあるので、水・ガソリンの確保などに当たるようになり、ケアマネの仕事が出来なかつた。初動の安否確認でも法人特養の方の避難が優先されたので、実際に安否確認に出掛けたのが2時間後だつた。
- 457.交通事故などの対応マニュアルはありましたが、災害関係のマニュアルはなかつた。震災に対する意識不足があつたと思う。4/7日の深夜の地震の翌日は、事務所本部の指示で行動している。
- 459.会社としての災害マニュアルはありましたが、全く機能しなかつたと思います。対策本部設置もしましたが、うまく指示も伝わってこない状況でした。震災後、新たに災害委員会を設立し、対応マニュアルを見直しています。
- 469.電話での安否確認ができなかつた。
- 470.電話での安否確認もすぐには出来なかつた（繋がらないので）。
- 472.法人内での動きはあつたが、ケアマネとして事業所での判断で動いていたことが多かつた。
- 474.法人として災害マニュアルを作成していたが、実際に起きると、マニュアルにない事が起きて全てをカバー出来ていなかつた。
- 482.慌てずお客様対応ができた（当日）。自分自身が被災者になる事を想定していなかつたので、何も出来なかつた。
- 486.緊急時、安否確認リストがあり、それを見て各地域ごとに訪問することが出来た。そのリストには状態や状況も確認できたため、担当外の利用者の大体の把握も出来た。電話がつながる場合には、早急に確認の必要な方を優先的に確認することが出来た。
- 489.訪問看護で以前に作つたのがあつたので、特別考えなかつた。
- 500.安否確認の優先順位を確認できた。
- 504.マニュアルはあつても、内容を良く周知しなければ役に立たないと思つた。定期的の確認しておく必要があると感じた。
- 505.居宅内のケアマネが全て外に出ていた時だつた。丁度、2つのグループ内で別々の研修に参加しており、地震直後、電話もなかなか繋がらない状況であつたが、スタッフ全員がマニュアルに目を通し把握していたため、指示がなくても動けた。それ以外でも、居宅内で話合う機会があつたため（このような場合はどうしたら良いか?）、迷わず行動に移せたとする。
- 506.安否確認の優先順位を明確にしていたことは有効だつたが、訪問のルートや訪問の仕方をもう少し、具体的にしておけば良かった。
- 507.まず、事業所に集合することになつてしたが、全員が揃うまでに時間がかかつた。また、電話での安否確認が出来なかつたため訪問するしかなかつたが、担当区域が広範囲であるため、移動時間・燃料の効率が悪かつた。優先順位を決めていたので、迷うことなく訪問できた。
- 512.被災が幸いにして少なかつたが、安否確認をどこがするか、一本化されていなかつたので、役場・サービス事業所・居宅介護支援事業所など、各々で連絡をしていた。横から縦の協力体制が出来ていなかつた。

- 514.マニュアルはあっても、それに沿った訓練したことがなかった上に、あまりにも震災の影響が大き過ぎ、目先の対応に追われてしまった。
- 516.震災マニュアルはあっても、今回の震災は規模が大きく想定外のことが多かったように思われました。事前に緊急連絡先は確認済であっても、ライフライン停止により、連絡体制が取れなくなった場合についても、確認しておく必要があると感じ、又地域での対応についても、日頃より確認を行っておくことが大切に思われます。
- 519.担当者が不在でもマニュアルを参考に主治医への連絡や家族への対応が出来た。
- 522.訪看と一緒にいるため、そのマニュアルはある。
- 524.訪問看護と兼務であり、そちらのマニュアルは実際には役にたたなかった。
- 526.役に立ったのは、まず優先的に安否確認する利用者を決めていて、そこに向かった。全体的にはあまりにも大きな災害で、想定外のことばかりであった。
- 527.津波マニュアルはなかった。想定外であった。当日の情報はなく不安であった。全国（遠方からのテレビ）の画像情報があり、災害の大きさを知った。なんととっても情報不足であった。
- 528.安否確認の方々の順番は、頭に入っていた。
- 529.一人暮らし・老老介護の方のリストを作っていたので、そのリストを頼りに安否確認をした。
- 533.想定を超えていた。
- 535.作成後の見直しがほとんどなかったため、実用的ではなかった。津波は考えていなかった。
- 537.震度⑤の地震で、集合することになっていたが、4/7日の夜間帯の地震時は道路の陥没など、電気も不通でとても恐くていけなかった。
- 544.災害マニュアルの中には、安否確認や家族の連絡先を入れていたが、予想以上に電話が繋がりにくく、ライフラインもなかなか復旧しなかったため、より細かい部分が必要。
- 557.自分のことだけを考えてしまった。
- 564.マニュアルはあったので行動に繋がったが、今回のような大規模震災の場合のように、停電・ガソリン不足などのため、職員がすぐ集まらない場合の個別の対応について補則が必要。
- 565.ライフラインが停止している時のマニュアル作成が必要。指示や連絡がなくても、自ら迷うことなく行動できる体制が必要である（報告は後からでも出来るため）。
- 567.ライフラインの停止期間が長いことを想定に入れていないため、自宅電話での連絡が困難だった。自宅電話が通じなかった場合、車で行くにもガソリン不足ですぐ連絡は取れなかった。
- 577.あまりの大規模な震災だったため、例になかった。
- 579.ケアマネの安全の視点がぬけていただろうか？
- 580.全て流失されてしまった。
- 581.ライフラインの寸断・ガソリン不足という想定外の出来事があったため（マニュアルは環境は整っているという想定で作られていた）。
- 586.今回のような大規模災害は予想されていなかったため、マニュアル通りにはいかなかった。
- 587.3/11日地震がおさまってから、大地震だったと思う程度だったが、大津波が発生して大規模災害になるとは思わなかった。災害対策について考える様になった（自分に何が出来るか）。

- 591.震災発生後、マニュアルの見直しを行った。役にたったが、内容的に不十分でライフライン復旧まで大変だったように思う。
- 592.安否確認の優先順位が明確で、早期対応が出来た。
- 604.震災時対応出来るように、担当ケースからの名簿作成と事前自宅確認をしていたので、安否確認訪問はスムーズに行えた。
- 610.電話が繋がらず、最終確認は支店へ聞かなければならないのに、どうしたらいいかわからず時間がかかった。
- 611.安否確認の方法について、ガソリン不足から車の制限あり、二人一緒に行動した為、効率が悪かった。しかし、不測の事態に備えて複数での訪問の方が良い場合もあることを認識できた。
- 614.形式的なもので、優先度などは記載していない。震災後作成しなおしている。
- 619.想像以上だった。
- 620.地震などに対してのマニュアルはあったが、津波に対しての居宅のマニュアルは作成していなかった。
- 621.今回は地震・津波被害にて高齢者の方々は大変な心労を味わいました。地域包括支援センターと各居宅事業所の密な連携の大切さを感じました。また、地域の施設・事業所の高齢者の一時避難所設定は、必ず必要と思われれます。
- 622.災害時の対応の話合いを始めたばかりの時だったので、マニュアルはない。今後作りたいたい。
- 623.事前に事業所で一人暮らしの利用者宅を把握していた。
- 624.マニュアル通りに動けたが、ライフライン停止までは想定がつかなかった。
- 625.事業所に戻り、指示に従い、すぐに行動することができた。
- 626.マニュアルはあれど、ライフラインが停止している状況では難しいこともあった。電気が使えないと難しいし、ガソリンも使えない状況もあった。
- 628.優先度つけてリストをつくっておいたのが役立った。
- 629.自分の担当以外の利用者でも状況が把握できるようになっていたが、古い情報もあったので活用しきれなかった。
- 635.安否確認リストを作成しておりました。一人暮らし・高齢者世帯など。しかし、停電のためパソコンが使用できず、最新版を作成できず、リストをもとに最新版を手書きで作りました。優先順位をつけて、安否確認へ回ることができました。
- 636.動きの順番などがなかった。
- 650.青葉区・泉区は被害も少なく、私の場合、介護度の重い人もいたが、電気が早く復旧した為、大事に至らずにすんだ。事務所も3/13日から水が出たため、利用者に届けることが出来た。
- 654.訪問看護ステーションマニュアルがあったが、現実的には使えない状況だった。
- 665.電話・携帯が使えなかった。
- 667.想定以上の被害状況だった。
- 679.安否確認が義務でないのならば、マニュアルは必要ないのでは？人命を守ることに着目すると必要だと思うので作りましたが、今後、マニュアルの義務化など、事務仕事を増やすようことはやめてほしい。
- 682.連絡網の確認が出来た。優先順位をつけて、確認することができた。事業所内では、全利用者のサービス時間・曜日を一覧にして、さらに活用し易いように作成をし直すことを決定しています。

- 688.法人としてのマニュアルに沿って行動し、役に立った。
- 694.緊急時連絡簿を利用出来た。
- 695.マニュアルはあったが、熟知していなかった。
- 698.緊急のため、マニュアルを開いて確認する余裕はなかった。後で見直すと、結果的にマニュアルの内容で動いてはいた。
- 699.マニュアルは施設の中では、ある程度使えました。居宅のマニュアルは、さらっとしていることもあり、今後改良の余地があります。
- 704.利用者一覧としては役立ったが、避難先がまちまちで行政区では把握できませんでした。
- 705.津波の大きさが想定外でした。
- 708.電話の長期不通・ガソリンの不足、他のライフラインの長期ストップ、事業所のサービス提供ストップ等、様々なマニュアル作成段階で想定しなかった状況が発生した為マニュアルは役に立たなかった。
- 709.一人暮らし、高齢者世帯のリストにて順序良く歩く事ができた。
- 711.情報を知り、その情報を基に対応する事が一番。安全確保、危険な行動はとらない（身の安全を図る）、一人で行動しない。
- 718.マニュアルを読んだ事がなかった。
- 719.町としての災害マニュアルはあったがケアマネジャーのマニュアルではなかった。
- 722.津波がどこまでくるのか、ケア会議で半年位前に聞いていたので参考になった。
- 723.ケアマネとしてではなく、施設全体としてのマニュアルで良く動けた。
- 724.日頃マニュアル通りに訓練していたのですぐに避難した。数日前の地震の際も高台に避難し、津波警報解除で会社に戻っていた。
- 728.詳細等はなく実践できるものではなかった。
- 730.津波は想定されていなかった。
- 731.役に立つ内容ではなかった（今回の震災があまりにも巨大すぎて）。
- 733.予想外。
- 735.データ保存の為にバックアップしていたMOを持ち出す事ができた。書類やパソコン等は水に浸かり使えなくなったがMOから利用者情報を確認する事ができ被害状況が大きかったわりに早く業務再開ができた。
- 739.防災マニュアルはありましたが津波の高さが異常な程高く、想定範囲外でした。避難者の受け入れ対応等はスムーズに運びましたが、想像を超える災害の規模にその場その場での対応となりました。
- 744.マニュアルを確認する余裕がなかった。
- 751.安否確認を優先的にする利用者を決めている事で、対応できる職員は少なかったが一定程度できた。
- 752.これまでにない被害であり、長引くライフラインの停止への対応は不十分だった。電話が通じた事で情報が交換でき、緊急のサービス（入浴やデイサービス利用等）を導入する事ができた。
- 754.事業所の母体法人のマニュアルに添って行動出来た。
- 757.すぐに安否確認や対応ができた。役割分担が明確になっているのですぐ行動に移す事ができた。
- 761.地域の高齢者宅の緊急連絡先・主治医・自宅の間取り等のファイルを作成しており、それを活用でき即対応できた。
- 763.この様な大震災に合う内容とは言えない部分がある。

- 766.社協支所としての動きとケアマネとしての動きを並行で行う必要があった。当然事業所の対応マニュアルがあったが、今回の場合はそれに基づいて動く余裕がなかった。同じ建物内で営業中のデイサービス利用者の安全な帰宅、帰宅しても一人になって家族を待つ方の避難所への送り、訪問介護利用者で独居の方の安否確認、介護力の弱い世帯の安否確認を勤務している職員で手分けして同時に始まらなければいけなかった。単独事業所では無い為、事業所のマニュアルよりも支所全体のマニュアルが優先された形だったが、それすら後になって職員それぞれがこれまでの訓練から頭に入っていた事に基づく動きだった。結果的にマニュアルから外れていなかった事が事実である。
- 773.電話で連絡する事や安否確認ができなかった。
- 774.電話も繋がらず自分が避難する事で精一杯だった。自分の安否の連絡も出来なかった。
- 776.地震・津波の規模があまりにも大きく、逃げるのがやつの状況の為、対応できる範囲ではなかった。
- 778.通信手段が無い為、報告や連絡を行う事が出来ず職員一人ひとりが孤立してしまった。
- 781.ライフラインが絶たれた事への状況を想定していたが現実はもっと厳しい状況にあった。ガソリン不足・不在・自宅の流失等自分達で手探りで情報を得ようと必死だった。また、指揮系統にバラツキがあり併設施設の業務も行わなければならなかった為優先的にできる事を随時済ましていった状態であった。マニュアル等に沿ってこれからのプランを組み立てる事については約2週間後から芽生え始めた。
- 782.安否確認で廻る順番等を決めていたが、実際は行ける所から手当たり次第のような状態だった。物の散乱や水害によりマニュアルが取り出せない状態だった。福祉用具等の取り扱いについて等、もっと細かく対応について確認が必要であった。
- 783.訪問の優先順位を決めていたので手分けしてスムーズに実施できた。
- 784.内容が細かくないので、どうしていいかわからず部署毎の対応となり管理者として指示をだした。
- 785.利用者リストでトリアージを行う。利用方法確認。
- 791.火災発生時のマニュアルのみであった。
- 794.一人事業所であり他事業者等との対応に役立った。
- 795.伝言ダイヤルをマニュアルに組んでいたが繋がらなかった。電話も燃料もストップしてしまい何も出来なかった。
- 796.内容そのものが地震等の対応になっていない。大震災用ではなかった。
- 800.独居や高齢者の方の優先順位・電話番号・住所・緊急時の連絡場所は確認していた。前日も確認したばかりですぐ対応できた。遠い所はガソリン不足があり電話も不通となり困難だった。
- 802.名簿を基に安否確認の訪問ができた。
- 805.利用者の緊急連絡先一覧を持ち出す事ができた。個人の携帯電話に関係事業所・避難先を全て登録していた為なかなか出社できなかったが安否確認を進める事ができた。
- 811.想定外の災害だった。
- 812.最新の情報ではなかった。
- 816.地区ごとに名簿を作っており、プロフィール（独居・高齢世帯・酸素・胃瘻・透析）が人目で分かるように記入されていた。各々のサービス状況も把握できる為、今何処にいてどのような状況かというのもだいたい分かった為迅速に動く事ができたと思う。
- 818.マニュアルに加えて地区毎の名簿を作っていたので安否確認に役立った。
- 819.地区毎に利用者名簿を用意していたので、その名簿を参考に安否確認を行えたので役立

った。自宅電話以外に有線電話や家族の携帯電話等の記載がなかった為、今後記載するようにした。また、他の地域の情報について避難所・区長・民生委員の情報が足りなかった為今後記載していく。

- 820.重症の方から優先順位を決め訪問した。
- 821.いざという時混乱してマニュアルが頭になかった。
- 824.マニュアル通りにはいかなかった。
- 825.想定外の規模の為対応内容が不十分であった。利用者名簿と安否確認の優先順位があったのは良かった。
- 827.今回マニュアルの見直しを行った。災害時の連絡手段について確認していなかった。今後の災害時に備えたい。
- 828.ライフラインが全く使えなかった（災害時伝言ダイヤル等）ので初めは徒歩で安否確認をせざるを得なかった。
- 831.地震対応マニュアルに経過と行動が記載されており、頭に入っていた為行動しやすかった。
- 833.連絡先の確認、二人で対応する等と決まっていたのでスムーズに対応できた。一人暮らし・高齢者世帯の名簿の確認がスムーズにできた。
- 835.3/9にも震度4の地震があったばかりなので、その日に今後の事を話し合おうとしたが、3名いるケアマネの中ではまとまらなかった。
- 838.ライフラインが停止する想定が出来ていなかった。これだけ長い期間の想定ができてなかった。被害地域が大きく行政が機能できず、施設も被災している所が多かったので自分達の判断で生命の安全確保が優先された。大地震・津波の想定が予想を超えていた。
- 840.想定外の災害でマニュアル通りにする事が難しかった。
- 844.今回の震災で急遽マニュアルにはなかった福祉避難所で活動を行った為マニュアルとは違う活動内容となった。
- 854.マニュアルで地震時の動きが頭の中に入っていた為指示等がなくても自分で考え行動ができた。その一方で地震があまりにも大規模だった為マニュアルでは対応しきれない所があった。
- 855.定期的に見直しを行っていた為スムーズに動く事ができた。
- 856.マニュアルがある事で動き出しが早くできた。
- 861.安否確認をし報告する事はできた。
- 867.見る暇がなかった。現実に使えるよう自分のケースに合わせて整理していなかったの（一人暮らしと優先順位の作成等）その場の判断で行動した。
- 868.緊急を要し、そこに目を留めている時間がなかった。
- 876.震災の規模が予想を超えていた。
- 880.ちょうど3月11日に安否確認の名簿・ルートの再確認をしたところで各自ファイルを準備できていたので最新の情報の下訪問できました。
- 881.事業所で安否確認のリストアップでデイサービス利用の日でない在宅の方を拾い手分けして安否確認に出る事ができた。
- 882.新規利用者を含め、再度ルートの確認等を行った為スムーズに廻る事が出来た。
- 883.安否確認のルートを再確認したばかりだったので役に立ったと思う。
- 887.想定外の地震と津波でライフラインが完全に不能になり復帰するまでのかなりの時間を要した為。
- 889.パソコンが動かなくても優先順位の高い独居・高齢者世帯・その他担当ケアマネが必要

- と判断した方々の氏名・住所・連絡先のリストを作成し毎月更新して管理していた。その為自宅が被災し出勤できなかったケアマネの分も把握して安否確認等が行えた。
- 890.事業所全体で独居・日中独居等，災害時安否確認の優先者をリストアップしていた為ケアマネが協力して他の担当者分まで安否確認ができた。
- 891.自分が把握していなかった。気が動転していたのでマニュアルを見る余裕がなかった。
- 894.あれほどの大震災，ライフライン全てストップの中では，在り来たりの災害対応マニュアル等ほとんど役立たず。
- 896.事業所全体の利用者の把握ができるようになっていた事，自分以外の利用者についても把握でき対応しやすかった。
- 897.緊急連絡ができない。
- 898.マニュアル確認というよりも目の前の状況を確認し臨機応変な対応が必要な状況であった。
- 899.マニュアルはあるが（ライフラインありきのマニュアル）実際避難訓練も行った事がなく自分たちの居る施設が避難所になると考えていた為避難場所も分からなかった。
- 900.自分一人の事より施設の中で利用者の安全を確保するにはマニュアル通りにはならないし，できなかった。
- 903.マニュアルに具体的な内容まで明記していなかった為，震災後マニュアルを見直した。
- 904.マニュアルに具体的な内容まで明記していなかった為震災後見直した。
- 908.ここまでの災害対応にはなっていない。
- 910.電話や訪問で安否確認をするというような事は普段から心掛けていたが，実際電話も繋がらず今回のように大地震の場合のマニュアルを考え直す必要があると感じた。
- 912.当会社では常に避難訓練をしていた為避難するのも早かった。津波はくるとは思っていなかったものの，47名の利用者とスタッフ全員が無事だった。会社は全壊したがマニュアルが全てではなく訓練とその時の判断がとても重要だ。
- 913.地域のケアマネ会議で対応して頂いたのが良かった。
- 914.自分の考え，頭の中にそういう時はこうしようという考えは常日頃あった。
- 915.地震の大きさ，津波警報，上司の命。
- 918.震災の規模が大き過ぎてマニュアルで対応できるレベルではなかった。
- 919.地震に伴う津波を想定したものではなかったから。
- 921.想定外の被害だった為水や食糧・非常用品が不足していた。
- 923.想像を絶する規模の地震だった為マニュアルは全くと言っていい程役に立ちませんでした。
- 924.地震時の安否確認の優先順位等の取り決めはしていたが，水・食糧等が必要な方（自力で調達できない方）等リストアップしていなかった。今後はリストアップし必要時活用できるようにしておきたい。
- 925.マニュアルはあったものの，実際災害が起こるとマニュアル通りにはいかないものや不十分な所もあった為。
- 933.余裕がなかった。
- 935.電話が使えなかった。マニュアルを超えた震災であった。
- 936.想定外の災害で通常では考えられない事が多過ぎて自分で判断出来ない状態。上からの指示で動く事しか考えられなかった。
- 943.会社のマニュアルはあったが，実際には目を通す前に安否確認を開始していた。市の研修で震災時の対応についての書類を見ていたが現実的に受け止めていなかった。利用者

- の一覧を貼り出していたので安否確認時役に立った。
- 944.県で発行している災害時マニュアルに添い、訪問看護・医師との連携を取れるように対応していた。
- 946.一覧にまとめた利用者台帳が役に立った(氏名の他に家族の緊急連絡先が記載されており迅速に対応する事ができた)。
- 949.マニュアルはあっても「ただある」だけだったと思います。しかし急な時は臨機応変な対応が必要と思われまます。
- 951.安否確認の優先順位が決まっていたので対応の指針にできた。
- 953.連絡が取れなかった為自分の判断で行動するしかなかったが、災害前のマニュアルがあったので対応できる部分のみ行った。
- 955.直後は電話連絡が取れなかった為役に立たない部分が多かった(電話連絡を取る前提だった)。防災グッズの携行等、自分の身を守る事等、役に立った部分もあった。
- 956.優先順が決まっていた。
- 959.ライフラインの長期間が想定外でした。電話以外の通信手段、ガソリン不足で車が使えなかった事等。
- 960.ライフラインの停止が数日～1ヶ月超続く事を想定してはいなかった。電話以外の通信手段、ガソリン不足による自動車での訪問出来ない事を想定していなかった。
- 961.連絡体制等一部役に立った。
- 965.大震災で役に立たなかった。
- 967.マニュアルは作っていたが、マニュアルでの対応という状況ではなく出来る事を少しずつ行っていた。連絡を取る事が出来ないし、歩いて訪問できる状況にもなかった。
- 970.利用者の緊急連絡先が1ヶ所だけだと連絡がつかないと大変。2ヶ所位確認が必要だと感じた。
- 974.震度5の時は施設に集合する事が決められていた。その際優先順位を決めて安否確認を取る連絡先を常に表示していたので迅速に確認がとれた。
- 977.一つにはそれらをきちんと熟知していなかった事や、まさか大きな地震が早々くる等とはあまりにも準備や供えも心構えも全然持っていなかった。
- 980.ライフラインの停止が長期に渡った為、今までのマニュアル通りにはいかなかった。
- 984.想定外の地震の為かなり厳しかった。
- 985.避難所生活の方や他県及び縁者宅に避難、また、電話等の連絡がつかずだった。このような時は1軒1軒訪問していきたい。
- 988.私自身が被災したので、食事の配給・支援物資等の時間も分からず職場に長く居る事自体困難でした。被災者が被災者を支援する事は精神的にきつい時期もありましたが、法人内の事業者や他のケアマネに助けて頂きながら現在もケアマネとして働く事ができています。今後の為にもマニュアルの再確認やケアマネとしての対応について事業所内では話し合っていきたいと思います。
- 989.電話が通じない。余震や信号が止まっている為車移動が困難。
- 990.電話連絡できずガソリン不足で対応が思うように出来なかった。
- 991.災害規模が大きかったので安否確認・所在確認の後は特に役立たなかった。日数が経つ程に各サービスが再開されるまでの間、各利用者さん毎に困り事が異なり対応し切れなかった。物の不足への対応も全員に同じ支援は困難(特に在宅避難者への物資支給は無かったので)。ガソリン不足もあり思うように動けなかった事も想定外でした。
- 992.具体的内容ではなかった。

- 994.内容を確認する事が無かった為どのように動くかも全く分からないまま動いていた。
- 995.ライフラインの完全ストップまでは想定外となっており、連絡対応が機能しなかった。
- 1001.ほとんど修正しました。発生時には何処に居たかで行動を起こす必要があった為、連携事業所ともっと短縮した連携を組む事で無駄が省ける為。
- 1002.事前に研修会で助言を頂き、テキストを基に準備を始めたばかりでした。自分自身も被災者となる状況を事前にイメージできていたのは良かったと思います。
- 1003.連絡網が断たれた。
- 1010.宮城県沖地震に備えて会社で事前に話し合いをしていた事が大変役に立ちました。
- 1011.今回の被害は通常の域を超えていた。
- 1012.あらゆる場面、場合を想定していなかった。また、想定を遥かに超える状況であった(ライフラインの全域、ライフラインの復旧の地域差があった)。
- 1013.想定外の震災であった為、災害対応マニュアルの一部を見直した。防災マップを各市町村からもらって来たものの効果的な活用方法を教えてもらいたい。
- 1014.安否確認の連絡・状態の把握が第一ですが、連絡が全く取れなかった。地震や台風等に考慮したマニュアルで今回の大津波までは想定外の避難ルートも多かった為。
- 1029.よくわかりませんでした。
- 1031.母体法人の災害マニュアルに沿ってそれぞれ活動できた。

6 震災対応について思うこと

- 自分も被災し家族の安否も分からず、自宅へも帰れない日が続いた。入居者の介護に追われながら、ケアマネの仕事どころではなく自分の事で精一杯であった。安否確認が済んだからは、サービス事業所は営業している所がなくケアマネの仕事をする事が無かった。一番大変な3月中にボランティアや他市からのサービス事業所の派遣がほしかった。
- 自宅も被災、身内も行方不明等申し訳ありませんが仕事どころではありませんでした。自分の拠点が決まってやっと仕事復帰出来ました。
- ケアマネジャーは業務負担があまりにも大きすぎる！(震災に関わらず)自分の命を守るのが優先。そんな中対応が遅いと怒られたりする。行政の対応も遅い。ましてやこのアンケート自体遅くないですか？もっと早くに対応すべき。ケアマネジャー業務の見直しを強く要望する。協会として震災時はどうすべきか？考えや対応策を提示してほしい。
- 皆、安否確認の際は喜んでくれたが、自分が本当に役に立っているのかどうかいまいち分からない。居宅の仕事だけできる訳でもない為、今後の事も考え一番最初に何が必要か、再検討していく事が求められているかもしれない。
- あまりに甚大な被害なので、どの部署も混乱しておりどうしたらいいのか分からない状況であったと思われる。自らも被災しながら途方に暮ながらも依頼があれば応じなければならず、乏しい情報の中で大変な事は確かだが行政の動きが遅く相談してもそっちで何とかしてくれみたいな対応であった。家族が奔走した事が大きかったと思う。全ての機能が麻痺した状態で交通・連絡手段も遮断され困難を極めた。また、今回の震災では利用者の方々だけではなく職員の安全確保も配慮すべき点かと思った。
- 震災時は自分自身の事で精一杯で正直何も出来ませんでした。連絡がつかない方もいらっしゃいましたし、電話連絡だけでは状況が掴みきれなかったところもあります。データの紛失は思った以上に大変でした。自分の記憶だけに頼って入所時のフェイスシート

を作ったり、計画書他書類が作れず、他事業所にご迷惑をおかけしました。計画をたてて仕事をする事は出来ず、目の前の仕事を訳も分からずこなしていったという状況だったと思います。今にして思えば解決策もあるように思います。今回の経験を通して出来る事から始めなければと考えています。

- 19.皆が皆、目先の対応だけで精一杯だったと思う。何か相談したい事があっても包括職員には全く余裕がなく相談できる雰囲気ではなかった。普段からの連絡体制作りが必要と感じた。震災後転出した方が何名かいたが、全てのデータが流されてしまいサマリーを作るにも一苦勞。幸い過去の記憶を辿り起こしたり、他事業所から情報提供してもらったりして何とか対応できたが、それらの情報のバックアップを取っておく必要を痛感した（今回の場合、自宅も全壊したのでどのような方法が最適かは分からないが・・・）。デイサービスとヘルパーステーションを併設しており、何とか早く再建したいと直後から思っていた。幸い場所はお借りする事ができ、貯金をかき集めて準備したが結構厳しかった。その後県から支援して頂けるとの事で喜んでいましたが、その申請手続きが非常に複雑なうえ実際の支給はいつになるのか・・・という状況。折角助けて頂けるのなら必要な時に速やかに・・・という訳にはいかないものかと思いました（ケアマネ業務とは直接関係ありませんが・・・）。
- 21.電話が繋がらず、ガソリンもなく、安否確認や訪問に行けず何も出来ない事が辛かった。
- 22.避難所が小中学校の体育館になっているが、その場所に災害時必要とされる物品（水・食糧・医薬品・毛布・おむつ類・簡易ベッド・簡易トイレ・トイレトペーパー・ティッシュ・暖房等）を備蓄されていると良い。
- 23.介護サービスを利用している場合、ケアマネを中心にサービス側と連携をとっている事で少しでも早く対応できると思う。高齢者・家族・地域の方達の生活を支える事は勿論、精神面の支えになる事も微力ながら出来るのではないかと思う。
- 24.常に災害が起こる事を想定して日頃から同事業所内に限らず地域との連携が必要だと思う。
- 29.同じ利用者さんに複数の業者が関わっている場合、安否確認がダブったので（電話が通じなかった為）、その点は手分けを作っておいて、それぞれの安否確認をスムーズに出来るようにしておきたい（電動ベッドを使っている人には福祉用具の点検も兼ねて福祉用具の会社の方が行く等・・・）。
- 32.利用者に関わる事が嫌なのではない。書類が多くデスクワークに時間をとられ、とても虚しさを感じてしまう。もっとスリムにならないものか・・・。大変な割にはお金に結びつかない事が多い。
- 36.併設施設の為、自分の担当している利用者の安否確認後、入所者の食糧調達やケアを行っていたが、もっと担当宅へ出向き対応がしたかった。一人部署で、一人だけ違う動きを出来る雰囲気でもなかった。居宅について、会社側から理解してもらえようしていきたい。
- 37.事業所（サービス）との日頃のコミュニケーションや対応が今回ケアマネ一人では対応せず、チームで動いた事に良かったと感じる。また、電話の手段が途切れると連絡が出来ず安否確認からサービスへ繋げる事も困難であった。今後は利用者に対して誰が第一に安否確認を行うのかケアマネが主となって考えていく必要あり。
- 43.生活を無くした人々に何の力にもなれないという事をつくづく知らされた今回です。地域の力がどれだけ力づけてくれたか！やっぱり“コミュニティ”です。
- 45.会社の人とも相談はしていたが、一人ケアマネジャーという事もあり、基本的には自分

- で考え行動していた。出来れば地域（包括単位）でもいいから、地域全体で考え、行動できればいいように思った。
- 46.震災時妊娠中で3/11以降産休に入らせてもらった為、利用者の安否確認をしたくらいで、その他の対応は引継ぎのケアマネジャーにお願いした。車がなく自宅訪問は困難だった。
- 48.ケアマネとして地域に救助に行きたい気持ちはあるが、施設の入所者が優先されるのでどうしても手が回らない。申し訳ない思いがある。
- 49.今後、個人主義が進行していく中で家族・友人・近所同士の付き合いが薄まっていくと思われま。今回の震災ではケアマネ自身も被災しており、その為その責任の重さが重要になるでしょう。ですが、自分自身も被災しており、家族と仕事との間でどのようにしたらいいのか判断に迷いがありました。家族を置いてまで仕事に行かなければならないのか等で、その事からケアマネに対する負担は今後大きくなるでしょう。行政・地域がこの問題に対して解決する事が重要です。この震災でケアマネとしての負担の大きさ等から仕事を辞めた人がいると聞いています。ケアマネが担当している人の数だけではなく、その家族の対応までとなると仕事の区切りがなくなり、辞めたくなるのも分かる気がします。今回はケアマネの重要さが再確認出来た事は良いと思いますが、その影で自分自身やその家族に対してやりたい事をしてやれない中でケアマネの業務をしている人達がいた事も取り上げなければ、またその問題を解決しなければいけないのではないのでしょうか。
- 55.自宅も全てライフラインが寸断され、家族と共に日々の生活への対応で精一杯でした。自分の無事を遠くにいる子供達になかなか伝えられず歯がゆい思いをした。
- 58.非常時は皆自分の事で精一杯でした。家族の食べる物や水を確保するのも大変で、利用者も大変でした。それでも仕事は皆続けていました。ボランティアにも行きました。ひどい災害でしたが、大事な経験が出来たと思います。災害を通して更に多くの連携が出来るようになったとも思います。市はほとんど当てに出来ないし、しなかったですが、地域で協力できたと思います。
- 59.ベストを尽くしたという気持ちはなく、これで良かったのか？という気持ちが常にあります。但、個人的な（家族の事・子供の事）事も考えると、それ以上の事は出来なかったかな？とも思います。
- 61.行政・地域の事業所がバラバラに動いていた感が強い。情報なども錯綜し混乱した。混乱している中、時間がない中で大人数で集まる事は難しいかもしれないが、地域の中で行政や包括が主体となって集まり、情報等を共有する機会が早い段階であっても良かったのではないかと感じた。以前（震災後）、ケアマネ協会の研修で気仙沼支部からの報告を聞いて感じた。
- 62.色々問題も多く、自分がした事、自分がしたいと思っても出来なかった事の整理に数ヶ月かかった。ケアマネジャーの役割がどの範囲までなのか？よく分からない部分もあった。今に至るも課題はあると思う。
- 70.事業所は全壊となってしまったが、職員は全員無事だった事が救い。同法人の施設でスタッフとして応援しながら、社員や利用者の訃報が次々に入る度に、心も身体もボロボロになり自分の家や家族は置き去りにしながら尽くす事はやはりやり切れなかった。まず傾聴を心がけているが、今も尚涙を流しながら話される人、もらい泣きしながらいつまで続くのかと感じる。地域の連携だったり、逆に孤立している方もいたりで、何が良く何が悪いとも言えない。行政の対応は遅すぎる事だけは間違いなし。
- 77.独居の方でも意外と近所の方が助けてくれたりしていたので助かりました。

- 88.自分の家族の安否も不明だったので自己でやってもらうしかないと思います。ケアマネが出来た事は限られていると思う。
- 90.3 / 1 1 当日、本当は地震のあった時間には丁度荒浜の利用者のお宅に訪問する予定でしたが、その方の前の利用者宅に訪問し、時間がかかってしまった為、直接荒浜には行かず事務処理を先に行おうとまたまた途中事務所に寄り事務処理を行っていた最中に地震が起きてしまい、事務所ではデイサービスも行ってた為、そちらの利用者の避難誘導を優先してしまった為その時点で荒浜の利用者の事が一瞬頭から消えてしまい、気がついた時には空から陸自・警察のヘリから「大津波がすぐそこまで迫っているので逃げろ！」との呼びかけで、荒浜の事が気になったもののどうしようもなくなってしまい、何とかしようと思った時にはその方に対して何も行う事が出来ず、結果何日か後にその方と家族の方は津波に飲み込まれて亡くなりました。結果論ですが、仮にその時自分がそのまま荒浜に行っていたからといって、その方を救えたかも分からず自分も犠牲になった可能性もとても高かったとは思いますが、その事がとても悔しいです。
- 91.連絡手段がほとんどないというのがかなり不安であった。また、普段は連絡を取る事ほとんどない別居されている身内の方との接触も必要な場面がいくつかあり、広く利用者の背景を把握する事も大切であると感じた。震災後の減免やそれに伴う請求等、事務処理の面での情報が錯綜し混乱した。
- 92.高齢者の安否確認に対するケアマネへの期待の大きさに驚いた。区・市・県他、連絡が集中した日があって大切だった。転送電話が鳴りっぱなし。ケアマネが安否確認をしなければならぬとすると歩きか自転車で動ける範囲のみで、営業すべきなのだろうか。医療や介護従事者自身の安全の確保をどう考えるべきか。余震が続く中、スタッフに利用者の安否確認へ行くように命令する事なんて出来ない。安否確認中にスタッフに何かあったらどう責任をとるのか。管理者だから自分で家族も犠牲にして休まず動き続けたが、今本当に疲れている。何も考えずに休みたい。
- 93.私がケアマネになったのは震災後の事です。当時勤務していたケアマネは退職しましたので当時の事は分かる範囲で回答しました。幸い利用者宅に大きな被害はなく、医療面の対応が大きい方は入院中だったり、独居の方はすぐに身内の所に避難したり、避難所に行かれた方もおりませんでした。今後また大きな地震等があった場合、自分だったらそう対応するのかすぐに判断できるのか不安です。
- 94.ガソリンが手に入らなかった。もう少し早い時期に震災時の緊急車両並みにガソリンを入れられるようにしてほしい。
- 95.これだけ大きな震災となると、自分・家族・利用者・全部の確認や体調維持・生活支援は出来ないと実感してしまった。自宅訪問中に震災に遭い、利用者と一緒に亡くなってしまったケアマネもいると聞いている。どういう状態で震災に遭うかで行動が違ってくると思った。工作中であれば利用者の事が心配となる。また、休みだったがやはり会社に向かい対応を行った。家族の安否が分からない状態では会社に向かうか迷っていたと思う。この仕事を続けていけるか不安に思っている。
- 96.自分の施設も被災し、居宅としての業務よりそちらを優先せざるを得ない状況でした。行政も全くといっていい程機能せず、地震より2週間位経ってやっと集まりがあった状況です。ただ、もっと何か出来たはずだとおい思いだけが残りました。包括と居宅の温度差を痛感し、自分達から発信していこうという思いで今皆と提案していく事、自分達でやらなくてない事を検証しているところです。
- 105.あまりにも多大な被害でケアマネジャーとしての資質と冷静さが問われた災害でした。

個々の生き様、個々の人生をも考えさせられた年でした。今でも深い心の傷を負っている方がいますが、自分は何か出来る事があろうかと日々悩める者です。簡単には答えは出ないと思います。福島の方々を常に考えて生きたいと思います。

- 108.ある程度のマニュアルは必要だとは思いますが、その場での判断が必要だと思う。
- 118.私自身と夫の両親、親類等が津波の被害に遭い、姉を亡くし全てを失った。私の両親と兄夫婦は我が家に70日、義母は90日同居した後仮設の住宅に住んでいる。夫は居を移し義母と生活している。一人では居られないからである。要介護3の母は福祉避難所のおかげで元気になった。地震当時母の担当をしていたケアマネジャーは自身の夫を津波で亡くしたにも関わらず、遠くの我が家で過ごす両親の安否を気遣いこまめに連絡をくれ、サービスの利用にも柔軟に対応してくれた。災害時にケアマネジャーの果たす役割は大きく、その存在は有難いと思った。幸い私自身担当するエリアに大きな問題はなく大事に至らなかった。今回の災害の教訓を仕事に活かしていきたく。
- 123.施設に付帯している居宅として施設入所中の利用者支援を手伝わなければならない、在宅の方に対して十分なフォローができなかった事が悔やまれる。施設の利用者も大切だが、地域にいる利用者も当然同じ位大切なわけで、その生活を支援する為に居宅のケアマネがいる。その事を居宅のケアマネとしては法人のトップの理解を求めていかなければならなかった。また、行政も安否確認をケアマネに委ねてくるのであれば、せめてガソリン給油の優先を居宅にも適用してほしい（訪看のように）。それがあっても法人内の居宅ケアマネの扱いは変わっていただろうと思う。そうすれば遠方にいる方の安否Wも直接確認する事ができたのにとと思う。
- 125.自分の家族の事が心配でも職務上仕事を優先しなければならない。理屈ではわかっていたが正直とても辛かった。幸い事業所で担当している利用者は全員無事だったので良かったが、父・叔父・叔母・いとこは津波にのまれ亡くなってしまった。夫の店も流出してしまい正直今は生活の為に仕事をしているが、将来も続けるかどうかはわからない。
- 126.震災時はケアマネジャーとして働いておらず育児休暇中だった。今後の震災対応について社内で話し合い、マニュアルを作り直す必要があると考えている。
- 132.日頃から連携の大切さ、利用者の家族の連絡先を明確にしておく。
- 134.食料の配布や支援内容について高齢者では対応できない事が多かったと思います。また、カップラーメン等食べ慣れない、食べられない物が多いのも疑問に感じます。地域包括支援センターも場所によっては足りない所、余っている所等の差があったので、足りない所へ補充する連絡体制作りが必要だと思います。
- 135.今回の東日本大震災を経験して、想定していた対応マニュアルでは全く対応できない状況でした。机上の推論だけではない事を実感致しました。幸いにも私どもの事業所の職員は自身の家族の事より高齢者世帯の近隣の方や一人暮らしの利用者の方々を手分けして避難誘導や安否確認をしてくれた事で、誰一人怪我人を出さず事も無く当日の行動力に感謝しました。仙台市内は何処も停電で信号も無い為至る箇所で大渋滞でしたし、携帯もショートメールを何度も送信を繰り返すどころか連絡が取れる状態でしたから・・・やっと自宅に帰れたのも深夜でした。しかし、翌日からライフライン復旧までの間は更なる救助活動や支援が必要となりました。食料や飲料水、生活排水の為の水等、特に2階以上のマンションはエレベーターも停止したままです。階段での搬送は大変でした。また、病院間の患者移送についても支援致しましたが、いくら緊急車両指定を受けていたにせよガソリンスタンドも長蛇の列でいつも体中ガソリンの臭いがしていた事を思い出します。今回震災の後、災害時マニュアルの見直しで職員と話し合い、総合的な災害

時の役割分担を明確にし、安否確認の方法や隙間のない支援のあり方、方法等について取り決めました。今回の経験を活かして非常時の電源確保（在宅酸素や介護ベッド）の設備や食料飲料水の確保配達的手段等、大きな設備軽費負担となりましたが、いつでも対応できる体制を作りました。また、高齢者世帯の方や一人暮らしの方には連絡先・処方薬・保険証の写し等を入れた緊急ファイルを作り、ベッド等に取り付け、第三者が救助に当たった際でもすぐにわかるようにしてあります。あの時の出来事は決して忘れてはならない教訓と日々心に言い聞かせております。

136.これだけ世間でケアマネジャーの必要性が再認識されたとされているが、自分達は法人のやり方「ケアマネ業務よりも施設内の利用者を守れ」という指示があり、ケアマネ業務はさせてもらえなかったし、その事に従うしかなく、利用者の対応を十分にできなかった事が本当に悔やまれる。もっともっと手を差し伸べる必要があった方がいっぱいいたと思う。

144.自分の居宅は停電があったが水が出たりしていた地域なので、被害としてはどちらかというところ少ないと思う。古い家に住んでいた担当の人でも倒壊の人がいなかったのが救われたと思っている。

145.ガソリンの調達に苦労しました。スタンドで優先に受ける事ができる方法を考えてほしかった！

独居の方の対応が難しい。受け入れ機関が少ない中、自家発電で対応してくれた施設があり本当に救われた。

難病の方の吸引・酸素供給の方法や代替方法を普段からしっかり確認しておく必要性を痛感した。

今回はたまたま上手く施設入所やデイサービス利用、入院と早期に対応ができたが本当に疲れました。せっかく避難できても亡くなる等無力感が続いたので・・・。

認知症の方でも忘れてくれる方はいいいのですが、被災時の恐怖心が抜けず娘さんと二人で暮らしても一人になる事を怖がり、介護量が増えています。

老人世帯の方、たまたまサービスに繋がっていたのでライフラインが復旧するまで毎日交替で対応する事ができたが、サービスに繋がらなかった方達は大丈夫だったのだろうか・・・地域で支えていく重要性を感じました。

146.少し疲れてしまっています。在宅が無理になって施設探しをケアマネに依頼してくるケースが増えていきます。一緒に相談して関わってくれるよう話すのですが難しいです。今頃不安神経症の方2人で毎日のプラン変更、毎日数回の電話にて当方が困っています。

150.連絡手段が取れなかった。ガソリン不足の為に1回の給油の為に5時間位待った。それでも130位しか入れてもらえず、4～5回並んで給油。寒かったがエンジンを切って行列に並んだ。

156.小さい子供がいる、高齢の家族がいる等の状況。場所によっては津波や家屋の半全壊等あり、自分の家族を守りながら仕事（利用者を守る）もしなければいけないという状況はケアマネ以外の医療・福祉関係の仕事の大変さだと思います。しかし、津波で亡くなり、人の命を守る事を遂行した方もいる事はいつまでも記憶し、今後につなげていく事が大切だと思います。ただ“津波の時とはとにかく家族を探さず、とにかく逃げる”が沿岸部の決まりになっています。それでケアマネが“安全確認”とい現状について、やはり仕事と命について考えさせられます！警察・行政・消防・医療・福祉全般に言える事なのですが)

159.当時同僚だったケアマネが、震災が落ち着いた5月末でメンタルの病気で退職してしま

った。とても責任感の強い方だったので震災の影響が大きかったと思う。利用者と家族を守る事が時に自分自身を苦しめてしまう・・・。ケアマネ自身のメンタルも含めた体調管理（コントロール）の大切さを再確認した。

施設入所の利用者はライフラインや食糧等、市から最低限の支給と配慮があった。介護保険では在宅介護を勧めているのだから、在宅要介護者を把握している市がもっと対応を強化するべきだと思う。施設入所者は市に守られ、在宅要介護者はケアマネ及び事業所が対応する。サービス利用のない在宅要介護者は取り残されてしまう。

- 162.有事に備えた行える全ての事に日々備えるようにする。
- 163.自分の家族も心配なのに、勤務中という事もあり仕事を放り出す事は誰もができなかったと思います。今は携帯電話が普及し、とても便利な時代の中で携帯が使えない、連絡の取りようがない事が一番大変でした。でもそれは被害が少なかった地域だから言える事で、志津川や気仙沼のように何もかも失われ、水や電気が何ヶ月もこない地域の方達から比べると私達の地域はまだ幸せでした。被災者の方々を受け入れた地域でもあり、メンタル面に十分気を配り避難所の方々のケアにも入りました。なかなか復興にはなりません、今後もケアマネとしての知識を高めケアに当たっていきたいと思います。
- 176.個別の判断で個人的に動いていたので、情報の不足と他に優先すべき事があったのではないか？という思いがある。
- 177.介護サービスを利用している方は各事業所からの安否確認や支援を受ける事ができたと思いますが、サービスを受けていない高齢者は支援されるまで時間を要す事のないように考えたいです。一人の人に対して多々の安否確認がされており、一括した情報収集協力体制をして頂ければ、他の支援協力ができたのではと考えました。地区毎の協力体制を充実して、そちらへ福祉の面での協力が直ぐに出動できるようにして頂きたいです。認知症の方は短期記憶低下の為“何故通所利用できないのか”“外出できないのか”理解できず、ストレスがあり家族も大変だった。少しでも集まれる所を作り、専門化の元で過ごし安定できればと思いました。
- 178.介護保険サービスがあつて良かったとの話を伺うも、地域住民の意識でも温度差を感じた。
- 181.今回のような大震災の時は、ケアマネ・サービス提供者も被災者となってしまう。そういった場合でも高齢者本人、特にその家族はケアマネを頼ってしまう。また、行政からの安否確認の依頼もあり、自分や自分の家族のライフライン確保でも苦勞するが、そういった場合の業務を行うかどうかの判断が難しい。ケアマネ個人々の責任感、使命感、善意に頼らざるを得ないのか？
- 182.一人ケアマネ故に業務内容は重要視されず、担当を後回しにされた。今は併設も増えた為担当の為に動きがとれるようにしていきたい。
- 184.自分の関連施設の対応に追われてしまった。認知症型の施設だったのでグループホームも通所も自宅に帰す事ができず、通所は2日目から再開。グループホームは1日も自宅に帰す事なく行った。日々の水・食料の確保が急務になってしまった。担当利用者全部は廻れなかった。しかし、町の職員・民生委員・訪問看護に助けて頂き、一人の犠牲もなく現在に至っている。
- 185.安否確認したくてもなかなか動けない状況がもどかしかったです。現在涌谷町で共通の災害マニュアルを作る委員会を立ち上げています。色々なサービスを利用している人は各サービス事業所から安否確認がくるが、何もサービスを利用していない人は何処からも安否確認がこないといった無駄が解消できると期待しています。

- 187.4/1 からケアマネになりました。震災時は施設のショートステイに勤務しており、その日は夜勤でした。信号も停止し、凸凹になった夜道を施設に向かう途中とても怖く、また、一晩中ろうそくを灯して見守りをしていました。家族は勿論大切ですが、利用者の心配もありました。4/1 施設のケアマネになってみると、震災後食事が摂れなくなり痩せた方もおりました。心のケアも大切だと実感しました。
- 188.施設長は研修先からすぐに電話を取り出し連絡（指示？）をしておりました。上の判断が大切だと思いました。防災の面から居室のタンスの向き等・・・本人や家族の意向より安全面を考えてしまいます。
 今回は津波で友人・知人が亡くなりました。訪問していて自分ばかり逃げるという事はできません。何か連携プレーができないものでしょうか・・・。
- 189.震災時ケアマネとしてどのような動き、どのような事をしたかというようなアンケートがたくさんきました。結局ケアマネに何処まで望まれるのかを考えたら、生活が成り立っているかの支援なのだと思いますが、実際にはあのような震災時の対応の基本マニュアルでもないのですが、何か見てみたいのです。また、ホームページ等に入ればそのような内容は見られるのですが、色々な事例を聞いてみたいものです。
- 190.震災に対しての対応方法を話し合っておくべき。
- 193.避難所へ行く事ができない高齢者の対応についてもう少し検討して頂きたい。
 ガソリンが給油できなくて遠方に住んでいる方への安否確認が遅れてしまった。
 罹災証明発行後の手続きが高齢者には複雑だった（全てに申請が必要で面倒だった）。
- 197.介護は緊急車両となかなか認めてもらえなくてガソリンが手に入らず、独居の方にヘルパーが入る事もままならない状況でしたので行政には介護も緊急車両として認めてもらいたいと思います。
- 198.他地域へのボランティア活動までできなかった自分であったので申し訳なく思っている。震災当日一人で慌ててしまう利用者宅へ自分が丁度訪問していて良かったと思った。また、ガソリンのない中自転車で利用者宅を訪問してくださったヘルパーさんもいて感謝している。
- 203.海岸沿いの利用者だけだったら、安否確認に行き、津波に呑み込まれていたと思う。自宅も職場も大きな被害はなく、多少のライフラインの停止等は問題視するべきではないかもしれない。地域の中での情報交換は必要であり、余裕のあるところから、被害の大きいところへの支援がスムーズに行えるようにしなければならない。
- 209.震災後ガソリン調達が困難な中、訪問介護事業所は、自転車で対応していただき、利用者も特変なく在宅で生活できたことには感謝でした。認知症で要介護4の利用者の曾孫さん（山元町在住）が、津波で行方不明となり、その家族も避難されており大変な状況でした。安否確認で訪問した際、自宅での介護には限界の様子でした。直ぐに時々利用するショートステイ先を訪問、事情を話したところ、長期入所が決定しました。その数日後、曾孫さんも発見されました。施設の迅速な対応に家族も涙を流していました。ボランティアには参加できませんでしたが、今後何かできる支援があれば参加していきたいと思います。
- 210.自身も被災者ながら、懸命に被災者、要支援者に対応している行政や介護職員に本当に頭が下がる思いがした。自分には到底できないと痛感すると共に、自分はケアマネに向いていないとつくづく感じた。日々の業務を含め、どこまでがケアマネの業務範囲だろうと悩むことが多く、精神的にも負担。震災後しばらくは夢中で動いていた為、ある程度落ち着いた現在、心が折れそうになっている。

- 211.災害対応マニュアルや、実際どのような対応を行ったかを参考にしたいと思います。
- 216.ライフラインがストップしたことにより、生活の支障が大きかった。デイサービスなど、自分たちが出来る事を早い時期から開始していた。ありがたいと思った。福祉用具事業所も緊急車両に位置づけてほしい。エアマット、特殊寝台の不具合により、床ずれの発症などが出現してしまい、医療の負担となってしまう。在宅酸素を使用している利用者が、業者と連絡がとれず、結局入院したケースがあった。ガソリンがあれば業者も動きがとれたと思う。
- 220.未曾有の大震災に自分自身も被災者となりこれからどうなっていくのか不安な思いを抱えながら、震災後は、しばらくは毎日必死に利用社宅を訪問していた。自分の家族を自宅に残し、仕事に向かうことに対して後ろめたさを感じたこともあり、自分の仕事の意味についても深く考えさせられた。また福祉、介護、それを担っている私達の仕事が社会的に、果たしてどれほどの重要性を持って見られているのかも如実に浮き彫りになった気がした。ガソリン一つをとっても福祉関係の事業所の車両は緊急車両として認めてもらえず、多くの事業所が訪問したくても出来ない状況にあった。にもかかわらず、行政からは安否確認依頼のFAXが届き、更に当日中の提出要請に正直現場の状況が全く分っていないし憤りすら感じたこともあった。せっかく立ち上げた支援制度についてもアナンスが足りず、支援制度が出来てしばらく経っても知らない人がほとんど、更にこんな状況でも行政の縦割りは相変わらず、手続きに窓口をたらいまわしにされ、不満を訴える方も多かった。こんな時こそ行政はもっと前面に出て、高齢者や事業所をサポートする姿勢を示すべきではないかと感じました。
- 221.支援物資が行き届かなかった。内陸部の支援が薄かった。
- 224.経験のない出来事なので、安否確認を優先しましたが、行政が把握すべき事なのではないかとも思った。避難所等の指定場所の周知徹底が必要かと思います。
- 225.当事業所は、病院隣接の為、石巻や東松島から被災し運ばれるケースが多かった。その後、避難施設での支援でのケアマネ業務依頼が多かった。届出などで石巻に行く機会が多かったが、被災の中、届出やその他の業務で顔色の悪い市役所の職員を目の当たりにしてきた。届出から始まるケアマネ教務であるが、災害時、サービス優先できる枠や方法などあれば、被災地の職員も楽に出来るのではないかと思われた。(町、市で書類やサービス方法が少し違いあり)一括して同じ方法で他の市町村でも手続きが取れるといい。
- 227.ケアマネジャーだけの対応では限界を感じた。日頃から、地域包括支援センターとの連携が大切だと思った。震災後、利用者さんからの相談事やサービス事業者からの報告で気になることや自分で判断しかねる事については、直ぐに地域包括支援センターへ繋げるようにしています。
- 229.保険者により対応がまちまちであった。(白石市、蔵王町、大河原町)津波(原発も含む)で避難して、避難先からの介護サービス利用で手続きが煩雑であった。(南相馬市、山元町、亘理町、石巻市、仙台市)
- 230.今回の地震の際、家族の安否が気がかりで、自分の家の状態がどうなっているのかも正直とても心配になりました。
- 236.老人世帯で寝たきりの方を介護している方が疲れてしまい、受け入れ先を探したが、他町と連絡がとれず、町内の施設(老健)は病院からの依頼が多く、ショート対応不可といわれた。その後発熱し何度か通院するが、患者が多いので入院不可と自宅へ戻された。最終的には、救急車で搬送され入院となった。病院は重症患者優先と言い、老健は病院からの患者優先と言い、福祉避難所は、体調不安定の方は困難とのことで、最終的には入

- 院となったが、対応に悩んだ。同僚で、自分の両親、祖父が津波で行方不明となったが、立場（役職）もあり、施設を守る為、泊り込んで介護等に当たっており見ていて辛かった。家族優先で良いと言われても、そうできない場合もあり心が痛んだ。今回の震災で、このような方がもっともっとたくさん居たと思います。
237. 今回の震災後に「今回の震災を振り返って」の研修を行ったりもしたが、最終的には報告のみで、次に繋げる対策案は、不透明なままのような気がする。次のいつ来るかわからない震災のためにも、早急に対策を全スタッフに周知する必要があると感じた。
238. 複合施設のため、特養、グループホームの入居者を守ることが第一だった。また訪問介護の事業所もある為、車の使用はそちらが優先となり、担当利用者宅へ自由に行くことができなかった。福祉避難所になった為、ライフラインが復旧するまで避難所で介護業務を行った。複合施設の場合、自分の担当利用者を最優先というわけには行かないので、それが辛かった。分担して安否確認を行ったので、自分の目で見て確認できない利用者もおりに気になった。日頃から包括や病院と連携が取れているので、その点はスムーズに対応できたのでよかった。
250. 今回被災したことで、ライフラインの重要性、またガソリンがない状況での安否確認方法等の、確認やマニュアルが必要と感じた。
251. 自家発電機の必要性はじめ、災害時の備蓄の整備は、きちんとしておかなければならないと感じました。
257. これまでも分っていたつもりが、いざ起きてみると慌てて対応が追いつかなかったり、自身の家族のことなど、想像つかないことがあるのだという事を改めて実感した。どのような場面で遭遇するか分からないので、個々の利用者別に緊急対応を確認しておくこと（紙面に貼っておく等）、介護サービスだけではなく、地域とのつながりなど多方面からの支えがもてる仕組みの大切さを感じた（地域体制のある方については大きな混乱はなかった。）。〇〇せねばならないという考えを、もっと広く考え、捉えていく柔軟さも必要と感じた。
272. 自分と自分の事業所のことで一杯になりボランティアまではできなかった。
277. 台数は限られると思いますが、各介護事業所の車を緊急車両指定してもらいたい。
287. いつどのような震災がおきても、あるいは来るものだという意識を持って生活しなければ駄目だなあと感じます。震災がおきた時どのような行動をするべきか、自分のマニュアル作りも必要で、それに従い行動していこうと思います。
290. 断水時に給水する為にヘルパー援助は算定になるかどうか分らず、仙台市に確認した。通常の援助内容を超える範囲かどうかの判断（物が散乱片付ける等）が難しかった。余震が続く中で安否確認に出向くことで、ケアマネ自身の身の安全はどのように確保すればよいか悩む。福祉避難所入所決定まで時間が要した。震災により体調を崩す方があった。対応の検討が必要であると痛感した。
301. 電話が通じず、ガソリンも無く、車での訪問が制限された為、大変だった。
307. まだまだ未熟なところもあり、利用者対応から教わるが多々あります。電話が繋がらず、指示をする側として今でも、対応の仕方がよかったのかと不安になります。現状だけでなく、予測しながら、また行政等の見解も確認してという点ではとにかく大変だったと思います。ただ避難所等の支援をしていないので、環境により、私よりもっと大変な思いをされた方が多かったのではないのでしょうか？皆さんの体験談を聞き、今後の参考にさせてもらえればと思いました。
311. 当該事業所は、担当エリアが広く、安否確認を行うにも電話が繋がらない時には、訪問

- を行うだけで大変でした。ガソリンもどこの市町村からも支給はなく、皆さんの事業所も同じだったと思いますが、連日車に泊まりガソリンを入れ、そのまま日中も利用者の対応に明け暮れ、体力・気力ともに限界でした。又、併設サービス事業所の担当者の被災、車でないと出勤できない職員も多く、ケアマネとしてだけでなく、他のサービスの対応にも追われました。事業所として、改める点は改めなければと思いますが、もっともっと行政や包括とのつながり・協力が必要だと感じました。
- 313.時間が経って、今冷静に思い返してみると、もっと良質な対応の仕方があったのではないかと、反省すべき点も見えてきております。しかし、あのような大地震のすぐ後に自分の取った行動は、目いっぱいだったような気がします。幸い、大崎は津波の被害はありませんでしたが、もし私が沿岸部にいたら、どのような判断し、行動していたかわかりません。ひょっとすると、人の命を危険にさらしたかも知れません。自分の家族はもちろん、利用者を守れたか、自信はありません。
- 315.地震の時、事務所にいたため、すぐに安否確認後、帰宅出来ない利用者支援も実施した。職員が卓上コンロや石油ストーブ、灯油などを持ち寄って炊き出しを行った。翌日からは、出勤できない職員が多く、部署に関係なく全員での介護体制。緊急受診で明らかに入院が必要な状態であっても在宅に戻るしかなく、これ以上悪化しないでと祈るのみ。あれから7ヶ月以上経過したが、その期間のみ空白。思い出すと動悸が激しい。一方で利用者支援を行い、3/11 帰宅は夜中になった。子供の安否確認や自宅の被害状況も分からず、他の介護施設（デイケア）に行っていた実母の迎えにもいけない状態での支援だった。家族の理解がなければ、この仕事は続けられないと思った。
- 316.あまりにも大きな震災で動揺してしまい、対応が適切だったか不安。今回、自分はそれほど大きな震災はなかったが、家族などに被害があったら、沿岸部の人たちのように対応できるか、考えさせられる。やりがいのある仕事だが、その反面、今後に対して不安も大きく残っている。今は被災地で仕事をすることが出来ないの、自分の出来る事を精一杯行って、被災に遭われた方々が一日も早く、元気になることを願って、日々の業務を行っていきたくと思います。
- 318 ケアマネジャーや各事業所からも利用者宅へ確認に行くため、利用者が戸惑っている。何ヶ所からも連絡は不必要に思う。
- 320.震災直後、こんなに大変な状況になるとは想像もつかなかった。直後、すぐに利用者の安否確認に行かなかったことを反省している。命を亡くしたケアマネジャーが入ることを後で聞き、改めてケアマネジャーの仕事の重要さをしらされた思いでいる。しかし、再びこのような大規模な災害が起こったときに、自分の命よりも利用者の命を優先できるかどうか自身はない。ケアマネジャーとして災害時の対応について教えて欲しい。
- 321.福祉サービス（居宅支援事業所を含む、全てのサービス事業所）に対する支援の優先度の低さを強く感じた。特に車の燃料については、ガソリンが確保できないことで、行うことができない支援が数多くあったと思う。
- 322.大きな災害だっただけに、ライフラインの復旧に時間がかかった。独居の方など、震災後も自宅で生活されているかたに対しての継続した支援が必要だったが、もっと独居などの高齢者に対しての優先的な支援があっても良かったと思う。
- 324.自分達の地域は内陸なので、津波などの被害はなかったが、大なり小なりの被害はあり。発災翌日から同法人の施設への応援でケアマネとしての活動は・・・？行政が安否確認などに動いてくれて民間と情報交換したりという動きもあったが、情報を伝達する手段が断たれたのは大変だった。

- 325.震災後にケアマネに求められることが多すぎて対応しきれなかった。まわりはしっかり対応しているのに、自分の能力のなさを改めて思い知らされました。転職を考えております。
- 330.各自治体によって、行政や包括支援センターの対応が違うことが広域で業務を行うものにとって大変だった。特に、予防の方は委託契約などの手続きが通常通りだったので、避難所もあった山間部にある当事業所は業務に負われていた（来てもすぐに中止になったり、また変更となったり）。要介護の方より予防の方のほうが書類作成に負担が大きいことを痛感しました。ある自治体の包括職員が動かずに安否確認の報告を待っているだけと言うのには、正直力が抜ける気がしました（ガソリンは調達できていたとの事）。他居宅の方の安否確認が行政の支援によって出来たのは良かったと思う（遠い事業所が担当していた。安否確認が遅れていたため、床ずれが悪化していた。緊急入所につなげた）。今回の震災によって、全面的に災害時マニュアルの見直しを行った。通常業務のとおり、ケアマネジメントを行わなくても良いと通知があったが、どこまでなのか不安なため、結局書類の作成に時間がかかってしまった。沿岸地域の方々のほうが大変だった時に支援にいけず、とても申し訳ない気持ちで仕事をしていました。
- 331.ケアマネジャーとして仕事をしていたが、社会福祉士の資格を同時に持っていたため、行政や社会福祉協議会・地域包括支援センターより応援要請が何度かありました。参加することが出来ず、申し訳ない気持ちもありました。
- 335.所属施設の応援対応が優先され、担当利用者の安否確認がすぐに出来なかった。又ガソリンもなかったので、全部を回することは出来ず、独居と高齢世帯しか回れなかった。
- 336.以前から考えていますが、業務量が膨大であり、最近困難ケースが増えてきており（家族も含め）、毎日サービス残業になっている。当事業所の体制にも問題はあると思うが、他居宅のケアマネの方とも話をするが、利用者30名以上超えてしまうと一人一人への対応が十分できない現状がある。一人一人へ十分な対応を行っていくため、ケアマネの生活を守るためにも、業務量の削や担当利用者数を更に減らしていけるよう、県ケアマネ協会が全体のケアマネの実情を把握して、厚生労働省などへの提言を行っていただきたいと思います。
- 337.今回の震災で、ケアマネジャーが行った役割は大きかったと思いますが、日頃ケアに当たってくれている事業所さんにも安否確認などにあたってもらい、大変お世話になりました。しかし、電話が繋がらず、ガソリンもないため、連携が取れなかったのが残念でした（安否確認が重複してしまった）。また、民生委員さんや地域の方々との連携も日頃からとっておかないと混乱してしまう状況が生じてしまい、今回の反省点となりました。今後は担当者会議や普段の訪問などでも、災害時の対応など話あっていければと思います。
- 338.震災時、勤務中であり、施設入所者さんの誘導・安全確保・食事の配布などが優先され、利用者さんの安否確認が遅くなりました。そのうちにガソリンが手に入らなくなり、出勤も困難になりました。
- 340.自分も被災地に住んでいればどう行動したか分からないが、余震も強くライフラインが寸断されている状況では、家族と自分の身を守るのが精一杯。また同じような災害が起きてケアマネとして、どう動いたらいいかは今でもよく分からない。
- 341.高齢者の支援・相談対応などをしてきて、今回のような災害時はライフラインがダメ、道路も危険などの状況の時、ケアマネとしては何にもできないことを痛感しました。それよりもどれ位、隣近所の力が大きいとかか…。私も家に戻って、近所の（別に要介護

ではなく、ケアマネを担当したわけでもない)年寄りの方と話をしたり、食べ物をおすそ分けしたりした。危険の無いように少し片付けも手伝った。担当している所へは、家のことも心配で行けなかった。これが悪い対応だったかどうかは、判断できない。自分の中でできる限りのことで、安否確認を翌日～自転車で訪問できる所だけ行ったが、無事でホッとした。

- 345.利用者の家族は大きな被災(水没など)が無い人も無理にショート利用、サービスが動いていないのに文句をいい、当たられることも多かった。3/11～約3ヶ月ほとんど休まず仕事していたが、過労でうつ病気味になってしまった。介護の仕事をしているのだから当たり前にしてもらわなくては…みたいな意識が多く、疲れもたまり、今回この仕事をずっと続けていけるか不安も大きい。
- 349.要介護の受入について、ライフラインが止まってしまい、利用者が困難で受入できる施設が無かった。
- 352.自分もそうであるが、スタッフは当然、家族であり、親であり、代わりのいない役割を各々もっている。それゆえ、ケアマネだからと使命感のみ追わせたり、使命感に頼り動くのは正しいこととは思えない。利用者の安否確認も大切だが、安全が確保できない所に職員を派遣することはできない。地震でも火事でも水害でも同じと考えている。今回は道の寸断・倒壊など多々あり、余震が続く中、派遣し、犠牲者を増やすことはあってはならないと思う。ケアマネジャーとして報道されている人のような動きをあえて指示を管理者として出さなかったため、ジレンマを抱えたスタッフもいるかもしれない。しかし、今後災害時の対応を考える上で、“安全が確保されない所に職員を派遣しない”という初期判断の方針は全く変えるつもりはない。
- 358 震災時、ガソリンがなくてヘルパーや訪問看護が自転車で訪問してくれた。本当に独居や医療依存度が高い人たちには訪問系のサービスはなくてはならないものであり、そういう事業者に対するガソリンなどの供給を今後検討してほしい。震災が月日の経過で忘れられないよう、心のケアに重点をおいた対応を長きにわたって支援してほしい。
- 359.みなさんがつらく、大変な思いをして過ごしたと思います。ライフラインが止まると困るのは皆同じです。普段から支援を受けている高齢者は、その支援(ヘルパーやデイサービス)さえも受けることが出来ず、求められても我慢していただくしかすべがないのは辛いです。それぞれの垣根を取り払い、効率よく支援を求める人に応えるべく結束できる体制が作れると良いと思います。
- 363.ケアマネジャーとしてだけでなく、一人の人間としてどう向き合っていくか、考えさせられた。沿岸部の支援を、出来ることから始めて続けていきたい。
- 365.事業ごとのマニュアルはそれぞれあったと思うが、連携をとって他事業所や行政と効率的に動けるような体制も必要ではと思った。
- 366 震災が想定外の規模であったとはいえ、ライフラインがストップするなど、我々の日常生活が脆弱な基盤の上に成り立っていることを痛感させられた。
- 369.中立公正に支援しているが、評価される仕組みがない。自己満足。将来性が不透明。
- 371.避難してきた方々の対応で包括センターは、ほとんど機能していなかった。他の町との温度差があり、町の対応に問題ありと思えた。ライフラインがストップし、大変な状況ではあったが、ガソリンが手に入らないことが1番大変だった。
- 372.①個人情報も大切ではあるが、命の重みに配慮した、地域との連携が必要。②これまで介護保険を利用していた方は勿論であるが、受けていなかった方への声掛けや見守り・支援を行うためのシステムの見直しが必要。③初動体制(トリアージ)の確立を早急に

- 行う必要あり。1週間以内に被害のレベルを分別し実施するべき。
- 373 行政の機能もマヒしている状態で、“何か指示があるかも”と大きな期待を持ち、ただただ待っている状況だった。自ら行動しようという思いや発想にはならなかった。同じ会社のスタッフが津波の犠牲となり、悔しい、悲しい。会社のみんが被災者にも関わらず、自分や子供を心配してくれ、助けてくれた。仕事に対してやりがい感や満足感に応えることは難しいが、みんなに恩返しをしたい。先輩方が築き上げた会社をずっと守っていきたい。山元町のケアマネが集まり、セーフティネットについて、話し合いを繰り返し行っている。包括。行政の動きは鈍いが、同じ後悔を繰り返さないように、しっかりした土台を作りたい。
- 374.包括と連携を取っていたつもりが、顔を会わせても「どう大丈夫」などの声掛けもなく、一生懸命自分としてはやっていたつもりだったが、むなしさを感じた。包括としての機能がマヒしていた（避難者がいなくなるまで）。地域のケアマネ集合して（包括抜きで）、今回の教訓を活かしたセーフティネットワークについて話し合いをしています。しっかりした土台をつくりあげ、今後に繋げて行きたい。自分から行動できなかった事も後悔している。質問した内容について、いつまで経っても行政（包括）からの回答が得られなかった。地の市町村との温度差を感じた。この町で働くのが嫌になった。
- 376.ケアマネジャーも人である。自分自身の体調（心身ともに）や家族の状況によっては、安否確認できない可能性もあった。もう震災はこりごりです。
- 377 自身の対応は、自宅・家族もある中で、又ガソリンがない中、全ての担当利用者宅を訪問しての確認は出来なかった。事業所ごとの対応やご家族の対応・支援によって補われた部分が非常に大きいと感じた。
- 378.何が起きるかわからない、心と身体を柔軟にし、対応できる力を養っておきたいと思いました。
- 383.役割分担など徹底させる。
- 388.自宅が被災し家族とも連絡がつかないまま、ケアマネとして支援に当たるのは辛かった。被災した自宅がある地域と居宅事業所がある地域は離れており、ケアマネとして利用者さんの支援にあたることと、自分が住んでいる地域の支援に携わりたいという気持もがあったが、両立は出来なかった。災害時のマニュアルがあれば、事業所としての動きがもったスムーズに出来たと思う。震災後マニュアルは整備されたので、今後活かされると思う。
- 404.事業所がサービスを中止になることにより、自分が動かなくてはと気持ち的に負担になる事が多かった。
- 406.今回の震災時、自分は海外にいたため、2日後に帰国し、それからの対応となっていた。大きな揺れの恐怖を体験しなかったので、冷静な判断が出来たと思う。居宅支援・訪問介護の管理者をしていたが、スタッフの安全・利用者の安全を中心に活動した。ガスが使えたため、3月中毎日、水とおにぎりやおかずを作り、スタッフと共に自転車で届けて回った（利用者宅、約30件）。マニュアルも満足ではなかったが、みんなの気持ちが一つになり、協力し合うことの大切さとありがたさを感じました。
- 407.連絡手段、連絡先を複数確認すれば良かった。利用者の避難場所を確認しておく。
- 413.今回の震災の大きさはまさかの想定外の出来事。今後はそのまさか起こるまい、絶対ないは“無い”。ここで災害が起きたら、自分はどう行動をとるか。時々頭の中でシュミレーションしてみても良いのでは。
- 413.極限の状態でも、使命感を持ってできる限りのことは対応した。自分も被災し、辛いこ

- ともあったが、周囲の支えや協力で、業務を継続することができた。
- 421.事業所で出来ることは限られているので、また市役所と連携をとりたい時に出来なかったのは残念。市役所としての対応の悪さに少しがっかりした。
- 427.燃料不足により、必要な時期に福祉車両へのガソリンの支援がありませんでした。事業所やケアマネ個人が県・市に燃料が必要であることを訴えても取り合ってもらえませんでしたが（自己努力で行うようにと）。組織としての対応が必要だと思います。
- 429.近い未来、地震が来ると報道されていたが、居宅としても備えで対応策を講じておりましたが、今回の地震は予想を大きく超えるものでした。実際、自宅が全壊・半壊し、その行き場を失ってしまった利用者が多々出ました。その中でも地震に対応する制度が、宮城県全体で統一化されておらず、かなりの困難をきたしておりました。本来ケアマネジャーとしての役割を超え、生きていただくために、範囲外で対応したケースも多くありました。報道では本人がいけなくても薬を処方してもらえとのことでしたが、かたくなに本人の受診を求める医療機関もあり、ガソリンを不足している中でかなり苦勞しました。各機関、様々な理由があるとは思いますが、まずは命を大切に对应して頂けたらと思います。また、緊急時にスムーズに対応してくれた施設が様々な手続きなどで、なかなか大変なようでした。やも得ない事情で頼んでいるので、もっと行政に柔軟に対応していただけたら良かったと思います。住んでいる地区によって同じ被災者であるのに、対応に格差があったのには、疑問が残ります。
- 435.何をどうすれば良いのか、分からなかった。集まって、皆で智恵を出し合い、対応した。きちんとしたマニュアルが欲しいと思った。指揮命令がなく（ケアマネ部門）不安だった。とりあえず、自分担当の利用者の安否とその対応に追われた。これで良かったのか、今でも疑問。区役所・保護課の対応がとても悪かった。緊急時、区は何もしてくれないとつくづく思った。
- 436.①安否確認の方法、ライフラインも確認が必要と思った。②地域の包括支援センターの活用について思い浮かばなかった。③以前利用していたが、たまたまグループホームに入居してなかった方を、福祉避難所で受け入れてもらいたかった。
- 437.被害を受けた高齢者は何をしたら良いのか、分からない。行政の情報を高齢者の状況に合わせて、分かりやすく説明し、必要な手続きの援助をすることが必要。
- 438.独居の方の対応が大変でした。ヘルパーも来れない、物も手に入らない、ショートで受けてもらえて助かりました。ケアマネ一人だけでは無理。遠方から家族が駆けつけてくれてありがたかった。
- 439.私の利用者さんにはいらっしゃらなかったのですが、認知症が酷い、自宅も住めるような状態ではなかった方が、避難所に移られたものの、苦情が出る等して、居られなくなったり、介護を必要とされる方が安心して生活出来るような避難所ではない等、大変なケースを目の当たりにしてきました。訪問介護や訪問看護、ケアマネの訪問車両も緊急用の車両として認めて欲しい。ここに書いていい内容かどうかは分かりませんが、年々介護保険制度が厳しくなってくると共に、ケアマネに対するチェックも厳しくなっているように感じます。ケアマネに従事して5年目となりますが、少なくとも今の介護保険制度が利用者さんにとって、使いやすくなっているとはどうしても思えません。一体誰のための介護保険制度なんでしょう・・・？と疑問を常に感じています。仕事やチェック、業務量が増えていく状況で、仕事に満足しているなどはとても言えません。疲れました。
- 443.気仙沼で被災、地元に戻った方のケアマネを行ったが、届出書などの様式が違っており大変だった。県内位は統一してほしいと思った。

457. 3/11日の地震は日中でしたが、早朝や深夜などにあった場合は、行動が難しいと思う。職場全体としての冷静な行動が必要です。電話や電気がストップしたのと、ガソリン不足が深刻であった。自分のガソリンの確保、食料の確保、寒さ対策が深刻な状況でもあった。利用者第一優先で勤務を続けました。
459. 全く想定しなかった大規模の震災だったため、避難所でのサービス利用やデイサービス・ショートステイ事業所の休止や閉鎖もありました。様々な場面でケアマネとして判断すべきことや特別な環境でのアセスメントが必要でした。また地域の中での自分という立場も考えさせられました。
460. 社内での連携というか、危機管理体制がまったくできておらず、混乱した。まずそこから整えるのが先と考える。自分の所属する居宅は大きな被害もなく、職員も全員無事であったが、罹災した方々への支援の方法がかわらず、いつもこれでいいのか…という思いがある。
463. ケアマネの立ち位置が分からない。事業所としても会社としても、動き方がわからず、混乱していた。青葉区はまだ被害が少なかったため、津波にあわれた所とは比べようがないが、あの混乱の中、一人一人の利用者の全体像を理解して、サービス変更に対応出来るのはケアマネの仕事と思った。
467. 今回の震災はあまりにも甚大で、目の前のことしか対応できなかったことが、今思うと反省点である。介護サービスを利用されている方は、サービス事業者なども安否確認を行ってくれたが、何もサービスを利用されていない方は、誰も来てくれなかったと言われ、深く反省させられた。
468. ライフラインが止まったり、自宅での生活が困難になった際の要介護状態の方についての避難場所は定めておく必要があるのではないだろうか？施設のライフラインは優先して復旧してほしかった。ケアマネジャー等、個人に頼るのではなく、行政主導でいち早く動いてほしかった。支援物資などの情報がほとんどなかった。包括支援センターから各事業所に伝えるなどの仕組みが必要ではないか？
472. 「すぐにかけた」という行動が利用者に安心を与えることが出来たようである（半年以上経った今でも感謝して下さる）。日頃の事業所との関係性を築いていると、このような時に事業所が協力してくれると思う。相互の信頼関係が非常に大切だと思った。
482. 緊急避難した後の精神的ケアや必要な連絡手続きなどを担えるのは、いつも関わってくれている人たちだと思います。医療・介護・福祉をつなげていける方が早期に活動できたら良かったと感じます。体育館上空をヘリコプターが飛んだ時、ホッとした事を覚えています。私の安否確認のため、デイサービススタッフが体育館へ来てくれた時（震災4日後）、医療スタッフと間違えられ、色々な方から声をかけられたと話されました。不安と苛立ちのピークでした。広い地域での被災だったので、ボランティアや物資が届くまでも時間がかかりました。狭い地区ごとのコミュニティが必要だと思います。
487. 自分の家族の安否も早く知り、安心して仕事をしたかった。仕事のため、利用者のため、自分の家族のことを後回しになっていたのは辛かったし、不安だった。
488. 自分自身も被災者となり、電気・水道・ガソリンがなく、夫は消防士・息子は役場職員として、家に帰ってこないで仕事をしていた。その間、自分が家族の面倒をみていたので、大変心細く、仕事にくる余裕がなかった。交通手段が確保されてから出勤した。
489. 以前から宮城県沖地震は来ると言われていた。他県での地震の怖さは、テレビの映像でしか知らない。この大地震により様々なことを学んだ。それは私自身、ライフラインはともかく家族や住居にさほど被害がなかったからかも知れないが…。この仕事をしてい

- る上での優先順位・職場でも上司の命令前に自分から動いたこと、それが良かったのかどうか。利用者さん方からは、とても感謝された。夢中だったので、後でどっと疲れが出た。上司も誰も評価してくれない。一人同僚が分かってくれたので救われた。みんな大変なことは分かっているが、職場スタッフが自分のことで大泣きされたのには参った。様々なことをしてむなしさを感じる時もある。やはり利用者さんに救われているのだろうと思う。
- 490.非常事態にその人柄が現れるとつくづく分かった。りっぱな人は口ではなく、行動であることが良く分かった。会社からの命令ではなく、個人個人の判断で対応した（会社の上司はケアマネ事業に対して反対のため）。アンケート項目42, 43, 44に対しては、上司はケアマネ事業に対して反対しているため、理解してもらえているのかが不明。そういった中での仕事のため、思い切り仕事が進まず、不安に感じているし、むなしくも感じる。
- 499.事前のマニュアルの重要性。安否は一件一件まわって確認することがベストだと思った。
- 504.自分は被災地でもなく、個人的に一番大変だったのはライフラインの停止ぐらい。ただ、30分程度離れた南三陸町の情報等を聞き、同業者の皆様のご苦労は計り知れないものと思います。一回だけボランティアに参加した時は、落ち着いた状況であり、ニーズ調査でした。色々なイベントがあつて、気分転換に出て行くが、デイサービスなども利用したいと思うがその手続きをするのが億劫で・・と話されていた。その方にあつたご案内が即答できればもっと良かったかな・・と思いました。ガソリンの供給が間に合わず、訪問の必要があつても出来ないのが辛かった。民生委員の方々が動いて下さり、とても助かった。常に連携が必要と感じた。
- 505.内陸部であつたため津波の被害はなく、自分・家族ともに被災に巻き込まれなかつたので、利用者の安否確認・対応などに動くことができた。今回、沿岸部ではそういった動きの中で、亡くなつたケアマネもいるとの事で、ケアマネとして危険を感じながら、どこまで動かなければならないのかと感じた。
- 506.今回の未曾有の震災にあたり、ケアマネジャーの業務に対する倫理感を考えさせられた。ニュースにて、ケアマネが安否確認中に津波にのまれ死亡したことを聞き、果たしてケアマネはこのような災害の時にどこまで対応すれば良いのかと感じた。
- 507.利用者さんを訪問していて、亡くなられたケアマネもいたと聞く。その状況にいれば、おそらくほとんどのケアマネが同じような行動を取つたのではないかと思われる。よく、医療や介護に携わっている人たちの災害時の行動が“美談”として語られている。当然仕事としてやるべきことであろうと思う反面、そこまでしなければならぬものなのか、“美談”で終わらせるものではないだとうと思つている。
- 508.震災時の対応について、常に確認していく。
- 514.震災の為に施設の損壊やライフラインの停止などにより、通所が利用できなくなつたために、サービスを中断したり、その代替をどうするか、特に緊急ショート相談の相談や対応に苦慮した。震災の影響で、職場の対応に追われて家庭の事に手が回らない家族も多く、またそれは私達も同じことで、仕事に出ればガソリンや食料の調達もままならない状況でした。
- 518.電話や訪問にて安否確認をしたのですが、電話がつながらず、利用者様を訪問しても不在だつたため、心配したのですが、実際は親戚が自宅に連れて行つていたことがあり、緊急時にはメモを残すか、事前に何かあつた場合の行く所を確認しておけば良かったのではないかと思つました。

- 519.近隣の事業者との連携が図れるように地域包括支援センターなどでの交流会に参加し、顔が見える関係づくりをしていく必要があると思われる。
- 522.訪看とケアマネを兼任している。ケアマネとして1名のみ担当。ケアマネというより、訪看という認識で行動していた。災害における他の事業所の方と連携の必要性は感じている。効率的に利用者の介護者に連絡がとれればいいのだが…。課題と思う。
- 524.ケアマネジャーが独自に動くだけでなく、地域の事業所や包括との連携が必要だと感じた。利用者と家族の自助努力も必要である（備蓄・介護対応など）。利用者ごとに有事にどのように対応するか、安否確認は誰が行い、何処に連絡するかなどのことを、話し合っておく必要があると思う。
- 526.あの日から8ヶ月。まだまだ生活の見通しが役立つ方たちが多い（経済的な問題・住まいの問題・心のケア・望まれる入所施設）。課題は多いが、一緒に頑張っていきたい。
- 527.近隣の介護施設の被災情報を知るにつれ、同じ業界として、ご支援できることはないかと考えて、全国の支援物資を分けて、提供しました（施設側として。特に杜の里の被害は大きく、心が痛かったです）。包括もエリアが違っていましたので、大変だのだと思いました。包括協としての支援はどうなったのでしょうか？福祉避難所の介護保険対応の指示には、大変混乱をおこしました。あのような大きな災害時は、支援者をまず支援することが優先です。「柔軟な対応」とはあいまいです。大きな被害のあった施設（地域）や包括への対応を強化してほしかったです。宮城野区又役所も大変混乱していました。仙台市全体で人的にも強化すべきではなかったかと思う。区役所の方、本当にご苦労さまでした。
- 528.8ヶ月も過ぎようとしているが、具体的に何も決まっていない。仮設に移られた方とマンションやアパートに暮らしている方々も「何もかもなくなった」と言う。物資・経済面だけでなく、身体機能も悪化も多い。精神的に落ち込み、最近やっとデイ再利用にこぎつけた方もいる。多面的な支援が必要だと感じる。市・県・国はもっと動くべきだ。
- 533.想定外の震災で柔軟な対応を心がけていたが、行政の対応が遅く大変だった。現在も対応が後手に回っていると感じる。
- 537.以外に高齢者の方の方が落ち着いていることが多く、若い世代の方たちのほうが、おろおろしている所が見られた。
- 538.準備していましたが、実際に直面すると自分の無力さを感じました。利用者最優先で安否確認を行いました。家庭にも戻らずだったことで、家族には大変つらい思いもさせ、自分の対応が良かったのかどうか、何が良いことなのか、正直良くわかりませんでした。我々の仕事は休みになることはないのに、ガソリンの調達や買い物に並ぶこともできず、不自由で職場内の雰囲気盛り上げるのにも苦労しました。
- 539.地震・津波8ヶ月、高齢者も仮設住宅や民間の借上住宅、それぞれが住む場所を確保して、生活を送っている。地域がバラバラになってしまった。仮設住宅や民間の住宅に集団で移動された方は、ある程度、同じ地域だった人が見える。しかし、自分で先に住む場所を確保した人から言われた言葉が離れない。「〇〇地域のこと、何も分からなくなった」「どうなっているのか、連絡もこない」と。これが孤立のはじまりなのかと実感する。我事務所も、別の区域で事業が再開した。考え様によれば、2つの地域を知る事もできるが、現状では仲間はずれになったような孤立感もある。失った物が多い方々が孤立の闇にいるように感じた。
- 540.震災後、話を聞くと、自転車や徒歩で避難所や自宅を回ったとのことでしたが、寒風吹きすさぶ中、自分が震災時、ケアマネだったらとしたら、果たして何が出来たのか、何

をすべきだったのか、未だに分かりません。自分の命・家族の命のことを考えると、最も重要だと思うし、自らも被災され、家族や友人を亡くした方でも尽力を尽くした人もいらっしゃると思います。天秤にかけるというわけではないのですが、自分の中では答えは出ません。こんな中途半端な人間がケアマネジャーをされていていいのかなと思います。

- 549.介護保険を利用していた方々は、安否確認をする上でサービス事業者や地域包括などからも、安否確認の情報を得ることが出来たので、大部分の方は早く情報確認できた。サービス利用中だったことで、安全に避難できたケースも多くあった。
- 552.認定を受けていた方は私達ケアマネや利用している各サービスの方々が安否確認しながら支援することができました。避難所担当者から電話で避難所を閉鎖するので、ケアマネが引き取りにきて欲しいと連絡がありました。一人暮らしで親族は遠方にいるのですが、余震が続く中で、本人も不安と思っているのにケアマネに迎えに来て欲しいって言われても、ケアマネはそこまでの責任があるのかと腹が立ちました。震災の日から毎日家族が心配する声も聞かず仕事をしていたため、家族からそこまでする必要があるのか？自分自身の体も考えて欲しい、家族の気持ちにもなって欲しいと懇願され複雑な思いの中の日々でした（夢中だったのです）。
- 553.ケアマネジャーの責任が重過ぎると思う。
- 560.自分の家や家族も被災しているが、ケアマネ事業所の責任が重いと感じた。身近な地域での声掛けや助け合い・支えあいが重要と感じた。
- 561.避難所に利用者様を誘導しても、一人の方にはずっとついていく訳にはいかず、医療度が高くてもその時は「大丈夫」だったので、訪問看護に連絡を入れたが遠くで対応が遅れ、肺炎とインフルエンザが原因で死亡してしまった方がいました。後で知ったのですが、行政でも避難所の把握は難しく、保健師の手が回らず、ストーブはあったとしても寒い避難所で、急変される方が多かったそうです。安否確認を1回して安心していたことが悔やまれますが、ガソリンも手に入らない中で、自分自身もかなり疲れきっていたことを思い出し、できる限りのことは頑張ったと実感しています。
- 577.自分も震災に合い、ケースの事も気になり心配だったが、自らの生活基盤が出来ず、歯がゆさを感じた。他のケアマネ（同事業所）と連絡し合い、とりあえず対応は行えた。
- 580.一言では言えませんが、ケアマネとして安否確認をすることくらいしか出来ませんでした。また、この震災後に人事異動で内陸部へ異動しましたが、今でも表現しがたい無念さみたいなものがあります。
- 581.私の担当する利用者の家族は本当に頑張ってくれたと思う。デイサービスもショートステイもヘルパーも利用できない中で、「みんな大変なんだから、うちは家族で何とかしてみます」と言ってくれ、頭が下がる思いだった。逆に「大変なんだから、何とかしてくれ」「いつも〇〇のサービス使ってるんだから、おじいさん預かってください」「とてもおばあさんのことまで手が回らない」などと言う家族の姿もある場所で目にした。こういう時こそ「在宅の力」試されるのだと感じた。ケアマネジャーには何の権限もない。独居で家が全壊し、どうしたら言いか分からない状態で避難所に行ってもらった利用者が「介護が必要なので、どこか行き場所を探してください」と言われ、やっとの思いで避難所に行くと「ここにはいられては迷惑だ」「今すぐ何とかしろ」と言われ、悲しい思いをした。その後行政に相談して対応したが、家族の役割まで求められたことは今でも疑問に思う。
- 587.被災された要支援・要介護者へ、特例・措置的サービスの利用方法などがあるのか、行政からの連絡がなかったように思う。厚生省からはすぐに通知はされていたが、自治体

が機能していなかった。

- 591.震災後、対応マニュアルの見直しなど何度も行われたが、指標となる物も上部（国・県側）で提示するのが遅かったように思われる。震災後8ヶ月にもなる現在、建設的方向で進行して頂きたい。
- 599.自分の家族の安否もなかなか分からない状態で、仕事優先には出来なかった。行政・ケアマネ・地域のサービス事業所などで、何度も安否確認する必要があったのかと思います。
- 603.震災後のマニュアル(何をすべきか)をきちんと作っておくことが必要だと思いました。燃料確保ができないことに憤りを感じた。
- 609.ライフラインはもとより、ネットワークの大切さを再確認することがあった。人と人とのつながりが一番大切なんだなと思いました。
- 610.まだケアマネになり1年だが、包括がないため新規がくるのは全て困難事例のようなケースが多く、自分の力量を考えると負担となっている。自分も被災、同居家族ではないが亡くなった者もいた。だがこの仕事に休みはなく、ずっと仕事をしていた。また同じ市内に住んでいても、海の方と山の方では（被災した・しないで）職場内でも温度差があり考えさせられた。その後も仕事を続け、休みの日に家の片付けや掃除があり、本当に体を休めることがない。仕事においても家庭においてもストレスが多いなどこの頃思う。
- 614.私の担当する地域では、津波被害・家屋の全壊倒壊がなく、人命救助されながら避難所での介護サービス提供などなかった。被災の大きかった沿岸部のケアマネさんのご苦労を思うと言葉につまります。地域単位での防災マニュアル・名簿作成（要援護者）と介護ネットワークの繋がり、要介護者での対応出来る避難所などの必要を感じます。また電気のストップに対し、ガソリン入手が困難になるなど、考えたことがなく、日頃の備え、非常時の備えに関し、聞き取りを行ったこともなく、独居者・老夫婦世帯に関しては情報収集必要と感じました。また自分の被災しながら、また家族の安否も分からないまま業務遂行できるのかどうか、職業倫理的な所でも考えさせられました。6月に入ってから、地域包括主催で震災時の対応をテーマに研修会があり意見交換をしました。居宅支援事業所の横のつながりも日頃から持っていたいものです。
- 615.安否確認は事業所それぞれです。地震があった次の日、バインダーを持って名札を下げているケアマネさんたちに遭遇しました。自分は自分の食料（家族）調達に走り回っている時に、何となく自分の利用者さんは・・と言う思いになりました。そんな時の対応に悩みました。
- 622.日ごろよりの連携ができていないかできていないかで、その後の動きがまったく違い、差が出てくる。今回のようにライフラインが作動しない時の連絡手段も日ごろより、話し合っておく必要を感じた。また、緊急時の受け入れてくれる施設や人数の取り決めも行政を通して決めておく。利用者・家族にも、もしもの時の連絡や避難場所の話もしておく必要を感じた。
- 623.このような事態になること想定できなかったことが残念。震災後、ケアマネとして行動できたが、不十分であったとも思う。
- 624.マニュアル作成の見直しが必要。
- 625.思わぬ事態に誰もが驚き、どう行動するのかなど戸惑った事も多かったと思う。震災後しばらくすると、被害の多かった地域から避難してきた方々の支援や震災によって負った精神的な恐怖は今もあると感じています。幸い泉区は比較的少なかったものの、日ご

- ろからの備え・訓練は怠ってはいけなないと振り返りました。
- 626.このような規模の震災まで想定していなかったため、自分が冷静になれなかった部分もあった。家族を優先するのか、どうしたらいいかわからず、改めて防災に対する意識を持つことが大切だと思った。自分の担当利用者は運良く命に別状はなかったが、今回のことを次に活かしていきたい。
- 628.これだけ多様な行動をしても、ケアプランチェックや指定取消し事業所の情報をみて、もう少し広い視野でもっと支援のしやすさを役所としては求めてほしかったです。
- 638.事業所内の連携が非常に重要だと思いました。
- 646.自分の住んでいる地域には、大きな被害がなかった事から不具合を感じた時期もごくわずかでした。今後、又発生する事も踏まえて、真剣に向かい合っていきたいと思います。
- 653.想定外であったため、ライフラインの大切さが身にしみて感じた。電気がストップしてしまい、エアマットのエア抜けによる仙骨部の褥そう発生・悪化があった。電話にて敷物の工夫や体交の指導などを行ったが、薬（ドレッシング剤）の調達も困難であったため、発生を免れることはできなかった。日頃からある程度の訓練（災害時）の必要性があったのではないかと思った。
- 656.隣人の方や地域の民生委員が声を掛けて避難所に連れて行ってくださったり、お互いに助け合っている様子があり、普段はみえない地域のつながりを感じることができた。
- 658.地域の方は、いざとなると強いものであると思いました。隣家などの協力がなければ、今回の震災をしのげなかった人は多数いると思います。
- 666.常時、介護や医療が必要な利用者については、普段入っている看護師やヘルパーさんが自分達も大変な中、訪問を続けてくれました。訪問の頻度や対応については、各事業所さんが独自で判断し動いてくれ、私の担当しているケースについては大きなトラブルなく、乗り切ることが出来ました。現場のそれぞれのサービス事業所さんの適切な判断や行動に感謝するとともに、ケアマネジャーとしてはガソリンが不足し思うように訪問できなかつたり、自分の無力感を感じました。
- 674.公的な事で役に立ちたいと思っていたが、市町村からの指示がなかったので出来なかったことが残念。指示・情報が欲しかった。
- 679.仙台市の軽微な変更、暫定ケアプランの取扱などはやりすぎです。周りのケアマネジャー皆さんが言っています。今の事務処理の多さで、ケアマネジャーの仕事が楽しいと思える人がどれほどいるのでしょうか。やりがいがあっても、大変過ぎます。是非、ケアマネジャー協会の方で、普段の業務に対する緊急アンケートをやってほしいです（無記名で）。その結果を、行政の方に役立てて欲しいです。不正などしていないのに、どんどん仕事が窮屈になっています。ケアマネジャーや福祉サービスで働く人は安い給料でやっています。これ以上苦しめる一方でいいのでしょうか？お年寄りに愛情を持って接しなればならない立場なのに、行政や社会から愛情を受けていない人が多いです。
- 681.今回の災害時にモニタリングや担当者会議は電話でも可となっていたが、電話でのやりとりでも全く問題がなかったように感じました。それを考えると利用回数を増やしたり、減らしたりするためだけのアセスメントや担当者会議等は何の意味があるのかと考えてしまいました。ケアマネジャーの本来の仕事とは？誰の為にいるのか？実地指導や監査に引っかけられないために書類を作成？入退院を繰り返している方や状態が変りやすくサービスの変更が頻繁にある方に対して、柔軟かつスムーズにサービスが利用できるシステム作りが今後、必要になってくるのではないのでしょうか？
- 682.所長が保険者とのパイプ役になっていたことで、地域内の他事業所との連携も密になり、

広い地域を各事業所で方面毎に区切り、利用者確認をしたり連携を図れた。ケアマネが動くというのはとても大切な事だなあと非常時に思いました。日頃からの関係性の積み重ねから生まれた連携だと思います。

689.私自身も今回の地震で罹災し、自宅は流失してしまいました。実家に家族全員で身を寄せたものの、母親が風邪をこじらせ肺炎になり亡くなった。ケアマネジャーとしての仕事もあり大変だった。

690.緊急の居宅の会議を開くことになった時に、各事業所へ当事業所で連絡をすることにしました。町内の事業所のみでなく、町外の事業所も連絡会のメンバーになっており、なかなか電話も繋がらず連絡がとれない状態でした。その中での連絡手段として利用したのが、各個人の携帯電話でした。友人・知人を通じてすべての事業所に連絡をとることができました。遺体安置所にいる人、避難所にいる人など様々な状況の人がいて、その人たちに協力をもらい連絡をとることができました。常日頃、人間関係を大切にしている当事業所のケアマネジャーの底力を感じました。

695.震災について、震災時に自分達が「どこまで動くべきか」ということがその後の課題となっていました。職員は小さい子供がいたり、お年寄りもいたりする方も多く、家族が心配でもこのままには出来ないとの葛藤が多くありました。私個人としては、以前消防から「まずは自分の身を守り、家族を守ってください」「それから余裕があれば動ける範囲で出来ることを対応してください」と言われていたため、同じように当事業所の者へは伝えていました。活動に参加すべきなどは、正直どうでもいいと思っています。そして、その時にできることをしていくしかないと思っています。その他として、仙台市だけかは分かりませんが、居宅に関して、書類ばかりが多く、書類の簡素化は全く図れていません。適正化が入り、返還を求められ、納得のいかないものも多いです。まじめにやっている方が多くいる中で、本当に書類が追いつかないことが多く、ケアマネをしたいという人もいないし、続けたいと思えなくなっている現状を理解してほしいと思います。

698.まずは安否確認と思い、訪問開始したが、役場や包括も動いてくれたため、結果的に同じお宅を何人も安否確認行ったケースがあった。その後、情報共有したが、今後誰がどういったお宅へ行くか、取り決めがあってもいいかと思う。サービス事業所と連絡が取れないことで焦りもしたが、サービス事業所側も独断で対応してくれていて助けられた。

699.ケアマネがもっと利用者に対して関わるのにスムーズなのが、「足」となる車でした。ガソリンを買うためにスタッフと並び、ガソリンの供給に問題はあった。(自分の出勤用は買えなかったが、近くに住んでいたから歩いてでも通えた。)ケアマネ・サービス事業者が手分けして、利用者の所在を確認して安心した方もいた。手間と同じ事と言って批判されがちだが、ケアマネが安否確認を主にすることがいいのか?とも考えた。でも津波で亡くなられた方には申し訳ない言い方だよな・・と考える。平穏な日々が幸せと思えること、そして少しずつ安心できる生活を送れるようになっている。大郷は被害が少なかったが、利用者それぞれ、私達全てが事前災害と共に生きることを考えさせられた体験でした。

702.ガソリン不足で思うように活動できなかつたことが大変でした。

707.避難訓練等を実施していたが対応できなかつた。災害対応マニュアルに支店指示を受けることになっていたが、当初電話不通、ガソリンもなく個人判断で対応するしかなかつた。

708.医療に対する行政の配慮は見られたが、介護に対する行政支援には対応の遅さを感じた。

- 介護サービスの提供の不足も利用者の身体には大きな影響がある事を改めて感じ、行政への介護側からの訴え自体が少なかった事も行政の対応の遅さの原因になっていると感じた。福祉という職種についている事で、中には公務員の方並みに自宅を顧みず支援にあたった方も多く見られた。公務員の方はこの様な対応も仕事の一つであると思うが、福祉の方は「使命」と捉えて携わっていた様に思える。気持ちだけでは乗り切れないところがあると思う。
- 719.今回の大津波では、利用者の安否確認を一番に行う事は困難であったと思う。自分の家族の安否さえ確認できなかったのだから。与えられた環境の中で自分のできる事を行なうしかなかった。
- 724.高齢者と一緒に避難したものの、被災した家族が多く避難所に安否確認に来ただけで高齢者を預けたまま帰る家族が多かった。ケースによっては引き取って頂いた方もあったが無理にでも引き取って頂いた方が良かったのか否か。避難所で公の直接的援助はほとんどなかった様に思うが仕方がないか・・・。避難者有志が動いていた様に思う。
- 726.今回の想定外の震災を経験し、ケアマネジャーとして事業所として、もう少し具体的な災害対策マニュアルが必要だと思いました。
- 730.自分自身も被災しており、利用者の安否確認や事業所の復旧作業に全力で対応できなかった。自分の家族の安否もわからないまま業務を行うことに辛い思いをしました。
- 731.震災当日女川町の老健施設における研修会参加の為石巻市内を走行中ただ事ではない地震に遭い東松島市内の事務所に戻ろうとしたが大渋滞で途中で避難。職場に戻らなきゃと思いつつも家族の安否がわからず一晩混乱の中で過ごした事は今でも忘れられません。自宅が被災し数日家族の消息不明でとても仕事どころではありませんでした。職場には顔を出す程度で10日程度は家族優先し仕事はほとんどできませんでした(ライフラインが戻ったのは3月末でした)。相談に来られた利用者様は行政や他ケアマネジャーが対応してくれました。仕事も気になりましたが、家族や家の事が大変で本当に毎日毎日どうしたら良いのかわからず無我夢中でした。今考えれば、仕事が安心してできるのは家庭が安定して初めてできるんだなあ実感しました。災害マニュアルは今後早急に見直しを行い備えていければと思います。どう動いたら良かったのか今でもわかりません。
- 735.ケアマネジャーは、震災時に頼りにされ責任の強い仕事と改めて感じた。
- 738.利用者の救助や緊急対応も大事だと思いますが、まずは自分の身を守る事が大事だと思います。その場のその状況にもよると思いますが、どのようにすれば良いか判断が難しく結論が出ないと思います。
- 739.全てが想像を超える規模で戸惑いながら今日までできています。職員も1名が行方不明、自分も身内が何名も亡くなり、その中で“生きる”為無我夢中で走ってきました。そこには職場の仲間の協力・助けがあったからこそです。自分の勤務している居宅事業所は併設している為様々な担当職員がいます。ケアマネだからとか介護職員だからとか、そういう立場は役立ちません。その時の状況のその都度対応するしかないのです。それが避難者の生命、果ては自分達が生きる事に繋がるのです。そう考えると震災時のケアマネの仕事という考えは疑問を持たざるを得ません。震災から8ヶ月が過ぎ、仮設住宅で過ごしている方々からの相談も増えている今こそケアマネの存在意義を感じています。ケアマネの仕事は続けたいと思います。そしてその中で復興の一端を担う事が出来ればと考えています。最後にご支援下さった全ての方々に心から感謝致します。
- 742.今回の震災においては大規模だった為にライフラインは素より、燃料供給がストップし

- てしまった事で安否確認に行きたいのに行けない、身動きが取れない等の支障がでたのが大変だった。行政である程度の燃料を優先的に提供してくれればとも思う。
- 752.電話・パソコンがないと仕事にならない事を痛感した。安否確認の順番、他のスタッフ担当のケアマネの状況も把握すべきだったと反省している。個人的な事だが、子供が小さく十分な安否確認の為の業務が行えず（家を離れる事ができない等）他のスタッフに負担をかけてしまい申し訳なかった。
- 754.電気・ガス・水道・ガソリン等の不足だった為高齢者が一番不自由したと思う。近所の人が水を持って来てくれたとも聞いた。大震災時等は日頃の近所付き合いがいかにか大切かを感じた。ケアマネとしての限界はあるが、地域住民の一人として高齢者を支えられたらと思います。
- 761.市町村より指示が届かなかった。逆に自分達が行動した事に文句を言われた。残念な事です。
- 765.どこまでやれば十分なのかと思いながら日々過ぎていた。
- 766.元々地域との繋がりが深い為か、ケアマネというよりは社協の一職員として認識されている部分が大きかった。独居・老老・家族がいても病気（認知症・精神）の方等の方々も震災で少なからず悪く変化された。水道復旧まで17日間、電気復旧まで8日間を要した日々。自分の事も家族の事も担当ケースも地域の方々も皆同じだった。ある物を分け合い、できる人ができる事をする毎日。地域の一員として日頃の繋がりが表に出た日々だった。また日頃の訓練がこれ程大切だったかと痛感もした。ケアマネとして固執するのではなく、社協職員として地域の一住民として生きてきたこれまでの自分の生き方が間違えてはいなかったと一人で思っている。ケアマネは課せられる事が多いので、どうしても自分の仕事以外には目を瞑りがちな人が多いと感じていた矢先の震災。心と目を広く開けなさい、人としてと教えてくれたような気がする。
- 773.ケアマネジャーとして利用者の救助や緊急対応・安否確認はとても大切な事だと考えられますが、あくまでも自分自身が無事で被害がない場合にできる事だと思います。事務所も自宅も自家用車・ケアマネ車も全て流失し、家族も亡くした自分に十分な対応ができたとは思えません。一時は利用者の事を考えられるかすら自信が持てなかった私ですが、こんな私の事を頼りにしてくれる利用者達の事を考えて今も仕事を続けています。
- 774.事業所が流失し、資料・データ・連絡先全てが無くなった。安否確認が思うように進まず不安と焦りが強かった。避難所でなく身内宅へ避難した方は確認ができず携帯が繋がるようになってから利用者家族から連絡が入るまで時間がかかった。安否確認後もサービス事業所も被災しており必要なサービスに繋げるまでサービス事業所の再開を待つ事になった。身内宅に避難した方はサービス利用をせず身体状態が変化するのが予測できたが、促しても「利用は出来ない」と状態が変わっていく姿を見る事が辛かった。大変な思いで避難した話や身内・家族が亡くなった話を聞き、気持ちの切り替えが大変だった。対応やサービス提供に対しても、これで良かったのか、ああすれば良かったのでは・・・と繰り返し考えている。震災の為に認知症状が強く出てきた方が多く、今まで上手くいっていた家族がストレスを抱えている。震災による悲劇です。
- 775.震災後狭い避難所で動く事が出来ない為機能がどんどん低下していく利用者さんに十分なサービス提供をできなかった事が残念です。その利用者さんは亡くなってしまいましたが、あの時もう少し早くサービスを利用できる状況があれば・・・と悔やまれます。
- 776.被災の規模が甚大な地域が担当エリアだった為亡くなられた方も多く、今だ行方不明の方もいる。避難所もまだ閉鎖されておらず、仮設住宅の移られた方も介護疲れや体調の

変化等が多くみられており日々対応に苦慮している状況が続いている。入所施設も被災しており、入院している方も在宅に戻らざるを得ない方も多くおり、ショートステイや入所の希望が増大しているが利用が難しい状況になっている。これから寒さが厳しくなり、ますます不安が募ってきている。

- 778.電気や水道・通信・車等多くの物が失われ、様々な機関への連携に大変苦慮しました。寒い中での避難という事もあり避難後体調を崩す方も多かったのですが、施設も被災している為行き場を失ったまま亡くなってしまった方もいらっしゃいました。各々の市町村単位では解決できない絶え間ない支援により最悪の状態に陥らずに済んだ方もいらっしゃいましたのでとても有難い事だと思いました。
- 780.自分の所属している事業所や利用者にこだわらず自分の住んでいる地域で資格を生かしたボランティア活動ができると良いと思いました。今後は自分から声をかけてあげてボランティア活動ができるように頑張りたい。
- 782.7/30 ケアマネジャー協会の研修へ参加し、被災のもっと大きかった地域のケアマネジャーの体験等を聞き、大変な状況の中沢山のケアマネジャーが利用者の方の為に尽力されたんだなあととても誇らしく思い、その一方で自分はほとんど何も出来なかったなと虚しい気持ちにもなりました。
- 783.当事業所は電話・FAX・メール等一切駄目になっていたので行政からの連絡は一切分からなかった。区役所に行っても担当者も不在で情報も颯爽しており何が本当なのか分からず判断に迷う場面もあった。また、家族も被災し小さい子供も二人いる為仕事と家族と守らなければいけなかった。
- 784.ケアマネジャーでなく地域が行うべきであると思う。近隣との良好な関係が今はほとんどなく、その為外部が介入しなければならないのもどうかと思う。人としてどうあるべきかを考えて福祉に関係ない方も意識すべきだと思う。民生委員も役に立っていない。
- 785.何もかもが初めての状況で優先順位をつけて行動する普段からの訓練が必要と感じた。生活全般を見て生活支援を行う（医療・保健・福祉だけに留まらない状況の方がいたのだ）。
- 794.滅多には起きない大震災でしたが、以前乗っていた50ccバイクを痛切に必要と感じた。普段からこまめに家族等との連絡を取り合っていた事が今回役に立ったと思う。また、地域の避難所も基本情報シート等に記載が必要と感じた。探すのに苦労を要した。今回は訪問介護事業所に随分情報等を頂き助けられました。今後も密に連絡を取り合い備えたい。
- 797.震災当日の安否確認は十分できた。その後ライフラインが止まり困っている事が起きた（透析通院ができない、食事が作れない等）。地域の方々が協力して生活できた事が一番大きかった。
- 800.ガソリン不足・ライフラインの停止にて通勤も困難、連絡も困難な中何にしても利用者様優先に頑張りました。命があるだけでも有難いです。
- 805.初期において介護サービス事業所への必要性評価は低かったと言わざるを得ない（緊急車両指定を受けられない、公的な支援物資が届かない等）。各事業所独自の対応で乗り切った状態。被災地に近い事業所ほど早期稼働の希望が多かったが通常再開が最も遅れた。被災地にある居宅介護支援事業所が一番被災介護者を抱えている。事業所自体も被災し対応困難になっている事業所に相談や書類作成（罹災証明書の確認・負担減額・減免申請・介護保険証再交付・送付先変更・場合によってはケアマネが罹災証明を取りに行かなければならない場合も。また遠方の避難先に居宅介護支援事業所変更したが災害後の

書類対応が分からず結局元のケアマネが書類作成や申請を行う等)が集中する。各市町村により証明書等の要不要が違い混乱も発生した。業務上必要な書類の再交付にも都度手続きが必要であった。各事業所の最新の可動状況、受け入れ状況、提供可能範囲を確認できる一本化した窓口があれば良かった。4月末頃まで震災対応による多忙期が続いたが職員3名とも自宅全壊した被災者であり私的にも厳しい状況であった。休みを取らざるを得ない状況も発生したが同法人包括支援センター職員との連携や他近隣包括支援センター職員に業務協力を頂き多忙期を乗り越える事ができた。可能な業種との連携や人的支援は我々にとって大きな助けとなった。

- 810.比較的地震の影響が少ない地域で恵まれていると思った。ケアマネジャーと言えども身内の安否の確認が取れない状況で活動するのは如何かと思った。自己の安全と身内の安否が確認できてこそ落ち着いた対応と冷静な判断ができると思った。ケアマネが動くのは最低限で地域の力を最大限に活用すべきと思う。
- 813.地域の連携が大変大切に感じました。
- 816.私の勤務地は内陸部のあり幸いな事に震災の被害は沿岸部に比べればほとんど無かったと言ってもいいような程の被害だった。ただ、災害弱者と呼ばれる人達にしてみれば生命の危機に直面したケースもあり日頃からの備えが重要だと実感した。このような場合行政や地域病院との連携、各地区の区長や民生委員等が中心となり助けられた場面が多々あり、インフォーマルの構築が大事だという事も実感した。
- 821.まさかこの様な震災に合うとは思わなかった。自分も小さい子供を抱えており大変であった。今思うとまだ何かできたのではないかと思うが、とりあえず周囲の皆さんが無事で良かった。
- 825.利用者さんに関わる事業所間で、災害時の安否確認について再度確認が必要であるとつくづく感じる。それぞれの事業所で対応し連絡も取れない事も多いので、現在何が必要でどんな支援が必要なのか、十分対応出来なかったように思う。
- 827.備えあれば憂いなしというが、本当に今回の大震災は被災地にのみならず他県への影響を及ぼした体験であったと思う。もう二度と起きてはほしくないが、今回の震災での教訓を必ず生かし冷静な対応で、まずは自身の身を守る事、連絡手段の確保、情報の確保が必要だと思った。最近ラジオをつけている事が多くなった。常に震災に対する意識を強く持ち続ける事が大切だと実感した。日頃の事業者さん同士のコミュニケーションと利用者さん方との災害時の避難先や連絡先を把握していく事が重要だと思った。
- 832.利用者さん・家族は勿論の事、近所の方の力もあり直接被害に合われた方はいなかったので安心した。医療依存度の高い方については、緊急時の対応について再指導した。救急車の対応も困難になるので、自宅の車の利用・発電機の利用・車のバッテリーの利用等説明した。今回の震災でケアマネジャーのできる事は限られているので、家族と自己責任も重要である事が分かった。
- 837.以前よりガソリンの節約の為、同事業所居宅ケアマネと同じ地域の訪問をしていた事もあり自分以外のケアマネの利用者宅も把握できていた。その為担当外の利用者宅も併せて安否確認ができた。利用者宅のマップの作成を事業所内の“震災時対応”の話し合いで提案した。
- 838.利用者の安全と自分の家族の安全が大切で、自分でできる範囲・できる事が何か考えたが、これでいいのかという不安もあった。他ケアマネさんの対応等を聞き、情報収集しながら利用者の力になれるように努めた。震災後自分達の今後同じような事になった場合の事を考え準備は必要だと思う。また他事業所同士の連携が必要で、グループ等を決

めている事で互いに心強さもあるのではと思う。

- 839.今回はたまたま育休中で自身の家族の心配をする事だけできたのが不幸中の幸いだった。他の職員の人達には申し訳ないなとは思いますがこれが本当に本音です。業務についていた時、果たして自分はどう動いていたか、ある程度しなければいけない事は管理者と協力して行うとは思いますが、また同じような被害が起こらない事を願うしかない。ケアマネの存在は心強かったと聞いています。また、たまたま当日通所利用だった日中独居の家族からは「デイサービスに行っていて助かった。一人で家にいたら家具の下敷きになっていたはずだ。」と話していました。介護保険制度がとてつもない数の命を救ったとも強く感じています。
- 842.災害後は瓦礫だらけで道路も通れずガソリンもなく電話も通じず、安否確認はなかなか難しかった。自転車で通れる所は1時間以上かけて自転車で訪問した。末期がの方で受診病院が被災し、尿カテーテル交換があり服薬もなくなるのでどうしようかと切羽詰った連絡が家族よりあった。その際、赤十字病院の往診の先生が自宅に訪問してくれ医療を繋ぐ事ができた。家族からとても感謝された。自分達が被災し動きが取れず、安否確認等の活動が素早くできなかった。
- 843.保険者との連携を図る事がスピーディに利用者への安全への確保に繋げる事ができた。また、利用者の家族や近隣等、普段のコミュニケーションが密な所はケアマネジャーが訪問する間に色々な手立てを実行していた。ネットワークがケアマネジャーの力になってくれた。ただ、事業所側ではケアマネジャーと連絡が取れないと不安だったとの話を聞いた。
- 844.自分が担当している地域は津波の被災を受けなかった地域ではあるが、震災直後より通常利用していたサービスが利用出来ない事態となり多くの高齢者の日常生活に影響を及ぼした。その事が直接的な要因とは言えないが、震災直後（1ヶ月以内）に亡くなられた方が何名かいらした。大きな震災が起きると高齢者は本当に日々の生活を維持していく事がどれ程大変な事なのかを実感させられた。平成15年と平成23年の二度に亘る大地震を経験し津波という新たな災害に襲われた方々を支援させて頂く中でこれから自分はケアマネとして何ができるかを模索している毎日です。
- 846.燃料不足でサービス事業所（デイサービス・ヘルパー等）が休みになってしまい、入浴ができない事で不満が聞かれた。
- 850.震災で大きく環境が変化し、その方が安心して生活できるよう取り組んできました。特例の措置にも対応できるよう地域に貢献できればと強く思うようになりました。
- 854.行政（市）の震災時の対応に不満。今回の緊急入所が全てショートステイ扱いとなり、その申請書類等の手続き全てケアマネが行わざるを得なかった。長期入所扱いだと良かった。
- 855.今回のようにライフラインの停止・ガソリンが入れられなくなった時の事を想定し備えておく必要がある。
- 856.一人暮らし・老夫婦世帯の安否確認ばかりで、エアマットや在宅酸素の方々の確認まで頭が回らなかった。
- 858.担当利用者の安否確認に着手できたのは震災から5～6日経過してから（電気が復旧し出した時期）だった。利用者・家族からは既に他のサービス事業所から安否確認に来た所もあり「とても安心した」と話す方もいた。その利用者は津波が来ない地域に居住していたが、高齢世帯というのもあり不安がとても大きかった様子。震災後すぐに動けばもっと早く安心感を与える事ができたのではないかと思った。また、自宅が流された

- り自らも津波に呑まれた各事業所の職員が震災後から休みなく被災者対応にあたって
いる光景が強く印象に残った。
859. ケアマネ自身も震災に遭う危険がある為マニュアル作りや場面状況に応じた対応が
できるよう心構えが必要となる。連絡が取れるよう手段の確保・約束事項等確認してお
きたい。
869. 緊急時の対応がどのように行えば良いのか、今回の震災で改めて重要さを感じまし
た。やはり日頃から地域包括支援センター・行政・民生委員・サービス事業所等、関係機
関との連携が重要であり、いざという時に役立つものだと思います。
882. 自分の住んでいる地域としての関わり方、組織の一員としての関わり方、ケアマネと
しての関わり方、どれを優先していったらいいのか、ケアマネとして動く一方で組織とし
ても廻る事をしなければいけなかったので困りました。
886. 正直ライフラインが途絶えた中でガソリン不足もあり、動きができない状況もありど
のように関わっていいのかわからない。また、自分の家族のこともあり、ボランティア等
の行動に出られなかった事を少し悩みました ()。
887. ケアマネジャーとして震災対応でどこまでやっていいのかわからない部分がか
なり大きかった。また、利用者に対しあるサービスの範囲で提供したが、果たして本人・家
族の満足度はどのようなものかとても不安があった。今後も本人・家族が満足できる
マネジメントを提供していきたい。
889. ケアマネジャーとして専門性を持って対応できる、対応した継続した活動が
できるような活動をしたい。また活動できる人を増やせるよう取り組んでいきます。4
月中旬より被災地でのマネジメントを行っています。約6ヶ月過ぎて思う事は特別な
支援ではなく、いつも通りの顔の見えるケアマネジメントでした。
890. ガソリンの不足が介護サービス再開に大きな問題となった。行政が中心となり、
介護事業者へも優先的に供給してもらえよう体制を整えてほしい。情報が錯綜する
ので統制も必要だと思う。
892. 今回の大震災に対して他に何か出来た事があったのではと思う事がある。
894. 今回の震災での影響で認定業務も著しく遅れをきたし5/2に行った区分変更申
請でさえ結果が出たのが6月半ば過ぎで本当に困りました。勿論一時更新申請も顕
著な遅れあり。挙句8月からは要介護3以上の要介護者は訪問調査・主治医意見書
等のプロセスなしで自動更新となり、要は行政・保険者の方は都合よく手抜き・楽
に対応する一方、我々ケアマネに対しては一切の容赦なく高圧的な扱い、通常
の対応を迫っており前述通り認定結果手続きの物凄い遅れでただでさえ多大な
迷惑を被っているところ、やるせない怒りにとらわれ正直ケアマネジャーになっ
て失敗であったと悔やむ毎日です。
896. 電話連絡が出来ずになかなか連絡が取れなかったのが不安が増大している
自分が居た。自分が被災してしまい他のケアマネに負担を掛けてしまっただけで
なく、お互い様との言葉を聞き涙が出てしまいました。このような大きな災害が起
きない事を祈っていますが、この震災での経験を活かして震災の際のマニ
ュアル作りが役に立てればと思います。震災で受けた心のケアの支えになっ
ていけたらと思います。
897. 津波の影響が無い地域を担当していたのであまり実感がなかった。自分が訪
問中にも津波が迫っていて利用者を避難させなければならない状況だった時に
自分はどのように行動したか？自分の命を犠牲にしてまで行動を起こせたか？
自信がない。
898. 他の事業所にて被災にて安全を確保する為にケアマネが地域の福祉施設
への緊急入所を進め、市の報告が後になってしまった事で市より指導（順番が
逆との事）を受けたと

- の事。緊急時の際のケアマネジャーの動きは迅速であり（命・安全の確保は非常に大切であり）市がケアマネに緊急時にはある程度の責任を与えても良いのでは？と思った。
- 899.震災直後ケアマネの仕事どころではない。夢であってほしいと心が何度も折れそうになる。上司の対応にも今回不満が残った。
- 900.今回の震災があまりにも大きかった事もあるしライフラインの復旧にも時間がかかった。ケアマネとしてはほとんど役に立つ事はなかった。ケアマネとして行動したのではなくお互い助け合いと思いやっていた。
- 903.3月11日の震災後、3月17日に仙台市介護保険課より「在宅の方の食料供給支援について」とFAX文書があったが、ガソリンの供給がままならない中で仙台市シルバーセンターまで受け取りに来るように記載され、更には必ずしも希望の数量を提供できるとは限りませんと記載されると、実際に無理をして伺っても無駄にならないかと不安になった。その為今後は各地域包括支援センター単位で身近な所で備蓄し供給支援して頂けたら良いと思います。
- 904.震災後ガソリンの問題で訪問のサービスが一時期停止してしまった。全国的に事業所のある大きな所では県外から燃料等を運んで訪問を再開する事業所があった。ケアマネとしてはサービス選択時の一つの理由となってしまう。
- 905.今回の震災は初めての経験でもあった為、果たして自分が災害直後にとった行動は正しかったのか今でも悩む事がある。自分自身ライフラインの停止によりどのような手段で安否確認をしていけば良いのかパニックになったが、周りの人達の行動を見て徒歩しかないと思えば優先順位を考える事無く歩ける範囲で安否確認をした事が思い出される。また、ガソリンが確保できない状況が一番安否確認を遅らせた。制限が緩和されてからは改めて優先順位を考え効率的に利用者を訪問した。余震も頻繁にあった為必ずペアで行動する事に心掛けた。今後の為にもこの震災で残った課題を整理し、どのような状況でも対応できる仕組みを作り上げた方が良いと感じた。
- 906.担当利用者が、あの災害時にデイサービスから自宅へ戻る途中送迎車ごと津波により亡くなってしまった・・・その事業所には当時マニュアルが存在しなかったと後で判明した。遺族の気持ちを考えると心が苦しい。他の事業所では家族の安否すら不明だったので、利用者を事業所に待機して頂く対応を取ったのだが・・・。
- 907.今回の震災対応では、各事業所の対応で明暗を分けた事がありどうしてだろうと思う事があった。ほとんどのデイサービスでは全利用者を施設内や避難所で待機させ安全が確認されてから自宅または家族の許に送迎等を行っている。しかし、一部の事業所では津波警報が出ているにも関わらず沿岸地域に送迎している。これまでの大津波が予想できなかったにしても残念な対応であった。
- 909.主任ケアマネからの対応指示がなく、マニュアルもなく自分で行動判断する。被災現場は水も引かず泥が推積して長靴・リュックを背負い自宅の飲料水・食品を詰め、タオル・ホッカイロを少量ずつ集め徒歩で巡回する。惨状を目の当たりにし涙を流しながら被災されていない事を祈りながら、時にはあまりの変わりように悲鳴を上げ、知人に逢うと互いに手と手を取り合い再会できた事に感銘し共に泣きました。全く知らない人でもお互いに声を掛け合い、その人の知っている被災日からその後の出来事や地域の状況等情報を収集する。全く情報がなく「人から人」の口コミで地域の様子、その方の被災時の九死に一生を生々しく聴き手を取り合い幾度となく泣き合う場面がありました。冷静な判断能力と何を大切にするか（生命か物か）で生存を分けた所もあり避難訓練等を行っていても全く通用せず、その夜（3/11）の避難所は家族が沢山で一晩中その背景が見

- られる。今振り返るとあの時自分は何をしていたのか？と自責の念有。自宅脇の避難所に寝具類を持ち運んだり野菜を届けたりするも、何かもっとできたのではと反省しております。
- 910.連絡手段が途絶えた事で他の事業所・ケアマネの動きが分からず自分自身どのように動いたらいいか分からなかった。普段関わっていなかった民生委員の方が知らない所で動いて下さり助けられた事もあったので改めて日頃の連携の大切さを感じた。家の津波浸水や破壊等により家に居られなくなった要介護者の受け入れ先を探すのが大変だった。それは現在も続いている事で家の建て直しをする人が多く、その間の受け入れ先を探すのに苦労している。
- 913.ケアマネだけでなく各事業所の方々も利用者様の安否確認をしてくれ二重・三重の確認になった事もありました。連絡方法がきちんとできればと思いました。
- 914.ケアマネ一人ひとりがやれる事をしっかりやっていく事が少しは復興にも繋がると思う。
- 917.いつどんな時に災害が起こるか分からない中で、自分がどの位動けるか自分がどの位役に立つか、不安を抱える毎日です。
- 923.今回の震災でスタッフ達も一時的にパニックになっていた時期もありました。ただ、自分達にできる事を考え一つずつ実施していった事で精神的に落ち着いていったと思います。今後もし同様の地震があった場合には今回の地震で足りなかった事を一つでもクリアしていけるようにならなければなりません。二度と同じような地震が起こらない事を祈ります。
- 924.私達の事業所は、地震によりライフラインはストップしたが事業所も職員も被害はない。恵まれている地域にいると感じています。被害の大きい所への支援をもっと積極的に行う為には自ら何か出来る事をアピールする必要があったのではないかと感じています。今後の支援（相談業務）のボランティアを行っていこうと思います。
- 925.大きな地震がくると言われていたものの、実際事が起きると冷静な判断や何をどうして良いのか少しパニックになってしまった。自分のいる地域は津波の被害はなかった為まだ恵まれた環境で対応できたと思います。今回の震災を踏まえて、災害マニュアル等をもっとスムーズに動けるよう検討が必要だと思った。
- 931.震災の後ケアマネとして勤務するようになるが、他のケアマネの働きには感動していた。自分の力の足りない所を学んで役に立ちたいと思っている。
- 934.安否確認してほっと一安心。利用者・家族もまずは元気な顔も見ることが出来た事に満足。それから1週間・2週間と時間が経つにつれて日々の生活への不安等が出てきて、必要とするサービス・困り事も変わってきました。見落としのないよう気を配っておりましたが、変化に対応する事に疲れを感じたりする日々を送りました。ケアマネのケアも大事な事だと痛感しました。
- 935.給付管理の仕方、免除の取り扱いの方針を早く出してほしかった。
- 936.移動手段は公用車の利用だったが、今回ガソリン不足で車が使用できず自転車での移動を指示された。何十年かぶりの自転車で悪路も重なり転倒、右手骨折で2ヶ月ギブスで不自由な思いをした。何とも情けない出来事だった。
- 943.内陸部だったので人命に係わるような救助が求められなかったが、沿岸部では利用者の救助により命を失った仲間がいる事に胸が痛みます。自分自身も保育所に子供を預けて働くのですが、子供達を守ってくれた保母さん達に感謝の気持ちで胸が一杯でした。介護サービスや学校等人を相手にする所で働く事の責任の重さを新たに感じました。在宅

の高齢者を支える立場だったが、家族がいる方は家族が頑張ってくれました。独居の方で震災前から家族と良い関係が作られていなかった方とは緊急時でも意見が合わず対応に苦勞し、つい感情的になってしまった事もあり精神的ストレスが大きかった。小さな子供があり、ライフラインの復旧や物資が流通する間主人は仕事が休みだったので食料調達や子供の事、義母には子守をしてもらったので仕事を早期から行えたと感謝しています。

- 944.行政に対して3/12には食糧・水は区役所に届いていたが配送手段無くそのままにしている。地域包括支援センターより一人暮らしの利用者に食糧配布の依頼があったが、1回2回は配布した。3回目以降は包括に対応するよう断った。理由はガソリンが無く配布できない。自分の車で7～8時間待ち給油しその車で食糧を配達している。3/12は行政が休みになっていた（区役所玄関で断られた）。忙しいのは分かるが直接区役所へ相談したい事が多くあった。この様な大災害となると一人の人間として周囲と見て助け合っていく事が必要なので自分の事業所の利用者・職員を守る事が大事となってくる。2年前仙台市に県のマニュアルに添った災害対策、特に医療必要者に対する支援を立ち上げるよう相談したが、人・お金が無いと断られた。震災後遺症が続く事が少なく済むのではなかったか。
- 945.地震の日、たまたま自分は休日で家に居たが、出勤していた他のケアマネが私の利用者の安否確認もしてくれたので本当に助かった。ライフラインがストップし近くの小・中学校が避難場所となっていたが、車椅子の人は結局避難所に居られず真つ暗な自宅で過ごしていた。要介護3の夫を介護している妻は、不安で不安でしょうがなかったと後日涙ながらに訴えていた。
- 946.ひとりでは何も出来なかったが、仲間がいる事で協力し合う事が出来た。震災時には電話が使えなかった為不便に感じたが、ライフラインは早いうちに回復したので苦勞した方とは言えない状況だったと思う。介護の仕事に関わっている方々にとって、今回の震災で緊急時家族を優先に考えるべきか利用者を優先に考えるべきか迷われた事と思う。今一度災害マニュアルを見直す事でより良い環境で業務に遂行できるのではないかと思う。
- 948.サービス事業所も再開の検討をしている中、サービス利用がストップしている利用者・家族に対しケアマネからの情報伝達の重要さを実感しました。震災直後病院を退院してくる利用者も多く、医療との連携について考えさせられました。
- 949.同じ県でも被害があった所・なかった所で全く違います。“何かしなくては”と思いつながらも仕事に追われ何も出来なかった自分が情けなく思います。災害も前からの準備（地域との繋がり）はとても大事と更に思いました。
- 953.ライフラインがストップしていた為自分の動ける範囲に制限があった為、家族や近所の人の大切さを感じた。デイサービス等の施設や訪問介護等からも連絡が入り、チームとして連携が取れた事が良かったと思う。
- 955.中心部に近い事で被害は少なかったと思いますが、施設で勤務されていた方は自宅に戻る事もできず非常に大変な思いをされたと思います。こちらとしては利用者を引き受けて頂き有難かったのですがご苦勞をおかけしたと思います（元々の帰宅予定日を過ぎてもそのまま引き受けて頂いた）。
- 956.ケアマネジャーも燃料不足で歩行。利用者の地域が広範囲で大変でした。
- 959.家は食器等の片付けは全く出来ず、買い出しも一度も行けなく、家族の協力や遠くの（県外）親戚から食糧やガソリンの援助があった。

- 960.地域包括支援センターに中心としての役割・行政との窓口を求め、震災後訪れてみましたが、事務所は閉鎖され、自転車で行けない「遠方の法人本部にあります」の貼り紙がありました。疑問を感じます。自分の被災状況をどう捉えるか。自宅の損壊はありませんが、当日は自分の小さい子供を学校に引き取りにも行けず、家族と連絡も取れず夜を迎えました。翌日からは物資を求めスーパー・ガソリンスタンドに並ぶ長蛇の列を横目に、私達の水や食糧の確保、子供の面倒は誰も心配してくれないものなんだと実感しました。今後はその点も含め対応を考えていかなければならないと感じています。利用者・家族は“意外と出来る力を持っている”事に驚きました。
- 961.仙台市太白区は被害が少なく、他市町村から家族がいる太白区へ移って来た利用者が何人かいたが、それぞれの市町村で書類の書き方が違ったりしていたので出来れば書式は都道府県や国単位で統一してほしい。
- 964.市内のケアマネや同級生だったケアマネが亡くなり何処まで対応していいのかわからない。自分の身を守る・家族の身を守る・利用者の身を守る……。震災で亡くなった方はいなかったが、関連死（エアマット使用できず床ずれが悪化し感染症で3月末に死亡）が1名あった。
- 966.沿岸部の津波被害に遭われた方々に比べれば、ライフラインの停止による不自由さだけで何の苦労もなかったと思います。どのようなお手伝いができるのか分からず具体的な行動に至らなかった事を恥ずかしく申し訳なく思います。
- 967.今回のような震災においては、今までの生活の流れを継続して行う事が出来ないという事を認識し、出来る事を確実に行っていくという考え方を持つ事が必要となるのではないかと思います。それに関しては支援を受ける側もする側も同じで、以前出来ていた事が出来なくなった事に不満を持つという姿勢は精神面においても良いものではないのではないかと思います、その状況の変化に対して受け止める事の努力が必要ではないかと思われる。
- 971.今回は地域そのものが活動できない状況となった所もあり、何処に連絡し対応を頼んで良いか迷った。活動したくてもガソリンが手に入らず個人で何とかするしかなかった。マンパワーが不足していたが、もっと大変な地域があると思うと自分達で何とかする事しか考えられなかった。以上の点から、地域の拠点を小→中→大とまとめる機関をいくつか設け、小が駄目なら中、中が駄目なら大と“頼み綱”を繋がるようにし、適切な判断と行動力がほしい（行政発信で）。介護職の資格や経験のある方々で仕事をしていない方を緊急時等のボランティアとして登録し、すぐ動ける体制を整えておく。以上を提案したい。
- 972.とにかくびっくり！でした。他地区でも数回地震には出会って？いますが、今回は体験でもなかった事です。大きく揺れてる間も津波の事や一人暮らしの利用者の方や我が家の事等を思い巡りました。日頃の防災意識がいかに乏しかったか……。いつも「万が一…」等を想定はしているものの実際に想定外の事が発生するとパニックになるものです。高齢者の方を抱えての職務で、何処まで自分の力が役立たせる事ができるのか……。これからは模索状態です。
- 977.この震災後には即事業所で話し合いを持ち、本当に必要なマニュアルを作りました。また、非常持ち出し鞆を2つも作り、災害時に必要だった物や利用者情報等も書類を作り入れております。また、災害時等の連絡ノートの作成も行い、それらをスムーズに利用する為の手順書も作り常に皆で確認等を行っています。
- 981.震災対応について今まであまり重要視していなかった事に気付きました。地震があつて

- もそれに伴うライフラインの停止までは考えられませんでした。自分自身約1週間の停電で普段どれだけ贅沢をしているのか気付く事ができた。
- 982.これだけの震災は初めてでしたので、これからどうしたらいいのかとか分からない混乱している状況でしたが、地震直後はこれからどうなるんだろうという不安ばかりがありました。
- 984.仕事に関してはやりがいも感じると共に、今回のような災害時自分でも何処まで対応出来るか、どうする事がベストなのか悩む事がある。今回については想定外の事でもあったが、時間がかかったが出来る限りの事はやったと思う。ただ、利用者の被災状況・病院・生活環境によっては困難な場合もあった。
- 990.想定外の事ばかりだったが職員の協力があり切り抜けられた。家族の安否不明の中、ただ仕事に集中して動き回り気を紛らわしていた事を思い出します。
- 993.無力。
- 996.震災当時は施設の入所相談員として勤務しており、ケアマネジャーとしての業務はライフライン等がある程度復旧し状況が落ち着いてからだったので、ケアマネジャーとしての動きについては具体的には分からない事が多いです。最近様々な震災関連の研修等に参加する機会があるので、今後同じような震災が起こった時にケアマネジャーとして自分がどう動けば良いのかを考え、緊急時にもすぐ対応できるよう日頃から備えていきたいと思います。
- 1002.以前勤めていた事業所の介護支援専門員の方が津波で亡くなりました。退院されたばかりの利用者を助ける為だったと伺っています。もしも私がおの場に居たらどのような行動をとったのか、夢にも時々現れます。今回の震災では行政の機能が著しく低下し、どのような行動をとるべきか判断を自らしなければならぬ状況も生じましたし、もしもまたあのような地震が起きたらという取り決めもするようになりました。正直震災時にケアマネの私は無力感を感じうつ病の症状がでましたが、自分が生かされている事を改めて思い出し、出来る事をやっつけようと思っております。
- 1003.ガソリン調達に多くのエネルギーを費やしました。振り返ると情報が無い中、とにかく利用者の安否を優先したと思います。後に太平洋沿岸部での被災状況を知り、もっと何か出来なかったのかと反省しています。一番気がかりな利用者(ADS)は、レスパイト入院中でした。
- 1012.震災後、日頃の地域連携の必要性を強く感じました。顔見知り程度でも構わないので連携が図れる状況が欲しいと思いました。居宅介護支援事業所自体には、備蓄食料や水が無かった為震災当日から2・3日はケアマネ個人の食料等を持ち出し提供していました。圏域の地域包括や地域共有の備蓄品の用意があれば良いのかとも考えました。事業所を不在にする為、玄関に白い紙とペンを設置し自身の安否と伝言を書いて頂けるようにしました。心配して来て下さった福祉用具事業所からの書き込みがありました。被災した事業所から2名と区違いでケアマネが来ないからとの理由で3月中に3名担当する方が増えました。
- 1015.震災を体験して介護者に限らず、皆普段からの防災意識と備えがいかに大切かという事を感じました。家具の固定から、非常時の燃料や飲食物の備え等をしていない人が多い事に驚きました。今回を機に当ステーションでは防災に関するアンケートを行い、非常時の連絡先の確認・避難場所、普段の備えの有無を利用者に問いかける事によりできているよう声掛け・促しを行う事ができました。今後も継続していく事が大切だと思っています。

- 1019.福祉避難所増とその周知徹底。ガソリン不足で思うように動けなかった。緊急時車輛として指定を取ればガソリン供給も受けやすい。介護保険請求について、もっと早く方針を出してほしかった。請求が免除かその取り扱いが後に回り利用者にも混乱が及んだ。支援物資の早めの対応を！
- 1025.小さい子供を家において仕事に出て来るのが毎日大変だった。家族と生き別れる決意で毎日仕事に出ました。
- 1028.ケアマネの仕事はやりがいはありますが、365日24時間利用者は自分の担当であり、責任もあり精神的にきつい部分もあります。震災後は何が何だか分からず安否確認に回りながら地区の避難所への物資運び。1週間家に帰れず泊り込みでいた。家族が無事だからこそ出来る事。自分だけで出来る訳ではなく家族あつての自分という事も感じました。
- 1029.自分の実家が流し家族の安否が分かるまで4日かかり、子供もいた為職場に駆けつける事が出来なかった。利用者さんの安否確認も他のスタッフに任せてしまい申し訳なかった。おむつ等の支援物資をたくさん頂いて助かった。行政も混乱しておりサービスの調整等の対応が大変だった。